

史前學雜誌

第六卷　第六號

昭和九年十一月發行



史前學會

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル

二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會合ヲ行フ。隨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ

四、會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル

入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込マレタシ

五、本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得

六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル

七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得

九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山史前學研究所内

史前學會

顧問　小金井良精　中澤澄男　柴田常惠

會長　大山柏

幹事　杉山壽榮男　田澤金吾　大場磐雄　甲野勇　大山柏　簡野啓　樋口清之　山口隆一　池上啓介　(順序不同)

會計　岡田義一

投稿規定

寄稿ノ範圍ハ史前學研究ヲ主體トシ、之ニ關連スル諸學ヲ包括ス。寄稿者ハ通常、會員並ニ會員ノ紹介アル者ニ限ル

原稿ハ返還セズ、但シ寫眞、圖表等ハ豫メ申出デアルモノニ限リ之ヲ返還ス

原稿掲載ニ就イテハ幹事ニ一任サレタシ

寄稿ノ別刷ハ豫メ申込ミアル場合ニ限リ、當分所要部數ノ實費及ビ送料ヲ申受ケ需ニ應ズ

昭和九年十二月一日印刷　第六卷第六號
昭和九年十二月五日發行　定價一圓

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　池上啓介

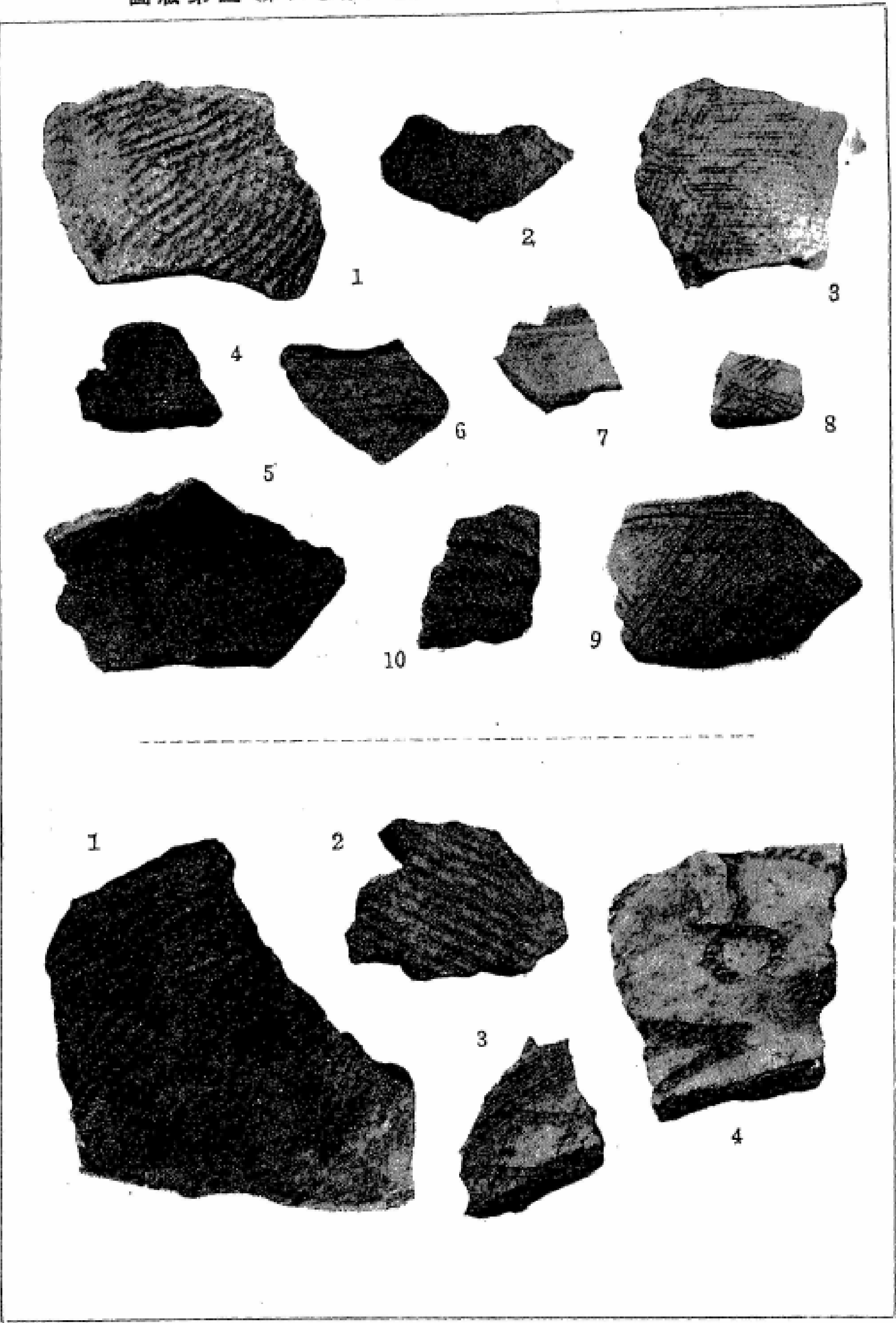
發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目一番地　鈴木越武

株式會社明章印刷所

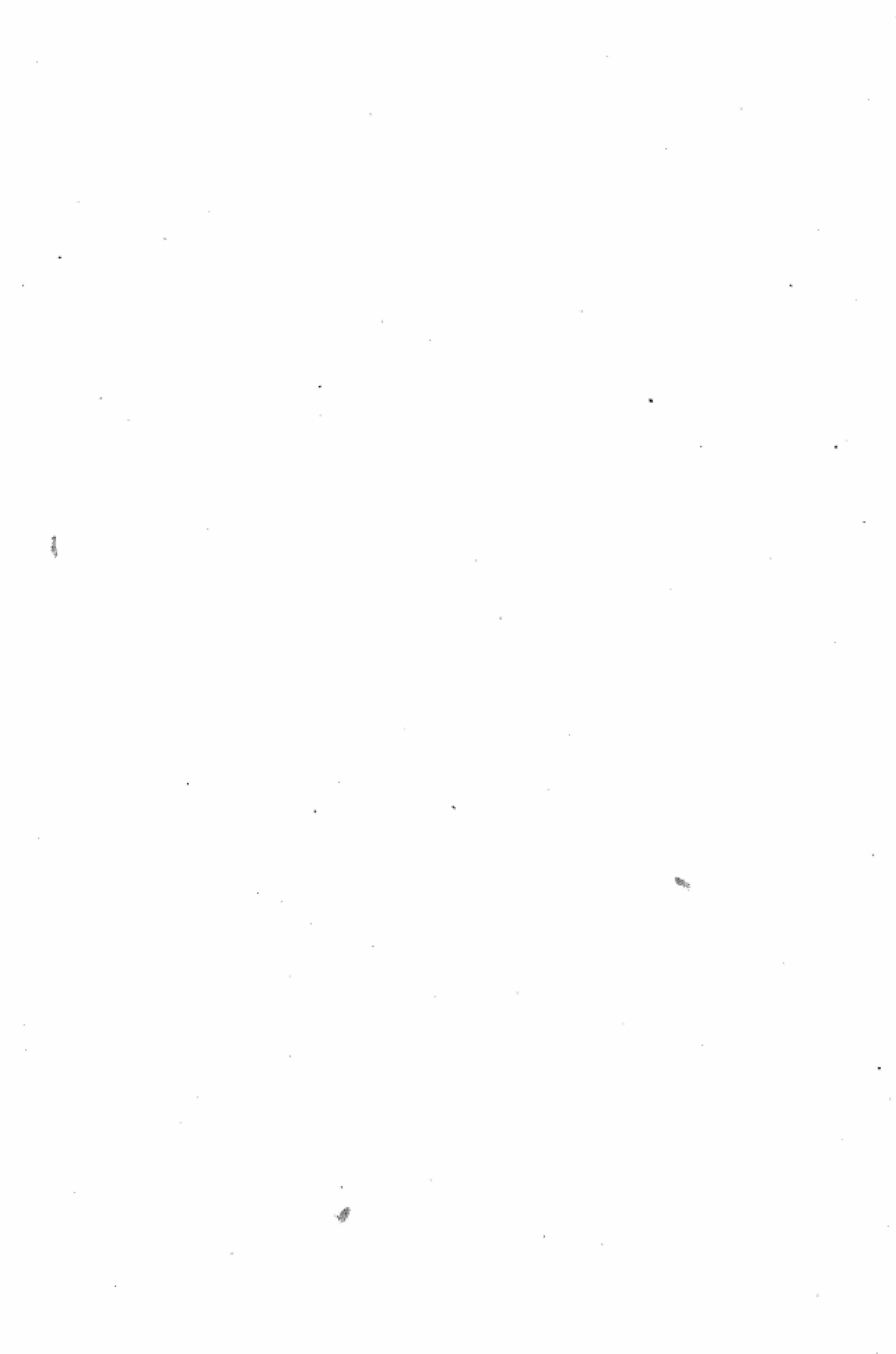
發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内　史前學會　電話青山一一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　岡書院　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番



武藏國新作八幡臺貝塚諸磯新型式土器（上段）　同 古 型 式 土 器（下段）　（同論文附圖）

Moroiso Typen von Muschelhaufen Shinzaku. Hachimandai. Gau Musashi.



史前學雜誌

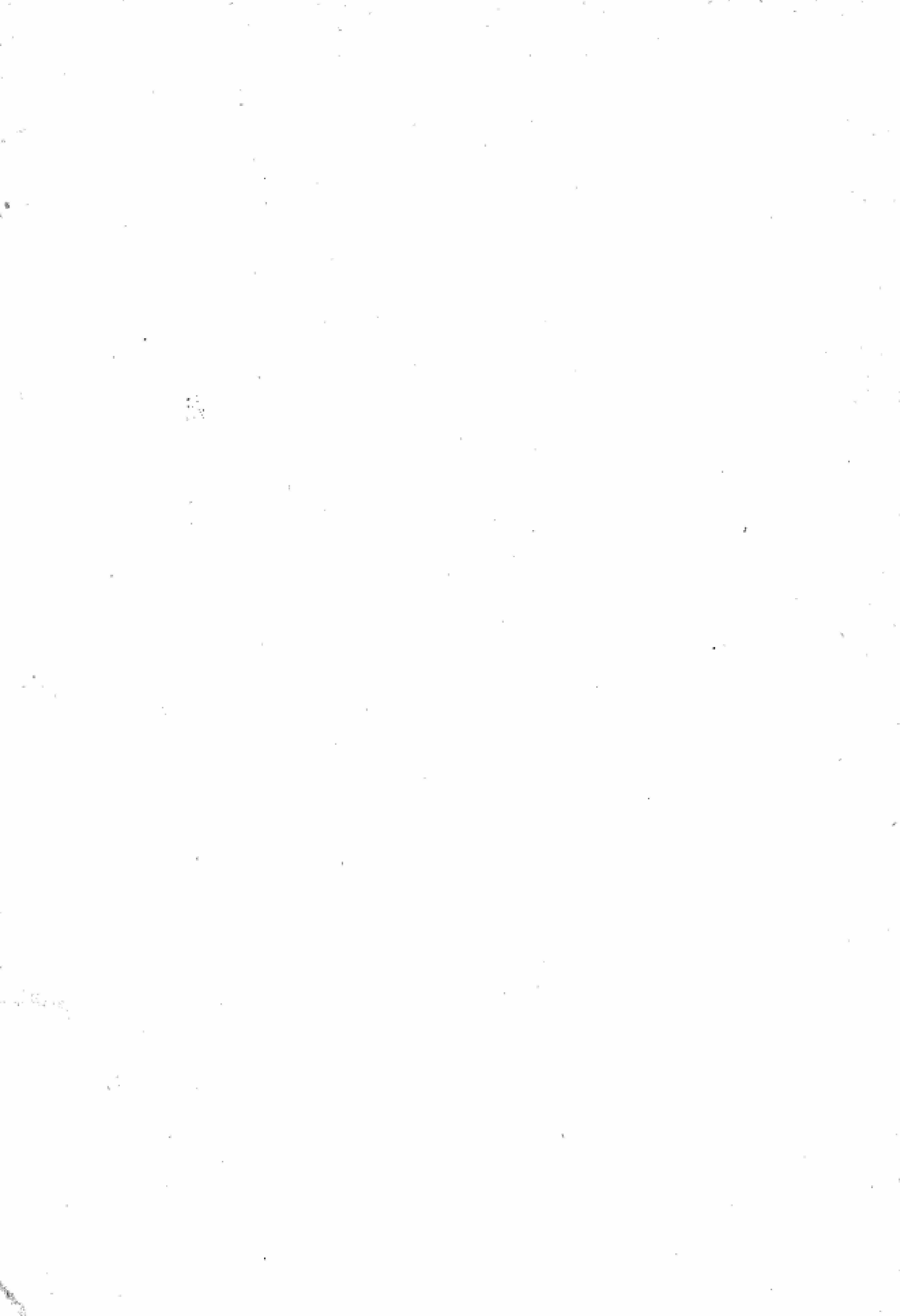
第六卷第六號

目次

圖版五、武藏國橘樹郡橘村新作八幡臺貝塚諸磯新古型式土器

資料

余白錄



武藏國橘樹郡橘村新作(シンサク)八幡臺貝塚調査報告

——多摩溪谷右岸の貝塚研究其四——

岡　榮　一

一　緒　言

予は已に多摩溪谷右岸の貝塚として、久本[1]、子母口[2]、末長[3]の三貝塚に就いて、夫々調査報告を成した。今又玆に本調査報告を成して、以つて多摩溪谷右岸の貝塚研究其四に充てんとするものである。

本貝塚の發見動機は、已に同一多摩溪谷右岸の多摩丘陵の久本、末長、千年(未發表)、野川(未發表)、子母口等の各所に貝塚の存在を識つた予等が更にこの邊にもあらんと、四時見出に努力した結果、昭和七年一月十八日、遂にその端緒を惠まれたのであつた。依つて地主中村龜壽、耕作者中村正治兩氏より、その地の發掘許可を受け、同年二月七日をトし、橘樹考古學會の澁谷七三郎、庄司啓三、中山錄藏、中村直孝(地主令弟)等の諸君及び中村豐作君(耕作者二男)等の參加盡力を得て發掘調査した。(第一圖)

Fig. 1. 新作八幡臺貝塚發掘地點

尙當日は偶然予を來訪せられたる八幡一郎、坂口保治兩氏も臨場、種々好意ある助言やら撮影の勞を取られたのは豫想外の歡喜であつた。前記各位の好宜と共に深く感謝の意を表する次第である。

【註】(1) 拙稿　神奈川縣高津町久本貝塚調査報告　橘樹考古學會誌第一年第二冊—第二年第二冊

(2) 拙稿　神奈川縣橘樹郡子母口貝塚群の研究　橘樹考古學會誌第二年第三冊—第五冊

(3) 拙稿　神奈川縣橘樹郡橘村末長臺貝塚調査報告　考古學雜誌第二十四卷第三號—第四號

二　遺蹟

(一)　貝塚の位置及び地形

本貝塚は多摩溪谷右岸の洪積臺上―多摩丘陵上にあつて、神奈川縣橘樹郡高津町の東南約二粁にある。(第二圖)云ふ迄もなく本溪谷は谷奥秩父、西多摩の山地に發し、谷口川崎平地に至る、左岸武藏野臺地、右岸多摩丘陵の間に介在するものであつて、そこに一內灣を形成して居る。

本貝塚附近に於ける多摩溪谷は、谷幅凡そ三粁强、河幅小なる現多摩川と、點在する川崎新市區及び高津町下野毛山谷の小部落と、大部分は水田の沖積平地である。而してこの沖積平地の標高は本貝塚附近で一二米、これが上方一粁半弱の久本貝塚附近で一三米、これが下方二粁弱の子母口貝塚附近で一〇米を算する程度に止まるのであるから、本貝塚成生の當時にあつては、この內灣の奥



Fig. 2.　新作八幡貝塚の地理的位置　×印新作八幡臺

$\frac{1}{50000}$

深く迄海水が滋へたと推定さるる。

本貝塚は上述の如く、多摩丘陵上にあつて、多摩溪谷右岸の比較的谷奥に位するものであるが、更にこれを詳言すれば、多摩丘陵の多摩溪谷に參差する不規則な一舌狀臺地—南北に養福寺谷戸、中村谷戸と俗稱する二小支谷を擁する八幡臺(別名神明臺)上で、(第三圖)臺地は東西約四〇〇米、南北約一〇〇米、標高四〇米内外、大體平かな山畑であるが、周圍の傾斜は比較的急峻である。



Fig. 3.　新作八幡臺貝塚

$\frac{1}{10000}$

本貝塚はこの臺上の東邊にある八幡神社の西方約三〇米と、一五〇米のA・B二ヶ所で、何れも臺上北東寄りにあり、現在の地表面は全く開墾せられ、予等が發掘前には僅かに農耕の際掘り出されたる極く小量の貝殼及び其他の遺物が露出して居るに過ぎず、貝層は全く地表下にあつて、耕作者の言に據つて初めて知つたのである。

今この遺跡を新作八幡臺貝塚と假稱する。

扨てこの自然環境より云へば、三方に海を繞らした舌狀地で、而かもその傾斜は比較的急峻、加ふるに鬱々たる森林を背負ひ、一段と保全率を高めたであらうし、他面東に多摩溪谷の浪穩かな煙波鄉を眺め、南北に養福寺、中村二支谷の淺小好適な干潟又は蘆荻叢生の沼澤地を擁し、西に多摩母丘の坦々たる陸道を得て、概して惠まれた住居地であつたらう。

されば本貝塚の附近、この丘陵には前記久本、末長、千年、野川、子母口等に、貝塚遺跡の存するのを見るの

である。

（二）貝塚の調査史

本貝塚は前記の如く、發見難の狀態にあつた爲か、殆んど學界に紹介されて居ない。日本石器時代遺物發見地名表第五版追補一に據れば、大里雄吉氏が歷史地理第四十三卷第二號の地名表に、新作、土器との報告があるが、未だ貝塚とは記して居らず、果してこの遺蹟なるやも不明である。昭和七年二月十九日、予は横濱貿易新報社の需めに應じて本貝塚の概略を同紙に發表した外、橘樹考古學會誌第二年第三輯、第六輯及びハイキング第一卷第六號にも本貝塚の發見と發掘とを小記したが、この他には寡聞本貝塚の學術的調査を知らないのである。

尙地主中村龜壽、耕作者中村正治兩氏の談にも本貝塚は叢地開拓の後、未だ發掘らしき發掘を試みず、又來訪者も尠しと云へば、予等今回の發見、發掘を以つて、或は本貝塚の學術的發見、發掘の嚆矢をなすものではないかと思ふ。

（三）發掘及びその狀態

今回發掘したのは主としてA貝塚で、B貝塚は試掘せるに止まる。從つてこれを第一回調査となし、B貝塚は後日に讓り度い。

發掘はボーリングに據つて知り得た貝層の東端より更に一米强の東方から東西に徑九・五米、南北に徑四米の長方形の壕を設けた。（第四圖A）

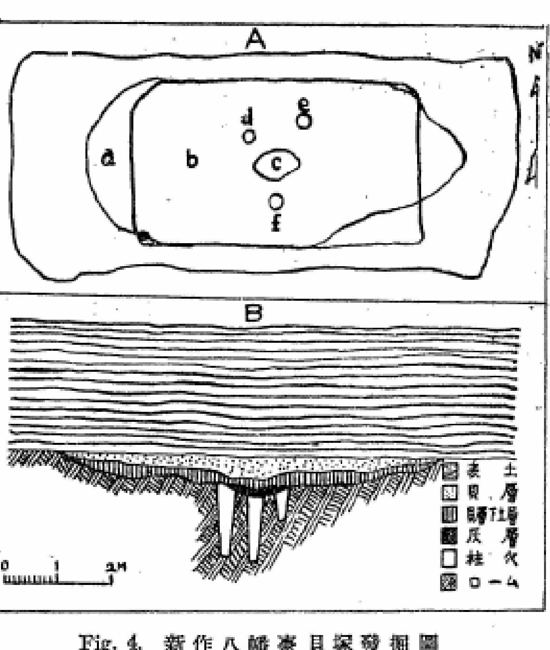


Fig. 4. 新作八幡臺貝塚發掘圖
A. 平　面　圖
a. 貝層　b. 住居址　c. 爐跡　d. e. f. 柱穴
B. 斷　面　圖

1　表　土

表土の厚さは平均二・四米。表面及び内部共に、極く小量の貝殼、石片、石器、土器破片等を散見するのみで、表土は貝層の深き爲めか、比較的貝層とは劃然して居た。（第四圖B）

2　貝　層

貝層は表土の直下にあつて、その厚さ一五糎—三〇糎、特に中央部の邊が厚く、その面積は不整楕圓形で、長軸東西に七米、短軸南北に三米、（第四圖A）殆んど混土の形迹がなく、貝殼の二枚貝は多く相合つて出で、或は純貝層とも云ひ得べく、恐らくは成生時に近く成生し、その儘今日に遺存したと思はれる。この貝層には土器破片、石器、石片、自然石、獸骨等を含み、貝層底は傾斜なきも、中央部が稍々低下して居た。尚貝層は單層であつて、往々當地方他の貝塚に見る如き同一種の貝類の局所的に比較的密集するところがあつた。(1)（第四圖B）

3　貝層下（土層並びに住居址）

貝層底に接して若干の貝層下土層が存在して居つたが、これは五—二五糎の薄層で、その直下は地盤たる壚坶層に達して居る。然しこの貝層下土層には、土器破片、石器等を混じ、誠に重要なる層位別の一單位であつた。

（第四圖Ｂ）

更に玆に大書すべきは、墟坶層の表面であつて、貝層中央部の垂直下を中心に、東西に徑五・五米、南北に徑三米の略々長方形に近き區劃面を見出したことである。（第四圖Ａ）

尙この區劃面を仔細に檢すると、四邊より僅かに斜凹してゐるが、その深さは漸く五糎内外で、明かな壁面と底面との分化はない。次に底面は中央部及び他の三ヶ所の垂直孔を除く外は概ね平坦で、敲き固め且つ研磨したか、一見砥の如き狀態を呈し、こゝに歷然たる區劃面をなす。中央部は周圍よりも更に低凹して、その中に最厚部二〇糎、平面觀不整楕圓形の東西に徑八五糎、南北に徑六〇糎の灰、木炭末、燒貝、燒土等があり、火力は墟坶層のみに及んで、貝層下土層には全く影響がない。他の三ヶ所の垂直孔とは、墟坶層に深く穿たれ、恰もこの中央部を三角形に取り圍む如く南側に一ヶ、北側に二ヶあつて、その口形は大體圓形、その壁面も大體垂直であるが、一般に口徑より底徑稍々狹く、何れも土壤が充滿して居た。各孔の徑、深さ、中心間隔及び中心より四邊に至る最短距離を第一表に示す。（第四圖Ａ）（第五圖）

想ふにこの區劃面は住居址であつて、底面はその床面、中央部はその爐跡、垂直孔はその柱穴であらう。只床面が成生當時の地表面上に位置するを以つて、これを竪穴とは稱し難いが、一種の平地住居址とは云ひ得よう。かゝる類例は他にも存する。[2] 尙又玆に注意を惹いたのは、三ヶの柱穴が略々等間隔に、爐跡に近接して存したことである。これは些か他の型式とも異り、原始民族が爐に對する特殊施設の住居址だと信ずる。

輓近貝塚貝層下發見の住居址例は逐次增加し、石器時代住居址に關する研究に一歩を進めつゝある。當地方に於ても折本貝塚[3]、下菅田貝塚[4]、矢上谷戸貝塚[5]、末長篭臺貝塚等[6]に、已にその發見例がある。八幡氏に據れば、運

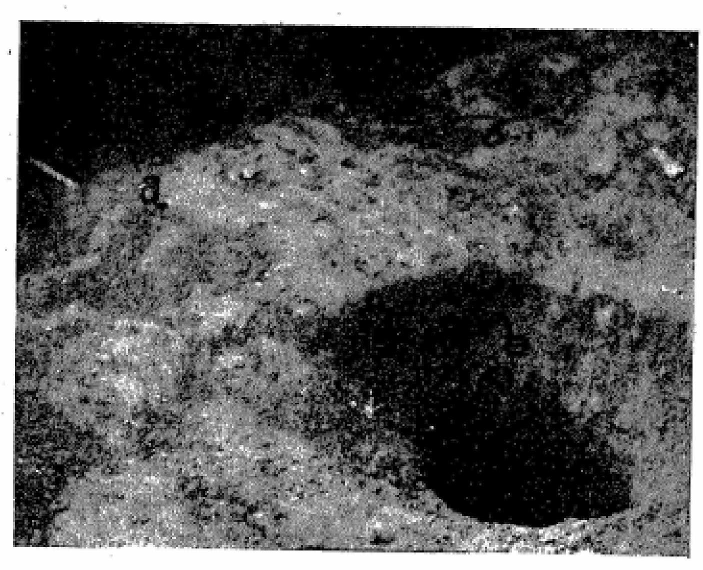


Fig. 5. 住居址南側(a)及び北西側(b)の柱穴

田式前後の時期より勝坂式の時期までは徑小、深さ大なる方形四本柱の竪穴が行はれ、加曾利E式前後の時期には徑大深さ小なる圓形多數柱の竪穴となり、堀之内式の時期には平地住居である敷石が認められる。加曾利B式以降は不明で、只安行式（奥羽地方では龜ヶ岡式）の時期の遺跡が比較的低濕の地に接して存すること、殊に泥炭層に遺物が存することなどから同時期に杭上住居式のものがあり、從つて一般には床下を生じたのではないかとの豫想を抱くとのことである。(7)

本貝塚は後述の如く、諸磯式期乃至子母口式期に屬する。從つて本住居址は同時期のものと見做し得る。これを八幡氏の蓮田式期前後のものと比較し、異同を檢すれば、先づ平地と竪穴の相違があり、深さ大、四本柱に相違があるが、徑小、圓形ならざるは一致する。兎もあれ日本石器時代住居型式の構造、年代、所屬等には未だ疑點がある。

部位 ＼ 垂直孔の位置	南側	北東側	北西側
口徑	30	35	22
底徑	28	32	20
深さ	130	125	60
中心間隔	153→	100→	132→
中心より四邊に至る最短距離	86	69	100

Tab. 1. 垂直孔（柱穴）の大さ（cm）

されば こゝにこの一新例を提出し得ることを欣快とする。

4 遺物包含の狀態

包含遺物の品目及びその一部の狀態には觸れたが、一般にこれらは人爲的に配列した如き形迹はなく、殊に土器は破棄せるものか、全部小破片のみであつた。又獸骨も頗る斷片で、採集になか〳〵困難を感じた。

5 各層の文化

各層、包含遺物及びその狀態は已に述べたが、この各層に於ける文化には、些か注意すべき楷梯があつた。即ち表土は彌生式乃至勝坂式に屬し、貝層は諸磯式乃至子母口式に屬し、貝層下土層は子母口式に屬して居た。更にこれを詳言すれば、彌生式は殆んど地表面で、勝坂式は表土の上層、諸磯式は貝層の大部分に新・古二型式と思はれるものを含み、子母口式は貝層下層より貝層下土層の全部を占めて居た。

【註】（1）八幡一郎氏　折本貝塚發掘記　科學畫報第八卷第五號
大山史前學研究所　東京灣に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける縄紋式石器時代の編年學的研究豫報〔第一篇〕
大山史前學研究所　關東縄紋式文化編年學的研究資料第一册等
（2）東京帝國大學理學部　人類學敎室研究報告第五輯
（3）大山史前學研究所　關東縄紋式文化編年學的研究資料第二册
（4）前出　（1）の3
（5）八幡一郎氏　日本石器時代の住居型式　人類學雜誌第四十九卷第六號
（6）前出　末長雅雄貝塚調査報告
（7）前出　（5）

三 遺物

（一）自然遺物

自然遺物としては貝殼、獸骨、木炭、灰、燒土、石片、自然石等を發見した。

1 貝類

貝類の殼は全遺物中、數量的に最も多く、凡そ左の如き十四種類であつた。

1 ハマグリ *Meretrix meretrix Linne.*
2 カキ *Ostrea gigas Thunberg.*
3 シホフキ *Mactra veneriformis Reeve.*
4 シヾミ *Corbicura japonica nipponensis Pilsbury*
5 オキシヾミ *Cyclina sinensis Gmelin.*
6 ハイガヒ *Arca granosa Linne.*
7 オホノガヒ *Mya arenaria japonica Jay.*
8 カヾミガヒ *Dosinia japonica Reeve.*
9 アサリ *Paphia(Ruditapes) philippinarum Adam & Reeve.*
10 サルボウ *Arca subcrenata Lischke.*
11 キシヤゴ *Umbonicum costotum.*

12　アカニシ　*Rapana thomasiana* Grosse.

13　ツメタガヒ　*Polinices didyma* Bolten.

14　バイ　*Latrunculus japonicus* Sowerby.

即ち淡水産はシヾミ一種のみで、他は悉く鹹水産である。而してこの内1―10が斧足類又は二枚貝類、11―14が腹足類又は巻貝類で、ハマグリ、カキ等が比較的多かつた。これを以つて本貝塚は主鹹貝塚と見るべきであらう。

尙本貝塚より下方の千年、野川、子母口等の諸貝塚が、同じく主鹹貝塚であるに對し、本貝塚より上方の末長、久本等の諸貝塚が、淡鹹貝塚であると云ふことは、これら貝塚の成生當時に於ける海岸線乃至其他の地理的條件を複原する上に極めて重要な點であらう。

2　獸骨

獸骨も甚だ小量であつて、明かに檢出し得たのは次の二種類である。

1　シカ　*Sika nippon nippon* (Temminck)

2　キノシヽ　*Sus leucomystax leucomystax* Temminck.

3　木炭・灰・燒土

木炭、灰、燒土等は、何れも爐跡に多量に存した。この内木炭に櫧が判然したのは、この種木炭質の檢出例の尠いだけに有難かつた。

尙他の植物として土器の粘土中に、植物纖維の遺存を見たが、これの鑑定は未だ得て居ない。(1)

4　石片・自然石

石片、自然石共に往々發見したが、石片は恐らく石器屑であらう。その石質には左の如きものがあつた。

1　黒　曜　石　*Obsidian.*
2　石　　　英　*Quartz.*
3　砂　　　岩　*Sandstone.*
4　閃　綠　岩　*Diolite.*

【註】（1）史前學雜誌第二卷第六號、宮坂光次氏の一王寺式土器中に殘存する纖維は理學博士草野俊助氏に據つて禾本科或は莎草科植物の維管束とせられて居る。

（二）人工遺物

人工遺物としては石器、土器を發見した。

1　石　器

石器はその數量も種類も乏しく、總計僅かに十七點、打製石斧、磨製石斧、打製石鏃を得たに過ぎない。この内打製石鏃が最多である。

1　打　製　石　斧

第六圖１・２は貝層より、第六圖３・４は貝層下土層より夫々發見したものであつて、１・２・３の完全三個、４の不完全一個の四個のみである。その型式は皆な下廣型で、多摩川沿岸に多いと傳へられる兩頭形を全然見ぬ

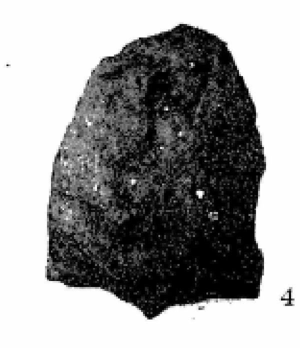



Fig. 6. 新作八幡臺貝塚發見石斧

こと丶、一般に片面に自然面を殘し、片面にのみ打裂を加へて居ること丶は注意すべきであらう。今その大さ、重量、石質を說明の便宜上第二表として示す。

即ち全長は六・二糎—七・九糎(十)、胴幅は三・九糎—五・三糎、刃幅は五・〇糎—略々六・〇糎、厚さは一・一糎—二・五糎、重量は六〇瓦—一二八瓦の間にあり、石質は悉く砂岩であつた。

2 磨製石斧

第六圖5の一個であつて、貝塚附近地表面の採集である。少しく頭部を缺いて居るが、勿論全形を推し得るもので、全長六・九糎、胴幅四・八糎、刃幅四・一糎、厚さ三・三糎、重量一九五瓦、頭部より刃部へ稍々幅狹の、中央より兩側へ稍々扁平の、部厚、兩刃のよく研磨された、石質閃綠岩の精品である。

號數	全長	胴幅	刃幅	厚さ	重量(g)	石質
1	7.5	4.5	5.0	1.4	60	Sandstone
2	6.2	3.9	5.5	1.1	40	Sandstone
3	7.1	5.2	6.0	1.8	90	Sandstone
4	7.9 (+)	5.3		2.5	127	Sandstone

Tab. 2. 打製石斧の大さ．重量及び石質(cm)

Fig. 7. 新作八幡臺貝塚發見石鏃

3　打製石鏃

第七圖1のみ貝層出土で、他は全部表面採集である。總計十二個、殆んど完全で、その型式は皆な無柄である。左に赤堀氏法[1]に據つた大さの計測、重量及び石質を第三表として示す。即ち長さは一四粍—二三粍(＋)、幅は一〇粍—二〇粍、厚さは三粍—六粍、重量は〇・三瓦—一・八瓦の間にあり、石質は黒耀石が大部分であつた。

號數	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質
1	20	12	3	0.3	Obsidian
2	14	16	4	0.5	Obsidian
3	18	10(＋)	3	0.6	Obsidian
4	14	13	3	0.4	Obsidian
5	20	17(＋)	3	0.8	Obsidian
6	18	15	3	0.9	Obsidian
7	21	16	4	0.9	Obsidian
8	23	15	4	1.1	Obsidian
9	18(＋)	16(—)	4	0.8	Quartz
10	22	14	4	0.8	Quartz
11	18	15	6	1.4	Quartz
12	20	15	4	1.2	Quartz

Tad. 3. 打製石鏃の大さ・重量及び石質(mm)

2　土器

本臺地の土器を大別すると、彌生式、勝坂式、諸磯式(新・古二型式)及び子母口式の四式である。然しこの内彌生、勝坂の兩式は表面乃至表土層より見出したものであつ

て、表土は貝層上二・四米もあり、明かに本貝塚には直屬せず、従つて本貝塚の主體土器は、諸磯(新・古二型式)、子母口の兩式である。而してその發見量は各式、各部共甚だ尠く、且つ何れも小破片のみで、器形の完きは一個もなかつた。次に發見量を第四表として示す。

型式	口縁部	胴部	底部	計
彌生式	2	6	0	8
勝坂式	5	14	2	21
諸磯新型式	2	72	4	78
諸磯古型式	8	35	0	43
子母口式	7	50	1	58

Tab. 4. 土器片の各式各部發見量

卽ち口縁部二四個、胴部一七七個、底部七個、總計二〇八個で、決して多量とは云ひ得ぬのである。

以下本貝塚の主體土器たる諸磯新型式、諸磯古型式、子母口式を形態、紋様、製作等より一應詳述し、終りにこれが概觀を試みよう。

１ 諸磯新型式土器

大體の器形は鉢形乃至深鉢形を想はするもので、口縁部形態は上斜外曲口(一個)、上斜直口(一個)、底部形態は平面觀圓形底、側面觀倒梯平直底(四個)、底面と側線のなす角度は五十度内外である。(第八圖)

紋様には縄紋(六三個)、爪形紋(三個)、竝行線紋(四個)、浮線紋(一個)があるが、縄紋は極めて普遍的に發達し、何れも斜行の斜縄紋で、その緻密度は粗大なものから可成り纖細なもの迄あつた。(圖版五、上段1・2・3)爪形紋は二條の竝行線間に、爪形を連續的に施したもので、三角形を作るものもあつた。(圖版五、上段4・5・6)竝行線紋は本型式にのみ見られた。(圖版五、上段7・8・9)浮線

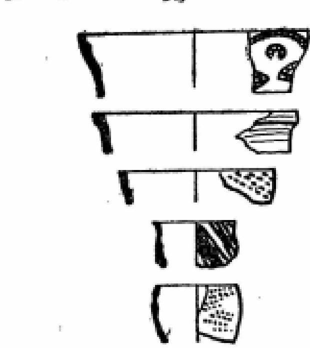


Fig. 8. 新作八幡臺貝塚土器口縁部及び底部形態

紋は細隆起線紋上に、切目を附して縄目狀を呈し、曲線或は渦卷狀をなす樣である。(圖版五、上段10)尙これらの諸紋樣は、一般に胴部より上部に多く、殊に口緣部に發達して居る。

燒成は一般に不良であるが、他の型式よりも良好で 色調に黑褐色、赤褐色多く、土質は粗雜で砂粉、石英粒、雲母末等を往々混ずるが、纖維は全然混じて居ない。厚さは概ね一糎内外である。

更にこの諸磯新型式土器は、これらの形態、紋樣、製作等より、大體二種類に分たれる樣である。

A　諸磯新型式 a 形土器

鉢形で、爪形紋、竝行線紋、浮線紋等を有し、燒成、土質等の最良好なものである。

B　諸磯新型式 b 形土器

深鉢形で、縄紋のみの、燒成、土質等の良好なものである。

2　諸磯古型式土器

大體の器形は深鉢形を想はするもので、口緣部形態は上斜外曲口(八個)である。(第八圖)紋樣には縄紋(三九個)、爪形紋(二個)があるが、縄紋は全部粗大なものである。(圖版五、下段1・2)爪形紋は二條の竝行線間に、又はこの竝行線を缺いて、曲線、三角形、格子狀等を作り、胴部より上部に發達して居た。(圖版五、下段3・4)

燒成は一般に不良であつて、色調に黑褐色、灰褐色多く、土質は粗雜で纖維を小量に混ずる。厚さは概ね一糎内外である。

3　子母口式土器

大體の器形は深鉢形を想はするもので、口緣部形態は上斜內曲口（五個）、上斜直口（一個）、垂直內曲口（一個）、底部形態は尖直底（一個）である。（第八圖）（第九圖１）

Fig. 9. 新作八幡塚貝塚子母口式土器

紋樣には條痕（四四個）、竹管紋（二個）、浮線紋（一個）、貝殼紋（六個）があるが、條痕は繩紋と同程度に發達し、アカガヒ科（ARCIDAE）の貝の腹緣を以て、內、外兩面に施されて居る。（第九圖２・３）竹管紋は弧狀をなして居た。（第九圖４）浮線紋は細隆起線紋上に、竹管紋を加味したものであつて、曲線或は渦卷狀を作る樣である。貝殼紋は條痕と同じく、ハイガヒ又はアカガヒの腹緣を縱に短く刺刻したもので、波狀或は三角形を作り、これを連續的に施したものである。（第九圖５）而してこれらの紋樣も亦、多くは口緣部に發達して居る。

燒成は一般に極めて不良で、色調は黑色、灰黑色を呈し、土質も粗雜で比較的多量の纖維混入を見たのであつた。厚さは概ね一糎內外である。

４　各式土器の概觀

以上本貝塚の主體土器を、諸磯新型式、諸磯古型式、子母口式として詳述して來た。この內諸磯古型式と子母口式とは纖維土器[2]である。扨て本貝塚に於けるこれらの各式土器の層位關係は、前記の如く、諸磯新型式、諸磯古型式は貝層にあり、子母口式は貝層下層より貝層下土層にあつた。この結果は大體關東地方の一般に合致する樣であるが、特に諸磯新型式乃至諸磯古型式と子母口式との層位關係を明

かになし得たのは、未だこの方面に立證乏しき關東古式縄紋土器の層位研究に資するところがあらう。

尚諸磯新型式は所謂諸磯式に相當し、諸磯古型式は八幡氏等が折本貝塚下層に於いて發見せられた纖維を含む諸磯の古い型式[3]に相當し、子母口式は史前學研究所の指扇式に相當する樣である。只こゝでは地理關係より子母口式の稱呼を逐つた。

【註】（1）赤堀英三氏　石器研究の一方法　人類學雜誌第四十三卷第三號

（2）山内清男氏　關東北に於ける纖維土器　史前學雜誌第一卷第二號

（3）前出　日本石器時代の住居型式

四　結　語

最後に各記載事項を要約して見ると次の如くなる。

1　遺跡に就いて

1　本貝塚は多摩溪谷右岸の比較的奥位に存するもので、自然環境に惠まれて居る。

2　本貝塚は臺上の平地に、二ケの貝塚より成る貝塚群である。

3　貝層の下に徑小、長方形、三本柱の爐に對する特殊施設の平地住居址を發見した。

2　遺物に就いて

1　自然遺物

A　貝類は淡・鹹兩水產であるが、鹹水產を主とする主鹹貝塚である。

B 獸骨は哺乳類のみであつて、且つその出土も比較的尠い。鳥骨、魚骨等は發見しなかつた。

C 木炭に樹質を檢出した。

2 人工遺物

A 石器

a 打製石斧(四個)自然面利用の下廣型で、貝層の二個は諸磯式に伴ひ、貝層下土層の二個は子母口式に伴ふものであらう。

b 磨製石斧(一個)地表面に於いて採集したもので、恐らくは勝坂式に伴ふものであらう。

c 打製石鏃(一二個)殆んど表面採集であつて、悉く無柄の三角形である。

B 土器

發見量は甚だ尠く、且つ何れも小破片のみで、完全に復形し得るものもなかつた。

a 形態 鉢形乃至深鉢形のみで、把手等は全然なかつた。

b 紋樣 大別すると縄紋系と條痕系である。縄紋系には爪形紋、竝行線紋、浮線紋の諸要素があり、條痕系には竹管紋、浮線紋、貝殼紋の諸要素があるが、これらは多く複合せられて、三角紋、曲線紋、渦卷紋、格子紋、弧紋、波紋等も作る樣である。然しその構成は未だ簡單である。尙條痕系は縄紋を缺き、條痕を內外に有するものである。

c 製作 一般に脆弱、吸水度大で、往々雲母末、砂粉等を混じ、纖維のあるものと、ないものとがあつた。

C 其他特殊な裝飾品や、骨角器等は發見しなかつた。

以上が今回發掘調査せる本貝塚群A貝塚の主要な成績である。かくて筆者は同一溪谷四ヶの貝塚調査報告を成した。而して漸次得るところがある。更に今後の累加を俟つて、一つは今回の不足を補ひ、一つは當溪谷諸貝塚の狀況並びに文化相をもより鮮明ならしめたい念願である。

終りに臨んで執筆を慫慂せられ、且つ貴重な紙數を賜つた、史前學會の御厚志を銘記する。（昭和九・一一・八）

關東地方に於ける貝塚貝層新舊とハヒガヒ放射助數の關係に就いて

土岐仲雄

はしがき

序　論

計測の目的と計測資料

東京灣のハヒガヒに就て

計　測　法

計測結果の表現法に就いて

本　論

同時代に棲息するハヒガヒ助數の比較

時代を異にするハヒガヒ助數の比較

貝塚ハヒガヒと現世ハヒガヒの助數比較

土器樣式とハヒガヒ助數との關係

結　論
附　記

はしがき

關東地方が、史前時代の遺跡に富んでゐる事は、世界に於ても稀に見る所である。それ等に關する、諸方面からの、種々な研究が、最近益々精密を加へ、深化されつゝある事は、誠に御同慶に堪へない次第であるが、觀察者の眼は、より多く文化遺物の方に注そがれ勝ちで、自然遺物は兎角等閑視され勝ちである。貝塚に於ける貝類の研究等も、殘念ながらこの例に洩れぬ樣である。余は、今回、アルカ屬中特にハヒガヒの放射助數と、貝塚貝層の新舊の關係に就いて考察し、此處に一つの結果らしきものを得たので、一應報告する次第である。本小論が、史前史研究上、多少なりとも寄與するところあれば望外である。

序　論

計測の目的と計測資料

上述の如く、本計測の目的は、ハヒガヒ放射助數の多少と、貝塚貝層の新舊との間に、何等かの普遍的關係があるかないかを、統計的に歸納し、延ひては、その結果より、逆に貝層新舊を判定する、一つの常數を得る所迄達したかつたのであるが、結論に於てものぶる通り、本論は前段の仕事の一部を完了したのみで、未だ後段に達してゐない。唯、その可能なる事が、辛うじて認められたと云ふ程度に過ぎない。

この放射助數計測の爲に、余が使用した資料の大部分は、大山史前學研究所が、關東地方繩紋土器の編年的研究の爲、同地方各地貝塚から採集して來た、同研究所々藏のハヒガヒによつたもので、關東地方以外の貝塚のも

のは計測しなかつた。特に本計測の爲に採集されたものでないから、一つ貝塚について計測箇數千個以上に達するものもあり、淡水性の強い貝塚になると、十箇に充たないものもある。然し此等のうちに、余自身が特に計測すべく採集して來た資料によつたものも數箇所あり、此後も機會があれば、なるべく多くの貝塚から、なるべく多くの資料を採集して、本來ハヒガヒの多い貝塚と、然らざる貝塚との計測箇數の差を縮少し、以つて本報告に於ける諸數値の、確實さを增進して行く事に致し度いと考へてゐる。

東京灣のハヒガヒに就て

最初に一言、東京灣のハヒガヒに就いて申し述べる。ハヒガヒは、アカガヒ、Arca inflata *Reeve* サルボウ Arca subcrenata *Lischke* と共に、アルカ屬(アカガヒ屬)に屬する鹹水貝で、學名は Anadara(arca) granosa *Linne* 後の二者に比して放射肋數が最も少くない事と、肋上に結節がある事とを特徴としてゐる。一名珍味とも云はれて、灰貝ともかき、支那では之を伏老とも云ふ。全體の形は三角形を爲し、殼頂に於ける鋸齒狀嚙合は一直線、從つて前面は矩形狀を呈し、その矩形の比較的正しいものと、著しく歪んだものとがあり、背面の曲線の強きものは、貝殼も厚く、強くあるが、曲線のなだらかなるものは、之に反する。余の計測したもののうちその幅六糎を越ゆるものも稀にはあつたが、全體としてはサルボウ、アカガヒの大きさに及ばない。實際珍味と名付けらるる如く、滋養豊富な貝で、原始人が好んで採集したのも、理由あることと思はれる。殊に秋採集したものが美味で、介殼よく合し、水中より取り出しても生存力強く、夏は五六日、冬には四十日位生存する。ハヒガヒの東洋に於けるロキャリティは、南支那及フィリッピンであつて、日本のそれは瀨戸南海以西の南海である。貝塚積成當時、非常に盛んに繁殖した關東地方―東京灣に於ては、既に完全な絶滅種となつてしまつてゐる。現在此の貝を盛んに養殖

してゐる岡山縣兒島灣地方等に就いて見るに、これを養ふに適當な場所は、灣内波靜かな、少しく淡水の流入する、干潮の時には水底の露はれる、底度軟泥のところがよいらしく、淡水の流入甚しき場所や、鹹度の強い場所、波の荒い、海水溫度の低い場所は絶對にいけない。鴨、鷺等の渉禽類も、この貝の稚貝の外敵として、ばかにならぬものださうで、同じ貝類の仲間のうちでは、ツブ、ニシ等の螺類が、酸液を分泌して、殼頂附近に孔を明けて、貝の内臟を食して、死に至らしめ、介殼の開くを待つて、全體を食ひつくすと云ふことである。就中ハヒガヒは寒氣に弱く、水面が氷結でもする樣な事でもあると、相當大きい害を受ける。とは云へ、暑氣强く、鹹度增す場合にも、斃死するもの多いが、殊に甚だしい大害を與へるものは出水と、波浪とで、出水の方は、鹹度を低下する事と、貝の上を泥で蔽ふ事との二重の害を與へる。この樣な場合には、一つ殘らず斃死すると云はれてゐる。赤潮、苦潮の害も、深く沈まない稚貝にとつては、相當恐るべきものの如くである。

關東地方に於ける化石貝層も、餘り多く實査しては居らぬが、猿島郡羽根野のそれに、放射肋數一九のもの一個あるを知つてゐる丈で、他には一個もない。それが貝塚積成期に入つて、急に增殖したらしく思へるのは、一體如何なる理由に基くものか。それが又數百年か或は、千數百年か、數千年かの後に、現在の如く絶滅したのは、水溫の變化によるものか、過度の淡水流入の影響によるものか、それとも一時的な赤潮等の發生に起因するものか、平均氣溫の下降によるものか、それ等諸原因が複合したものか、今のところ、これを確定すべき資料を缺いてゐる。然し大體に於て、種々な理由から、比較的古いと認められる貝塚貝層中には、ハヒガヒの數極めて多く、中には埼玉縣北埼玉郡綾瀨關山貝塚の如く、ハヒガヒの純貝層があるものもある。之に反して、新らしいと思はれるものになると、貝類鹹度の強い貝塚でも、含まれてゐるハヒガヒの箇數は、著しく減少してゐる。然しまだ

何時頃まで棲息してゐたのかと云ふ、絕對年代に觸れられる樣な資料は摑んでゐない。

計測法

古い時代に屬する貝殼の殼頂角度は、新らしい時代のものより狹いと云ふ事は、從來常識的に云はれてゐるところである。余は然しハヒガヒの放射肋數を計測した。アルカ屬にあつては、その貝殼の放射肋數は、種々なる重要な意義を有するものであり、モールス氏も既に、大森介墟篇中に於て、アルカ屬の新舊を論ずるに、放射肋數をもつてしてゐる。然し、例へば今述べた貝殼頂の角度を計測したり、高さ、幅、長さを觀測したりする、他の種々な方法のある事も考へられる。極めて大體の事は、若し正確な一定の方法を樹立する事が出來さへすれば、他種の貝の總數に對する、ハヒガヒの總箇數の比を見る丈でも、その貝層の新舊は大概想像出來ると云ふ事は、關東地方の貝塚研究者等によつて、常識的に說かれてゐるところである。この意味からすれば、第一表計測箇數の欄に並べた數字も、各貝塚から比較的公平に採集されてゐると云ふ意味に於て、多少の意義を有するとも考へられる。

放射肋數を數へる位の事は、三歲の童子にも出來そうな仕事であるが、實際にやつて見ると、種々注意しなければならぬ問題が起つて來る。それを以下箇條書にして、一纏めにして見ると、

(一)年齒の老幼による放射肋數の變化は、貝殼の大きさの著しい差違にも拘らず度外視した。(とは云へ、勿論極端に小さいものは除外した)隨分小さい貝殼に於ても、兩端の肋數の狀況等、大なる貝殼と、全く同じく計測し得たからである。(1)

【註】(1) 一般に貝塚貝層中に含まるゝ貝殼の大小を見るのに、下層のものは大きく、(或は大きなものを含んで居るのに對して)上層のものは比較的小さい樣である。マルサスの人口論を舁ぎ出す迄もなく、現住者が、その地域に定住してゐたものとして、自然食料の增殖

率が、人口の增加率に及ばなかつた爲、その貝塚の後の時代に至る程、如何なる貝にせよ、その幼貝まで採集しなければならなくなつたと云ふ事實を提示してゐるものではなからうか。

（二）最も問題になるのは、兩端の、肉眼には助上結節等の見えない、極めて不分明な放射助である。貝殼の兩端は必ずしも放射助をもつてはじまつてゐる譯ではない。或は、もう一つ位助のあるべき間隔を置いて、次の助に飛んでゐるのもある。この場合には、普通の外光にすかして見て、陰影の生ずるのを限度として一と考へた。勿論、構造上X光線でも用ひて見れば、陰が生ずる筈のものでも、肉眼で見て、影がなければ、數には入れなかつた。大體に於て、肉眼を以つてして、マキシマムに數へた譯である。この場合、資料の狀況を均一ならしめて置く事が必要で、必ず貝殼の兩端を、ブラシ等で清拭して置く樣にした。一とすべきか否かに就いて、餘り惑はなければならぬ樣なものは、全部捨てるのも一法だが、資料の箇數の關係から、そんな贅澤の許るされぬ場合もあり、その誤差は多少あるにせよ、余はなるべくマキシマムに數へて、之を採錄して行つた。

（三）中央附近の放射助でも、稀には一部分癒着して居り、その痕跡が明瞭に窺へる樣なものもあつた。余は之を二と考へた。

（四）如何に他の部分の放射助が明瞭であらうとも、如何に貝の成育が理想的であらうとも、兩はじの破損し、或は磨滅してゐるものは、一切之を省いた。この樣な貝の助數は、結局想像に終るからである。之に反して、中央部の破損してゐるものは、何とかして明確に、助數を數へ得るので、全部之を採用した。

（五）右殼、左殼の放射助は、中央部は明に喰ひ違ひの狀態にあるが、兩端に到るに從つて、喰ひ違ひの山は次第に低くなり、兩極に至つては、全く消失してゐる。故に右殼左殼は、中央部から推測すれば、元來一つの差があ

るべきところ、兩極の如何によつて、同數にしか數へられぬものも相當な數にのぼつた。一丈多い場合、余は多い方に從つた。なほ、本來採集當時は、合ひ貝であつたものが、現在はなればなれになつてゐるものもあらう。その場合には、止むを得ず二箇と數へてゐる譯であるが、明なる合ひ貝は、一箇として數へて、その右殼左殼孰れかの中、助數多きものの方を擇んで採錄した。

(六)貝殼が厚く丈夫で、丸々してゐるものは古く、薄く、扁平なるものは新らしい事は前にも一言したが、之を數字的に計測して、貝の高さ、幅、長さと、助數の多少の間に、如何なる相關々係が存するか等については、本計測に於ては、問題としなかつた。

(七)以上の樣な、種々の條件や約束があるので、計測は全部余一人で行つた。然し助數の曖昧なものは、二人以上の計測の結果の、算術平均を出すのも一方法かも知れない。

(八)上述の如く、本計測は、兩端の助數計測の場合に、主觀の入り込み得べき餘地を殘してゐるので、助數を計測する場合には、全くその貝殼の所屬貝塚名、或はその性質等を解らなくして置いて、之を行つた。

計測結果の表現法に就いて

(一)計測助數全部の算術平均(余の方法は少數點以下三位まで、四位は四捨五入)をもつてする方法は、夙にモールス氏が、大森介墟篇中に於て、使用してゐる方法である。甚だ簡便ではあるが、これによると、箇々の助數のものが何箇あるのかを、明示する事が出來ない。

(二)そこで余は、箇々の助數のものを併記して、その上にそのパーセンテージを示めし、その貝塚に於では、助數何條のものが何箇何パーセントあるかを、一目瞭然たらしめた。

（三）此等諸パーセントのうち、問題になるのは(a)助數一九のものに對する二〇のものの比、同じく(b)助數一九のものに對する二一のものの比、(c)助數一八のものに對する二一のものの比等である。此等を夫々(a)19/20、(b)19/21、(c)18/21等の記號を用ひて表現する事にした。これらは、その貝塚の、ハヒガヒ助數の特徴を、最も端的に表現し得るものである。

(a)(b)(c)のうち、殊に(a)は若し、兩端助數の曖昧なものが多い場合には、助數一九のものと助數二〇のものが、互に交錯して、その比も不純になり勝である。(c)はこの意味に於て、比較的純粹にして、明確なる數字を出し得る。但し、(c)の場合、總計箇數の減ずること及それに起因する諸缺點の生ずることは又止むを得ない。

（四）なほ、此等の數字は、漠然と並べても何にもならない。と云ふのは、そのハヒガヒの棲息場所によつて、助數の支配される點が多く、嚴密に云ふと、A溪谷の諸貝塚に屬するものと、B溪谷の諸貝塚に屬するものとを比較しても、淡水の流入その他の要因が異るから、實際の比較は成り立たない譯である。此の意味に於て、一つ溪谷に所屬する數多の貝塚の存在する、關東地方の如きは、甚だ惠ぐまれたる狀態にあるものと云はざるを得ない。

かくして得られた計數的結果は、本來から云へば、その溪谷獨特のものである。然し同じ谷奧のものを集計し、又同じ谷口のものを集計して、比較的逆現象なく、一定の計數的結果に到達し得たとするなら、それも又將來演繹的方法を施行する場合の、一標準たり得る、歸納的結論たるは勿論であるから、この方法も考慮して置いた。

本論

同時代に生棲するハヒガヒ助數の比較

（一）第一表第二六號と第二七號埼玉縣北足立郡綾瀬村蓮田關山貝塚に於ては、殆んどハヒガヒのみに少量のカキ等を混へたる層のある地點（A卽第二六號）と、蜆の多く混じたる地點（B卽第二七號）とがある。兩地點のハヒガヒの放射肋數を比較すると、A地點に於ては、一九の肋數を有するもの四九・〇%（19/20＝一・五五二、19/21＝一〇・七〇二、18/21＝二・九三一、平均肋數一八・五〇三）で、最多を占むるに對し、前者卽ちB地點に於ては、二〇の肋數を有するもの四七・一%（19/20＝〇・七〇八、19/21＝二・八三三、18/21＝〇・五八三、平均肋數一九・七〇六）で最多を占むる。

（二）現生種にあつても、岡山產のもの（第一表現生種第一號）は、肋數四二・九%で、一九のもの最多なるに對し、備中妹尾產のもの（同第二號）は、肋數六〇・七%で、二〇のものが最多である。

（三）神奈川縣橘樹郡橘村子母口貝塚のハヒガヒの貝殼は、關東諸貝塚中、稀に見る美事なるもので、文化遺物から見ても、必ず古き時代の貝塚と推定されるにも拘らず、肋數四二・七%（19/20＝〇・八二一、19/21＝二・三九七、18/21＝〇・四一三、平均肋數＝一九・六九三）で、二〇のものが最多である。

（四）鶴見溪谷の唯一の外貝塚たる神奈川縣橫濱市神奈川區駒岡町貝塚（第一表第四號）は、之のみ著しく肋數一九のもののパーセンテーヂが大である。（本論第四二頁參照）

此等の諸例は、同一時代に棲息してゐるハヒガヒであつても、その肋數は淡水の流入量や、水溫、水底の狀況如何によつて、著しき差違のあるものであると云ふ事實を明示するものなのであらう。

此の事實は、淡水流入量の多い溪谷に於けるハヒガヒ肋數は、例へ古き貝層に屬するものと雖も、二〇以上の、肋數多きもの多く、肋數丈によつては新舊の差を計出する事が出來ないと云ふ結論に導く。鶴見溪谷、多摩溪谷

の如き、この代表的な好例で、谷奥から、谷口に至るまで、何れの貝塚のハヒガヒの放射助數を見るも、殆んど二〇のパーセンテーヂが最高で、その間に甲乙を附することが出來ない。これはハヒガヒ放射助數と貝塚新舊貝層との間に、一定の數的關係を抽出し得ない失敗例をなすものである。

時代を異にするハヒガヒの助數の比較

（一）第一表第四二號及四三號埼玉縣南埼玉郡豐春村花積貝塚は、例の有名な、貝類鹹度の等しい、上下二層の貝層を有する、特殊な貝塚であつて、上層即ち第二層からは、勝坂式土器を出し、下層即ち第一層からは蓮田式土器を出土する。この兩層に屬するハヒガヒを別々に數へて見ると、前者の方は四五・六%（$\frac{19}{20}$＝〇・六五〇、$\frac{19}{21}$＝〇、八六七、$\frac{18}{21}$＝〔18のものなし〕、平均助數＝二〇・一四五）で、二〇の助數を有するものが最多であるが、後者にあつては、助數四六・五%（$\frac{19}{20}$＝一・二〇六、$\frac{19}{21}$＝五・四四八、$\frac{18}{21}$＝〇・七二四、平均助數＝一九・五〇三）で、一九のものが最多を示めす。この兩貝層は、共に純鹹性の貝層であるから、淡水流入等の影響を、主として考へる事は出來ない。先づ貝層の新舊と云ふ事を以つて、說明しなければならぬと思ふ。

（二）貝塚積成當時の關東地方の大體の地形を、洪積層臺地によつて復原して見ると、第一表にも擧げた樣な、鶴見溪谷、多摩溪谷等々の諸溪谷があらわれて來る。此等の諸溪谷に屬する數多の貝塚中、最も谷奥にある純鹹貝塚、又はそれに近い貝類鹹度を示めす貝塚は、海水が、その邊まで侵入してゐた當時に積成されたものであるから、他の諸貝塚に比して、最も古い筈であり、同一溪谷中の、谷中の純鹹性貝塚（又はそれに略々等しい鹹性の貝塚）は、それについで古く、谷口のものは最も新らしい筈である。若し同じ溪谷の谷口に純淡性の貝塚があり、その上に同じ貝塚がありとすれば、谷口のものが最も新らしくて、谷奥へ行く程古い譯である。

上述の要因が、比較的理想的に行つてゐるのは入間溪谷である。此の溪谷の貝類鹹度は、大體に於て淡水性に傾いてゐる。そして谷奥から、谷口に至るまで、比較的等しい距離を置いて、第一表第一三號乃至第二四號の諸貝塚が點在してゐる。(谷奥乃至谷口の諸貝塚を具ふる點に於ては、元荒川溪谷も同じであるが、此の溪谷には日川支谷がある爲に、貝塚の位置が、非常に複雜化されて、谷奥、谷中、谷口の區別を立てる事が、極めて困難であり、又貝塚と貝塚が餘り接近してゐて、文化遺物から見ても、一つを他と區別する事は極めて、困難な狀態にある。綾瀨溪谷の諸貝塚は、所在地の位置はよいが、之と比較すべき谷口の貝塚を缺いてゐる。結局諸方面から見て、一番模型的に貝塚が並んでゐる溪谷と云へば、第一表中に於ては、入間溪谷を置いて、他に發見し得ない事になる)

此溪谷に於ける谷奥五つの主淡貝塚、即ち、第一表第一三號乃至第一七號の、埼玉縣北足立郡平方村南貝塚、同縣同郡指扇村五味貝戸貝殼山貝塚、同縣同郡三橋村並木貝塚、同縣同郡同村側ヶ谷戸貝塚、同縣同郡與野町大戸貝塚の諸貝塚に於ては、最後の大戸貝塚以外、孰れも助數一九のもののパーセンテーヂが、最多である。即ち、南貝塚に於ては助數一七のものが四箇三三・三%、二〇のものが三箇二五・〇%なるに對し、一九のものは五箇四一・七%で最多、五味貝戸貝塚に於ては助數一八のもの二箇一四・三%、二一のもの三箇二一・四%、二〇のもの同じく三箇二一・四%なるに對し、一九のもの六個四二・九%で最多、並木貝塚に於ては、助數一八のもの一〇箇一二・三%二一のもの二箇二・〇%、二〇のもの二六箇三二・一%なるに對し、一九のもの四三箇、五三・一%で最多、側ヶ谷戸貝塚に於ては、助數一七のもの一箇三・六%、一八のもの四箇、一四・三%、二一のもの一箇三・六%、二〇のもの一〇箇三五・七%なるに對して、一九のもの一二箇四二・九%で最多、大戸貝塚のみは助數二一のもの二

箇二八・六%、二〇のもの三箇四二・九%なるに對し一九のもの二箇二八・六%で、稍逆になつてゐる。この計測箇數總計は一四二箇で、助數一七のもの一箇〇・七%、一八のもの二〇箇一四・一%、二一のもの八箇五・六%、二〇のもの四五箇三一・七%なるに對し、一九のもの六八箇四七・九%で最多、$\frac{19}{20}$＝一・五一一、$\frac{19}{21}$＝八・五〇〇、$\frac{18}{21}$＝二・五〇〇、平均助數＝一九・二七四である。

之に對して、同溪谷中、谷口四つの淡鹹及一つの主淡貝塚、第一表第二〇號乃至第二四號に於ては、如何なる結果が示めされるかを次に示めそう。五つとは、埼玉縣北足立郡芝村小谷場貝殼坂貝塚、同縣同郡谷田村太田窪下貝塚、同縣同郡神根村新井宿貝塚、東京市板橋區志村小豆澤町貝塚、埼玉縣北足立郡新郷村東貝塚の諸貝塚である。この五つの貝塚に於ては、新井宿貝塚のものが、同數値を示めす以外、全部助數二〇のパーセンテーヂが最多である。卽ち小谷場貝塚に於ては、助數一八のもの五箇三・九%、一九のもの三三箇二五・九%、二二のもの六箇二七・六%、二一のもの三五箇二七・六%なるに對し、二〇のもの四八箇三七・八%で最多であり、太田窪下貝塚に於ては、助數一九のもの一〇箇三〇・三%、二二のもの一箇三・三%、二一のもの一一箇三三・三%なるに對し、二〇のもの二一と同じく一一箇三三・三%であり、小豆澤貝塚に於ては、助數一八のもの二箇九・二%、一九のもの一箇四・五%、二三のもの一箇四・五%、二一のもの六箇二七・二%なるに對し、二〇のもの一二箇五四・五%で最多であり、東貝塚貝塚に於ては、助數一九のもの三箇三〇・〇%、二一のもの三箇三〇・〇%なるに對し、二〇のもの四箇四〇・〇%で、最多であり、唯新井宿貝塚丈、助數一九のもの八箇四二・一%、二一のもの三箇一五・八%なるに對し、二〇が一九と同數値の八箇四二・一%を示す。此の計測總箇數は二一一箇で、助數一八のもの七箇三・三%、一九のもの五五箇二六・一%、二三のもの一箇〇・四%、二二のもの七箇三・三%、二一のもの五

八箇二七・六%なるに對し、二〇のもの八三箇三九・三%で最多であり、$\frac{19}{20}$=〇・六六三、$\frac{19}{21}$=〇・九四八、$\frac{18}{21}$=〇・一二一、平均助數=二〇・二八四である。即ち、

助數 ╲ 溪谷	谷奧	谷口
$\frac{19}{20}$	一・五一一	〇・六六三
$\frac{19}{21}$	八・五〇〇	〇・九四八
$\frac{18}{21}$	二・五〇〇	〇・一二一
助數平均	一九・二七四	二〇・二八四

この數字を比較するに、谷奧よりも谷口の方が$\frac{19}{20}$に於ては〇・八四八、$\frac{19}{21}$に於ては七・五五二、$\frac{18}{21}$に於ては二・三七九減少し、平均助數に於ては、一・〇一〇丈增加してゐる。(1)

【註】(1) 谷中と想定されるものの諸數値は左の如くである。計測總個數一二八、助數一八のもの五箇三・八%、一九のもの三四個二六・五%、二二のもの二箇一・六%、二一のもの二〇箇一五・六%なるに對し、二〇のもの六七箇五二・三%で最多を示めす。その$\frac{19}{20}$=〇・五七、$\frac{19}{21}$=一・七〇〇、$\frac{18}{21}$=〇・二五〇、平均助數=一九・八四四、之等の數値は谷口の何れとも逆數を示めすが、さりとて谷奧とは一つも逆數を示めさない。然し谷中を今のところ問題の渦中に投ずる必要もないので、この數字は本文中には挿入する事を中止した。

此等の諸貝塚は、奧より入口に至るに從つて、次第に新らしくなつてゐるらしい事は、その文化遺物を見ても明であり、前述の諸差は、貝塚貝層の舊い、新らしいによつて生じたものと考へる他はない。

(三)綾瀨溪谷に就いて見るに、此處の諸貝塚の分布狀態も極めて良好で、淡水の影響も比較的均分に行つてゐる樣に思はれるが、前にも鳥渡述べた通り、殘念ながら比較すべき、谷口の貝塚を缺いてゐる。强ひて云へば埼玉

縣南埼玉郡柏崎村浮谷貝塚が、一番谷口に近く存するのであるが、未だ充分なる資料を採集し得てゐない。現在計測したものだけを云ふと、第一表第二五號乃至第二九號の諸貝塚で、最奥のものから之を列擧すると、埼玉縣南埼玉郡綾瀬村栗崎貝塚、同縣同郡同村蓮田關山貝塚(二地點)、同縣同郡同村蓮田坂堂貝塚、同縣北足立郡春岡村深作貝塚の四貝塚である。之等の諸貝塚は、文化遺物から見ても、非常に舊い時代に屬するものの如くであるが、助數パーセンテーヂに於ても、關山貝塚のB地點を除く以外、悉く一九のものが最多である。卽ち栗崎貝塚に於ては、助數一八のもの七箇一七・九%、二一のもの一箇二・六%、二〇のもの八箇二〇・五%なるに對し、一九のもの二三箇五九・〇%で最多であり、關山貝塚に於ては兩地點の合計に於て、助數一七のもの一七箇〇・六%、一八のもの四五箇一二・八%、二二のもの九箇〇・八%、二一のもの五九箇五・三%、二〇のもの三七二箇三二・九%なるに對し、一九のもの五三七箇四七・六%で最多であり、坂堂貝塚に於ては、助數一七のもの三箇二・一%、一八のもの二二箇一五・四%、二一のもの七箇四・九%、二〇のもの四五箇三一・五%なるに對し、一九のもの六六個四六・二%で最多であり、深作貝塚に於ては、助數一七のもの八箇一・四%、一八のもの七九箇一四・〇%、二二のもの一箇二・〇%、二一のもの二一箇三・七%、二〇のもの一六八箇二九・八%なるに對し、一九のもの二八七箇五〇・九%で斷然最多である。此等諸貝塚の總計測箇數、一八七五箇に對し、助數一七のもの一八箇一・〇%、一八のもの二五三箇一三・五%、二二のもの一〇箇〇・五%、二一のもの八八箇四・七%、二〇のもの五九三箇三一・六%なるに對し、一九のもの九一三箇四八・七%で最多であり、その19/20＝一・五四〇、19/21＝一〇・三七五、18/21＝二・八七五、平均助數＝一九・二七七である。

この最後の數値を入間溪谷の谷奥の諸貝塚のそれと比較するに、前者は後者より、19/20に於ては〇・〇三九、

19/21に於ては一・八七五、18/21に於ては〇・八七五を夫々增加し、平均助數に於ては〇・〇〇二丈減少してゐる。

これによつて見れば、此等諸貝塚のハヒガヒは、大體に於て、入間溪谷の谷奧諸貝塚のそれと同樣、甚だ古いものである事が肯定される。(2)

【註】(2) 尙ほ此處に述べた如く文化遺物等から見ても、大體此處の諸貝塚が略々同一時代に積成されたとするならば第一表第二五號と第二七號の二主淡貝塚の合計に於ける 19/20 = 1・〇一八なるに對し、一つの主鹹貝塚と、一つの純鹹貝塚である、第二六號と第二九號の合計に於ける 19/20 = 一・五八五なる事の差は、同時代に於けるハヒガヒ助數の淡水其他の影響による差とも見られる。同樣な現象は、若し同じ假定を用ふるならば、元荒川溪谷の谷奧三つの貝塚にも見られる。

少なくとも以上三事實は、谷奧の比較的古いと思はれる貝塚貝層中のハヒガヒは、谷口の比較的新らしいと思はれる貝塚のそれに比して、確に助數の少くない事を確認せしめるに充分であると思ふ。

序に元荒川溪谷の諸貝塚及奧東京灣諸貝塚に就いて一言しよう。

元荒川溪谷の諸貝塚のハヒガヒ助數の計測結果は、多摩溪谷と同樣比較的とりとめがない樣ではあるが、此の溪谷は谷幅狹く、諸貝塚の位置が接近し、且その相互年代も、頗る接近してゐる樣に考へられる。此等の數字を、餘り深く解釋する事は、結局妄想を逞くましくする事に終りそうだから、此處には唯、位置は相當に距つてゐるが、前述の貝類鹹度と溪谷中の位置との相關關係に於て、異々同時代に屬すると推定される、此の溪谷中の谷奧二個の主淡貝塚第一表第三〇號埼玉縣埼玉郡綾瀨村貝塚、同第三一號同縣同郡篠津村白岡正福院貝塚と、谷口に近い純鹹貝塚第一表四〇號埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村櫻山貝塚、同第四二號同縣同郡豐春村花積貝塚第一貝層、同第四四號同縣同郡慈恩寺村南貝塚の兩群を比較して見る事としよう。前群に於ける計測總箇數は九六箇で、うち助數一八のもの三個三・一二%、二二のもの一個一・一%、二一のもの九箇九・四%、二〇のもの三七箇三八・五%な

るに對し、一九のもの最も多く、四六箇四七・九%であるが、後群に於ても計測總箇數五八二箇のうち助數一八のもの三二箇三・一%、二二のもの四箇〇・七%、二一のもの五七箇九・八%、二〇のもの二三六箇四〇・五%なるに對し、最多なるは一九のもので、二五三箇四三・五%である。谷奥の19/20＝一・二四三なるに對し、谷口の19/20＝一・〇六八、谷奥の19/21＝五・一一一なるに對し、谷口の19/21＝四・四三九、谷奥の18/21＝〇・三三三なるに對し、谷口の18/21＝〇・五六一、谷奥の平均助數＝一九・五七三なるに對し、谷口の平均助數＝一九・五六七である。卽、谷口は、谷奥より19/20及19/21に於ては、夫〻〇・一七六及〇・六七二を減じてゐるが、18/21に於ては〇・二二八丈多くあり、助數平均に於ても僅に〇・〇〇六丈多い。

この數字より考察するに谷奥の、より强い淡水の影響を考慮に入るゝもなほ、兩群の貝層の積成年代の略〻同じなる事が推定される。故にこの溪谷の數字の複雜なるは、要するに略〻同じ時代の貝塚が密集して散在し、その間に多少新らしいもの、古い貝塚が混在してゐる事を如實に物語るものであつて、多摩溪谷のそれの如く、失敗例であるとは考へられない。

今これとは全く別の方面から、唯、その貝塚の谷中の位置と、貝類鹹度のみを標準にして、第二表を作成して見ることとする。此處に集計したものは、谷奥の純鹹（實際は之に最も近いものしかないのであるが）、谷中の純鹹、谷口の純鹹の三群のハヒガヒを、全く無條件に、各溪谷から集めて、その助數の變化を見てみたのである。

谷奥二つの主鹹及淡鹹貝塚、埼玉縣南埼玉郡綾瀨村遺田關山貝塚A點及同縣同郡同村貝塚貝塚の兩者の合計に於て、その計測箇數總計は一〇六五箇、そのうち助數一七のもの七箇〇・七%、一八のもの一三八箇一三・〇%、二二のもの八箇〇・八%、二一のもの四八箇四・五%、二〇のもの三三八箇三一・七%なるに對し、一九のもの五二

六箇四九・三%で最多を示めす。この19/20＝三・八一二、19/21＝一〇・九五八、18/21＝二・八七五、平均肋數＝一九・一九三條である。

谷中九つの純鹹貝塚、即ち、神奈川縣都築郡新田村折本貝塚、同縣橫濱市神奈川區菊名町貝塚、同縣都築郡中川村茅ヶ崎貝塚、埼玉縣南埼玉郡黒濱村宿裏貝塚、同縣同郡同村宿貝塚、同縣同郡同村馬場貝塚、同縣同郡同村江ヶ崎貝塚、同縣同郡慈恩寺村古ヶ場貝塚のそれの總計に於て、その計測總箇數五八七箇のうち、肋數一七のもの四箇〇・七%、一八のもの五六箇九・五%、一九のもの二三四箇三九・九%、二三のもの一箇〇・二%、二二のもの一箇〇・二%、二一のもの五五箇九・四%なるに對し、二〇のもの二三六個四〇・二%で辛うじて最多である。この群に於ける19/20＝〇・九九二、19/21＝四・二五五、18/21＝一・〇一八、平均肋數＝一九・四九二である。

谷口一つの主鹹貝塚及五つ純鹹貝塚、即ち神奈川縣橫濱市神奈川區駒岡町貝塚、東京市大森區調布千鳥町貝塚埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村櫻山貝塚、同縣同郡豐春村花積貝塚(第一層及第二層と合計す)、茨城縣猿島郡五霞村土塔貝塚、千葉縣東葛飾郡關宿元町(恩國寺裏)貝塚のそれの總計に於て、その計測總數八〇六箇のうち、肋數一八のもの四一箇五・一%、一九のもの三三四箇四一・四%、二二のもの七箇〇・九%、二一のもの八五箇一〇・五%なるに對し、二〇のもの三三九箇四二・一%で、これも僅に二〇が最多である。その19/20＝〇・九八六、19/21＝三・九二九、18/21＝〇・四三五、平均肋數＝一九・六〇七である。即ち、(上表參照)條件を附せざりし爲に、この數字の中には、非常に不純なる要素が數多混入し

肋數＼採谷	谷奥	谷中	谷口
19/20	三・八一二	〇・九九二	〇・九八六
19/21	一〇・九五三	四・二五五	三・九二九
18/21	二・八七五	一・〇一八	〇・四三五
平均肋數	一九・一九三	一九・四九二	一九・六〇七

て來てゐるにもかかわらず、19|20の谷中と谷口に逆數字が現はれてゐるのみで、他は略〻谷口に至る程—時代が新らしくなる程、ハヒガヒ助數の增加せる事を示めしてゐる。[3]

【註】(3) 淡水性の貝塚についても、同様な觀點から、集計出來る答であるが殘念ながら、谷奧の主淡貝塚はあつても、谷口のそれがなく、比較する事が出來ない。

この計測結果は、三つの事實による前述の結論—時代が新らしくなるにつれて、ハヒガヒの助數は增加してゐると云ふ事實を、改めて裏付する、一つの有力な資料なりと考へられる。[4]

【註】(4) なほ、第一表の諸パーセンテージを、別に要約して表にすると次の様になる(別表)

助數／遺跡／%	←17					18					19					20					21					22→					計
	鵜	多	入	綾	元	鵜	多	入	綾	元	鵜	多	入	綾	元	鵜	多	入	綾	元	鵜	多	入	綾	元	鵜	多	入	綾	元	
←10		1	1	3	4	5	5	3	1	10		1	1								3	1	2	4	8	1	6	5	3	9	77
11.-20								3	4	3	2		1								2	3	2	1	6						27
21.-30											1	2	5		1			2	2		1	1	6	1	1						23
31.-40								1			2	2		1	8	2	1	5	2	8		1	1								34
41.-50												1	4	3	4	1	4	2	1	6											26
51.→											1		1	1	2	3	1	3		1											13
計		1	1	3	4	5	5	7	5	13	6	6	12	5	15	6	6	12	5	15	6	6	11	6	15	1	6	5	3	9	200
合計	9					35					44					44					44					24					

貝塚ハヒガヒと現世ハヒガヒの助數比較

モールス氏は大森介墟編（英文）第二七頁に

		Mound	Recent
number of ribs in	Area subcrenata	30.5	33.3
	〃 inflata	39.6	41.2
	〃 granosa	18 to 20	23 to 26

なる表を掲げてゐる。これ等の數字は Darwinism を實證するものとして、ダーウィン自身によつても、認識讃意を表された權威ある數字であるが、少くともハヒガヒの放射肋數についていは、余の計測せる範圍内に於ては、不幸にして多少疑はざるを得ない。貝塚ハヒガヒ放射肋數一八乃至二〇と數へた事に關して異義を唱ふるものではないが、現世種二三乃至二六と數へた事に就ては、如何なる產地のものを資料としたか、前文を見るとこの數字は氏自身が計測したものでなく、北米產のものの數字を借用してゐることがわかる。その地方にかかる高度の肋數を有するものがあるのかも知れないが、少くとも、余が計測した範圍内に於ては、現生種と雖も、肋數二二を越ゆるものは甚だ稀で、第一表に揭出した通り、余は二四のものにさへ、未だ一箇も遭遇してゐないのである。大山桂氏が、逗子で採集された、肋數二六のハヒガヒと稱せらるる標本も、實見の結果、一端で急折した介殼の形から見て、余は Arca subcrenata であると信じて居る。殊に、その標本は、介殼の兩端が磨滅してゐるから、數へ方によつては、肋數は三〇位に上るかも知れない。

事實、肋數二三以上の肋數を有する現世ハヒガヒが、ざらにあるものとすれば、貝塚ハヒガヒと、現世ハヒガヒの區別は、極めて容易であるが、第一表（B）に併出した現世ハヒガヒの肋數表を御覽になつてもわかる通り、この問題は、しかく簡單なるものではない。否、現在の自分の考へとしては、肋數によつては、その兩者を區別

する事は、絶對に不可能であるとすら考へてゐる。それは要するに、淡水その他の影響が、貝塚ハヒガヒに對しても、現世ハヒガヒに對しても同樣であり、ハヒガヒはサルボウになる事はないのであつて、その助數、二〇以上のものが增加する樣では、貝塚と現生とを論せず、その種は旣に絶滅に瀕してゐると考へられるのであつて、二四乃至二六の助數を有するものが、現生種のみにあるとはどうしても考へられない。

化石ハヒガヒと、貝塚ハヒガヒの間にも、唯の一箇ではあるが、羽根野の例（助數一九）をもつてすると、同じく桁違ひの助數による區別は、先づ不可能と考へざるを得ない。

土器樣式とハヒガヒ助數との關係

貝塚貝層の新舊と、竪穴、爐趾等の住居跡の新舊とは、一致する場合もあり、必ずしも一致しない場合もあらう。それを證明すべき、積極的な證據はないのである。文化遺物又然りである。然し貝層中に包含される土器と、貝層とは、大約に於て、略〻同一時代に屬するものであると想定して、同一溪谷中の貝塚の、貝類鹹度と、地形的位置とを考慮して、蓮田式、諸磯式等は古い方で、勝坂式は中間、大森式は最も新らしいと云ふ、最近の關東縄紋土器に關する、大體の編年的硏究の結果が、現れて來た譯である。卽ちこの論定に從ふと、蓮田式、諸磯式を出す樣な貝塚貝層は古く、ハヒガヒ助數は一九のものが多く、二〇のものが少くない筈であり、勝坂式は助數一九と二〇のものに大差なく、大森式を出すものは、最も新らしくて、一九よりも二〇のものが大多數を示めす筈である。この推定を實證する爲、他の諸條件を全く無視して、土器樣式のみを基準として、第三表を作つて見た。

第一表中蓮田式土器のみを出土する貝塚（從つて他樣式のものを併出する貝塚は、之を除外した——他式に於てもすべて之に準ずる）を、第三表に轉載した。埼玉縣北足立郡春岡村深作貝塚以下二四箇所の貝塚に於て、その

計測總箇數四九六〇箇、うち肋數一七のもの三八箇〇・八%、一八のもの一四二箇一〇・七%、二三のもの一箇〇・〇%、二二のもの二〇箇〇・四%、二一のもの三八九箇七・八%、二〇のもの一七八七箇三六・〇%なるに對し、一九のもの二一九六箇四四・三%で、豫想通り最多を占むる。その19/20＝一・二二九、19/21＝五・六四五、19/21＝一・一〇三、平均肋數＝一九・四〇九である。

次に神奈川縣都筑郡新田村折本貝塚以下六箇の純諸磯式貝塚に於ては、その計測總箇數一七二箇あり、そのうち肋數一八のもの一一箇六・四%、一九のもの五八箇三三・三%二三のもの一箇〇・六%、二二のもの一箇〇・六%、二一のもの一九箇一一・〇%なるに對し、二〇のもの八二箇四七・七%で、豫想より稍〻二〇のものが多い。その19/20＝〇・七〇七、19/21＝三・〇五三、18/21＝〇・五七九、平均肋數＝一九・六七四である。

次に埼玉縣南埼玉郡豊春村花積第二貝層以下三箇所の純勝坂式貝塚に於ては、その總計測箇數一四二箇のうち、肋數一八のもの二箇一・四%、一九のもの二六箇一八・三%、二三のもの二箇一・四%、二二のもの四箇二・八%、二一のもの三三箇二三・二%なるに對し、二〇のものは七五箇五二・八%で、豫想通り壓倒的多數を示めす。その19/20＝〇・三四七、19/21＝〇・七八八、18/21＝〇・〇六一、平均肋數二〇・二二〇である。

最後に東京市大森區田園調布四丁目(上沼部)貝塚以下合計九箇所の純大森式貝塚に於ては、その總計測箇數二四三箇のうち、肋數一八のもの一〇箇四・一%、二三のもの一箇〇・四%、二二のもの六箇二・五%、二三のもの四八箇一九・八%なるに對し、二〇のもの一〇九箇四四・九%で、絶對多數ではあるが、稍〻勝坂式に及ばない。その20/19＝〇・六三三、19/21＝一・四三八、21/18＝〇・二〇四、平均肋數＝一九・八九三で、勝坂式と全部逆になつてゐる。卽ち、

上表中、遮田式、諸磯式、勝坂式の諸關係は豫想通り行つてゐるが、大森式丈はやゝ逆現象を呈する。これは、純勝坂式貝塚で、計測した箇所が唯の三ヶ所にすぎぬ事が、まづ第一に不安の種子であ

	(蓮田式)	(諸磯式)	(勝坂式)	(大森式)
19/20	一・二二九	〇・七〇七	〇・三四七	〇・六三三
19/21	五・六四五	三・〇五三	〇・七八八	一・四三八
18/21	一・一〇三	〇・五七九	〇・〇六一	〇・二〇四
平均助數	一九・四〇九	一九・六七四	二〇・一二〇	一九・八九三

り、これを如何に解釋すべきかについては、今は解らないと申して置くより致し方がない(1)。

【註】(1) 尚第三表中蓮田式、諸磯式、大森式の各式集計中途中にバーを設けて、その一つの集計結果を示めしたのは、同じ樣式に屬する貝塚中にても、鹹度の高い貝塚と、低い貝塚との間にどれ位の相違があるかを示めしたものである。但し勝坂式に於ては、數が少くないのでこうした試みは省略した。

第一表中鶴見溪谷と、多摩溪谷と、奥東京灣諸貝塚の計測數に就いては未だ殆んど一言も觸れて居らない。前者に於ては、多摩溪谷の子母ノ口貝塚の助數二〇のものの多いのが疑問である如く、鶴見支丘上の外貝塚駒岡町貝塚が、何故助數一九のもののパーセンテーヂに於て五一・二なる高い數字を示めすか面白い現象である。恐らく他の五つの貝塚は内貝塚であつて、淡水等の影響を强く受けたのに對して、外貝塚なる駒岡町貝塚は、此等の内貝塚に比しその蓄積された時代が、大して古くないとしても、純鹹性外貝塚として、貝の强さを維持したものであらう。これ以外の數字については、甚だ曖昧であつて、時代を同じくするハヒガヒ助數比較の項に述べた如く、大體多摩溪谷と共に、淡水等の影響の爲に、助數による新舊の比較を、失敗に歸せしめてゐるものと見るべきであろう。

られない。

二、祝部土器

割合に少ないが、甕の破片と盤の破片があるが、製法、形等には一般と異る處はない。

Fig. 6. 土器底部

六、動物骨

此貝塚には動物骨も割合に多い、予が採集した動物骨は

鹿

猪

兎

魚類

鳥類

等であるが、鹿と猪は今では飯島には全く棲息してゐない、以前二宮氏が發掘されて、山崎五十麿氏に送られた物には此外に尙鯨骨と人骨も混じてゐたとの事である。

彌生式土器に特有な事は、土器中に多量の黑雲母が混じてゐるために恰も金砂子を振りかけた如き光輝を放つ事である、これは現在手打附近の砂土には多量の黑雲母があるから考へて、此彌生式土器が此附近の土を以て造られたものであると云ふ證據になるかと思ふ。

A土器。粘土製法の粗雜な物であるが、此種の土器で完全なもの三個を發掘した(第四圖)此內bの壺は貝層中に斜に倒れてゐて、中には貝類土壤等が入つて居た丈けで、特別なものを入れてゐた形跡はない、dの鉢は緣の過半は缺けてゐるけれども、形はこれで推定するに差支へはない、aの鉢は昔これを製造した時分には、も少し緣は大きかつた物を使用中に緣が缺けた爲めに、綺麗に緣を缺いで今の大さにして使用したものらしい。

此種の土器の器形は第五圖と第六圖で見るやうに、甕・壺・鉢類が主で高杯は此種のものには無い、而して壺では口緣・胴部に特種の意匠を施した、一條或は二條の凸狀帶を廻してあつて、此凸狀帶の意匠が各少しづゝ異つてゐる、土器の底部を見ると、臺座の無い物は總べて丸底か或は少しく丸味を帶びてゐて、不安定なものが多い。

第六圖の5は土器の臺座であるが、周圍に篦樣の物で上下二段に凹捺してある物で、臺座にかくの如き意匠を施した物は、本縣では出水貝塚の繩紋土器に類似した物がある。

B土器。前者に比して割合精細な粘土で作られてあつて、表面には朱を塗つてある、第四圖cの壺と第六圖9 10 11 12 13が此種の物で高杯が多いが外に壺・盤のやうな物がある、壺も此種の物は小さい、鉢甕類には此種の物は見ないし、亦此種の物には凸狀帶のある物もない。

以上の如く予は此處の彌生式土器に二種類を區別して記載したけれども、勿論此間には何れとも區別の出來ない中間の製法の物もある、且つ兩者とも貝塚內では伴存して見られるから、此兩者に時代的の差があるとは考へ

ハマグリ、ヒラコマ、である。

五、土　器

土器は破片として多量に存在してゐるが、割合完全な形のものもこれまで可なりに發掘せられたらしい、予等が發掘したものもで、完全に近いものが四個程ある。(第四圖)

土器の大部分は彌生式土器で、其中に極少數の祝部土器片が混じてゐる、又貝塚の層位に依つて土器の性質は異つてはゐない。

Fig. 5. 土器口緣部

一、彌生式土器

此貝塚特有と云ふわけではないが、此處の彌生式土器に二種類がある、一は粘土粗鬆で製法も多少粗雜なもので、一は粘土が割合に緻密で、表面に朱を塗つてあるものである、然し兩種ともに此處の

尺あつて貝類と腐蝕土とを混じ其下は直ちに砂層になつてゐる。

予は一月四日同七日の兩日に月野功徳君と共に手打駐在巡査名越正明氏と同村青年大重三省君並びに徳元國祥君の援助によつて之を發掘したもので、第三圖のａ地點を凡そ三坪とｂ地點を凡そ半坪程發掘したのである、尙ｃ及びｄの兩地點も深さ五尺に至るまで試掘したが、此兩地點は腐蝕土下は直ちに砂層であつて、何等貝類はない。

Fig.3 貝塚附近略圖

四、貝　類

イトマキボラ、パウシウボラ、ナガニシ、マヒノソデ、バイ、ヒラコマ、ナルトボラ、アマヲブネ、ツメタガヒ、バテイラ、アマガヒ、クルスガヒ、ハマグリ、マツバガヒ、ウシノアシ、ユウシホガヒ、トコブシ、タカラガヒ、（貝類圖に依る）

以上述べて鹹水產のみで淡水產のものはない。此内で最も多いのは、

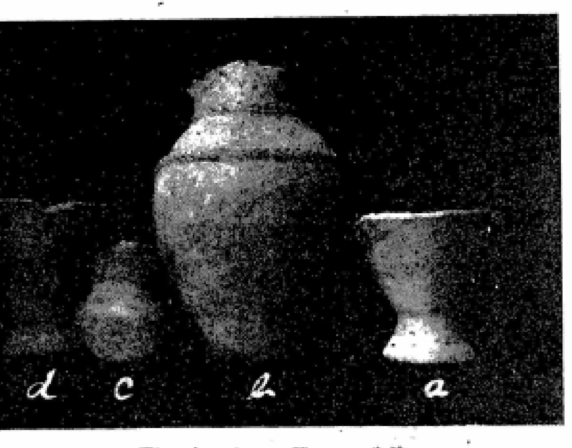


Fig. 4.　土　　器　cハ朱塗

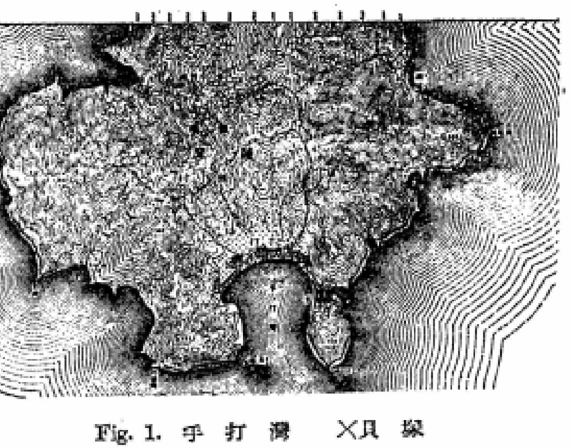


Fig. 1. 手　打　灣　×貝　塚

甑嶋は薩摩半島の西海洋上にある離島で、主として上甑・中甑・下甑の三島が南北に殆んど密接して相連つて居るが、同島より東は薩摩半島の諸山を見、北は島原半島天草諸島を望み、西は渺茫たる大海原で東支那海を隔てゝ遙かに支那大陸に相對するので、上海附近の江蘇省浙江省あたりより九州に渡るには肥前五島列島と相並んで、尤も距離の近い所である。而して貝塚所在地は同島最南端にあつて、鹿兒島縣薩摩郡下甑村大字手打小字向井にある。

三、貝塚の状態

貝塚は手打字向井の森田次三太氏の宅地内に主として存在し、一部は其南隣の大重嘉平氏宅地内まで廣がつて居るが、貝塚の範圍は凡そ五六十坪の小貝塚である。

元來甑島は山岳重疊の殆んど平地の無い島地で、手打は此南部連山に圍まれた小沖積層地に存在する港灣で、貝塚は此小平地内にあつて海岸より凡そ二町標高凡そ一五米の僅かの臺地をなし、表面腐蝕土下一尺六寸にして貝層に達し、貝層は厚さ凡そ五

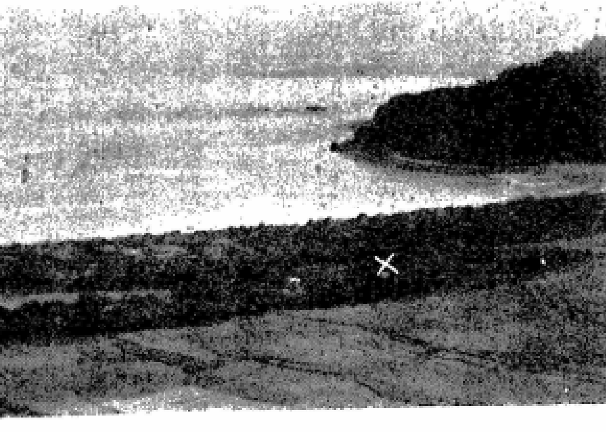


Fig. 2. 手　打　灣　×貝　塚

薩摩國甑嶋手打貝塚

寺師見國

一、緒言

薩摩國甑嶋手打貝塚は、數年前手打小學校長二宮氏が初めて之を發掘し、其當時採集せる遺物を鹿兒島市の山崎五十磨氏に送られ、同氏は之に依りて同貝塚を彌生式貝塚として鹿兒島新聞紙上に發表された事がある。其後二三の同好者が渡島して發掘したる事がある由だけれ共、未だ學界に發表せられたる事は聞かない。

予は昭和九年一月に月野房德君と共に渡島して、之を發掘調査したものである。

現時甑嶋に渡るには、出水郡阿久根町と日置郡串木野町島平の二ヶ所から小蒸汽船が通航して、阿久根から凡そ一八浬、二時間半で甑嶋最北端の里港まで渡るけれども、これから貝塚所在地の手打港は直徑凡そ二十七里の甑嶋小群島の最南端にあるから、陸行は不可能で汽船は里港から途中の小港に寄港するので、手打に到るには尙四五時間を要する。

二、貝塚所在地

（総計24箇所）					4960	(38) 0.8	(529) 10.7	(2196) 44.3	(1787) 36.0	(389) 7.8	(20) 0.4	(1) 0.0				$\frac{18}{21}=1.360$ 平均助数=19.409
Ⅱ 諸 磯 式																
1	諸磯式	純	鹹	神奈川県都筑郡新田村折本	19			21.1 (4)	73.7 (14)	5.3 (1)			左岸 鶴見	多摩支丘	谷中	
2	諸磯式	純	鹹	神奈川県横浜市神奈川区菅田町	12		8.3 (1)	33.3 (4)	33.3 (4)	25.0 (3)			右岸 同	鶴見支丘	谷中	
3	諸磯式	純	鹹	神奈川県都筑郡中川村茅ヶ崎	12		8.3 (1)	16.7 (2)	58.3 (7)	16.7 (2)			右岸 同	多摩支丘	谷中	
4	諸磯式	純	鹹	埼玉県南埼玉郡慈恩寺村[illegible]	114		7.9 (9)	37.7 (43)	43.9 (50)	8.8 (10)	0.9 (1)	8.8 (10)	右岸 奥東京	慈恩寺支丘		
					157		(11) 7.0	(53) 33.8	(75) 47.8	(16) 10.2	(1) 0.6	(1) 0.6				
5	諸磯式	淡	鹹	神奈川県橘樹郡高津村久本	8			37.5 (3)	50.0 (4)	12.5 (1)			右岸 多摩	多摩丘陵	谷中	
6	諸磯式	主	淡	埼玉県北足立郡与野町大戸	7			28.6 (2)	42.9 (3)	28.6 (2)			左岸 入間	埼玉丘陵	谷奥	$\frac{19}{20}=0.707$ $\frac{19}{21}=3.053$ $\frac{18}{21}=0.579$
					15			(5) 33.3	(7) 46.7	(3) 20.0						
（総計6箇所）					172		(11) 6.4	(58) 33.7	(82) 47.7	(19) 11.0	(1) 0.6	(1) 0.6				平均助数=19.674
Ⅲ 勝 坂 式																
1	勝坂式	純	鹹	埼玉県南埼玉郡[illegible](第1地点)	55			23.6 (13)	4.56 (25)	27.3 (15)	3.6 (2)		左岸 元荒川	慈恩寺支丘	谷口	
2	勝坂式	主	鹹	千葉県東葛飾郡木間ヶ瀬村東宝珠花	68		2.9 (2)	17.7 (12)	55.9 (38)	17.7 (12)	2.9 (2)	2.9 (2)	左岸 奥東京	葛飾丘陵		
3	勝坂式	純（若干ノ淡水）	鹹	千葉県東葛飾郡[illegible]	19			5.3 (1)	63.2 (12)	31.5 (6)			左岸 奥東京	葛飾丘陵		$\frac{19}{20}=0.347$ $\frac{19}{21}=0.788$ $\frac{18}{21}=0.061$
（総計3箇所）					142		(2) 1.4	(26) 18.3	(75) 52.8	(33) 23.2	(4) 2.8	(2) 1.4				平均助数=20.120
Ⅳ 大 森 式																
1	大森式	主	鹹	東京市大森区田園調布四丁目（上沼部）	25		4.0 (1)	4.0 (1)	48.0 (12)	36.0 (9)	8.0 (2)		左岸 多摩	武蔵野台	谷中	
2	大森式	主	鹹	東京市大森区田園調布一丁目（下沼部）	71		1.4 (1)	43.7 (31)	40.8 (29)	9.9 (7)	4.2 (3)		左岸 多摩	同上	谷中	
3	大森式	主	鹹	千葉県東葛飾郡葛飾村古作	54		3.7 (2)	22.2 (12)	46.3 (25)	25.9 (14)	1·9 (1)		左岸 奥東京	葛飾丘陵		
					150		(4) 2.7	(44) 29.4	(66) 44.0	(30) 20.0	(6) 4.0					
4	大森式	主	淡	埼玉県北足立郡新郷村新井宿	19			42.1 (8)	42.1 (8)	15.6 (3)			左岸 入間	埼玉丘陵	谷口	
5	大森式	淡	鹹	東京市板橋区志村小豆沢町	22		9.2 (2)	4.5 (1)	54.5 (12)	27.2 (6)	0.0 (0)	4.5 (1)	左岸 同	武蔵野台	谷口	
6	大森式	淡	鹹	埼玉県北足立郡新郷村東貝塚	10			30.0 (3)	40.0 (4)	30.0 (3)			左岸 同	埼玉丘陵	谷口	
7	大森式	?		千葉県東葛飾郡川間村東金野井	14			28.6 (4)	50.0 (7)	21.4 (3)			左岸 奥東京	葛飾丘陵		
8	大森式	主	淡	千葉県東葛飾郡七福村岩名	11		18.2 (2)	36.4 (4)	36.4 (4)	9.1 (1)			左岸 奥東京	同上		
9	大森式	主	淡	千葉県東葛飾郡八木村野々下貝塚	17		11.8 (2)	29.4 (5)	47.1 (8)	11.8 (2)			左岸 奥東京	同上		$\frac{19}{20}=0.633$ $\frac{19}{21}=1.438$ $\frac{18}{21}=0.205$
					93		(6) 6.2	(25) 26.9	(43) 46.2	(18) 19.4	(0) 0.0	(1) 1.2				
（総計9箇所）					243		(10) 4.1	(69) 28.1	(109) 44.9	(48) 19.8	(6) 2.5	(1) 0.4				平均助数=19.893

第二表　純鹹貝塚助數表

番號	所屬溪谷	所屬丘陵	溪谷中ノ位置	所在地名	計測箇數	17（數箇）	18（數箇）	19（數箇）	20（數箇）	21（數箇）	22（數箇）	23（數箇）	貝類鹹度	土器様式	其他
Ⅰ 谷奧ノ主鹹又ハ淡鹹貝塚															
1	綾瀬左岸	岩槻支丘	谷奧	埼玉縣南埼玉郡綾瀬村蓮田關山A點	1027	0.7 (7)	13.4 (138)	49.0 (503)	31.5 (324)	4.6 (47)	0.8 (8)		主鹹	蓮田式	
2	元荒川右岸	岩槻支丘	谷奧	埼玉縣南埼玉郡綾瀬村貝塚	38			60.5 (23)	36.8 (14)	2.7 (1)			淡鹹（主淡＝近シ）	蓮田式	
（計2箇所）					1065	(7) 0.7	(138) 13.0	(526) 49.3	(338) 31.7	(48) 4.5	(8) 0.8				$\frac{19}{20}=3.812$ $\frac{19}{21}=10.958$ $\frac{18}{21}=2.833$ 平均助數＝19.198
Ⅱ 谷中ノ純鹹貝塚															
1	鶴見左岸	多摩支丘	谷中	神奈川縣都筑郡新田村折本	19			21.1 (4)	73.7 (14)	5.3 (1)			純鹹	諸磯式	
2	同右岸	鶴見支丘	谷中	神奈川縣横濱市神奈川區菊名町	12		8.3 (1)	33.3 (4)	33.3 (4)	25.0 (3)			純鹹	諸磯式	
3	同左岸	多摩支丘	谷中	神奈川縣都筑郡中川村茅ケ崎	12		8.3 (1)	16.7 (2)	58.3 (7)	16.7 (2)			純鹹	諸磯式	
4	元荒川左岸	黒濱支丘	谷中	埼玉縣南埼玉郡黒濱村宿裏	172		13.4 (23)	38.9 (67)	37.2 (64)	9.3 (16)	0.6 (1)	0.6 (1)	純鹹	蓮田式	
5	同左岸	同上	谷中	埼玉縣南埼玉郡黒濱村宿	25		4.0 (1)	32.0 (8)	52.0 (13)	12.0 (3)			純鹹	蓮田式	
6	同左岸	同上	谷中	埼玉縣南埼玉郡黒濱村馬場	68	1.5 (1)	5.9 (4)	35.3 (24)	41.2 (28)	16.2 (11)			純鹹	蓮田式	
7	同左岸	同上	谷中	埼玉縣南埼玉郡黒濱村新井耕地	111	1.8 (2)	9.9 (11)	35.1 (39)	44.1 (49)	9.0 (10)			純鹹	蓮田式	
8	同左岸	同上	谷中	埼玉縣南埼玉郡黒濱村江ケ崎	22		4.5 (1)	40.9 (9)	40.9 (9)	13.6 (3)			純鹹	蓮田式 諸磯式	
9	同左岸	慈恩寺支丘	谷中	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村古ケ場	146	0.7 (1)	9.6 (14)	52.9 (77)	32.9 (48)	4.1 (6)			純鹹	蓮田式	
（計9箇所）					587	(4) 0.7	(56) 9.5	(234) 39.9	(236) 40.2	(55) 9.4	(1) 0.2	(1) 0.2			$\frac{19}{20}=0.992$ $\frac{19}{21}=4.255$ $\frac{18}{21}=1.182$ 平均助數＝19.492
Ⅲ 谷口ノ純鹹又ハ主鹹貝塚															
1	鶴見右岸	鶴見支丘	谷口	神奈川縣横濱市神奈川區駒岡町	168		6.5 (11)	51.2 (86)	33.3 (56)	8.3 (14)	0.7 (1)		純鹹	諸磯式	
2	多摩左岸	武藏野臺	谷口	東京市大森區調布千鳥町	67		1.5 (1)	25.3 (17)	55.2 (37)	16.4 (11)	1.5 (1)		主鹹	勝坂式 大森式	
3	元荒川左岸	慈恩寺支丘	谷口	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村根山	83		3.6 (3)	37.4 (31)	45.8 (38)	12.0 (10)	1.2 (1)		純鹹	蓮田式	
4	同左岸	慈恩寺支丘	谷口	埼玉縣南埼玉郡豐春村花積（第一貝層、第二貝層）	395		5.3 (21)	43.3 (171)	39.4 (156)	11.1 (44)	0.8 (3)		純鹹	蓮田式 勝坂式	
5	古利根北奧	五霞支丘	谷口	茨城縣猿島郡五霞村土塔	81		4.9 (4)	34.6 (28)	51.9 (42)	7.4 (6)	1.2 (1)		純鹹	蓮田式	
6	古利根左	葛飾支丘	谷口	千葉縣東葛飾郡關宿元町（恩岡寺裏）	12		8.3 (1)	8.3 (1)	83.3 (10)				純鹹	蓮田式	
（計6箇所）					806		(41) 5.1	(334) 41.4	(339) 42.1	(85) 10.5	(7) 0.9				$\frac{19}{20}=0.986$ $\frac{19}{21}=3.929$ $\frac{18}{21}=0.482$ 平均助數＝19.607
（總計17箇所）					2853	(11) 0.4	(256) 9.0	(1265) 44.0	(1069) 37.6	(232) 8.2	(19) 0.9	(1) 0.0	$\frac{19}{20}=1.183$ $\frac{19}{21}=5.453$ $\frac{18}{21}=1.103$	平均助數＝19.460	

第三表　土器様式助數相關表

番號	土器様式	貝數鹹度	所在地名	計測個數	17（數個）	18（數個）	19（數個）	20（數個）	21（數個）	22（數個）	23（數個）	所屬溪谷	所屬丘陵	溪谷中ノ位置	其他
Ⅰ 蓮田式															
1	蓮田式	純鹹	埼玉縣北足立郡春岡村深作	564	1.4 (8)	14.0 (79)	50.9 (287)	29.8 (168)	3.7 (21)	0.2 (1)		綾瀬右岸	原市支丘	谷奧	
2	蓮田式	純鹹	埼玉縣南埼玉郡黒濱村炭釜屋敷	1323	1.2 (16)	12.1 (160)	48.1 (636)	32.0 (423)	6.3 (84)	0.3 (4)		元荒川左岸	黒濱支丘	谷奧	
3	蓮田式	純鹹	埼玉縣南埼玉郡黒濱村宿裏	172		13.4 (23)	38.9 (67)	37.2 (64)	9.3 (16)	0.6 (1)	0.6 (1)	同左岸	同上	谷中	
4	蓮田式	純鹹	埼玉縣南埼玉郡黒濱村宿	25		4.0 (1)	32.0 (8)	52.0 (13)	12. (3)			同左岸	同上	谷中	
5	蓮田式	純鹹	埼玉縣南埼玉郡黒濱村馬場	68	15. (1)	5.9 (4)	35.3 (24)	41.2 (28)	16.2 (11)			同左岸	同上	谷中	
6	蓮田式	純鹹	埼玉縣南埼玉郡黒濱村新井耕地	111	1.8 (2)	9.9 (11)	35.1 (39)	44.1 (49)	9.0 (10)			同左岸	同上	谷中	
7	蓮田式	純鹹	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村古ケ場	146	0.7 (1)	9.6 (14)	52.7 (77)	32.9 (48)	4.1 (6)			同左岸	慈恩寺支丘	谷中	
8	蓮田式	純鹹	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村根山	83		3.6 (3)	37.4 (31)	45.8 (38)	12.0 (10)	1.2 (1)		同左岸	同上	谷口	
9	蓮田式	純鹹	埼玉縣南埼玉郡豐春村花積第一貝層	340		6.2 (21)	46.5 (158)	38.5 (131)	8.5 (29)	0.3 (1)		同左岸	同上	谷口	
10	蓮田式	純鹹	茨城縣猿島郡五霞村土塔	81		4.9 (4)	34.6 (28)	51.9 (42)	7.4 (6)	1.2 (1)		古利根北奧	五霞支丘	谷口	
11	蓮田式	純鹹	千葉縣葛飾郡關宿元町（恩岡寺裏）	12		8.3 (1)	8.3 (1)	83.3 (10)				同左岸	葛飾支丘	谷口	
12	蓮田式	純鹹	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村表慈恩寺月讀社	57		12.3 (7)	42.1 (24)	40.4 (23)	5.3 (3)			奧東京右岸	慈恩寺支丘		
13	蓮田式	純鹹	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村表慈恩寺梅木	22		9.1 (2)	45.5 (10)	36.4 (8)	9.1 (2)			奧東京右岸	同上		
14	蓮田式	純鹹	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村表慈恩寺上野	599	0.2 (1)	9.3 (56)	42.9 (257)	39.2 (235)	8.3 (50)			奧東京右岸	同上		
15	蓮田式	純鹹	千葉縣東葛飾郡小金町幸田	40		2.5 (1)	42.5 (17)	37.5 (15)	17.5 (7)			奧東京左岸	葛飾丘陵		
				3643	(29) 3.8	(387) 10.6	(1664) 45.7	(1295) 355.	(258) 7.1	(9) 0.3	(1) 0.0				$\frac{19}{20}=1.284$ $\frac{19}{21}=6.444$ $\frac{18}{21}=1.500$ 平均助數＝19.384
16	蓮田式	主淡	埼玉縣北足立郡三橋村飼ケ谷戸	28	3.6 (1)	14.3 (4)	42.9 (12)	35.7 (10)	3.6 (1)			入間左岸	埼玉丘陵	谷奧	
17	蓮田式	淡鹹	埼玉縣北足立郡六辻村白幡	92		5.3 (5)	30.4 (28)	52.2 (48)	120 (11)			同上左岸	同上	谷中	
18	蓮田式	淡鹹	埼玉縣北足立郡芝村小谷場貝殼坂	127		3.9 (5)	25.9 (33)	37.8 (48)	27.6 (35)	4.7 (6)		同上左岸	同上	谷口	
19	蓮田式	淡鹹	埼玉縣北足立郡谷田村太田窪下	33			30.3 (10)	33.3 (11)	33.3 (11)	3.3 (1)		同上左岸	同上	谷口	
20	蓮田式	主淡	埼玉縣南埼玉郡綾瀬村栗崎	39		17.9 (7)	59.0 (23)	20.5 (8)	2.6 (1)			陵瀬左岸	岩槻支丘	谷奧	
21	蓬田式	淡鹹	埼玉縣南埼玉郡綾瀬村坂堂	143	2.1 (3)	15.4 (22)	46.2 (66)	31.5 (45)	4.9 (7)			同上右岸	岩槻支丘	谷奧	
22	蓮田式	淡鹹（主淡＝近シ）	埼玉縣南埼玉郡綾瀬村貝塚	38			60.5 (23)	36.8 (14)	2.7 (1)			元荒川右岸	岩槻支丘	谷奧	
23	蓮田式	淡鹹	埼玉縣南埼玉郡河合村掛[illegible]田	812	0.6 (5)	12.2 (99)	41.3 (335)	37.7 (306)	7.8 (63)	0.5 (4)		同上右岸	岩槻支丘	谷中	
24		主淡	茨城縣結城郡飯沼村鴻ノ山貝塚坂	5			40.0 (2)	40.0 (2)	20.0 (1)			飯沼左岸	結城丘陵	谷中	
				1317	(9) 0.7	(142) 10.8	(532) 40.4	(492) 37.4	(131) 10.0	(11) 0.8					
（總計24箇所）				4960	(38) 0.8	(529) 10.7	(2196) 44.3	(1787) 36.0	(389) 7.8	(20) 0.4	(1) 0.0				$\frac{19}{20}=1.229$ $\frac{19}{21}=5.645$ $\frac{18}{21}=1.360$ 平均助數＝19.409

[illegible]

（計2箇所）					93		5.4	31.2	55.9	6.5	1.1				$\frac{18}{21}$=0.833 平均助數=19.667
VII 奥東京灣															
47	左	葛飾丘陵		千葉縣東葛飾郡木間ケ瀬村東實珠花	68		2.9 (2)	17.7 (12)	55.9 (38)	17.7 (12)	2.9 (2)	2.9 (2)	主鹹	勝坂式	余ガ採集セル資料ニヨル
48	左	同上		千葉縣東葛飾郡川間村東金野井	14			28.6 (4)	50.0 (7)	21.4 (3)			?	大森式	
49	左	同上		千葉縣東葛飾郡七福村岩名	11		18.2 (2)	36.4 (4)	36.4 (4)	9.1 (1)			主淡	大森式	
50	左	同上		千葉縣東葛飾郡野田中野臺	19			5.3 (1)	63.2 (12)	31.5 (6)			純鹹（若干ノ淡水）	主として勝坂式	
51	右	慈恩寺支丘		埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村下手耕地野中	114		7.9 (9)	38.6 (43)	43.9 (50)	8.8 (10)	0.9 (1)	0.9 (1)	純鹹	諸磯式	
52	右	同上		埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村表慈恩寺月讀社	57		12.3 (7)	42.1 (24)	40.4 (23)	5.3 (3)			純鹹	蓮田式	
53	右	同上		埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村表慈恩寺梅木	22		9.1 (2)	45.5 (10)	36.4 (8)	9.1 (2)			純鹹	蓮田式	
54	右	同上		埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村表慈恩寺上野	599	0.2 (1)	9.3 (56)	42.9 (257)	39.2 (235)	8.3 (50)			純鹹	蓮田式	
55	左	葛飾丘陵		千葉縣東葛飾郡梅里村山崎	5			40.0 (2)	40.0 (2)	20.0 (1)			主鹹 主淡	勝坂式 大森式	
56	左	同上		千葉縣東葛飾郡八木村野々下屋敷	17		11.8 (2)	29.4 (5)	47.1 (8)	11.8 (2)			主淡	大森式	
57	左	同上		千葉縣東葛飾郡小金町幸田	40		2.5 (1)	42.5 (17)	37.5 (15)	17.5 (7)			純鹹	蓮田式	余ガ採集セル資料ニヨル
58	左	同上		千葉縣東葛飾郡葛飾村古作	54		3.7 (2)	22.2 (12)	46.3 (52)	25.9 (14)	1.9 (1)		主鹹	大森式	$\frac{19}{20}$=0.916 $\frac{19}{21}$=3.523 $\frac{18}{21}$=0.748
（計12箇所）					1020	(1) 0.1	(83) 8.1	(391) 38.3	(427) 41.9	(111) 10.9	(4) 0.4	(3) 0.3			平均助數=19.576
VIII 飯沼溪谷															
59	左	結城丘陵	谷中	茨城縣結城郡飯沼村鴻ノ山貝塚坂	5			40.0 (2)	40.0 (2)	20.0 (1)			主淡	蓮田式	$\frac{19}{20}$=1.138 $\frac{19}{21}$=4.750 $\frac{18}{21}$=1.088
（計1箇所）					5			(2) 40.0	(2) 40.0	(1) 20.0			純鹹 24 主鹹 13 純淡 9 主淡 13	蓮田式 33 指扇式 4 諸磯式 12 勝坂式 6 大森式 12	平均助數=19.208
（總計）57貝塚（59地點）					7946	(46) 0.6	(775) 9.7	(3382) 42.6	(2972) 37.4	(712) 9.0	(53) 0.7	(6) 0.1			

（B）

現世種

産地		計測箇數	助數 17	18	19	20	21	22	23	備考
1	岡山	28	7.1 (2)	35.7 (10)	42.9 (12)	14.3 (4)				科學博物館貝類標本番號 1597
2	備中妹尾	28			21.4 (6)	60.7 (17)	17.9 (5)			同上 6506
3	廣島	7			100.0 (7)					同上 1599
4	高知	8		25.0 (2)	50.0 (4)	25.0 (2)				同上 1600
5	岡山	11		18.2 (2)	27.3 (3)	54.6 (6)				同上 6507
總計		82	(2) 2.4	(14) 17.2	(32) 38.8	(29) 35.4	(5) 6.2			

附記一、所屬溪谷ト所屬丘陵——關東地方ニ於テ現存スル洪積臺地ニヨッテ、貝塚積成當時ノ地形ヲ復原シ、ソレヲ上記ノ如ク假稱シタモノデアル。ソノ呼稱法及貝塚ノ所屬如何ハ、全部史前學會ノ「關東縄紋土器ノ編年學的研究豫報」ノ總表ニ從ッテオイタ。

二、溪谷中ノ位置——奥中口ハ大體ノ見當デアッテ、數字的根據ノアル譯デハナイ。實際ハ奥トロトノ區別位シカ役ニ立タヌ。ニモ係ハラズ、コレヲ此處ニ記載シタノハ、コレガ貝類鹹度ト關連シテ、貝層ノ新舊ヲ論ズルニツイテ、相當重要ナ要因ヲ爲スカラデアル。

三、計測箇數——貝塚ニ於テ、ソノ助數ヲ數ヘタはひがひノ總數（片貝）デアルガ第二六號ト第二七號及第四二號ト第四三號ハ同ジ貝塚ノ二地點ヲ、別々ニ表錄シタモノデアル。

四、助數——最小一七カラ最大二三マデヲ併記シ、ソノ各項ノモトニ、ソレニ相當スルハヒガヒノ箇數ヲ括孤ニ入レテ記載シ、何レガ何程多キカヲ一目瞭然タラシムル爲、ソノパーセンテーヂヲ上ニ併記シタ。助數ハ 17 以下、23 以上ノモノハ一ツモナイ。

五、貝類鹹度——委シイ事ヲ史前學會ノ前記「豫報」ニ讓ルガ、一ロニ云ヘバ、ソノ貝塚ノ貝類中、鹹水産、淡水産ノ貝ノ割合ヲ、純鹹、主鹹、淡鹹、主淡、純淡ノ五種ニ分類シタモノデアル。

六、土器様式——コノ名稱ハヤハリ、史前學會ノ「豫報」ニ從ッタ。蓮田式ハ古式ヲ代表スルモノデ、諸磯式又古ク、勝坂式ハ中期、大森式ハ最モ新ラシイト考ヘラレテキル。

七、(a) $\frac{19}{20}$ (b) $\frac{19}{21}$ (c) $\frac{18}{21}$ 平均助數等ニツイテハ序論計測結果ノ表現法ノ項參照。

第一表 (A) ハビガヒ助數總表

番號	所屬溪谷	所屬丘陵	溪谷中ノ位置	所在地名	測定箇數計	助數 17(箇數)	18(箇數)	19(箇數)	20(箇數)	21(箇數)	22(箇數)	23(箇數)	貝類鹹度	土器樣式	備考 其他
				I 鶴見溪谷											
1	(主)左	多摩支丘	谷中	神奈川縣都筑郡新田村折本	19			21.1 (4)	73.7 (14)	5.3 (1)			純鹹	諸磯式	
2	(主)右	鶴見支丘	谷中	神奈川縣橫濱市神奈川區菊名町	12		8.3 (1)	33.3 (4)	33.3 (4)	25.0 (3)			純鹹	諸磯式	
3	(主)右	獨立丘	谷中	神奈川縣橘樹郡日吉村箕輪	20		10.0 (2)	20.0 (4)	65.0 (13)	5.0 (1)			主鹹	諸磯式・蓮田式	
4	(主)右	鶴見支丘	谷口	神奈川縣橫濱市神奈川區駒岡町	168		6.5 (11)	51.2 (86)	33.3 (56)	8.3 (14)	0.7 (1)		純鹹	諸磯式	
5	(支)右	多摩支丘	谷中	神奈川縣都筑郡中川村茅ヶ崎	12		8.3 (1)	16.7 (2)	58.3 (7)	16.7 (2)			純鹹	諸磯式	
6	(同)左	同上	谷中	神奈川縣都筑郡新田村高田	119		5.0 (6)	34.5 (41)	47.9 (57)	12.6 (15)			主鹹	諸磯式・勝坂式	$\frac{19}{20}=0.934$, $\frac{19}{21}=3.917$, $\frac{18}{21}=0.583$
				(計6箇所)	350		(21) 6.0	(141) 40.3	(151) 43.1	(36) 10.2	(1) 0.3				平均助數=19.329
				II 多摩溪谷											
7	右	多摩丘陵	谷奥中	神奈川縣橘樹郡高津村久本	8			37. (3)	50.0 (4)	12.5 (1)			淡鹹	諸磯式	
9	左	多摩丘陵	谷中	神奈川縣橘樹郡橘村子母口	431	0.2 (1)	6.0 (26)	35.0 (151)	42.7 (184)	14.6 (63)	1.2 (5)	0.2 (1)	主鹹	指扇式	[illegible]
8	右	武藏野臺	谷中	東京市大森區田園調布四丁目(上沼部)	25		4.0 (1)	4.0 (1)	48.0 (12)	36.0 (9)	8.0 (2)		主鹹	大森式	
10	左	武藏野臺	谷中	東京市大森區田園調布一丁目(下沼部)	71		1.4 (1)	43.7 (31)	40.8 (29)	9.9 (7)	4.2 (3)		主鹹	大森式	[illegible]
11	右	多摩丘陵	谷中	神奈川縣橘樹郡日吉村谷戸	40		5.0 (2)	25.0 (10)	45.0 (18)	22.5 (9)	2.5 (1)		主鹹	諸磯式([illegible])	
12	左	武藏野臺	谷口	東京市大森區調布千鳥町	67		1.5 (1)	25.3 (17)	55.2 (37)	16.4 (11)	1.5 (1)		主鹹	勝坂式・大森式	$\frac{19}{20}=0.750$, $\frac{19}{21}=2.130$, $\frac{18}{21}=0.310$
				(計6箇所)	642	(1) 0.2	(31) 4.8	(213) 33.2	(284) 44.2	(100) 15.6	(12) 1.9	(1) 0.2			平均助數=19.765
				III 入間溪谷											
13	左	埼玉丘陵	谷奥	埼玉縣北足立郡平方村南	12		33.3 (4)	41.7 (5)	25.0 (3)				主淡	指扇式	
14	左	同上	谷奥	埼玉縣北足立郡植水村五味貝戸貝塚山	14		14.3 (2)	42.9 (6)	21.4 (3)	21.4 (3)			主淡	指扇式	
15	左	同上	谷奥	埼玉縣北足立郡三橋村並木	81		12.3 (10)	53.1 (43)	32.1 (26)	2.5 (2)			主淡	指扇式、大森式、蓮田式	
16	左	同上	谷奥	埼玉縣北足立郡三橋村側ヶ谷戸	28	3.6 (1)	14.3 (4)	42.9 (12)	35.7 (10)	3.6 (1)			主淡	蓮田式	
17	左	同上	谷奥	埼玉縣北足立郡與野町大戸	7			28.6 (2)	42.9 (3)	28.6 (2)			主淡	諸磯式	
18	左	同上	谷中	埼玉縣北足立郡六辻村白幡	92		5.3 (5)	30.4 (28)	52.2 (48)	12.0 (11)			淡鹹	蓮田式	
19	左	同上	谷中	埼玉縣北足立郡六辻村文藏	36			16.7 (6)	52.8 (19)	25.0 (9)	5.5 (2)		主鹹	蓮田式	
20	左	同上	谷口	埼玉縣北足立郡芝村小谷場貝殼坂	127		3.9 (5)	25.9 (33)	37.8 (48)	27.6 (35)	4.7 (6)		淡鹹	蓮田式	
21	左	同上	谷口	埼玉縣北足立郡谷田村太田窪下	33			30.3 (10)	33.3 (11)	33.3 (11)	3.3 (1)		淡鹹	蓮田式	
22	左	同上	谷口	埼玉縣北足立郡神根村新井宿	19			42.1 (8)	42.1 (8)	15.8 (3)			主淡	大森式	
23	右	武藏野臺	谷口	東京市板橋區志村小豆澤町	22		9.2 (2)	4.5 (1)	54.5 (12)	27.2 (6)	0.0 (0)	4.5 (1)	淡鹹	大森式	
24	左	埼玉丘陵	谷口	埼玉縣北足立郡新郷村東貝塚	10			30.0 (3)	40.0 (4)	30.0 (3)			淡鹹	大森式	$\frac{19}{20}=0.805$, $\frac{19}{21}=1.826$, $\frac{18}{21}=0.371$
				(計12箇所)	481	(1) 0.2	(32) 6.7	(157) 32.6	(195) 40.5	(86) 17.9	(9) 1.9	(1) 0.2			平均助數=19.757
				IV 綾瀬溪谷											
25	左	岩槻支丘	谷奥	埼玉縣南埼玉郡綾瀬村黒谷	39		17.9 (7)	59.0 (23)	20.5 (8)	2.6 (1)			主淡	蓮田式	[illegible]
26	左	同上	谷奥	埼玉縣南埼玉郡綾瀬村蓮田關山(A)	1027	0.7 (7)	13.4 (138)	49.0 (503)	31.5 (324)	4.6 (47)	0.8 (8)		主鹹	蓮田式	
(27)	左	同上	谷奥	同上(B)	102		6.9 (7)	33.3 (34)	47.1 (48)	11.8 (12)	1.0 (1)		主淡	蓮田式	
28	左	同上	谷奥	埼玉縣南埼玉郡綾瀬村蓮田城堂	143	2.1 (3)	15.4 (22)	46.2 (66)	31.5 (45)	4.9 (7)			淡鹹	蓮田式	
29	右	原市支丘	谷奥	埼玉縣北足立郡大砂土村深作	564	1.4 (8)	14.0 (79)	50.9 (287)	29.8 (168)	3.7 (21)	0.2 (1)		純鹹	蓮田式	$\frac{19}{20}=1.540$, $\frac{19}{21}=10.375$, $\frac{18}{21}=2.625$
				(計5箇所)	1875	(18) 1.0	(253) 13.5	(913) 48.7	(593) 31.6	(88) 4.7	(10) 0.5				平均助數=19.277
				V 元荒川溪谷											
30	(主)右	岩槻支丘	谷奥	埼玉縣南埼玉郡綾瀬村貝塚	38			60.5 (23)	36.8 (14)	2.7 (1)			淡鹹(主淡ニ近シ)	蓮田式	
31	(主)左	黒濱支丘	谷奥	埼玉縣南埼玉郡日勝村白岡正福院	58		5.2 (3)	39.7 (23)	39.7 (23)	13.8 (8)	1.7 (1)		主淡	蓮田式・諸磯式	
32	(主)左	同上	谷奥	埼玉縣南埼玉郡黒濱村[illegible]	1323	1.2 (16)	12.1 (160)	48.1 (636)	32.0 (423)	6.3 (84)	0.3 (4)		純鹹	蓮田式	
33	(主)左	同上	谷中	埼玉縣南埼玉郡黒濱村[illegible]	172		13.4 (23)	38.9 (67)	37.2 (64)	9.3 (16)	0.6 (1)	0.6 (1)	純鹹	蓮田式	[illegible]
34	(主)左	同上	谷中	埼玉縣南埼玉郡黒濱村宿	25		4.0 (1)	32.0 (8)	52.0 (13)	12.0 (3)			純鹹	蓮田式	
35	(主)左	同上	谷中	埼玉縣南埼玉郡黒濱村山城	68	1.5 (1)	5.9 (4)	35.3 (24)	41.2 (28)	16.2 (11)			純鹹	蓮田式	
36	(主)左	同上	谷中	埼玉縣南埼玉郡黒濱村新井耕地	111	1.8 (2)	9.9 (11)	35.1 (39)	44.1 (49)	9.0 (10)			純鹹	蓮田式	
37	(支)右	同上	谷中	埼玉縣南埼玉郡黒濱村江ヶ崎	22		4.5 (1)	40.9 (9)	40.9 (9)	13.6 (3)			純鹹	諸磯式・蓮田式	
38	(支)左	慈恩寺支丘	谷中	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村[illegible]	68		2.9 (2)	42.6 (29)	44.1 (30)	10.3 (7)			主鹹	蓮田式	
39	(支)左	同上	谷中	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村古ヶ場	146	0.7 (1)	9.6 (14)	52.7 (77)	32.9 (48)	4.1 (6)			純鹹	蓮田式	
40	(主)左	同上	谷口	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村裏山	83		3.6 (3)	37.4 (31)	45.8 (38)	12.0 (10)	1.2 (1)		純鹹	蓮田式	
41	(主)右	岩槻支丘	谷口	埼玉縣南埼玉郡河合村[illegible]	812	0.6 (5)	12.2 (99)	41.3 (335)	37.7 (306)	7.8 (63)	0.5 (4)		淡鹹	蓮田式	
42	(主)左	慈恩寺支丘	谷口	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村花積(第一貝層)	340		6.2 (21)	46.5 (158)	38.5 (131)	8.5 (29)	0.3 (1)		純鹹	蓮田式	
(43)	(主)左	同上	谷口	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村花積(第二貝層)	55			23.6 (13)	45.6 (25)	27.3 (15)	3.6 (2)		純鹹	勝坂式	
44	(主)左	同上	谷口	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村南	159		5.0 (8)	40.3 (64)	42.1 (67)	11.3 (18)	1.3 (2)		純鹹	蓮田式	$\frac{19}{20}=1.211$, $\frac{19}{21}=5.408$, $\frac{18}{21}=1.232$
				(計15箇所)	3480	(25) 0.7	(350) 10.1	(1536) 44.2	(1263) 36.4	(284) 8.2	(16) 0.5	(1) 0.0			平均助數=19.456
				VI 古利根溪谷											
45	北奥	五霞支丘	谷口	茨城縣猿島郡五霞村土與部	81		4.9 (4)	34.6 (28)	51.9 (42)	7.4 (6)	1.2 (1)		純鹹	蓮田式	
46	左	葛飾支丘	谷口	千葉縣東葛飾郡[illegible]	12		8.3 (1)	8.3 (1)	83.3 (10)				純鹹	蓮田式	$\frac{19}{20}=0.558$, $\frac{19}{21}=4.833$, $\frac{18}{21}=0.833$
				(計2箇所)	93		(5) 5.4	(29) 31.2	(52) 55.9	(6) 6.5	(1) 1.1				平均助數=19.667
				VII 奥東京灣											
47	左	[illegible]		千葉縣[illegible]	68		2.9	17.7	55.9	17.7	2.9	2.9	[illegible]	[illegible]	[illegible]

貝塚貝類の貝殻の色彩

貝塚から掘つて來たばかしの貝殻は、殊にそれが泥土貝層から採集して來たものである場合等には、全く泥にまみれてゐて、手のつけようもない。やがて、泥のかわくのを待つて、丁寧にブラシをかけて見ると、その貝殻が持つ、本來の色彩が、見えるか見えぬ程に、ほんのりと現はれて來る。實際、保存の悪い貝殻は、どれをみがいても、その表面が、白い粉になつて、剝げ落ちる丈で、貝殻はどれもこれも一様に、石膏の模型の様になつてしまふが、少し保存のいゝ、特に灰層の中に含まれてゐるもの等は、時とすると、現世種そのまゝの、光澤と色彩を、磨き出すことが出來るのである。私は貝殻の色素が、如何なる化學的成分を有するものかも知らないが、どれ丈の星霜を經たとも知れない貝殻の表に、かくも偶然に磨き出される色彩を見る毎に、それは壯麗な自然の大觀に比すべくもないが、徴かな、ほろびかけた、頽廢的なその美に、ひどく胸を打たれるのである。例へばアヅマニシキ chlamys arreri nipponensis Kuroda のほのかな櫻色、見るからにビロウドの様なマツカサガヒ Invesidens Japonensis Lea のわずかに黄味を帯びた乳白色、その他、あさりや、しじみの様なものでも、云ひしれぬしぶい色彩を帯びてゐるものがある。殊に複雑な縞と、光澤を失はない蛤は、他の諸種の貝類に比して、一段と鮮かな色彩を添へるものである。或は何時か、然し、この色彩も、史前學研究の立派な對象となる日が、來ないものとも限らない。(土岐)

等のうちで、正面から見て、貝が餘り丸い爲、他の殼頂の、一直線の喫合の一端が、全く見えない一群がある。これは特別に强い介殼の一種であつて、或は特別にA型ハヒガヒとでも名づけ得るかも知れない。

附記二、本報告の豫報として、岩波書店科學第四卷第九號(昭和九年九月)に「ハヒガヒ放射肋數による貝塚貝層新舊決定の可能に就いて」なる概報を寄せて置いたが、同文中現世種ハヒガヒ肋數表の岡山のものが肋數一七の項からはじまるべきを一八の項から記してあるのは、全く誤記であり、關山A點B點の記號は逆になつてゐる。その他土器樣式と肋數の相關表の數字も、本文のそれと大部分相違してゐる。それは、その後ほ五六の貝塚のものを加へて、本論の同表を作製した爲であり、その他論旨中に、多少相違してゐる點もあるから、なるべく本論の方を見て頂き度い。

附記三、この仕事に對して、種々指導を賜はつた大山公爵に謝意を表する。東京科學博物館動物學部百瀨主任にも併せて謝意を表する。

（了）

數の何れから見るも明である。

一、綾瀬溪谷に於ては、19/20、19/21、18/21の何れの數値も大で、平均助數は小、之と比較すべき谷口の貝塚は、資料を缺いてゐる爲に不明である。

一、元荒川溪谷に於ては、谷奧と谷口を、ハヒガヒ助數によつて區別する事は、一見不可能なる如くであるが、共れは溪谷の性質と、貝塚相互間の位置の複雜さに歸せられるもので、大體此等の諸貝塚ハヒガヒ助數は、同一數值を示現するものと見るべく、その間に多少の差はあるが、19/20、19/21、18/21が何れも大で、平均助數の少くないものが散在してゐる樣である。

一、全く他の條件を顧慮せず、谷奧、谷中、谷口の純鹹性貝塚を集計すると、19/20、19/21、18/21平均助數の何れについても略〻逆現象なく、谷奧の助數が少くなく、谷口のそれの多い事が示めされる。

一、土器樣式のみによつて、助數を集計して見ると、蓮田式、諸磯式、勝坂式の三者は、大體逆現象なく助數の增加してゐる事が見られるが、大森式諸貝塚は、勝坂式に比して、相當助數の少くない事を示めす樣な數字が出て來る。

以上要するに、ハヒガヒ計測の諸結果は、當初の目的の如く、貝塚積成期の祕密の扉をひらく一つの鍵となる所までは行つてゐない。唯、その鍵の原型が、おぼろげながら形成された程度である。この鍵を使用して、更にその奧の扉を開く程の仕事は、到底未だ企て及ぶべからざるものである。

附記一、計測中に感じた事であるが、ハヒガヒの貝殼の形には、非常に種々の形がある。兩端が、扇子の樣に延びて、高さの著しく低いもの、略〻二等邊三角形に近いもの、一端のみが著しく延びてゐるもの等。然し之

至つた。

溪谷中の位置、谷奧、谷中、谷口を何か明確な根據によつて區別し、之と貝類鹹度を關連さして考へると、關東諸河川の沖積作用、或は地震噴火等に起因する土地隆起その他の諸原因で、各溪谷から次第に海水が減退して行つたものとして、貝塚の新舊を、大體次の五期に分割し得る。卽ち、

第一期　谷奧の純鹹貝塚積成期

第二期　谷奧の淡鹹、谷中の純鹹貝塚積成期

第三期　谷奧の純淡、谷中の淡鹹、谷口の純鹹貝塚の積成期

第四期　谷奧の純淡、谷中の純淡、谷口の淡鹹貝塚の積成期

第五期　谷奧の純淡、谷中の純淡、谷口の純淡貝塚積成期

こんな區別は、現在では全く觀念的な、模型的區分に過ぎないが、行く行くは、こうした時代的相異も次第に明かにされて行くに相違ない。その一つの前提として、各時代をハヒガヒ助數によつて特徵づける事を工夫して見たり等したが、勿論現在の狀態では、谷奧谷口の、恐らく第一期と、第四期あたりの區別を漸く知り得るに過ぎない。何か餘程よい方法が發見されるか、或は現在發見されてゐる倍以上の貝塚でも見つからない限り、こんな事は結局空想に終るかも知れない。

現在云ひ得る事は、結局次の諸點である。

一、鶴見溪谷及多摩溪谷に於ては、ハヒガヒ助數の多少と、貝塚貝層新舊の關係は不明である。

一、入間溪谷に於ては、谷奧と谷口との區別、ひいては貝塚貝層新舊の區別は、19/20、19/21、18/21及平均助

比較して見た。當時まだ、勝坂式、大森式の諸貝塚については、充分な資料を持つてゐなかつたので、この兩者に就いては、適確な數字を算出し得なかつたが、それにしても、蓮田式の助數一九のもののパーセンテーヂが、他の何れの様式のもののそれよりも多い事丈は解つて來た。

序いで東京科學博物館に赴いて、同館所藏の現世種ハヒガヒの助數を計測したところ、現世種にあつても、ハヒガヒ助數は決してそんなに増加してゐるものではない事實を知つたのみならず、同じ現世種ハヒガヒの間にあつても、同じく助數パーセンテーヂに、產地によつて著しい差異のある事實をも知つたのである。此等の現世種ハヒガヒ產地の適確なベリーポイントを、同館カードによつても探ぐり得なかつた事は殘念であつたが、然し同じ現世種の間にあつても、淡水その他の影響によつて、非常に體質の衰へてゐるものと、强いものとがあると云ふ事が解つたのである。

それで種々ハヒガヒに惡影響を及ぼす、自然界等に於ける諸現象を勉强して見たところ、就中惡影響を及ぼすのは、出水と、寒流である事を知つた。

東京灣に一體、何時頃までハヒガヒが棲息してゐたか知らないが、既に貝塚積成時代の末期のものには、ハヒガヒが殆んど發見出來ない所から推測して、相當古い時代に既に絕滅したのであらうから、出水にせよ、寒流にせよ、何か劇しい體質的影響を、比較的急速に受けた事は事實で、同じ時代のハヒガヒ相互間にあつても、その助數に著しい差異が現はれて來ても、決して不思議でない事を知つた。

それに溪谷毎に、ハヒガヒ體質に影響を與へたコンディションが異るので、嚴密な數字は溪谷別にして、谷奥、谷中、谷口の三つによつて測定して見ねばならぬ事を考へ、入間溪谷に於て、はじめて結果らしき數字を得るに

奥東京灣の諸貝塚については、これは溪谷でないから、この材料を、直接新舊判定に使用する事は出來ないが、土器様式に種々あり、それと、パーセンテーヂの關係を一應御覧に入れた次第である。純鹹性の蓮田式貝塚の一九のパーセンテーヂが比較的多き事、中でも灣頭に近い野々下屋敷、古作二貝塚の助數二〇のものの著しく多き事、にも拘らず、此の兩者の中間にある純鹹性、蓮田式貝塚なる幸田貝塚にあつては、助數一九のもののパーセンテーヂが最多を占むる等、觀て居ると仲々興味津々たるものがある。

之等の他、古利根溪谷、飯沼溪谷等に於ても、未だ賓踏された貝塚數も少くなく、資料數も貧弱であるが、特に一貝塚に於て五箇以上を計算したものを取つて、その數字を擧げておいた。之等も何時か、資料として生かす事の出來る日が來る事と思ふ。

結　論

余がハヒガヒ助數を計測しはじめた當初の目的は、その助數の多少によつて、容易に貝塚貝層の新舊を判別し得る、一定の數値を見出す事にあつた。所が、仕事が一段落付いた時に發見した事は、同じ谷奥にある、貝塚鹹度の等しい貝塚のハヒガヒ相互の間にも、相當著しい助數パーセンテーヂの差違ある事實である。例へば子母ノ口貝塚の如く、多摩溪谷の最奥に近く存在する貝塚の、しかも甚だ立派な貝殼のハヒガヒに於て、助數二〇のもののパーセンテーヂがリードする理由が全然不明であつた。それは現世種が助數二三以上を示めし、古いものは一八以下、一七以下のものもある事を豫想してゐたからであつた。此處でこの仕事は一坦全然失敗に歸したかの如くに考へられた。

第二の試みとして、大體逆説的ではあつたが、第三表に相當する土器様式による分類表を作つて、その總計を

七、骨器、石器

牙器類は一つも見當らなかつたが、骨製品としては第七圖に見る如き、鹿角を磨滅して作つた篦様の物の一端と、長さ三寸位の鹿角を切斷した物を見つけたが、これは何に使用した物かはわからない。

石器は第七圖 e に見る如き砂岩製の石斧の頭部かと思はれる物一個を採集した丈けであるが、然し二宮氏から山崎氏に贈られた、遺物中には磨製石斧の刄部があつたそうだし、亦手打校に居る西利德君の話に依ると、同校にも貝塚から出た尖り底の壺と磨製石斧の破片とが保存してあるとの事であるから、全く石器の無い貝塚ではないけれ共、石器が極めて少ない事は事實である。

而して第七圖の鹿角を見るに、b c は單に鹿角を切斷して多少加工したもの、d は切斷した鹿角の根元であるが、此斷面を見ると、どうも石器の如きもので切斷した物ではなくて、鐵類の刄物で切斷した物ではあるまいかと思はれるやうであるが、然し今ではまだ此貝塚から鐵器類位の物も見出されては居ない。

Fig. 7. 角製品石器

八、結語

一、本貝塚は薩摩の最西端の離島にある、彌生式鹹水貝塚であつて、厚さ凡そ五尺、廣さ凡そ五十坪の混土貝層をなしてゐる。

一、土器は彌生式を主とし、之に少しの祝部土器を混じてゐるが、壺形土器の頸部胴部に特別の意匠を施した。凸狀帶を繞らした物が多いが、此種の意匠を施した凸狀帶は、本縣では指宿遺跡や始良郡横山村にも見られるが、(京大考古學報告第六)然し手打の物と指宿、横山の物とは意匠に直接の關係類似は見られない。

一、石器類が極めて少ない、と云ふ事と、鹿角の切斷面が鐵器で切斷したものではあるまいかと云ふ事などから、此貝塚は比較的後期の所謂金石併用時代のものではあるまいか、と疑はれるけれ共、然しこれは今後尙調査を俟たねば判然とした事は言へない。

資料

信濃下水内郡・鳴澤頭の土器及び石鋸

藤森榮一

一 南信濃の踊場式土器が關東の十三菩提式其の他と並行すべきものであり、又諸磯式の終末期に該當すべき特徴を持つものであるとして、關東に幾多の系統を引く一方、千曲川を下つた越後、越中、加賀等の北陸地方にも重大なる關係を持つものである事を視逃してはならない。各遺跡の調査報告は他日精細に發表されるべきものであるが、そうした土器を出す遺跡は二三に止まらない。佐渡に於ける長者ケ平、小泊、源太平の三遺跡、(杉山壽榮男氏日本原始工藝)越後糸魚川長者ケ原(同前)越中氷見朝日貝塚、(東大人類學教室藏)加賀倶利加羅上野、(上田三平氏・石川縣)等がそれである。特に朝日貝塚は幾度かの發掘に依り、最下層の土器として屢々學界にも紹介されたものであつた。

二 越後境に近い千曲川左岸の高い丘陵に位置する信濃下水内郡岡山村桑名川鳴澤頭の土器は、南信濃の踊場式土器と北陸の踊場式並行の土器の一群―氷見式土器とを連絡づけるものである點で價値づけられる。

Fig. 1. 信濃鳴澤頭の土器

土器は桑名川渡邊喜平次氏の發見に依るもので、地下三尺の個所より數個の自然礫に近い石器と共に發掘され、當初は完形であつた。遺存する部分から推すに、口縁部が内側に彎曲し口縁上向の把

手様突起が素晴しく發達した、極めて大型な深鉢形土器である。全面に連續半截竹管紋の隆起帶が美しい曲線的な發達をみせ、その間隙を縄紋が滿してゐる。粘土は夾雜物の尠ない良質のもので、赤褐色、内面は稍滑らかに磨かれ、厚手に燒かれてはゐるが左程硬くなく、吸水性も强い。第一圖左下の二つの破片は同じ個體のものではなさそうであるが、同一形式のもの前者よりは遙るかに薄い。

東筑摩郡中山村がニボリ塚の土器（宮坂光次氏史前學雜誌二ノ一）が最もこれに酷似したもので、十三菩提式もこの種のものが主體をなすものであらうし、踊場式Cの極めて發達した例とも見られようとも思ふ。同時に又北陸の氷見式土器の諸遺跡からも屢々發見されるところのものである。

三　序に渡邊氏の發掘に依つて伴ひ發見された石器に就て書き留めて置く。手頃な川原礫に簡單に加工したもので、相當に手擦れて居り、不規則ではあるが滑らかで手觸りが良い。形は一定しないが、一樣に斷面は三角に近い形を呈し、其の一端を心持刃狀に作り出してゐる。第二圖の１２３は其の刃部の最も顯著なものである。刃部尖端は共に平かに磨滅され、餘程使用したものとみられる。大きさも不同であるが、總て掌に丁度握り得る程度のものである。１は斑礪岩、２は輝綠岩　３は橄欖安山岩かと思はれる。何れにしても新鮮な堅緻の重い岩石を撰んでゐる。形狀、刃部、石質等より考へて、所謂石鋸の範疇に入るべきものであらう。

石鋸は古く大野雲外氏に依つて注意され、（東京考古學會雜誌一四）其の後早川莊作氏の資料提供があり、（越中石器時代遺跡遺物）近くは八幡一郎氏に依つて各方面から研究され、其の性質も稍鮮かになり來つたものである。（人類學雜誌一四七ノ二、信濃考古學會誌三ノ一）所謂擦切石斧、及び其の原料である靑色な石、そうした一つの文化形態の傳播を知る上に於て、其の擦截用具であらう石鋸は相當な重要性を持つものに違ひない。

1　2　3　4

Fig. 2.　信濃鳴澤頭の石鋸

現在では縄紋式文化の末期的な所産ではなからうかと思はせる資料が多く發行されてゐる。鳴澤頭ではこの種の自然礫に近い石錘は總數で七個あつた。その形式―自然石に極めて僅かな加工しか加へず刄部と基部との區別もして居らない様な簡單なものである事實と、伴出土器が古式縄紋土器の稍後れたものである事實とは、それに如何なる示唆を與へて呉れるものであらうか。勿論肝心な擦切石斧が發見されて居らない今日、單にこれのみを以つて、直ちに擦切なる石器製作の手法が、この時期に近く原始的な姿で始めて日本島に行はれたものであらうと云ふ様な考察は許されないものに相違ないが。

石錘の分布も北海道、東北に多い以外に、越後、越中、越前、特に越中に於て多く發見される事實から、その地方に於ける踊場式及びそれに並行すべき氷見式土器等の濃厚なる分布に徴して、將來鳴澤頭の如き意味の興味ある資料も出てくるものではないだらうかと疑つてもゐる。

鳴澤頭の石錘の七個、その數量は一寸と奇異にも考へられるが、假に地表採集のものが混じてゐるとしても、遺跡に間違ひはない。倚渡邊氏は附近の桑名川東原からも同一な簡單なものを二三發掘してゐる。遺跡は信濃では稀有な加曾利B式を中心とする大遺跡で、極めて僅かな堀之內式、安行式と共に加曾利E式、勝坂式、及び其れ以前の古式土器をも含むものである。

未報告の例として諏訪郡北山村湯川上ンダの例は(第二圖4)表面赤褐色を呈し輝緑岩かと思はれる素晴しく硬い重い石で作られてゐる。八幡氏の上水內郡榮村宮の例の如く、基部と刄部との區別は作り出されては居らないが、其れに次ぐ精撰なものである。遺跡は加曾利B式、安行式、龜ヶ岡式の土器を出す遺跡であるが、諸磯式土器も澤山發見されてゐる。(一九三四・九・一一)

久ヶ原庄仙出土臺付土器

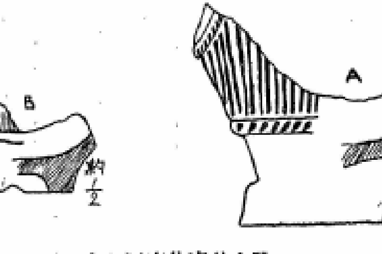
佐野又治

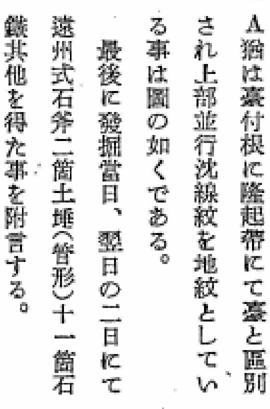
去る四月、齋藤房太郎、齋藤武一、久保常晴の諸氏及び日比野、竹下兩君等と雪ヶ谷貝塚發掘の際、庄仙へ採集に行きし久保氏が臺付土器片を得、つゞいて翌日私も得た。本遺跡に關し齋藤房太郎、齋藤武一兩氏が詳細なる論文を發表して居り、而して此二個が夫れ以後出土し、且つ從來勝坂式遺跡に於いて臺付土器が出土する事は認められているが、同じ勝坂式遺跡としての本遺跡に於いて寡聞の爲めか最初である故敢へて報告する

事とした。思ふに本遺跡を考へる時、或程度の重要性を本土器片が有するのではなからうかとも考へ得られる。圖に於けるAは久保氏採取のもので底徑六・三糎Bは底徑七・五糎である所より察して相當大形のものである。

A猶は臺付根に隆起帶にて臺と區別され上部並行沈線紋を地紋としている事は圖の如くである。

最後に發掘當日、翌日の二日にて遠州式石斧二箇土錘(管形)十一箇石鏃其他を得た事を附言する。





久ヶ原庄仙臺付土器

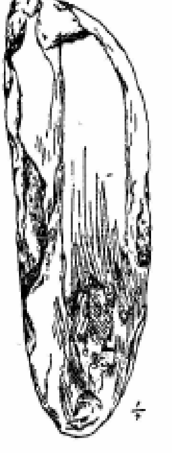
青森縣三戸郡是川村一王寺發見の石庖丁樣石器

池上啓介

圖示せる遺物は、昭和四年四月、是川一王寺遺跡を發掘調査

した際發見したものである。當時の報告は宮坂光治氏より本誌二卷六號にある。宮坂氏は本遺物が全く例外なものでもあるし、又、氏自身の發掘によらなかつたものであつた所から該報告には割愛せられたものであつた。

本類系の石器は私達の發掘に際して、數個發見したのであつたが、不注意にも一個しか持ち歸へらなかつたものである。其後數年間頗る奇異な石器として考へられてきたものであつた。然るに、先般、同遺蹟の所有者であり、熱心な研究家である泉山岩次郎氏が訪問せられた際、この石器の例品を、數例發見せられた由を聞知した。



是川一王寺遺跡發見石庖丁樣石器

是川一王寺遺蹟は申す迄でもなく、圓筒式土器を出土するの遺蹟であるが、遺蹟の特徴として此の樣な石器が伴ふのではないかとの憶測のまゝ御報告する事とした。

本品はスレート質の石で、形態は圖示せる如く、從來の通念の石庖丁なるものに似てゐるが、特に刃部と見るべきものがなく刃器として考へるには餘りに不都合な點が多い。製作は打製

の技工によつて、大體の型をつくり、其後に粗雜な磨製の方法を行つてる。元來、石庖丁なる遺物は薄肉鋭利なものであるが、本品は厚さ一・五糎もあり、而も周縁の一部は研磨されてゐる點が見られる。大きさは大形で最長二十三糎、幅七糎もある。

兵庫縣岡本梅林遺跡に就て

松下胤信

昭和八年一月廿二日の事であつた。新聞紙上で岡本梅林内の區劃變更に伴ふ、考古學的資料の發掘を報じたので、早速馳せ參じて搜査するを得たので、玆に小報をものして調査者としての責を果す事にする。

兵庫縣武庫郡本山村岡本遺跡は、神戸市の西北方、六甲山麓の南東面する一支脈の山地に位し、北西方蘆屋川を隔て西宮市に對し、南方住吉川に依り神戸市に近接して居る。そして背後に六甲の山々、前面には大阪灣を俯瞰し、緩傾斜の陵面は其末端に、幾多の小流の沈積作用に依る扇狀地を構成して居る。斯うした地理的景觀は現在に於いても、尚惠れた山嶽地帶と半田園的地帶に、阪神經濟區のユートピヤとして、限りないアツトラツクテイブな因素を投じて居る。

遺跡への道程は、阪急電鐵岡本驛下車、山麓に向つて西南進すれば、少時にして岡本梅林を擁する、小山地に達する。謂ふ所の岡本遺跡は此等ブロック圏内に存在するのである。

梅林は古來阪神間に著名であつて、諸名士の杖を曳くもの多かつたが、奔流する都市文化圏の俎上に、遂に住宅地帶として其犧牲に供せられ、副産物として遺物の露出を見たのである。

丘側諸處横に穴を見、埴輪埴瓮斷片、齋瓮系統に屬する。坩坏高坏並びに堤瓶蓋坏等を見るが、斷片的の破片である爲、僅かに器型を推測するに過ぎない。此丘上又彌生式土器類の散布地であつて、廣汎な地域に亘つて其の散列を布いて居る。彌生式齋瓮系統を通じ、無紋大部分を占めて居るが、少數の刷毛目波狀紋を點見する事が出來る。

以上を以つて私の報文は終るが、六甲山麓地帶に貧弱ながらも、古代文化の黎明を新に加え得る事を、竊かに私は喜ぶのである。（一九三四、九、二六）

史前横濱遺物發見地名表

松下胤信

曾て私は本誌壹卷五號及貳卷參號に横濱附近の遺物地名表を報告した事があつたが、其後ノート整理の際追加分が出來たので前稿二報文の追補として、左の如く列擧する。

幸ひにして其等の鄕土史の上に、幾分なりとも參考資料を供し得ば、報者の望外の榮とする所である。

横濱市中區井土ケ谷町山ノ根壹〇九壹近邊（彌生式）

横濱市中區大岡町同潤會住宅近邊臺地（彌生式）

横濱市保土ケ谷區岩間上町壹八七八地壹九〇七地近邊（彌生式、齋瓮）

同　保土ケ谷區和倉臺（彌生式）

同　同　川島山（同　）

同　同　瀬ノ谷戸（同　）

同　神奈川區青木町臺町壹七八〇（高島山）（彌生式）

横濱市神奈川區青木町濱町壹八貳〇（彌生式）

横濱市鶴見區市場町壹參貳五—壹參參六近邊（貝殼、埴瓮）

横濱市鶴見區豊岡町貳ノ參七四附近（埴瓮、齋瓮）

横濱市中區南太田町横濱高商附近畠（縄紋、彌生式、齋瓮、陶質土器）

横濱市區久保町東臺兒崎女學校附近（彌生式）

横濱市中區久保町外荒具壹五六壹地壹五五七地近邊（紋文、彌生式）

昭和八年の年報訂正に就いて

五卷六號の代冊を發行しました結果、昭和八年度（昨年度）の年報の目次並に索引に訂正がありますから御面倒でも御張付の上御訂正を願ひます。

史前學會
大山史前學研究所

刊行書目

史前學雜誌第一卷（昭和四年刊行）定價六圓

史前學雜誌第二卷（昭和五年刊行）定價六圓

史前學雜誌第三卷（昭和六年刊行）定價六圓

史前學雜誌第四卷（昭和七年刊行）定價六圓

史前學雜誌第五卷（昭和八年刊行）定價六圓

史前學雜誌第六卷（昭和九年刊行）定價六圓

研究小報第一號 神奈川縣新磯村勝坂遺物包含地調查報告 大山柏著 定價壹圓 送〇、一〇

研究小報第一號 埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調查報告 甲野勇著 定價壹圓廿錢 送〇、一〇

パンフレット第一號 史前の研究 大山柏著 定價十五錢 送〇、〇四

パンフレット第二號 石器時代の概要 大山柏著 定價十五錢 送〇、〇四

パンフレット第三號 未開人身體裝飾 甲野勇著 定價三十錢 送〇、〇四

パンフレット第四號 石器時代遺跡概說 大山柏著 定價四十錢 送〇、〇四

東京灣に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける縄紋式石器時代の編年學的研究豫報（第一編） 大山史前學研究所 史前學雜誌第三卷六號代冊 定價一圓五十錢 送〇、一〇

關東縄紋式文化編年學的研究資料第一冊 横濱市下菅田貝塚群（昭和九年刊行）大山史前學研究所 定價六十錢 送〇、一〇

關東縄紋式文化編年學的研究資料第二冊 神奈川縣都田村折本貝塚（昭和九年刊行）大山史前學研究所 定價六十錢 送〇、一〇

（但し、史前學雜誌第五卷全部希望の方には編年資料第一、第二冊を第五卷第六號とします）

日本舊石文化存否研究 大山柏著 史前學雜誌第四卷第五六號代冊 定價二圓五十錢 送〇、一〇

史前學講義要錄（第一部基礎史前學）大山柏著 定價七十錢 送〇、一〇

史前學講義要錄（第二部事實史前學）大山柏著 定價八十錢 送〇、一〇

史前學繪葉書 第一輯（外國之部）定價二十五錢 送〇、〇二錢

史前學繪葉書 第二輯（日本內地之部）定價二十五錢 送〇、〇二錢

東京市澁谷區穩田一ノ九
史前學會
電話青山一二五番
振替東京五八九六八番

INHALT

I. ABHANDLUNGEN (Japanisch)

II. KLEINE MITTEILUNGEN (Japanisch)

TAFEL



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durchjährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich :

9. Onden Shibuya-Ku Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei
Sumio Nakazawa Jookei Shibata
Vorsitzender Fürst Kashiwa Ohyama
für den Vorstand
Kiyoyuki Higuchi Keisuke Ikegami
Isamu Kohno Kei Kanno
Iwao Ooba Sueo Sugiyama
Kingo Tazawa Ryuichi Yamaguchi

ZEITSCHRIFT
FÜR
PRAEHISTORIE

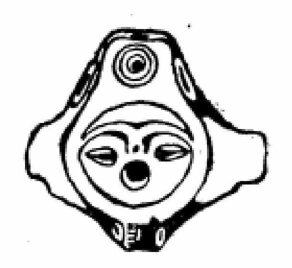
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

ORGAN DER JAPANISCHEN
PRAEHISTORISCHEN GESELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN

von

KASHIWA OHYAMA



6. BAND 6. HEFT

TOKIO

November 1934

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Shibuya-Ku Tokio



史前學雜誌

第六卷　第五號

昭和九年十月發行

史前學會

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル

二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌（年六回隔月發行）及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會ヲ行フ。隨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ

四、會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル

入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込マレタシ

五、本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得

六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル

七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得

九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山史前學研究所内

史前學會

顧問　小金井良精　中澤澄男　柴田常惠

會長　大山柏

幹事　杉山壽榮男　田澤金吾　大場磐雄　甲野勇　大山柏　簡野啓　樋口清之　山口隆一　池上啓介

會計　岡田義一

（順序不同）

投稿規定

寄稿ノ範圍ハ史前學研究ヲ主體トシ、之ニ關連スル諸學ヲ包括ス。寄稿者ハ通常、會員並ニ會員ノ紹介アル者ニ限ル

原稿ハ返還セズ、但シ寫眞、圖表等ハ豫メ申出デアルモノニ限リ之ヲ返還ス

原稿掲載ニ就イテハ幹事ニ一任サレタシ

寄稿ノ別刷ハ豫メ申込ミアル場合ニ限リ、當分所要部數ノ實費及ビ送料ヲ申受ケ需ニ應ズ

昭和九年十月十五日印刷　第六巻第五號
昭和九年十月二十二日發行　定價一圓

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　池上啓介
發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一
印刷者　東京市神田區三崎町二丁目一番地　鈴木越武
株式會社明章印刷所

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内　史前學會
電話青山一二二五番
振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　岡書院
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第六卷第五號

目次

餘白録

雜報

史前食料概説 其一

大山柏

第一節 總記

一、はしがき

史前食料研究の必要であるに拘はらず、この研究の餘りにも閑却せられて居ると云ふことは、既に本年本誌第二號「史前生業研究序説」に於て開陳した所である。而して其際生業に連關した食料關係として、自然界より舊、中、新石文化並に金屬文化初期に於ける食料一般を、最も簡單に觸れもしてきたが、史前食料研究の大局から見れば、以上述べた所の如きは、其一部をなす食料發展史の骨幹に過ぎず、且つこの發展史としても、尚述ぶ可き多くがあるから、玆に如上の表題のもとに、史前食料の基礎的研究を行ひ、史前食料に對する認識に資し、現實に際しその根柢を形造ると共に、前陳の不備をも補いたいと考へる。只本稿を纏むるに當つても、史前食料個々の各部分にこそ、參照すべき多くを見たが、不學の故か未だ取り纏つた研究を見ない(一)。從つて以下述ぶる所も、全く著者獨自の組織に過ぎないから、冗漫・偏見の存する所も多いと考へる。それ故先づ其旨を告白して、讀者の不消化に備へ、又其批判と推進とを御願する次第である。

二、史前食料の概念

生物に食料(Nahrung)がなくてはならぬことは、改めて云ふを要しない。これが缺乏は直に生命を劫し、其充實は生活の餘裕となる。特に史前文化に於ける食料なるものは今日に比し、文化工作が少なかつた、それだけ多く全文化に影響する。又既に碩學ヘルネスは『食料の改善は、卽ち文化の進展である』と喝破もして居る。(2)試みに天然界に目を轉ずれば、幾多の生物が或は孜々として努力し、又は惠まれた閑暇を貪るもの等々夫々其身に應じた生活を行ふもの〻、其大多數は彼れ等生活の第一義は食料である。さすれば史前文化の如き、比較的天然生活に近い、生活環境に於ては其食料問題の重要意義の存することは、容易に肯定し得る所である。

更に史前食料の研究に當つても、研究の主眼は直接食物を對象とし、食物生產行爲たる各種生業とは、こ〻に切りはなち、生業研究は改めて夫々行ふこと〻し、本研究には多く觸れない。又史前食料の現實遺存せるものは、甚だ偏しても居り、或は全く何等の事實を止めないものも、理論上必要を認むるものは、對象として居る所も豫め御斷りして置く。例へば飮用水の如き人類生活に缺く可からざるに拘はらず、現實遺存のないが如きは顯著な一例である。

三、食料の基本的性質

食料なるものを客觀的に見れば、生物に於ける新陳代謝の補充に過ぎないが、これを主觀的に見れば、飢渇の衝動に基く充慾行爲である。只哺乳類の如き高等動物になると、より味覺の發育せるものがあり、經驗、體質、官能、天然環境等各種現象の相配せられ、そこに食物に對する輕重の嗜好を生ずる。この味覺なる官能が一面に於て、後述して居る如く、種々相を有するに拘はらず、綜括的には動物生活の色々の素因をもなすのであ

る。萬一にも味覺の如きが發育せず、食料攝取が單なる新陳代謝の補給のみであるならば、獨り人類と云はず生物界に於ても、其生活現象は機械化して甚だ單純となるであらうが、一面にはこうした官能があるが故に各種の慾望も生れ、睡眠、性慾等の諸官能と共に、複雜なる生活現象が生れ、人類に於てはそれ等が直接、間接に文化に齎す所が深い。

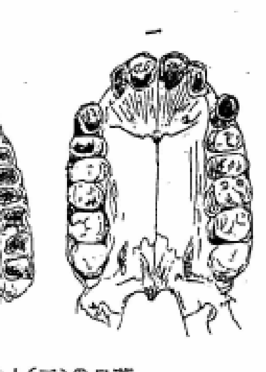


Fig. 1. 猩々(一) 黑人(二) 歐人(三)の口蓋
(宮島博士より)

四、食物に對する生理的機關

更に方面を變へて、人體に於ける食物攝取の機關を見ると、そこに所謂消化機（Verdauungsorgane）系統なるものゝ存することは餘りに常識化せられ、且つこれが內容に向つて一度其專門的見地に立てば、研究深遠であつて到底吾人等門外漢の一朝一夕に其窺覘が許されない。只直接史前食料に深く關係する所を、概見するに止めざるを得ないが、それでも本學上、參照し又研究理解して置く可き件々は、決して尠なくない。特にこれ等消化機系統として史前人の直接今日に遺存する部分は、僅に其門戶をなす齒（Zahn＝Dens）を見るに過ぎず、身體軟部の如きは研究對象たり得ないが、(3) 間接には多くがある。後述して居るが如き人類は其齒の示す所（第一圖）、乃至は胃腹の構造上、雜食者であり、それよりして食料範圍の手掛りも生れてくる。更に食料に於ける榮養素の充否の如きも、唯に消化系統に止まらず、それよりする熱量の如きは直に身體體溫に及ぼし、引いては衣服、場合によつては住居にまで關係を及ぼしてくる。又有毒食料に對して

は、獨り天然衛生として官能的に調節せらるゝに止まらず、場合によつては天然衛生に戻り、反逆を敢てする所に文化の發露も窺ひ得らるゝ。此の如き次第である以上、これ等に對する一般の知識も亦必要と考へるが、こゝに細述するだけの餘裕と知識とを有して居らぬ爲、後章に於て個々に出會せるものに就てのみ記する。(4)

五、食物に對する嗜好

人類の食物に對する嗜好は、一見其範圍廣汎で一定して居らない。特に今日の文化に於ては、地理的、民族的の範圍を越え、中には各個人的にまで其傾の進んだものすら認められもする。又この嗜好たるや、必ずしも一定不變のものでない。時代によつても、地方に於ても、男女性別でも、成長別でも夫々相違を見得るから、甚だ複雜である。又天然界にあつても、それ相應の食物に對する嗜好を見る。今日の未開土人に於て、文化人に比し食料著しく單純且つ種類に乏しいに拘はらず、其間にも嗜好の偏差が見らるゝ。この未開人と同樣、史前文化に在つては、食料の種類も調理の方法も、文化古きに遡るに從つて、より單純となるから、彼れ等史前人の嗜好は、今日とは比較にならぬ簡單なものであつたとは想像に難くない。而して其極限に到達すれば、文化なき天然生活であり、天然界のそれと一致する。この天然界に於ける嗜好たるや原則として官能的要求と一致するものであるから、無制限のものではない。今日文化人等に於てすら、小兒の多くが甘味を要求したり、疲勞後エネルギー恢復に要求するもの、或は體溫保持上の要求等があり、中には今日の文化所產として、保衞上必ずしも味覺と一致を見ないものすらあるが、兎に角官能的要求の存する所深く、且つ史前民の如きは大半これに支配せられたものと見て、大過ないと考へる。尙この嗜好たるや官能的に氣候に支配せらるゝ所も深い(第三節、三、參照)。今日熱帶地方と寒帶地方とでは、相互土着人間には大きな開きがあり、綜括的に熱帶方

面では植物質を、寒帶では動物質食料を愛好し、又熱帶の如きでは、植物質により富んでも居る。更に溫帶地方に住し文化を誇る吾人等ですら季節の支配、卽ち夏冬に於ける嗜好の變差があるから、嗜好に就て見るにしても、天然環境、特に今述べた氣候環境を取り入れて考へなければならない。勿論この外、民族としての傳統もあらう。體質上の特異性もあらうが、それでも史前民に於ける場合は、其文化の階梯に應じ、官能的と文化的との案配如何が歸着點である。而して今日とは餘りに隔て多い、天然生活者のそれに近い道程が、史前民の嗜好なのである。

【註】（1） 史前食料の重要であり、既にこれに對し研究の端緒をなしたものは、相應に見らるゝ。**M. Hoernes; J. Ranke; W. Boelsche Ed. Hahn;** 其他多くの碩學の注目せられた所である。我國の如きは既に**岸上鎌吉博士**、「原始民族の水產食料」中央史壇、六ノ一、（大正十二年）がある。又多くが夫々各自の學的立場に於て研究せられた爲か、中に片言よく肺腑を抉る體の啓蒙せらるゝ所はあるにしても、其多くが直接史前食料をのみ對象としたのではない。又食料生產と食料それ自身とは離る可からざる關係の存する點も充分に認められ、其意味に於て著者も前回發表したのである。然るに多くの書類にあつては、食料研究に當つても動もすれば、食料それ自體よりも、生產に費さるゝ所が多い。それ故生產研究に就てこそ、多くの教唆も受けるが、食料それ自體に對し多大の不足を見たのであつて、この點を上述したのである。只著者としては、單に史前學方面のみから觀察して居るので、こうした文獻を多く見出し得ない點も多いと考へる。社會學方面乃至は植物學、動物學或は生理學、衞生學、榮養學等の方面では、少なくとも個々の部分に觸れたものも多からうが、こうした廣い範圍にまで著者として捜索の手が及ばないことも併せ御斷りして置く。

（2） **Moritz Hoernes;** Natur-und Urgeschichte des Menschen. 1909. I. Bd. S. 482. „Die Sorge um Nahrung." „Im Uebergange von einer Nahrung zur andern liegen die Fortschritte der Kultur." 參照。

（3） 史前人の遺骸として通常は骨骼のみである。それすら全身遺存しない場合も多い。特別の場合に於て所謂沼澤遺骸（Moorleichen）と稱せらるゝ歐洲史前文化末期のもので、兎に角一部の軟部が保有せらるゝ場合が無いのではない。又史前文化ではないが、エジプト、新疆等の「ミーラ」も亦、軟部の一部が遺存もするが、これ等は特異の場合として、除外する。

（4）消化機の一般は、J. Ranke; Der Mensch; 其他多くにある。又消化作用に就ては、澤村眞博士、「食物化學講話」等に見らるゝ。これ等の研究は更に將來に於ても必要に應じ增補も試みたいと考へて居る。尙これに就ては、註（7）參照。

第二節　天然界に於ける食料

一、一般

直接人類の食料を見る以前に、一通り天然界、其內でも人類がこれに屬し、且つ人類に最も近い哺乳類に就て概見することは、文化研究の或る範疇ともなる。特に哺乳類にあつては、其主食料に基き草食（Frugivor）肉食（Karnivor）雜食（Omnivor）の三習性に分たれ、人類は前述した如く其齒の性質上、雜食性であると云ふ點が辨うべき一要點であり、これに就ては更に後述もするが、哺乳動物界にも其例に乏しくない。人類に最も近緣ある猿類（Simiae）の如きも顯著な一例である（第一圖參照）。この三者を比較して見ると、夫々特徵がある。草食獸に在つては、食料對象が植物である以上、其繁茂せる地方に於ては、比較的勞作少なく食料は充實する。唯彼れ等の多くには、肉食獸なる强敵があつて、生命の不安は食料と共に其身の保安にある。更に陸上草食獸は大形なものが居る。象の如きは特別としても、馬、鹿、牛等身體が大であればこれに比例して食物の量も大きくなるから、廣い地域も必要となつてくる。特に群棲するに於て然りである。[5]これに對し肉食獸に在つては、食料對象は常に移動性を有する動物であり、抵抗力少ない草食獸であつても、容易に獲得し得ざるものもある。それ故食料生產には大なる勞力、場合によつては所謂「喰ふか喰はれるか」の如き危險な場面にも遭遇する。勿論肉食は草食程、量を要しないのが一般ではあるから、より小形な抵抗弱い草食獸、鳥類其他を攻擊するにし

ても、勞力と或る危險率が伴ふ。これから見ると雜食性が一番有利な生活條件を持つことになる。第一に食料が動植物兩方面に亙るだけ、夫々個々のものより廣い。植物性のものは、草食者と同樣、攝取に危險はない。動物質に對しては、比較にならぬ程度の弱者を求むれば、危險率も甚だ低下するのみならず、（次項、猿の食料參照）何れか一方に偏食しても、暫時の飢は滿し得る。只保安の武力に於ては、問題は存する[6]も、これとて天然人で未だ全く文化なく、赤手空拳の時代であつても、大形肉食獸にこそ武力劣れ、小形な肉食獸からも、たやすく捕食せらるゝものとも思はれないから、この點に就ても或る不安はあつたにせよ、食料採集上からは有利であつたと見なければならない。

更に天然界に於ける食料の攝取を見ると、總てを通じ定時に食を採らない。卽ち定食性がない。大約晝間に採るもの、夜間に主として漁るもの等はあつても、所謂其日暮しの範圍を越えない。中には後述して居る如く、喰ひ溜めをするもの、又は冬の食料缺乏期に冬眠（Winterschlaf）を試みるもの、乃至は同樣期間に對し食料貯藏を行ふもの等特異なものは居るけれども、普遍性ではない。空腹に食を漁り、食あれば滿腹して眠ると云ふ樣なのが、一般であり、育兒以外は殆んど後顧することがない。

又これ等天然界にあつては、一般に生食のみであつて、調理加工、火食或は食料配合等は全くない。只彼れ等には、夫々其食物に對する嗜好があり、これに對する搜索官能の或る程度までの發達は認めらるゝ。且つ毒物に對する認識本能も存し、嗜好と相待つて食料の或る程度の撰擇も行はるゝから、其大約の範圍も定まつてくる。以上は彼れ等生活の平常時のことであるが、饑饉其他の非常時に於て幾何まで食料變化乃至は擴大が伴ふかは、豫め考慮中に入れて置く可きである。要は天然界に於ける食料は、生産卽消費であり、飢渴充慾に對

する刹那的滿悦であつて、食料としての或認識に缺けて居る。

二、猿類の食料

猿類の食料と雖も、天然界の食料範圍を出でないが、人類に最も近い體質所有者であり、其消化系統の如きも部分的個々には若干の特色あるとしても、大局上人類に最も近似するとせらるゝ[7]以上、彼れ等の天然生活に於ける食料は、天然生活人、乃至はこれに近い低文化人の食料に對する、一比較資料を供する。只猿類食料を見るにしても、無條件ではない。顧る可きの一つは、現存野生猿類の其殆んどが、足の發育が不充分であり、人類に比すれば寧ろ四つの手と申し得可きである。[8]而してこの體質と離る可からざる習性は、特例（第二圖參照）もあるけれども、主體は樹上生活に在る。[9]それ故樹上生活者としてこの食料採集の點は、人類と其趣を異にする。次には現存野生猿類の分布は、南暖地方に多く、我國の猿（*Pithecus fuscatus*）の如きは、彼れ等の北限地產とせられ本州北端を界とし、最早や北海道には產しない。[10]それ故猿類の食料と云ふても、其主體は地理的に南暖的であると云ふ點は、辨へねばならない。かくして先づ猿の齒以下消化機系統を見ると前述の如く、人類と略同樣である。即ち雜食性なのである。然しながら各個々に就て見れば、食料にも若干の開きはあるが、概ね菜食が主である。これは一面に於て南暖地方に主棲し、植物豐富であり且つ樹上生活者としては、最も容易且安全に採集し得る特典もある。又猿類の多くが人類と比較すると身長は甚だ短小である。ゴリラのみが大きく、大形類人猿の「チンパンヂー」、「ヲラン、ウータン」、等何れも人類より小である。それ故多くの猿類の食物量も、體軀上、より少なくてすむ。それでも中には「ムカデ」「サソリ」「カタツムリ」「クモ」「チョウチョウ」等の外「カヘル」「トカゲ」乃至は鳥類鳥卵より「コウモリ」「ネヅミ」等の小形哺乳類等の諸動物を採食す

るものがある。[11]特例ともすべきものには、「カニクイザル」(*Macacus cynomolgus*)と稱し主として南洋に產するものにあつては、海岸附近に棲み好んで「カニ」を捕食し、且つ游泳、潜水も巧みな由である。[12]更にゴリラに至つては、果實等を嗜食するものゝ時には肉類も喰ひ、或場合には殺戮した人肉をも食すると云ふことである。[13]此の如く猿類に於ても、雜食的性質が窺ひ得る。特に前述した如く、主として南暖地方に於ての現象であるから、もし猿類にして北寒地方に自棲するなれば、更に人類との間に色々の比較對照をも生ずるであらうと思はれ、人類と其分布を異にする所は、考慮すべきと考へる。



Fig. 2. イヌガラヒヽの食物採集 (Nach Brehms) 〔(9)參照〕

三、天然人の食料

現實に於て全く文化なき天然人と認む可き遺骨の出土はない。文化の有無不明な史前人骨は、ピテカントロップスやハイデルベルク人等があるけれども、由これ等を文化なき、天然人として見

ても、其食料遺物は明でない。其出した動物遺骸があるとしても、彼れ等が捕食の結果か、或は單なる化石層の如く、何等かの原因から天然に集積したかは未詳である。それ故適確な事實は尙將來に待たねばならず今日は單に類推せらるゝに止まる。これも大局上から見れば、猿類に近いものとは考へらるゝが、細部に就ては何んの手掛りもない。特に人類食料始原問題、卽ち始原は草食であつたか、始めより雜食であつたか議論等もあらうが、根柢が未だ弱い。この問題も亦將來の事實發見に待たねばならない。兎に角、猿と同樣、或は多くの猿よりも身體が大きく、武力には富むもの丶攝食量は多いだけそれだけ、食料範圍の擴大を必要とする。卽ち雜食の方が、より有利である。特に足の分化が出來たからには、人類より力弱くとも運動性に富む動物は捕獲も容易でない。又猿の樣に樹上、枝から枝へと、巧みな輕業も樂には出來ない。それ故採り易い植物と、一部鈍重な動物とが、多く食料とならうから、動植兩方面で互に一部の不足は補へる。尙前述した天然界の食料攝取と同樣、天然人に於ては何等の調理加工もなく生食であつたと考へらるゝ。火の確實な使用痕跡は、只今までの發見では前期舊石文化の「アシュウレアン」(Acheuléen)に始現し、「シエルレアン」(Chelléen) 及びそれ以前の文化には、今日未詳である。[14] 又定食性も未だなく、全く天然界其儘の一員たるに過ぎなかつたと考へらるゝ。更に比較的低い文化を有すと稱せらるゝ、今日の未開人の食料に就て見ると、中には隨分變つた食料もある。例へばアフリカのブッシマン(Buschmann) は獸肉、菓果の外蟻



Fig. 3.
「ウシガヘル」とブツシマン
(nach Schmidt u.a)

の卵、「ミヽズ」「イナゴ」「ハチ」等をも食し、「ウシガヘル」(假名)(Ochsenfrösche=*Rana mugiens*)は彼れ等の最も嗜好する所である(第三圖)[15]。又インドのウエッダ(Wedda)も一般の肉菓果の外、「コーモリ」「ネズミ」「ウミヘビ」昆蟲類の幼蟲等を食し、野蜂の蜜は最も好む所である[16]。更に他の諸民族に就て、こうした特異なものを捜出したら随分多くもならうと思はれるが[17]、兎に角、人類食料として、こんなものまで食料に供せらるゝものであるとの一例證とするに止まらず、又前述した猿類の食料と比較して見ても、見方によれば大差ないとも申される。それ故天然人の食料中にも随分多くのこうした食料も含まれ得可き點は、豫め考慮せねばならぬと同時に、今日に遺存する史前人の食料研究に當つても、其當時の食料範圍が決して、遺存範圍と一致するものでない。否寧ろ甚だ廣かつたであろうと思はるゝ點は、常に辨へべきことゝ考へる。

(5) 洪積終末に於て絶滅したマンモス(*Elephas Primigenius*)の如きは、洪積氷河環境に於て寒的蘚苔類を主として食したものが、氷河去り氣候温向の結果、彼れ等の嗜好植物の北移に從うてシベリア等寒的地方に移つたものゝ、氣候の暖向はこれ等植物の不足となり、食料不足も絶滅の一大原因と考へられ、又大形に過ぎた點も、不足を生ずる。同樣にマンモスに比すれば大きくはないが、これと食物を同うする厚毛犀(*Rhinoceros tichorhinus*)も亦、前者と運命を共にして居る。而して兩者の近縁者は夫々、南暖地方に於ては、今日尚其種を保つて居る。

(6) 史前人類の保安に就ても、一通り研究すべき内容を藏し、屢々其必要を提唱するのであるが、一向研究者を見出さないのを遺憾とする。この保安の一部に就ては、拙稿、「原始人の鬪爭」科學畫報、第八の六號(昭和二年)に又保安と生業に就ては、本誌本年二號拙稿中に述べて居る。

(7) 猿と人類との比較解剖學上の研究も、相應に進展して居る樣である。手近にある前掲 **J. Ranke**; Bd. I. S. 314-,, Vergleichende anatomische Betrachtung" を見ると、舌、胃、腸等に就て、夫々簡單に比較せられて居る。又齒の一般比較は、**F. Birkner**; Die Rassen und Völker der Menschheit. S. 255- ,,Der Schädel von Mensch und Affe." **E. Haeckel**; Anthropogenie. 1910 Bd. II. S.

668- 等に述べられて居る。更に歯に就ては、獨り食料採取の機關たるのみならず、保安上から攻防の重大任務もあるし、器具等の作出に際し色々利用もせらるゝ。これ等の詳細に就ては、何れ後日、更に人と猿との關係を研究したいと考へて居るから、總てを其際に讓ることゝする。

（8） 人類に於ける足の發育なることは、獨り自然人類學的見地に止まらず、文化研究に及ぼす所も深いが、こゝで研究すべきものとも思はれないから、後日に讓る。これ等は申すまでもなく、既に古くより諸學によつて研究せられて居る。一例を擧ぐれば、**Th. H. Huxley**; Mans Place in Nature. 1863.（(邦譯)「自然界に於ける人間の位置」）「**ダーウヰン** (1874)（邦譯）「人類の由來」前掲、**E. Haeckel**; 4. Al. 1910. 等多くがある。

（9） 猿類中、イヌガシラのヒヽの一類（*Cynocephalus od. Papio*）は樹上に生活せず群棲するものがある。これ等は多くが性凶猛であり、歩行は四足(手)で行ふが、手を以て石を起して下敷の昆蟲などを捕へたり、又樹に登ることも忘れては居らない。たゞこうした種類の存在は(8)に述べた人類歩行始原研究には、面白き對照である。**憲利憲氏**「動物學精義」下巻、S. 542-548. **A. Brehm**; Brehms Tierleben. Bd. 13. 554- 等參照。

（10） 日本猿の北限産に關しては、日本動物圖鑑、S. 3. による。尚、**宮島幹之助博士**、「動物と人生」(大正十年)「猿の巻」S. 8. によれば支那猿(*Makakus tcheliensis*)は、高山に棲み、印度のリーサスザル(*M. rhesus*)も北はヒマラヤに分布する由であるから、これ等が我日本猿と共に、北限的の樣に思はれるが、これ亦詳細には研究して居らない。

（11） 掲出した猿の動物性食料に就ては、前掲、**M. Hoernes**; Bd. I. S. 485. 前掲、**J. Ranke**; Bd. I. S. 356-357. „Die Nahrung der menschenähnlichen Affen. 前掲、**憲利憲氏**等による。

（12） 前掲、**憲利憲氏**、S. 550. による。但し一部の猿類が游泳、潜水の習性を有する點は、人類の有せざると對比して面白いことである。これに就ては史前漁撈を研究する時、改めて愚見を開陳する。

（13） 前掲、**J. Ranke**; Bd. I. S. 365. による。

（14） 今日までに於ける、最も古き確實な火利用跡に就ては、拙著、歐洲舊石器時代、(考古學講座)前編、S. 203, 211-212. 參照。以下單に「歐舊」と略稱。

（15） ブッシュマンの食料に就ては、**K. Weule**; Leitfaden der Völkerkunde. 1912. S. 78-79. **W. Schmidt** u. **W. Koppers**; Völker

und Kulturen. S. 417. ミュラーリヤ原著、文化の諸相、S. 63. 等にある。特に「ツシガヘル」を嗜食することは、K. Weule による。

(16) 前掲、W. Schmidt u. W. Koppers; S. 417. 同上、ミュラーリヤ、S. 62-63. 等による。

(17) 未開人の食料範圍に就ても、研究して貰くことが史前人食料範圍に對する一研究資料ともなるとは考へるが、こゝでは單なる一例として例出したに過ぎない。將來漸次類加してみたいとは考へて居る。

第三節　食料の化學的性質概見

一、一般

史前食料を研究するに當り、食料其ものを直接對象とする以上、人體に於ける食料攝取の機關と相待つて、食料其もの丶有する榮養價値に就ても、一通り概念を得て置くことが必要と考へる。勿論これが詳細は、食物化學とし、又榮養論（Ernährungstheorie）として專門分野を有し、到底知悉し得ないが、これが概念的であつても、以下述ぶる如く史前食料に及ぼす所も尠なくない。[18] それ故こうした方面に對しては、著者自からも、甚だ淺學であるけれども、史前學方面よりの研究として、其一端を紹介し將來研究の端緒としたいと考へる。

この史前食料を榮養學的見地より眺むれば、其動、植、無生物質の如何に拘はらず、其大本は水分、有機分、無機分である。而して有機分は更に大別して、蛋白質、脂肪、含水炭素及びビタミン等の所謂四大榮養素とすることが出來る。[19] これ等が食料中に夫々含有せられ、又其配合をも見て各種食料の榮養價値となるのであつて、食料中に如何樣に榮養素の存在するかは、一面に於て人類食料として生命保持增進に各種の影響を與へ、其良好なる攝取は人類發展の一資源となると共に、不良なる榮養攝取は、場合によつては民族衰退の一因ともなり、又各種疾病をも生ずる。[20] 特に毒物攝取の如きは當然死を以て報いらる丶。然しながら、史前食料なるものが、

今日に比すれば甚だ單純であつて、未だ充分の加工も種類も多く無い以上、多くの場合官能的要求は又嗜好と相一致し易いから、一面には天然の諸動物と同樣、乃至はこれに近く、官能指導の大きなことも、併せ考へられ、榮養問題としても或る單純さを想起せしむるが、兎に角上述した四要素に就て、夫々個々に見てゆく。

二、蛋　白　質（Proteins＝Eiweis）

蛋白質は體内諸機關、組織及び體力等の保持增進に必要なる榮養要素であり、其攝取が必然的に要求せらるる。それ故蛋白質に對する理解の有無に拘はらず、天然衛生上[21]、人類として攝取するものであり、其充否、適不適は保健に大きな結果を齎す。而して蛋白質と概論せらるゝ中に、數種の元素的成分を有し、其組成によつてなるものであるから、組成の如何により夫々性質も異つてくる。然しながら蛋白質の分布は比較的廣く動植物兩方面に亙るから攝取は困難でない。動物質として比較的多量に含有するは、肉、卵、乳等であるが、史前食料としては肉類に求む可く、後二者は未だ普遍して居らないと考へる[22]。植物質にあつては、其含有量に大きな開きがあつて、一定し得ない。穀類は多い方でなく、荳類に多く、球根、葉莖、果實類は概して多くない方であるが、勿論個々の植物によつても開きがある。それ故、蛋白質を攝取するには、史前人としては、多くの場合動物質の方から攝取した方が樂であつたと考へらるゝ。

三、脂　　肪（Fett）

脂肪は主として身體にエネルギーを供給し、又其燃燒により熱量を高昇せしめ、且つ熱の傳導性が弱いから、體溫保持の作用をなすものである。從つて寒地は勿論、溫帶地方の冬期の如きには、體溫保持上必需の榮養素である。これが含有分布も廣く動植物兩方面に亙るから、比較的容易に攝取し得る。動物に在つては、獸鳥に多

く、魚貝には比較的少ない。而して一般的に寒棲動物は脂肪に富むものが多い。例へば、鯨の如きは最とすべきであるが、熊にも「マス」「ニシン」等にも夫々多くがある。[23] 植物質にあつては、一般に穀類に少なく、荳類により多く、球根、葉莖、果實等は概して含有少ない。但し植物中よりも、若干の文化工作を行へば、各種の油は採集し得るけれども、[24] 天然の姿其まゝ、乃至は殆んどこれと大差なき狀態にあつては、攝取は動物質のやうに容易ではない。執るにしても多量を要する。又脂肪を要求するの寒地、季節には、概ねこれ等植物はないから自然動物質から攝取せらるゝことになる。これから見ると寒地農耕か或は牧畜の或る充實を見る以前にあつては、單なる脂肪質要求の上からも、こうした地方乃至季節には、陸産と水産とを問はず動物質の採集が必要となる。これは史前文化、特に北的文化研究に考慮せらる可き一つと考へる。又現實にエスキモーの如き極地人の生活を見ると、鯨の脂肉(Speck)を最も嗜好する所も、[25] 一面に官能の然らしむる所で、[26] 前述した官能と嗜好との一致の一例證であると共に、直に以て想到するものは、酷寒の氷河環境に生活した、舊石人の食料である。これに就ては尙後述する所もあるが、脂肪質の要求が特に多かつた點は、容易に肯定し得る。

更に見る可きは脂肪の攝取量であつて、其過少は發育不全等を招致すると共に、其過多も亦障碍を惹起する。卽ち適量攝取にあり、未開土俗から見れば、こうした官能的調節が史前人に於ても出來たやうに考へらるゝ。[27]

四、含水炭素 (Carbohydrates)

含水炭素(炭水化物)はエネルギー給源の一要素であり、葡萄糖、果糖、澱粉、グリコーゲンの如きを包括し又その變化により、脂肪、ビタミン等との相關々係を齎す。含水炭素は主として植物中に廣く分布し、比較的容易に攝取せられ得る。然しながら史前食料として、如何なる種類が多獲せられたか、特に野生植物として如

何様に糖分乃至は澱粉の如きを採集したか、著者には充分解つて居らない。[27] 將來更に研究したいと考へる。

五、ビタミン (Vitamin)

1, 一般

ビタミンは最近檢索せられた一種の有機化合物のやうであり、人類榮養上の一重要々素である由である。今日これに就ては未だ研究の日淺く、不充實の點も多いとのことであるが、今日に於てはビタミンと概言せらる中に夫々性質を異にしたものが少なくともＡ—Ｅの五類は或る點まで闡明せられて居る。これ等の中には史前食料研究にも見逃し難い諸問題をも包含して居るから、一通り夫々個々に就て概觸して行く。

2. ビタミンＡ

ビタミンＡは榮養上の一要素であり、其不足は發育不良に基く疾患を生じ、其過多も亦病源を生む由であるから、其攝取量は整調せらる可きであり、恐らく史前時代には嗜好と相俟つて天然調節が行はれたものと考へるが、何物の現證すべき根柢はない。其分布界は比較的廣く動植物に互り、動物に於ては肉類に少なく臓物に多い。史前食料中、「ウナギ」「ニシン」「カキ」等には多量含有せらる〻。[28] 植物にあつては、胚子、蔬菜の綠葉或は一部果實中には多量に包含するものがあるから、これからも攝取は出來る。

3. ビタミンＢ

ビタミンＢの中には數種の性質を含み、その內容には尙議論もある由であるが、抗脚氣 (Beriberi) 性、抗ペラグラ (Pellagra)[29] 性及び發育捉進性等の性質がある。史前文化に於ける米食の如きは、空間的に南、東洋の範圍を主とし、時間的には石器時代終末以降に多いのであるから、其登場場面には限度がある。[30] 然しながら日本

史前學としては、勿論一顧すべきではあるが、米食が悉く脚氣になるとは限らないし、[31]よし、脚氣に罹つて殪れても、今日に其痕跡も遺るまいと考へるから、史前文化研究としては觸面大とも考へられない。寧ろ發育促進性の方が、史前食料として考慮することが大きい様に思はれるが、未だ適確な因縁は考出して居らない。この分布は動物質に於て、蛋脂中になく、肉中に少ないが、臟器には中量を含み、貝類中「カキ」「シジミ」に多く、「ハマグリ」「オオノガイ」には殆んど含有しない。[32]植物質にあつては、穀物、荳類、野菜類中には多量に含有するものがあるが、其量は夫々一定して居らない。果實には比較的少ないが、「クルミ」「クリ」等には相應量がある。兎に角、分布は廣い。只含有量が動植夫々個性的に差があるから、採集上にも及ぼしてもくるとは思はれるが、果してどれだけ史前食料關係が生れ出づるかは、只今全く其研究に着手して居らない。

4. ビタミンC

ビタミンCは血液の精純を保持するに必要であり、一度これが缺亡は、忽ち壞血病(Skorbut)に陷る。[33]其分布は動物質にあつては、肝臟、血液等に多く肉には少ない。植物質では葉莖、果實等に相當量を含有するから、天然と人工とを問はず、新鮮な植物質食料が充實して居れば、缺亡は防げる。此點から見れば、南暖地方では植物豐富であるから、恵まれもする。これ亦問題の多くは北的生活にある。又ビタミンCは加熱によつて著しく破壞せらるゝから、攝取量を增大にするには、生食するのも一方法である。特に北的生活環境の如き植物質豐富ならざる場合、これを動物質に求めざるを得ない如き、少量のみしか含有しない肉類にあつては、多食するか、[34]或は生食するかにある。さなくんば肝臟、血液等[35]含有多きものより求めねばならない。卽ちビタミンCに對しては、人類としては、最も多く、且つ容易に得らる可き、植物質の絕やさざる充實慾となり、[36]又生食と

火食との關係が生れ、史前食料問題としては、共に一研究綱目をなし、後者に就ては第六節に述ぶる所があるが、氷河環境に生活した歐洲舊石人の如きは、如何にして食料攝取を行ふたかは、自づと考察の端緒が得らる る。更に有史以降の長途航海に於て、幾多の慘例を見るに於ては、[37] 史前長途航海がよし船舶に於て可能の域に達しても、食料に於て相應の困難の存す可き點も併せ考へらるゝ。

5. ビ タ ミ ン D

ビタミンDは主として骨質榮養に關係ありとせられ、且つ紫外線に因果關係があり、兩者の綜合作用により、正常に榮養が營まれ得るものらしい。其缺亡は佝僂病(Ricket)の原因となる由である。これ等は「イワシ」「ニシン」「サケ」「イルカ」「クジラ」等の水棲動物肉及び植物質では史前食料に關係なさそうな干製「シイタケ」に存する外、尚多くが檢出せられてない樣である。もし佝僂病の如き骨質變化があつたなら、史前人骨にも遺存し得る所と考へるが、これに就ては未だ研究して居らない。又齒牙にも影響する所も大きい由であるから、或は我國石器時代民の齲齒比較的多いと云ふ樣な事實と、そこに何等かの因果關係が見出されないとも限らない。[38]

6. ビ タ ミ ン E

ビタミンEは主として生殖作用に重要でありとせらるゝ。これを缺くに於て、繁殖率を減じ或は喪失もする。從つて民族の繁榮、衰退、乃至は絕滅の各場面をも演ず可き素質が存するらしい。其分布は動物質に在つては、獸類の筋肉中に比較的多く含まれ、腦、腎臟、生殖器中には相當量がある。植物質にあつては、種子の胚子、野菜の綠葉中にも含有せらるゝから、史前民としても、通常の場合は、缺亡を生ずることもない。只人類に於ては、他哺乳類と異り、交尾期の喪失？　の問題がある。もし萬一これが既に史前時代に生じたのであるなれ

ば、史前人としては、他動物と異り、年中ビタミンEの或る量を必要とすることになり、これが充實要求も高くなる。これが根本に於て、何時今日の如き狀態になつたのか、又かく喪失した所以は單なる天然作用の結果なのか、或は文化上の一工作として行はれたのか、今日、著者には皆目解つて居らないし、又研究もしてない。然しながらビタミンEが、生殖に關係深きだけ、如上の問題に對し、どれだけの役割を演ずるかは、將來の研究にまたねばならない。

六、榮養關係小括

以上甚だ概雜ではあるが、主要榮養素個々に就て、史前食料との關係の有無深淺を見たことにして、綜括して見る。只今こそ研究不實の故か、緣遠くも見られもするが、既に或るものに就ては、端緒も得ても居る。それ故こうした方面に對する研究も、將來尙進む可き分野は廣い故、史前學上の收穫に就ても相應な期待も持ち得る樣に考へる。特にビタミンの如き、今後榮養學的に尙多く進展もするであらうから、引いて史前食料に及ぼす所も、決して少なくないと想像する。後述して居る如く、貝類中の「カキ」の如きは、ビタミンのA—E悉くを含有する上、グリコーゲンも豐富であるから、榮養上重要視し得るものであり、某種貝塚に多い點も、一面からは頷き得る所と考へる。此の如き顯著な例は別としても、史前遺存食料に對し、こうした目で見る時は、更に變つた一方面觀察も行ひ得ると信じ、かく述べ來つたのである。只上述した如く、今回の研究の如き、唯それが端緒をなすに過ぎないから、これを根柢として更にこうした方面への研究にも進みたいと考へる。

（18）史前學上から榮養學的內容に向つて研究せられた文獻は、未だ見出してない。間接に多くのヒントは得らるゝものは多く見られ、又一部に觸れたものは相應に存する。例へば A. Maurizio: Die Geschichte unserer Pflanzennahrung. 1927. 中にも言及はした所があ

るも、其だ僅少である。恐らく榮養學的乃至はより廣く醫學的方面から研究もせられて居るとも考へるが、未だこうした方面にまで手を伸す餘裕を持て居らない。同樣に未開土族に於ける同樣研究に對する參考書も未だ發見しない。これ等は讀者に敎示を願ふ所、切なるものがある。

(19) これ等は左記の參考諸書による。以下各榮養素個々に就ての化學的性質はこれ等の參考書によつて居る。

1. 澤村　眞博士、食物化學。大正七年(第三版)
2. 同　　氏、食物化學講話第一卷、大正十五年
3. 藤卷良知 有本邦太郎氏、榮養と食品の化學、昭和六年
4. 藤卷良知博士、ビタミン　昭和八年(第二版)

(20) 史前人の疾病及びこれに對する治療に就ても研究を行ひ得る廣き分野あるを認める。こゝでは史前食料を對象として居るから、多くに觸れない。又現實にこうした方面まで研究しても居らない。

(21) 天然衞生と稱するは、衞生の理解がなくとも官能的に保衞行爲を營むものを指し、獨り食料に對してのみでなく、又人類のみでない。例へば雀が砂浴を行ふが如き、犬猪猿等の身體清拭を行ふが如きである。これ等に就ては將來史前保安を研究する際、改めて愚見を開陳する。

(22) 史前文化に於て、鳥の飼育は今日未だ明に認められない。卵をとるなれば野生であるから、大きな期待は出來ない。勿論後述して居る如く、駝鳥の卵でもあつたら大きいから、充分に蛋白質は求められやうが、地方的に限られた特異例とすべきと考へる。
又獸乳攝取に就ては、全く不明である。只家畜の獸乳なら、主として新石文化以降に於て、其可能性は認めらるゝも、未だ普遍性は肯定し得ない。

(23) 鯨其他例出した脂肪は、(19)の參考書3の卷尾、食品分析表による。同表によれば、鯨、七五・二五。「マス」一三・六一「ニシン」八・四七「クマ」肉(鑵詰)二六・七九のパーセントがある。

(24) (23)に揭げた分析表により、植物質脂肪を見ると、禾穀類中多くが三・〇〇以下であり、蕎麥、粟の五・强、玉蜀黍の七・七七を最とする。但し玉蜀黍は横山又次郎博士、生物地學講話(大正十四年)S. 125. によれば、アメリカの原産とせらるゝから、舊世界の史前

文化には關係がない。荳類は「フジマメ」の二〇・二三を最とし大豆は一三・一一八・の間にあるが、僅少なものもある。蔬菜類には一・〇〇を越ゆるものがなく、果實中には落花生三九・一〇ゴマ四四・一五一・の脂量大なるものがあるけれども落花生はブラジル、ゴマは印度であるから、普遍化はしてない。尙これ等油脂植物に就ては、前揭、横山又次郎博士、S. 155–158.「油脂植物」參照。又これに就ては前揭、A. Maurizio; S. 59– に觸れては居るが、多く南洋方面の民族例である。

(25) エスキモーの脂肉好食に關しては、前揭、A. Maurizio; S. 19. 及び阿部徹介氏、「北氷洋洲及アラスカ沿海見聞錄」、明治廿八年 S. 102. に於て、エスキモーの食料中『鯨族ノ如キニ至テハ其捕獲切入リノ際流出スル多少ノ血液ノ外寸毫モ失フ所ナク其外部ノ黑皮ノ如キハ土人無上ノ珍味ニシテ恰モ吾人ノ鯛ノ刺身鯉ノ膾ニ於ケルニ異ラズ』とある。但し同氏は其次に土人の大量の脂肪を食し油を飮むとの記事は虛談と否定せられて居る。これから見ると、攝取量の甚だ極端でないと云ふことが考へられ、上述して居る脂肪過多に對する或る天然調節も想起せしむる。

(26) (25)阿部氏の記事參照。

(27) 史前食料としての糖分は、野生植物であつても、果實等に含まるゝものが多い。而して「イチゴ」の如きは寒地にも生育するから、季節に支配はせらるゝもの〻温、寒地でも攝取は出來る。又天然にあつては蜂蜜もある。但し蜂蜜が史前人に採集せられたか否かに就ては、何等の現實がない。只甚だ不確實ではあるが、スペイン地方の一舊石文化に屬するカプシアン繪畫中、所謂「木登りする人」(同書は前揭拙著「歐舊」。後編。S. 129. Fig. 141. に揭出) の畫面が或は蜂蜜を取るのか、又は鳥の卵を取るのではあるまいか、と云はれる程度の根據薄弱なものがあるに過ぎない。尙蜂蜜に就ても硏究を要すべきものがあるが、未だ着手しては居らない。V. Hehn; Kuturpflanzen und Haustiere. 1911. には有史以降しかない。

同様に澱粉を含有する球根類、例へば「ジヤガイモ」「マニヲーク」「サツマイモ」「サトイモ」「ジネンジヨウ」の類は前揭、横山博士、S. 133–136.『根果』によれば、前二者は南アメリカ原産、後三者は南疑產であるから、史前文化に存するも、後三者が地方的に出會し得る公算を有するに過ぎない。又澱粉性果實に「パンの樹」「バナヽ」「ヤシ」其他があるが、(同博士、S. 138–140.『澱粉性の果實と木髓』參照) これ亦其多くが暖產である。只次節に後述して居るが如く、「クルミ」其他は、我國にも出土は見て居る。

(28) 「ウナギ」「ニシン」「カキ」等が悉く水產である所は、例出したもの〻偏りがあるが、これ等は(19)の參考書、3より摘出したに過ぎない。而して以上はデンマークの貝塚よりも、(拙稿、デンマークに於ける貝塚構成時代。(史學、七の二、昭和三年) S. 30–31. 參照)

（以下「デンマーク貝塚」と略稱）我國のそれよりも（**K. Kishinoue**; Prehistoric Fishing in Japan. 1911. S. 375. 參照）出土して居る。

（29）ペラグラに相關することは、前揭、（19）の諸書によるも、文化研究方面よりも氣付かれて居る。例へば **Ed. Hahn**; Das Alter der wirtschaftlichen Kultur der Menschheit. 1905. S. 21. 前揭、**A. Maurizio**; S. 13. u. 249. 及び **L. Reinhardt**; Kulturgeschichte der Nutzpflanzen. Bd. I 1911. S. 65. 等に見られる。それ故、史前食料との因緣に就ては、更に研究する。

（30）稻に就ては研究を要すべきものがあるが、將來史前農耕を研究する際に讓る。只稻は南亞系の植物であり、南アジア方面に野生を見る外、アフリカ、スーダン地方にも見る由である。（前揭、**横山博士**、S. 123–125.）又脚氣は歐洲に少ない故か、（29）例出の三書には書いてない樣である。

（31）日本史前文化に於ける稻に就ても將來に讓る。又米があるにしても史前當時に於ては、玄米の範圍を出でまいから、脚氣をより起さなかつたと考へる。脚氣の多くなつた歷史に就ては、（19）の3. S. 104–105. 參照。

（32）貝類中にB類の分布が、大きな開きのある所は、貝類食料として、研究に價するものとは考へるが、尙研究を要する點もあるから、これも只今保留せざるを得ない。

（33）壞血病に關しても、文化方面よりの研究は、次の一例を見て居り、更に搜索もする。**Ernst Wahle**; Wirtschaft. (Reallexikon der Vorgeschichte. 1928. XIV. Bd. S. 323.) 但し前揭、**Maurizio**; **Ed. Hahn** 等には未だ見出して居らない。

（34）肉類多食によつて、壞血病を免れた現在例は、（19）の4. S. 217. に一例揭出せられて居る。

（35）血液を吸飲する例に就ては、未だ見出して居らないが、恐らく未開土俗にはあると考へる。僅にエスキモーが乾燥せる血を最も好むことを、**F. Ratzel**; Völkerkunde. 1895. Bd. I. S. 548. で見たに過ぎない。前揭、**Ed. Hahn**; S. 22. にはアフリカ、マサイ族（Masai）の若者が飲むことがあり、又血盟に就て血飲の多くの例は、**Thurnward**; Brüderschaft, Künstliche. (Reallexikon.. Bd. II. S. 190) にあり、前揭、**M. Hornes**; I. S. 11–12. にもあるけれども、直接食料としての問題に遠い。

（36）この問題は、農耕始原に關係する所が深いから、將來その研究に際し、更に私見も開陳したい。

（37）（19）の3. S. 109.–111. 同4の S. 175–180. 189. 等に諸例がある。

（38）ビタミンDと齒の關係に就ては、（19）の4. S. 454–458. 參照。又我石器時代人に齲齒多きことに就ては、**小金井良精博士**、**齲齒**の統計に就て、人類學雜誌、第四九の九、（昭和九年）參照。

（未完）

浮線紋壓着考

土岐仲雄

關東縄紋土器中、諸磯式土器と稱せられる一群の存する事實は、神奈川縣三浦半島油壺附近の、諸磯貝塚發掘以來、夙に主張せられ、土器の科學的、編年的研究の進捗するにつれて、今や漸く確認される所まで來てゐるが、此の式のものに特有な一種の土器には、第一圖、第二圖に示めす樣な、浮線紋がついて居る。勿論、この紋樣は、縄紋、沈線紋等と併用されて居り、此の種の線紋に代表的なものをとつて、浮縄目紋、浮縄狀紋等とも云はれてゐるが、必ずしも縄狀に見えない、浮線紋全部の壓着法を考察するのが、この小論の目的であるから、本論に於ては、特に浮線紋と云ふ名稱を撰んだ。

壓着論に入るに先立つて、ひと言、浮線紋の起源について愚考を述べる事にする。現在のところ、浮線紋は、單なる一種の裝飾としか考へられて居ない樣であるが、その起源に就いて一考して見ると、先づ頭にひらめくのは、例の輪積とか、捲き上げとか云ふ、土器全體の製成法と、何等か必然的な關係が、ありはしないかと云ふ事である。粘土が充分軟らかい時には、二つの繼ぎ目を、兩方から引きのばして、うまくこすつておけば一應はくつつくが、粘土が渇き過ぎてゐたり、又それでなくても器形の如何によつては、土壓で、つぎ目から割れ目が生じ樣とする。濡れたきれ等でしばつて、こうした失敗を防ぐ前に、つぎ目の內面、又は外面から、粘

土の塊を附着し、なほ一歩進んでは、そのつぎ目に沿ふた部分に丈、ほそい粘土の線を附着し、それによつて兩邊の膠着の强化を計る事も、必要に應じて工夫されはしなかつたであろうか。こうした必要は、底邊より、胴部以上、口邊に於て、より屢々生じたであらうが、此の浮線紋も、主として胴部以上に施こされる約束がある樣に考へられる。それにしても、口唇に垂直なる浮線紋（第一圖１２）、浮線紋と浮線紋を略々垂直につなぐ浮線紋（３）の解釋はどうなるか。これの方は、成程、餘程裝飾的要素が强い樣に思はれ、人によつては、竹籠細工等のあるものを模したのであらうと云ふかも知れないが、これも發生論的に考へれば、やはり粘土のベルトの折を生じた場合、又は折を豫防する爲に用ひたとすれば何でもない。殊に口唇部にこの縱浮線紋があると云ふ事は、内曲又は内折した口唇を、胴部にあとからつなぐ場合に、粘土片をはりつけて、内外から之を强化する事は、この部分の重量を特別に重くして、土器全部の安定を缺く樣な疑問が生じて來る樣な場合もあらうし、旁々、粘土の細い線をはりつけて、之によつて補强をする等と云ふ事は、工夫された、仲々頭のいいやり方であつたかも知れない。唯同第一圖４に見る如き曲線に至つては、これもやはり諸磯式に屢々見られる渦狀紋、流水紋等を、この浮線紋で表現せんとしたかと思はれるもので、全く裝飾的意義をしか含くまぬものの樣に考へられる。

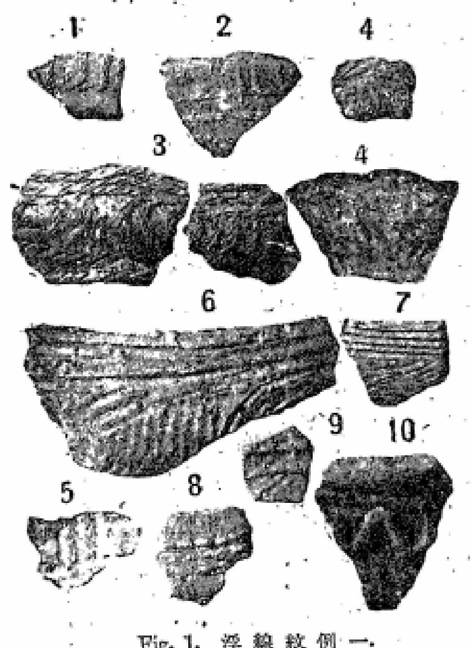


Fig. 1. 浮線紋例一.

以上浮線紋の起源に關する愚說は、ほんの思ひつきで、强く主張する譯ではない。唯、どんな裝飾らしく思はれるものも、殊に原始藝術に於ては、必要と强く結合してゐるものであるから、それで見當をつけて見たものだが、以下、こんな道草はやめて、浮線紋壓着の諸手法について、その實例丈を考察して見ることにする。

第一圖5は、私が發掘した東京市道灌山石器時代遺物包含地から發見した一種の土器の口邊で、全體の色は赤褐色、處々に黑斑がある。これに圖の如き粘土の線をはりつけて、指か何かで、ゆつくり壓へて、それを器面に壓着した浮線紋がついてゐる。完全に引きのばせば、跡形もなくなつてしまふが、或程度で止めると、こうした浮線紋になる。この場合、線は全體ひらべつたく、薄くのび、且つその線の緣邊が、加へる力の强弱により、場所によつて、出たり入つたりしてゐるのが、詳細に御覽になれば、よくお解りになる事と思ふ。委しく觀察して見たが、指紋等のあとを認める事は出來ない。かと云つて、道具を用ひたらしい痕跡もない。

一體粘土をはりつけて、內曲又は內折した口唇を胴部にとりつけたり、把手をつけたり、底をはめ込んだりする事は、浮線紋で補强するより原始的な手法であつたらうと云ふ事は、前に述べた通りであるが、此處にこの兩手法を併用してゐる一つの例がある。第一圖の(6)がそれである。これも道灌山包含層で、私が採集したもので、この土器片の部位は、前者と同じく口邊部、內曲した口唇がついてゐて、色は黃みを帶びた褐色、繩紋も一部に見られ、非常に大きな土器らしく、一見厚手の如くで、その厚さ一・二糎に達してゐるが、これはやはり諸磯式の一種である。口邊部の浮線は、(5)と同じ浮線紋に見えるが、これは恐らくはりつけ粘土に、沈線を施こしたものだ。それは浮線らしく見える線が、上から壓しつぶされた痕跡更になく、線は丸々とふくよかである。線の並び方も、浮線紋ではこれ程よく揃つて平行させられない。唯、口唇部に丈、(5)と同樣の手法によ

る、おしつぶされた浮線紋があるのであるが、一部は陰になつて見えないかも知れぬ。(7)の方は、沈線紋のみを、同樣の手法によつて施したもので、この資料は史前學會が谷戸貝塚で發掘されたものを拜借した。之と殆んど同一のものが、やはり道灌山包含地からも出てゐる。これ等も、浮線紋ではなく、線は丸々してゐて、餘程、粘土の軟らかい時に施紋した事が想像出來る。

第一圖(8)は、採集地は同じく道灌山包含地、赤褐色、部位不明の小土器片であるが、これにも亦、一種特別の浮線紋がついてゐる。これは、約〇・一五糎の間隔を置いて、所々で浮線紋を壓着してゐるのである。これだと繩狀と云ふ感じが餘程强くなり、裝飾的になつて來て居る樣に思はれる。上から押しつければ、その部分丈浮線が、太くひらたくなるのであるが、これは何か相當先の細いものをもつて、線の上方から、一度に土を壓しとつてゐる。この爲に、壓着された浮線紋と、脹くらんだ部分と線の太さが少しも變つてゐない。

第一圖(9)は、これと殆んど全く同一手法による壓着のし方であるが、唯、道具らしいものを明に用ひてゐる點に、非常な進歩が見られ、その道具の用ひ方も鮮かである。壓紋から考察すると、その先の幅〇・一糎程の、相當に薄い、竹箆樣の道具であるらしい事は、その纖維紋が、縱にはつきりついて居るのでも確證する事が出來る。これは第一圖(8)のものより、繩狀は呈しないが、線の眞ん中をではなく、線の一方の邊緣丈を壓着したところに、やはりこの土器の製成者の、裝飾的意圖を察すべきなのであらう。緣邊の他の側は、この爲に却つて丸々と持ち上がつて、例の補强的意圖から云へば、全然意味を爲さぬ事になつてゐる。これも、赤褐色の比較的うすい、部位不明の小土器片で、採集地は道灌山包含地である。

第一圖(10)は、史前學會が、下菅田貝塚で發掘された土器片である。まるで線は丸々してゐて、之丈のものを

土器面につけたと云ふにすぎない。このまゝ燒く氣になつたところに、土器製作者の技術的自信を感じ得る。全く裝飾的意圖のものであらう。

その道具が果して竹篦であつたかどうかは、別に熟考を要する事實であるが、竹と云ふ字が、いやでも思ひ出させるのは、恐らく、その名自身の示す如き、材料の道具を用ひて附せられてあらう、例の竹管紋及爪形紋、（或は人によつては半切竹管紋）と呼んでゐる一類の紋樣の事である。これも諸磯式獨特の模樣の一種であるが、浮線紋ではない。此の圖（第二圖１２３）に示めしたのは竹管紋ではなく、全部爪形紋で、道灌山包含地のものと、下沓田貝塚のものとが混合してゐる。唯、此處に引き合ひに出したのは、道具の材料が第一圖(9)のものと同一物でなかつたかと云ふ疑ひ以外、此の爪形紋が、やはり浮線紋を壓着するのに充分役立ち、(3)の如く平行線の間に付した爪形紋が、如何にも浮線紋と關係あるらしく思はれたからである。然し、史前學研究所で、その材料をさがしてゐるうちに發見したのは、第二圖(4)（此の圖は誤つて脫落したが、細く順々に扇形に粘土を重ねたものである）に示めすものである。これは千葉縣野田町清水貝塚發掘のもので、諸磯式ではなく、

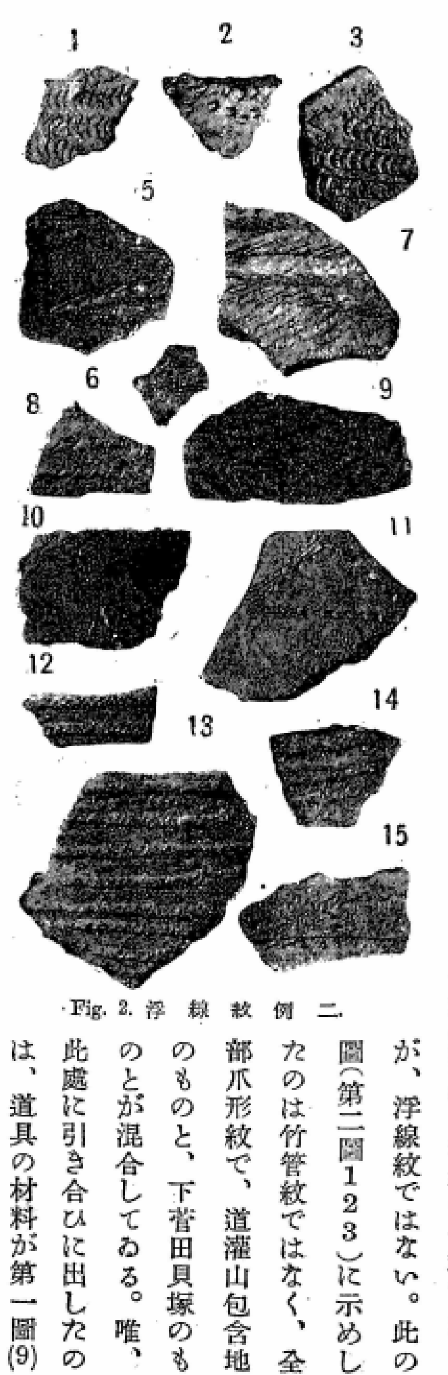


Fig. 2. 浮線紋例二.

大森式にごくありふれた浮線紋であるが、これが爪形紋を想起せしめる事は奇妙である。本論と別に關係はないが、參考の爲に擧げて置こう。竹管紋も、或意味では壓着的效果を持ち得る樣であるが、これは實例について見るに、線紋とは殆んど無關係らしくあるから、今のところ、爪形紋と共に、浮線紋の壓着とは、別個に考へるより仕方がない。

第二圖(5)—(9)及第一圖(1)—(4)の如きは、浮線紋の最もありふれた壓着法で、主として、之をめざして、此の裝飾紋全體が浮繩目紋、又は浮繩狀紋等と稱せられるのである。卽ち、これは、或一定の間隔を置いて、斜に刻みを入れることによつて、浮線を器面に壓着してゐるのである。刻みを入れる道具は、これも亦うすい竹篦樣のものであつたと思はれるが、粘土の切れ口から觀て、貝殼を用ひたのではないかと、疑はれない事もない樣なものもある。(然しこれ丈でなく、貝殼と浮線紋とどれだけの關係があるかと云ふ問題は、今暫らく預りにして置く方が無事であらう）唯、何故に斜に刻みを入れたかと云へば、線を直角に切れば、刻みと刻みの間が餘り短かくなつて、壓着的效果がうすくなる。斜にするか、弧狀卽ち爪形にするかして、壓線の全長を長くしなければならないわけである。この場合、裝飾的意義と云ふよりも、實用的意義の方が强く働いてゐる。一方、考へて見れば、この壓着法は、前述の何れよりも簡單である。この方法が盛行したのも、さこそと思はれるのである。この種の浮線紋=浮繩目紋は、勿論一本でも、繩目の感じは充分出るが、同第二圖(5)(7)の如く、相接した二つの繩紋が、互に反對の方向をもつた刻み目をもつてゐると、一層裝飾的意義が强くなつて來る。爪形紋には、一つ土器で、爪形が反對にむいた例は、殆んど絕對にないと云ふ事實と對比して、この事實は記憶して置かなければならない。(8)(9)の如く同方向のものもあるにはある）

第二圖(10)及び(11)は、この浮繩目紋を、沈線紋をもつて、土器面に、いはゞ寫生したものである。(10)はやはり道灌山包含層發見の胴部破片であるが、(11)は史前學會研究所が、谷戸貝塚に於て發掘されたものである。何れも淡赤褐色の、比較的薄い土器で、器形も餘り大きいものではなさそうである。これも、浮繩目紋ではないが、浮紋が、勝坂式の如き、强い形式のものに發展して行つたのではないかと云ふ疑の存する一方、此の如き退歩した形式の生じてゐることも、これ等の實例によつて記憶せねばならぬと思ふ。

最後に第二圖(12)—(15)は、浮線紋上に、明に繩紋が現はれてゐるものである。土器面に繩紋が附せられる理由としては、相當に幅のある織物をもつて、器形の歪みや、崩れを防ぐ爲鉢卷した時に、壓力の爲についたと云ふ第一説と、餘り長くない棒に繩をまきつけ、器面全體を押しかためた時についたと云ふ第二説と、袋をつくつて、その内部に粘土をはりつけ、全體の器形を作つた時に土壓でついたと云ふ第三説等ある樣であるが、第三説は、簡單な器形のものの場合には云へるとしても、浮線紋の高い、大きい場合等には、先づ無關係と斷ぜざるを得ない。浮線紋を付したまゝ袋に入れる事は先づ困難だからである。浮線紋に、繩紋がついて居るものを細かく點檢して見ると、浮線紋の上と、器面の上の繩紋とは、線の高低の脉が全く一致してゐて、(同圖(14)(15)參照)線上と器面上は別々にではなく、同時に押され、こうする事が、やはり浮線紋を器面に壓着するのに大いに役立つたと考へられる。この樣な模樣のつき方は、少なくとも第二説の方法を用ひた事が確實である樣に思はれる。何となれば、線上と、器面上とに於て、繩紋壓着力の相違は、毫も認められないのみならず、浮線に接した兩側面に於ても、繩紋は、浮線の緣邊を眞直ぐにする爲に、後から加へられた引つこすりによつて、摺れて薄くはなつてゐるが(13)の第一線と第二線の間右の上の方を見よ)實際は、しつかりした痕跡をとどめて

ゐる。若し布(きれ)を鉢巻さしたものとすれば、意識的に壓迫したしないに拘らず、繩紋は線上に於て強く、器面に於て弱くなり、すくなくとも、直接線紋に接した部分から、それに遠ざかるに從つて、次第に明瞭になると云ふ様なつき方である筈である。然し、此處に寫眞は掲げなかつたが、研究所が發掘した谷戸貝塚の土器の中には無紋の土器面の上に、相當幅のひろい浮線が附してあつて、それに實に美くしい繩紋の帶が出てゐる土器片がある。之等は、繩紋のすべりがない所を見ると、絶對にと云ふ譯ではないが、布(きれ)の鉢巻説がよい様である。(5)は、研究所が谷戸貝塚で發掘した、黝色をした、餘り厚くない諸磯式土器の胴部一片である。これ等は、何れの線も區別なく同じ力で、やたらに壓へて紋をつけ、且、それによつて浮線を、器面に壓着もしたらしくあるが、これは一點、蓮田式に於ける如く、貝殼を利用したのではないかと疑へば疑へぬ事もない。

扨、上述諸技法のうちで、どれが最も始源的で、どれが最も新らしいかを決定することは、興味のある、且重要な結論ではあるが、又最も困難な仕事でもある。解らないと云つてしまへばそれ迄だが、それも餘り殘念だから、敢て蛇足を付するならば、浮線紋としては、恐らく道具を用ひないで、第一圖(5)の如く、手づくねで壓着したものが、最も始原的な方法の遺映であるらしく、その次に第二圖(15)に於ける如く浮線紋と器面の區別なく、力一杯おさへて壓着したものも、或意味に於て古い形に屬するらしく考へられる。これ等の諸法と正反對に諸種の美事な技法を示めすものから、同じ單純な浮線紋でも、第一圖(10)の様な附着面の極端に少ないもの、換言すれば、裝飾的意義の大きくなつて、實用的意義が薄くなつてゐるもの等は、より進歩した、新らしい技法に屬するものであらう。第一圖(8)(9)等に示した壓着點をさへ裝飾化してゐる様なものは、谷戸下菅田等の諸磯式貝塚には餘りその實例が發見されないもので、寧ろ、道灌山包含地の如き、恐らく末期諸磯文化に屬す

る獨特のものかも知れない。唯、第一圖(5)—(9)第二圖(1)—(4)の如き所謂浮縄目紋＝浮縄狀紋と稱せられる一群の手法に至つては、最も簡單にして、しかも實用的意義と裝飾的意義とを、併はせ有するもので、浮線紋壓着法の、正に大道を行くものと斷ぜざるを得ない。それ丈に、これは又、相當熟練した頭腦の、一段の工夫を豫め規劃するもので、最も始源的な手法に屬したとは考へられない。然しひと度この方法が採用されるや、これは時間的にも、空間的にも、廣く遠く、重用されたと推察される。

浮線紋の起因については、既に、文頭に、一つの假説を提出して置いたが、その末路はどうなつたか。この事については、第二圖(10)(11)のところで、一言觸れて置いた樣に、衰退と發展の二方向があつた事が注意される。あの圖に示めしたものは、明に浮線紋の衰退を物語る資料である。が、大山公爵も、そうした資料の整備する日を、心密かに、期待してゐられる如く、この浮線紋が、勝坂式土器の、口唇部、口邊部に見る如き、例の隆起紋に發展して行つたらしい、今一つの發展の場合もありそうに思はれる。實際、史前學研究所の、下管田の土器を見ると、あの勝坂式土器の莊大なる把手の祖型が、確に諸磯式に含まれてゐると考へさせられるに充分なものがある。（一九三二・六・二）

附記——この小論の起草に當つては、大山公爵の有益なる暗示を受け、又史前學研究所で採集された多くの資料の自由調査を許るされた。圖版については、同研究所の竹下次作氏のお世話になつた。何れも感謝に堪へない。

貝塚なる名稱に就て

貝塚の學名は丁抹語 Kjökkenmödding である。獨逸語の Kitchen-midden Küchenabfallhaufen 佛語の Debris de cuisine に當る。平たく云へば食料殘滓の捨場、芥捨場で、貝の意味はない。然し同じ丁抹語の Affaldsdynger, skaldynger は、英語の Shell-mound 獨語の Muschelhaufen 佛語の Amas de coquilles に當り、日本の貝塚である。つまり貝塚には、これを芥捨場と見る名稱と、貝の集積と見る名稱と二系統ある譯である。ところで、日本語の方には、貝塚（介塚とも記す）、貝墟（介墟とも記す）或は稀に貝場等と云ふ位で、芥捨場の意味に相當する名稱が缺けてゐる。それにしても貝塚なる俗稱も、今では一つの術語（テクニツク）になつてゐて、一々その意味を穿鑿する必要はない樣なものではあるが、貝塚は何と云つてもモールス氏等が盛んに用ひたであらう Shellmound の直譯に相違なく、Mound＝塚と云ふ意味が、考へ方によつてはひどく邪魔になる。本來の意味から云つて Mound は集積を云ふので、それが地表上に岡になつてゐるか否かは問題でないのであらうが、塚と云ふと、どうしても古墳の樣な丸い岡を想像したくなる。勿論昔は、中里貝塚や、下沼部貝塚の如く、實際に貝の岡た形成してゐたものもあつたらうが、今の樣に表土を除去しなければ貝層が出て來ない樣なものも貝塚と云ふのは、考へて見れば變なものだ。その名稱は何處から來たか知らぬが、貝墟と云ふ方が、まだ少しましな樣に思はれる。然し實際鑿や、錐でない樣なものも、石鑿、石錐と呼んで滿足してゐる現狀に於ては、貝塚の譯語丈を、これ程面倒臭く論ずる必要もないかも知れぬ。之と問題は少し違ふが、洞窟中の貝層や、アリユーシヤン諸島にある樣な竪穴内部の貝層等は、洞窟貝塚、竪穴貝塚等と呼べぬものであらうか。積成の原因から考へれば、私はそう云へると思ふが。

（土岐）

關東地方貝塚出土の朱塗り土器に就て

池上啓介

一

關東地方の貝塚で、發見する土器を注意して見ると、案外、朱塗り土器が多い。試に大山史前學研究所の土器を調べると百三十餘片あつた。そこで、此等の發見地並に分布狀態に就て鄙見を申述べることゝする。

先づ御了解を得て置き度いのは、朱塗り土器と云つても、朱其のものゝ化學的成分を明にしたものでなく、從來の概念のもので、赤色土器、彩色土器とも稱せられて來たものを取扱つた事である。主に朱色をもつて、土器の一部、或は全體を第二次的に着色を行つたと認めるものである。

二

本會刊行の「縄紋式石器時代の編年學的研究豫報第一編」（本誌第三卷第六號代册）に發表した、昭和二年九月以降より同六年七月までの、九十五ヶ貝塚の實査に依つて得た、多數の土器を概見することによつて百三十六片の朱塗り土器が擧げられる。その發見遺跡は左の通りである。

（貝　塚）	（土器系式）	（溪　谷）
1 神奈川縣横濱市神奈川區下菅田貝塚	諸磯式	鶴見溪谷

番號	遺跡	型式	地域
2	神奈川縣横濱市神奈川區駒岡貝塚	諸磯式	鶴見溪谷
3	同　縣都築郡新田村折本貝塚	諸磯式	右同
4	同　縣橘樹郡日吉村箕輪貝塚	蓮田式、諸磯式	右同
5	同　縣都築郡新田村高田貝塚	諸磯式、勝坂式	右同
6	同　縣橘樹郡橘樹村子母口貝塚	指扇式	多摩溪谷
7	同　縣同　郡日吉村矢上谷戸貝塚	諸磯式	右同
8	東京府荏原郡調布町上沼部貝塚	大森式	右同
9	同　下沼部貝塚	大森式	右同
10	同　千鳥窪貝塚	勝坂式、大森式	右同
11	同　上町雪ヶ谷貝塚	諸磯式	右同
12	同　北豊島郡志村中台貝塚	蓮田式、諸磯式、大森式	入間溪谷
13	同　小豆澤貝塚	大森式	右同
14	埼玉縣北足立郡神根村新井宿貝塚	大森式	右同
15	同　新郷村東本郷貝塚	大森式	右同
16	同　東貝塚	大森式	右同
17	同　南埼玉郡柏崎村眞福寺貝塚	大森式	綾瀬溪谷
18	同　篠津村白岡正福院貝塚	蓮田式、諸磯式	元荒川溪谷

19	同　豊春村花積貝塚(上層)	勝坂式	元荒川溪谷
20	同　黒濱村江ヶ崎貝塚	蓮田式 諸磯式	右同
21	茨城縣猿島郡五霞村冬木貝塚	大森式	古利根溪谷
22	千葉縣東葛飾郡關宿元町篠臺貝塚	大森式	右同
23	埼玉縣南埼玉郡慈恩寺村裏慈恩寺貝塚	大森式	奥東京灣
24	埼玉縣北足立郡安行村領家猿貝貝塚	大森式	奥東京灣
25	千葉縣東葛飾郡七福村岩名貝塚	大森式	右同
26	同　野田町清水貝塚	大森式	右同
27	同　中野臺貝塚	主として勝坂式	右同
28	同　梅里村山崎貝塚	勝坂式 大森式	右同
29	同　新川村上新宿貝塚	大森式	右同
30	同　上貝塚	大森式	右同
31	同　流山町鰭ヶ崎貝塚	大森式	右同
32	同　八木村野々下屋敷貝塚	大森式	右同
33	同　高木村新井貝塚	大森式	右同
34	同　明村上本郷貝塚	勝坂式	右同
35	茨城縣猿島郡猿島町金岡貝塚	大森式	中利根溪谷

36　茨城縣猿島郡森戸村伏木青木貝塚　勝坂式　中利根溪谷

卽ち九十五遺跡中三十六遺跡に就て發見せられるのである。尤、採集した何萬と云ふ土器片中から、拾ひ上げたに過ぎないから、細に見るなら、尙多くを檢出することが出來たであらう。而して、朱塗り土器は、御存知の如く、顏料が剝脫し易いもので、特に注意しなければ、水洗ひする際に落し勝のものである。以上の樣な條件があるにも拘らず、斯く多數發見し得た事は、驚きの他はない。

三

此等の遺跡の地理的分布を見ると、鶴見多摩溪谷方面と奧東京灣の葛飾丘陵方面の貝塚に最も多く分布して居り、此の中間の入間溪谷、綾瀨溪谷、元荒川溪谷、中利根溪谷方面には局部的に濃密な分布もあるが、總體的には比較的少ない。

卽ち第一表の如く調査貝塚數と比較すると興味深き數が擧げられる。

第一表　溪谷別による朱塗り土器發見貝塚數

溪谷	調査貝塚數	朱塗り土器發見貝塚數
鶴見溪谷方面	7	5
多摩溪谷方面	9	6
入間溪谷	19	5
綾瀨溪谷	9	1
元荒川溪谷	17	3
古利根溪谷	5	2
奧東京灣（葛飾丘陵）	24	12
中利根溪谷	3	2
飯沼溪谷	2	0
合計	95	36

更に、此れを貝塚發見の土器形式に基いて見ると、第二表の如くなる。卽ち諸磯式、勝坂式に比較的多く、大森式に至つて最も多く發見するのである。

第二表　貝塚の土器形式に基く朱塗り土器發見貝塚數

土器形式	實査せる貝塚數	朱塗り土器發見貝塚數
指扇式	四	〇
蓮田式	三四	〇
諸磯式	一一	五
勝坂式	七	四
大森式	二十二	一八
蓮田式 諸磯式	六	(諸磯式三)
蓮田式 諸磯式 大森式	一	(大森式一)
諸磯式 勝坂式	一	(勝坂式一)
勝坂式 大森式	二	(勝坂式一 大森式一)
蓮田式 勝坂式	一	(勝坂式一)
指扇式 諸磯式	一	(諸磯式一)

又、文化的編年上より見れば、關東前期の指扇式及び蓮田式に全く皆無であるけれども、同じく前期の諸磯式に於いて初めて朱塗り土器を見る。中期の勝坂式の一部に甚しき進歩が見られ、後期の大森式に至つて益々發達してゐる傾向が認められる。

四

土器の研究に於いて、紋樣の研究の重大な事は、今更述べる迄もない事であるが、私は此の機會に、立體的と云ふか、彫刻的な一般紋樣に對し、朱塗り土器の如き顔料を塗布する紋樣の研究も亦、今後大いに、留意すべき事である事を强調したい。そこで、此の一般紋樣による裝飾と顔料による裝飾との配合による、土器裝飾と云つた點に就いて次に鄙見を述べたい。

先づ、土器に顔料を使用する源流とも考へられる諸磯式に見るなら、本式土器は、無紋或は縄紋のみのものと、種々の裝飾紋が殊更に發達したものとの二樣に大分す

る事が出來る。而して、朱塗り土器は、前者の無紋或は繩紋のみのものの一部に、多く見られる樣である。これは、彫刻的な裝飾紋を施す代用として、彩色による裝飾法が用ひられた結果と解せられはしないだらうか。尤も、諸磯式特有の爪形紋や並行沈線紋の複雜な裝飾紋を有するものにも、若干彩色を行つたものもあるが、私の資料は甚だ少なかつた。

次に、勝坂式に就いて見ると、本式貝塚の數が比較的僅少であるが、實査總數七遺蹟中四遺蹟まで、朱塗り土器を發見してゐる。而して朱塗りのものは、勝坂式特有な隆起曲線紋のある厚手の大形の土器には、殆んどなく、淺鉢形の稍々薄手の土器の口緣部或は底部、若くは、內部に、彩色したものが見られるのである。又種種な紋樣を畫いてゐるのも此の種の器形の土器に多い。

大森式には、彩色法と、立體的な一般裝飾法とが、盛んに併用された跡が見られる。前述した如く、此式の土器は、特に顏料が剝脫しよい所から、見逃し易いけれども、よく注意して見るとその根跡が認められるのである。實際、私が朱塗り土器を注意した結果、その數の多い事に驚いたのも此の式の土器であつた。（實際明に發見されるものは小形土器に多い）

大森式特有の優美な形態の上に、更に赤く彩色の施された當時の原形を想像すれば、藝術的價値が一層增大するであらう。而して大森式は、土器ばかりでなく、土偶土版、耳飾りと云つた特殊の土製品や骨角器等にまで、彩色せられ、顏料使用の最盛期を思はせるものがある。

五

最後に、今回取扱つた、材料は非常に小範圍の地域の而も僅少な材料であつて、表題と甚だかけ離れた感が

ないでもない。其後大山史前學研究所に於いては、數多くの貝塚を調査し、從つて、資料も亦、今回の分に倍加する程の材料を有してゐるが、今日、尚遺物整理中であるから、此の研究は他日完成を期することゝし、今回は單に分布狀態の一部に就て鄙見を披瀝したに過ぎないが此小報告が機となり諸士の御示教を受ける事が出來れば幸である。

尚、此等の諸貝塚以外に於いても、私の遺物を實見した出土地を拾つて見ても左の如く多數に上る。

（昭和九年十月十二日）

横濱市鶴見區子安町東寺尾貝塚
同　青木町三澤貝塚
東京市大森區大森貝塚
同　目黒區上目黒東山貝塚
同　瀧野川區西ヶ原昌林寺貝塚
神奈川縣橘樹郡高津村下末長貝塚
千葉縣千葉郡都村貝塚
同　加曾利貝塚
同　都賀村園生貝塚
同　犢橋村犢橋貝塚
同　東葛飾郡大柏村柏井貝塚
同　香取郡神里村白井貝塚
同　木内貝塚
千葉縣香取郡良文村阿玉台先堂貝塚
同　良文村貝塚
同　海上郡海上村余山貝塚
同　船木村船木台貝塚
同　北相馬郡文間村立木貝塚
同　小文間村中妻貝塚
茨城縣行方郡麻生町大宮台貝塚
同　津澄村繁昌貝塚
同　稲敷郡古渡村飯出廣畑貝塚

同　大須賀村福田貝塚　同　高田村椎塚貝塚
同　大田村寺内貝塚　以上二十五遺跡

— 238

最近發見の古作貝塚の人骨

千葉縣東葛飾郡葛飾村古作貝塚と云つても今の中山競馬場となつてからは、貝塚は全滅の形であるが、去る九月廿八日、同學の土岐氏が偶々競馬場の下水工事中に通り合せられ、人骨を發見せられたので、幸ひにも見學する事が出來た。研究所の竹下氏と貝塚に到着して見ると、人骨が出たと云ふ騒ぎで、黒山の様な見物人、果ては所轄警察署から數名の警官が急行せられる等、誠に御苦勞千萬な事で、人骨よりも騒ぎの大きいので驚いてしまつた。發掘は御役人の手で、頗る敏捷に二三分で終つた。其間私達は變死體發見立會人と云つた容子で茫然とするより他はなかつた。

人骨を發見した所は、競馬場入口左側であつて、工事の爲貝殼が取り去られ、僅に貝層下部の黒土混りの殘部があり現在の地表から二十糎にして、ロームに達してゐるが、このローム中に發見したのであつた。人骨は伸葬の姿勢であり、各骨骼の保存状態は甚だ良好で特に骨盤の如きは原型のまゝ取り上げる事が出來る程であつた。

取り上げられた人骨細片は其後村役場で鄭重の後懇に埋葬せられた筈である。(池上)

資料

信濃西筑摩郡井出の頭の土器

藤森榮一

一 井出の頭は木曾川の水源八森山に近く、中央線木曾藪原驛より東五キロ支流菅川を遡つた西筑摩郡木祖村菅神田地籍にある。明治二十三年、奥原松三郎氏所有畑地を水田に改造した際、地下三尺程の個所で大きな三個の甕——その一個には三個の「たかつき」形土器が入つてゐたとの事だ——が發掘された事がある。その土器の周圍は大きな盤狀な岩石四個で圍んであつた。又土器の群より十尺程北に離れて、約七尺に十尺方形に黒土が赤土層に陷入してゐたとの事だつた。發掘品は原狀のまゝ埋めてしまつたとの事、幻想の様な話で餘り當にはしなかつたが、昭和五年十一月、西筑摩教育會の諸氏と再掘して見た。

三個の土器なるものは遂に發見されなかつたが、地下一米四〇程で前述竪穴らしいものに掘り當つた。竪穴のプランは三米に二・三米の隅の取れた方形で、セクションは相當に深く一米三〇もあつた。柱穴敷石、其の他の構造は不詳であつたが、粘土層の下底から、不規則な盤狀の石九個が爐狀に小口を重ねあつて圍み、其の中に土器數十片、凹石三個、打石斧二個、赤硅岩、硬砂岩片、數個が出て來た。

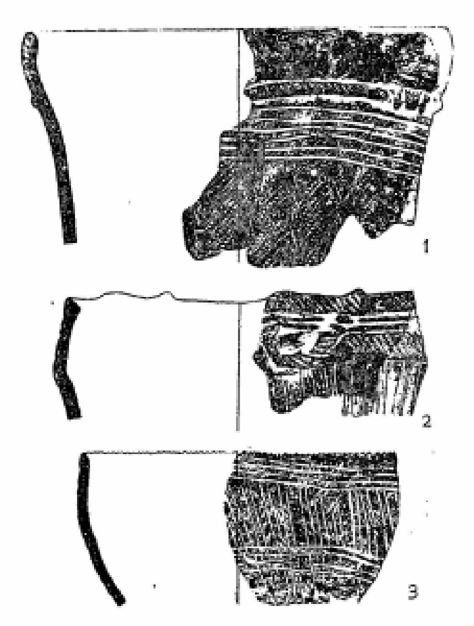


Fig. 1. 信濃井出の頭の土器

二 土器片は當時でも相當に疑つたものと思ひ特に注意をしたものだつたが、汽車の都合で實測も出來ずに歸つた。最近に至つて再度菅學校に該土器を訪れたのであるが、殘念にも大半は失はれて圖示したものゝみが殘されて居るに過ぎなかつた。

1は口經一一糎、口緣の稍外側に開いた深鉢形土器、頸部の繩紋を付した隆起帶を境に口緣部は素紋、其の下胴部まで六條の太い並行する溝を廻らしてゐる。胴部以下は粒子は稍細かいが極めて疎らな繩紋が粗末な寸法で施され、それを數條の縱の繼繩紋が區切つてゐる。長石粒を極めて多量に含み、土質惡く、內面は赤褐色で特に粗く、表面は黝色で稍密である。

2は胴部以下を缺くが、口緣の內側に屈折した深鉢形土器。口緣部は幅廣な隆起帶が二條、それに鉤形な隆起帶がからみ變化を見せて、口唇は輕く波打つてゐる。隆起帶には總て粒子の大きい繩紋が施されてゐる。胴部以下は不規則ではあるけれど二條づつの並行線で、細かに幾つにも縱に區切られてゐる。土質、燒成、色調共に1に等しい。脆くて吸水性が强い。

3は稍內彎した淺鉢形土器、口經七・四糎、口唇には深い爪形の刻みを付し、縱橫の並行線紋を細かに施してゐる。これにも極めて楽細な繩紋が極めて疎らに散されてゐる。縱橫の並行線の紋樣は2の胴部同樣、不規則ではあるが二本の歯を有する施文具にて施されたものであるらしく、2も3も同樣に、其の二本の並行線の間の距離の等しいのは面白い。土質、燒成、共に1、2よりも粗惡ではあるが、意外にそれ等よりは硬く、吸水性も尠ない。

三、以上の外二圖に示した數片があるが、八幡氏の提唱された楕圓捺型紋土器を含む捺型紋土器の一群である。發掘當時から此の特殊性には氣付いて居たが、肝心な出土狀態、前述した一群の土器との關聯が詳かでない。僕の觀察では殆んど混同して出土したものの樣であつた。4は小型な土器の口緣部で、何等の變化も持たないものである。5は楕圓形の粒子の縱に配列した例、6は同じく橫に配列した例である。5、6は稍厚く黝色を呈し、吸水性が尠い。4は茁褐色、粗面で吸水性が顯著である。7、8はジクザの紋、縱に配列した部分と橫に配列した部分とが同一破片にある。8は特に編物樣なものの捺型であらうかと思はせる。土質は共に良く、硬くて薄手である。

四、諏訪郡上諏訪町踊場遺跡から單一な姿で發掘された土器の群は、形式の上に於ける一種の單純化、其の他に依つて特徵づけられるもので、古式繩紋土器の末期の一型式であらうと考へた。この甚だしい特異性を持つた踊場の土器は尙諏訪湖を中心とする高地に點々と興味ある分布を見、僕はそれ等を便宜上踊場式土器と假稱したものであつた。（人類學雜誌四九、一〇）關東に於ては甲野勇氏の十三菩提式がその一部と再行すべきものである。（史前學雜誌二ノ三・四）層位的な編年觀に就ては何等云ふべきものをもたないが、形式上からは諸磯式と勝坂式と

の中間に位置すべきものであらうとは甲野氏も論ぜられた所であつた。僕は踊場式土器のうちに古式の土器に對する類似點以外に、それ以降の土器の類似點から、加曾利E式の紋様構成に暗示を持つものC類、勝坂式のうち古式と思はれるもの（八幡一郎氏「南佐久郡の考古學的調査」に於ける第一群第一類、東大藏伊豆大島の土器を標式とする一群）と深い關係を持つB類とを區別した。



Fig. 3. 信濃井出の頭の土器

　井出の頭の1、2に圖示した土器は踊場式土器のB內至Cに並行すべきもので、それが紋様の構成に於てより加曾利E式に近い點、及びより大型な土器の發達を見る點等踊場式土器のうちでも稍下降するものではなからうかと思ふ。3の土器と同じ範疇に入るべきものに相違ないが、或は諸磯式に近いものかとも考へる。特に土岐仲雄氏に依る東京道灌山の土器（史前學雜誌六・四）には極似した性質のものの樣である。

　楕圓捺型紋土器の類が踊場式土器に伴ふ場合は獨り井出の頭に限つたものではなく、千曲川の上流南佐久郡芦の平にも、諏訪伊那の郡境後山柴場等の高い山溪の奥にも見られ、又佐渡に於てもそうした例が發見されてゐる。尙踊場式土器共自身にも或種の捺型紋文が僅かながらも存在する。乍然ら井出の頭の場合は時間的にも相當な距離を肯定しない譯にはいくまいと思ふ。一九三四・六・一九

一種の石庖丁樣打製石器

樋口清之

　石庖丁と言へば、今日考古學上、磨製にして端平細長く多くは一側に孔を有する石器を指すことが通念となつて居つて、用途の是非の判定を問はずこの概念に入らない石器は別の名稱を以て呼ぶ可きが妥當であると考へられる。從つて圖示の石器亦暫く石庖丁樣打製石器なる名稱を以て呼ぶことにする。今回茲に圖示するところのものは全部香川縣內の發見に係り、現在、坂出町鎌田共濟會鄉土博物館の陳列になるものである。その出

土地を列擧すれば、

1、三豐郡粟井村藤日山
2、3、綾歌郡岡田村城山
4、三豐郡紀伊村母神山千幣社
5、綾歌郡府中村鼷ノ宮
6、三豐郡一ノ谷村本大樋ノ口，
7、香川郡大野村船岡山

右の諸遺跡は多くは高松、讃岐兩平野に面する洪積丘陵上に存するものであつて、概して、香川縣に於ても中央及び西方に偏するものであると言ふことが出來る。その全部は彌生式土器の遺物包含又は散布地であつて、石鏃、石錐等の打製石器及び石庖丁、石斧等の磨製石器を伴出してゐる。

此等の石器はいづれも現在灰白色に風化してゐるが、本來、此地方に最も多く産出し、ほとんど全部の打製石器がそれで出來てゐるところの讃岐石 (Sanukite) で作られ、その加工は一見原始的であるとは言へ、最も練達した技工によつて、薄肉鋭利に、無駄な打製を用ひずに製作されてゐる。その型態ほ、いづれも横長くやゝ矩形を呈し、その短邊の兩側中央を凹入させて、一種の錨石にでも見受ける加工を示してゐる。双は、ほとんど全部一側の長邊のみに存し、直線を成して鋭利であり、反對側は多くは双の設備が無い。要するに、矩形にして端平、一長邊に双を有し二短邊が凹入する點を以て本石器の型態上の最も顯著なる特色とすることが出來る。

右の如き石器の存在は、自分の淺學なる未だ近畿九州四國中國關東の石器、特に彌生式土器に伴ふ物は知らないところであつて、此小報告が機となり諸地方の研究家より類例の示敎を受ける事が出來れば此上なき幸と思つてゐる。しかし、今日に於ては、自分は、あるひはこの型態の石器が、瀬戸内海の一地方のみに主として分布して石器型態のローカル カラーを示すものではないかと考へてゐる。勿論、この石器に關

一種の石庖丁様打製石器の例

聯して直ちに想ひ浮べる磨製の石庖丁の中に於ける長方形の物の存在は內地に於ては鳥取縣青島、滿洲に於ては各地の例（梅原末治氏「鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡」大正十一年九月、R. Torii. Etudes Archeologiques et Ethnologiques. Populations Prehistoriques de la Manchourie Meridionale.1915.）に見られ、遠く中華民國河南省殷墟及び仰韶村等（J. G. Anderson. An Early Chinese Culture. (Bulletin of The Geological Survey of China. No. 5. Part. I. 1923.）の遺物に之を見ることが出來る。但し、此等はいづれも磨製にして左右の凹入の代りに孔を有してゐる點を異にして居つて、あるひはその用途に於ては相互相通ずる點があるとは想はれるが、その型態に於ては全く同一ではない。又東北方に於ては彼のアリウシアン列島出土の遺物にも長方形のものが存在するが(W. Jochelson. Archaeological Investigations in the Aleutian Island. 1925. Plate. 16.）磨製であつて、孔を有しないが凹入が無い點を異にしてゐる。要するに今日に於ては、此地方特有の石器であると思はれるが、しかし、その型態は所謂石庖丁と著しく接近した關係に在るものと言ふことは出來ると思ふ。

遺物の研究に於て最も大切な一領域を占めて居るにもかゝはらず、忘れられたり輕蔑されたり單純に取り扱はれたりするものにその用途の考究が存在する。この石器の用途に關しても先づ第一に想ひ浮ぶことは現在の土俗例である。自分等は近畿地方等に於て、現在民家に於て餅を切るのに使はれる兩手の附いた一種の庖丁、又は下駄屋桶屋等が木を竪に削るのに使ふ同樣の一種の庖丁等の存在を知つてゐる。この利器の金屬の部分は此石器とたゞ柄を附ける部分が突出してゐるか、又は凹んでゐるかの差があるのみであつて、あるひは同樣な方法で柄を附けて用ひたのではないかと推察される。かつて、Anderson 氏は前揭のその著書に、氏が北支那の各地を旅行した時に土民が、銍鐮(正しくは粟鑿と言ふ)と俗稱してゐる高粱の穗を切り取る鎌の石庖丁樣の有孔の利器を見て、石庖丁もやはりこの孔に革紐でも通し、それに指を入れて同樣の目的に使つたものであらうことを推考してゐる。後我國に於ても近時石庖丁を現在の草鎌の如く稻等の刈取りに用ひたと推考して農業資料の一に加へる人もある。この Anderson 氏によつて始められた考說は、又この石器にも、孔の代に左右の凹みによつて紐を固定させたと假定して妥てはめることが出來る。たゞその對象が、水稻如きもののみであつたか否かは勿論大いなる疑問である。又現在のエスキモー族の如く、この刄と反對側に梳き櫛の齒に被せるカヴアーの如きものを取り付けて用ひたかも知れない。

石器新資料

宮崎　糺

1、黒曜石製分銅形打製石斧

本年五月横濱市菊名東方の臺地より七田忠志君が表面採集によつて得られたもの。全長四・七糎、幅腹部の凹缺部で二・三糎、扁平にして周縁全體に亘つて細かに削ぎ取りが行はれてゐるが、鋭利とまでは言へない。形態は一般の分銅形打製石斧と全く同一であるが、遙かに小形である。同君が一緒に採集された土器は諸磯式か勝坂式か乃至夫れ以前の形式に屬するものであるらしい。（挿圖一の1）

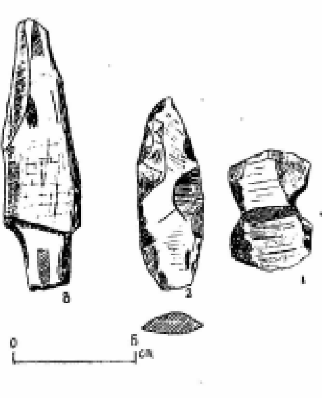


Fig. 1.　石器新資料

2、石鏃

東京府北多摩郡小金井村發見。黒曜石製。全長七・八糎、最大幅二・六糎、斷面は圓味を帶びた二等邊三角形を呈し、全體整美に出來て居る。伴出土器は目下の所明かでない。同郡東村山村徳藏寺所藏。尚同寺には他に石鏃二三を藏するが出土地が明かでないので玆には割愛した。（挿圖一の2）

3、石鏃

東京府西多摩郡東秋留村二宮明神附近にて同村中村利助氏が拾得され、現在同氏所藏のもの。全長一〇・六糎、最大幅三糎、石質硬砂岩らしい。柄を有すると云ふ一特徴を把へて石鏃と呼んだが、石質、加工共に一般の石鏃（2、4の如き）と異り、反つて打製石斧と呼ばれてゐるものに酷似してゐる。伴出土器は不明なるも、かの勝坂式及び堀内式を出した牛沼石器時代住居阯は程遠からぬ地點に存する。（挿圖一の3）

4、石鏃

東京府北多摩郡砂川村四番組阿豆佐味天神社東北方一町餘の畠地より十年程前に發見し、現在筆者の藏するもの。黒色硅岩製。全長十三糎、最大幅三・二糎。斷面2と同樣略二等邊三角形を呈する。中央部より先端へかけて次第に扁平となり鋭利さを想はしめるが、基部へかけてはさ程でない。全體丹念に削ぎ

取りが施されて居り、色澤は美麗とは稱し得ぬが形は極めて整うてゐる。土器を出す遺跡とは一里以上距つてをり、附近よりは往々石鏃を出す他、何等遺物の發見を聞かない(挿圖一の4)

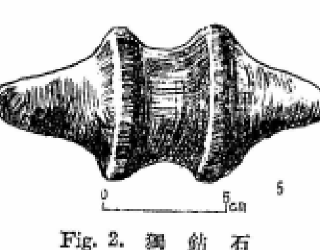


Fig. 2. 獨鈷石

5、獨鈷石

東京府西多摩郡東秋留村大塚附近より中村利助氏が採集され現在同氏所藏のもの。全長約十三糎。全體よく研磨され、刄部らしいものは認められない。斷面は略圓形を呈する。石質は不明であるが、色は粘板岩に似てゐる。(挿圖2)

以上、二三の石器に就き、比較的類例に乏しいといふ意味から簡單なる報告を試みたに過ぎぬ。お役に立たば幸である。

神奈川縣鶴見附近の諸貝塚

土岐仲雄
竹下次作

人類學雜誌第三十八巻五號(大正十二年五月)に、[illegible]譽次氏が同じ題目の下に、鶴見總持寺裏の丘陵地帶に、多數の小貝塚が散在してゐる旨を報告してゐるが、それ等の現狀がどうであるか、果して實際に發掘し得る樣な箇所があるか否かを踏查する爲、余等は二回に亙つて同地方に赴いた。以下の記事が、後日同方面を實査される方々の爲に、多少なりとも役立てば幸甚である。

菊名貝塚(第一圖1)これは史前學研究所が目下調査中の貝塚である。余等は、同所が丁度順路に當るので、通り掛かりに鳥渡立ち寄つて柵の中をのぞいて見たばかりであつた。

Fig. 1 鶴見附近の貝田塚分布圖

篠窪貝塚(第一圖2)横濱線菊名トンネル上の三角點標識が建つてゐる所。此處は現在糞溜になつてゐて、夏草の間に牛糞等が、足の踏み場もない程に散らばつてゐる。場所によつて、貝殼がちらほら見えて居り、貝層も存するが、表面から眺めた丈では、文化遺物の存否は知るよしもなかつた。この貝塚は竹下

が知つてゐたもので、鹽氏の報告にはない。

綿内谷貝塚　この綿内谷と云ふ字のうち、舊家らしい赤門の澤野と云ふ邸の主人らしい人が、門前で草取りをしてゐるのを幸種々質問して見たが、さつぱり要領を得ない。すぐ前の畑に居た夫婦連れの農夫に訊いた所、二人ははえぬきの土地つ子だが、綿内谷に貝塚が出たと云ふ話は絶對に聞かぬとの事。その斷言は余りあてにならぬとしても、鹽氏も文化遺物なしと云つてゐる位だから大した貝塚がなかつた事丈は確實であらう。

池谷貝塚（第一圖３）綿内谷より池谷に向ふ途中、左手崖上にあるバラック風の住宅へ登らうとする道の側の切斷面に、サルボウ、オホノガヒ、ハマグリ、アサリ等の貝殼が見えてゐるが、現時錢道ぐさ等の繁茂甚だしく、その中に蜂の巣があるとかで、ちかよれず、草枯れを待つて調査するより致し方ない狀態であつた。其處に見えてゐる限りでは、文化遺物は一個も發見し得なかつたが、上の畑には純貝層が多分ありそうに思はれる。鹽氏の池谷貝塚（氏は土器片も採集した）と云ふのは、恐らく此の場所を指したものと思へる。弱小貝塚ではあるが、再調の價値はあらう。

松陰寺傍及同寺下貝塚　住職にたずねて見たが、貝塚らしいものが、附近に出た覺えはないと云ふ話。門前には時々貝を買つて敷く事があり、本堂新築の時も、土臺に貝を入れた。その樣な貝が散つてゐるのを見て、貝塚と云つたのではないかと云ふ話であつた。鹽氏は後者に於ては文化遺物を何も採集して居らず、前者に於て、土器片、獨鈷石を得てゐる。寺の坂にかゝる少し手前の處に、木の根かたに古い貝の出てゐる所はあつたが、之も問題にならぬ。（第一圖４）鹽氏の松陰寺傍と云ふのは、或はこの地點を云ふのかも知れぬ。それから、同寺裏の丘を半分崩してある所で余等は厚手の土器二三片を採集した。

白幡神社鳥居附近の地點（第一圖５）此處は鹽氏の報告にはない。山を登つて、神社境内へ入らうとする鳥居の周圍に、多少貝の細片が散つてゐるのを見た。古い貝らしくはあるが、附近何處に貝層が存するのか、或は存しないのかは遂に確かめ得なかつた。

白幡神社裏參道登り口貝塚（第一圖６）同神社拜殿横の倉庫前面にも、蜆等がおちてゐたが、貝につやのある所から、竹下はこれは現世種であると斷定した。其處からすぐ右へ裏參道へ下りて行くと、山の下の民家へ出ようとする少し手前、左手一段高くなつた、小笹等生えた林地の中に、立派な純貝層があるので、余等は雀躍りして試掘して見たが、上下左右何れの方向に行くも、貝層は忽ち稀薄になり、殆んどつきてゐるのでがつか

りした。その間文化遺物等の挾雜は一箇もない。それにしても人工的な集積貝層である事丈は確と思はれる。この地點も鹽氏の報告には就つて居らず、將來再調の要あるものとも考へられない。（第二圖參照）

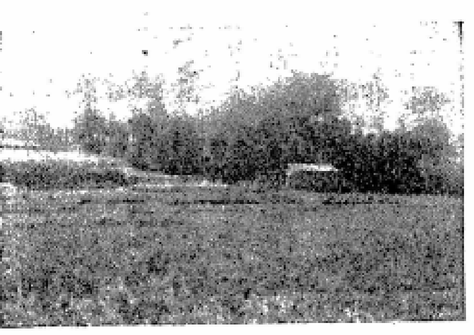


Fig. 2. 白幡貝塚遺跡

荒立貝塚（第一圖7）ここは花月園の方へぬける、坦坦たる大道の側面に、數箇所純貝層が露はれてゐる。中でも持丸金三氏宅登り口のものは幅約二米深さ半米位ある美事な貝層で、ハマグリ、アサリ、サルボウ、オホノガヒ等が多い。（第三圖參照）同所に、楓を植ゑる爲掘り出した。貝の堆積があつたので、しばらくかきまわして見たが、文化遺物は一箇だに發見する事が出來なかつた。然し附近の貝層は何れも處女貝層らしくあり、再調の價値充分なりと思はれた。

これは吉田文俊氏が人類學雜誌第二十卷二二九號（明治三十八年四月）に、多數の文化遺物を得た旨報告してゐる貝塚があるが、余等は實査の結果、氏の東寺尾貝塚と云ふのは、此の地點を指すものではないかと考へた。實は前述の池谷と云ひ、白幡と云ひ、以下述べる二本木も皆同じ大字東寺尾に屬する地名であり、この樣な地點名稱は甚だ不完全である。

Fig. 3. 東寺尾荒立貝塚貝層の一部

後へ戻つて、第一貝層露出地の少し手前を山に登つて行くと、農家の生け垣によつて四辻が形成されてゐる所へ出る。ここはこの岡の最高地點であるが、それに到る迄、道に眞白に貝殼細片が散つてゐるので、若しやと思つて、その農家のうちの一軒について、問ひ質して見たところ、これは道普請の爲め、海から運んで來た砂について來たものであると云ふ話であつた。

馬場谷（ばばやと）貝塚　射的場の横裏にあたる、戸數約五十戸程の一村落で、同じく東寺尾地內である。鹽氏は此處にも貝塚がある旨報告してゐるので、舊家らしい家二三軒に就いて、たづねて見

たが、さつぱり要領を得なかつた。鹽氏は此處でも土器片を採集したとの事である。

　二本木貝塚(第一圖8)現在は緑ケ丘住宅地とよばれてゐる一劃の、人家稠密した場所にある。一段高くなつた、住宅地の裏庭から、道路を横切つて、下の崖の方へと、相當に廣く貝が散つてゐる。竹下は、柵を越えて、道路下の崖の側面を試掘して見たが、これは恐らく道普請の時に、上から掃きおとされたものであらうと云ふ事が推斷された。貝はハマグリ、アサリ、サルボウ、ハイガヒ、シジミ等で、相當多くの土器片が散つて居り、その土器の種類は、やはり諸磯式である。若し純貝層があるとしたら、上の住宅の裏庭の所にあらう。大した貝塚ではないが、此の邊では相當保存のよい方でもあり、もう少し精査して見ても無益ではあるまいと考へられる。鹽氏もここに於て土器片を得た旨報告してゐる。

　二本木・藏畑境附近貝塚(第一圖9)鹽氏のこれに相當するらしい地點は、二本木貝塚から、新道路に出た所にある、舊家らしい農家の、道に沿ふた屋敷地の側面に、青苔と共に散つてゐる點々たる貝殼細片のある場所に當るものと察せられる。當時は兎に角、現在では殆んど全く絶滅してゐると云ふ外はない。尤も鹽氏は土器片、石鏃、錘石等を採集したと云つてゐる。

　藏畑貝塚(第一圖10)藏畑と云ふのは、台地へ上がつて、廣い新道に出た所の向ふ側の谷一面をさす名稱である事を、二回目に行つた時に聞いた。前述の場所まで、藏畑が入り込んでゐるとは鳥渡考へられない。二本木・藏畑境貝塚と云ふのは、或はこの台上の何れかの地點を指すのかも知れない。ともあれ、附近の地つきの人に種々尋ねて見たが、此處でも要領を得なかつた。今になつて考へて見ると、この台地を、所謂藏畑の方へ下りて行つて見たら、或はもう少し變つた話を聞き、場所を見る事が出來たかも知れないと思ふ。然し、他の多くの場合と同樣、顯著なものでない事丈は、附近の人が更に知らない事丈でも證明出來ると思ふ。鹽氏は藏畑貝塚なるところで、石斧と、土器片を得た由である。

　神明神社境内貝塚(第一圖11)相當に立派な神社であるが、野宮である。廣い新道から、このお宮の參道へ行こうとする途中、畑を切り立つた道の上に、相當濃く貝の細片が散つてゐる。古そうな貝殼片ではあるが、此の邊はよく獵見の方から貝を持つて來ては、敷く由であるから、何とも云へない。貝層があるとすれば、傍の薄の一杯のびた傾斜面の方かも知れないが、殘念ながら足の踏み込み場所もない。この他神明神社境内で、貝層のありそうな所とては、先づ絶對になからう。鹽氏も文化遺物

については何も記して居らぬ。

澁澤貝塚　神明神社の西側の畑を、下の方へ降りて行つたところが澁澤である。十七八戸しかない、極めて長閑かな一村落である。そのうち舊家らしい家二軒について聞いて見たが、上の台畑に、古墳らしいものがあつたと云ふ事を聞いたと云ふ事の外、貝殼が出た等と云ふ話は、絶對に聞いた事がないと云ふ事であつた。して見ると、此處もやはり、あつたかなかつたか、わからぬ位の怪しげなものと斷定せざるを得ない。

以上東寺尾の地域内丈に於ても、未だ實査しない貝塚が二三報告されてゐる樣であるが、又別の機會に之を讓る事にしやう。

將來の實踐者に希望する事であるが、貝塚が存したならば、その存在箇所は、貝塚が貧弱であればある程、尚一層明瞭に、なるべく地圖を添へて報告して頂き度い事である。それから同じ大字のうちに二箇所以上の貝塚が存する時には、長谷部博士も何時か云はれた樣に、必ず字(あざ)を添へて呼ばれ度い事。然し必要以上に小字等を添へられる事は、往々にして當時丈、又はその村の或一群に丈しか通用しない俗稱等が入り込んで來るので、これもなるべく避けられ度い事。後學の爲に、何より有難いのは、附近の明細圖を一葉添へられる事に如くものはない。實は人類學教室の地名表に於ても、此の附近は、昭和二年頃は横濱市に編入されたばかりで、一部は横濱市の部にあり、一部は橘樹郡の部にあり、他は脫落して居ると云ふ工合で、亂脈極まりない。人工的區劃より、地圖第一主義を提唱する所以である。土地の名が解からなくても、地圖さへあれば、兎に角、その地點へ達する事は出來る。以上聊か蛇足ではあるが、特に先輩諸賢に懇願する次第である。

雜報

ミュラー博士(Sophus Müller, 1846—1934)の訃

今夏デンマークの考古學雜誌、アールベーガーを受け取り、卷を開くや同博士の追悼號であつたので、驚き且つ哀しむと共に、こゝに遲れながら弔辭を述べる次第である。

同號によれば本年四月十七日逝去せられたのであり、既に同地博物館長の職は、M. Mackeprang 博士に讓られ、閑地にあられたのであつた。顧れば、デンマークに於て盛名籍々たるトムセン館長の後に、其後繼として申分なきヴヲルサヱ氏出でゝ

同國史前文化研究は斷然頭角を顯し、更に其後を襲いで其覇を全ふしたのが、このミユラー博士である。其貝塚研究。北歐考古學。北歐史前藝術。等の如き、何れも世界的研究として令名があり、博士をして重きをなさしめた一礎石でもあつた。更に其八十餘年の生涯に於て、幾多の研究のあることは、一度アールベーガーを繙けば、直に首肯し得る所である。而して此の如き碩學を失ふたことは、獨り同國の損失のみでなく世界の損失である。加ふるに同博士の學的後繼者と目されたザラウ(sarauw)氏の同博士に先つての長逝は、一沫の寂しさを同國史前學界に見らるゝのである。さるにしても新進の後繼者は躍進もしよう。それは今後に待つとして、こゝに重ねて同博士を愁傷するものである。(大山)

リユトー博士(A. Rutot)の訃

これは文獻上から見たのではない。先頃ベルギー大使に出遇ふたら、同大使より直接聞知したのである。同博士も亦同國々立博物館長として、夙に令名あり、特に原石論の肯定急先鋒として、長年戰はれた鬪將であつた。其是非は兎に角、鬪志烈々たるものがあり、亂軍中に奮鬪せられた有り樣は、其比を見ない所であり、同博士と云へば、直にこれを追想する次第である。勿論、「原始人類復原像の試案」の如き好著があり、多くに引用せられても居る。今日前述した溫厚なミユラー博士と共に、鬪志燃るが如きリユトー博士を失ふたことが、更に秋の寂しさを增し、學界に重なる損失を、數へて過古を想ふと共に、茲に哀悼の意を表するものである。(大山)

入會

東京市牛込區戸山町三〇番地並松高一方　森　貞成
東京府北多摩郡砂川村二六五　宮崎　紀
臺灣、臺中州大甲郡沙鹿庄昭和製糖株式會社沙鹿製糖所　古澤國彦

轉居

東京市世田谷區玉川奥澤町二丁目六六五　川合貞一
東京市世田谷區松原町四丁目一五一　樋口清之
水戸市西原町三三七四　生沼豐彦

退會

宮島貞亮

史前學會
大山史前學研究所

刊行書目

史前學雜誌第一卷（昭和四年刊行）定價六圓

史前學雜誌第二卷（昭和五年刊行）定價六圓

史前學雜誌第三卷（昭和六年刊行）定價六圓

史前學雜誌第四卷（昭和七年刊行）定價六圓

史前學雜誌第五卷（昭和八年刊行）定價六圓

史前學雜誌第六卷（昭和九年刊行）定價六圓

研究小報第一號 神奈川縣新磯村勝坂遺物包含地調査報告 大山柏著 定價壹圓 送〇、一〇

研究小報第一號 埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告 甲野勇著 定價壹圓卄錢 送〇、一〇

パンフレット第一號 史前の研究 大山柏著 定價十五錢 送〇、〇四

パンフレット第二號 石器時代の概要 大山柏著 定價十五錢 送〇、〇四

パンフレット第三號 未開人身體裝飾 甲野勇著 定價三十錢 送〇、〇四

パンフレット第四號 石器時代遺跡概說 大山柏著 定價四十錢 送〇、〇四

東京灣に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける縄紋式石器時代の編年學的研究豫報第一編） 大山史前學研究所 史前學雜誌第三卷六號代册 定價一圓五十錢 送〇、一〇

關東縄紋式文化編年學的研究資料第一册 横濱市下菅田貝塚群（昭和九年刊行）大山史前學研究所 定價六十錢 送〇、一〇

關東縄紋式文化編年學的研究資料第二册 神奈川縣都田村折本貝塚（昭和九年刊行）大山史前學研究所 定價六十錢 送〇、一〇

（但し、史前學雜誌第五卷全部希望の方には編年資料第一、第二册を第五卷第六號とします）

日本舊石文化存否研究 大山柏著 史前學雜誌第四卷第五六號代册 定價二圓五十錢 送〇、一〇

史前學講義要錄（第一部基礎史前學）大山柏著 定價七十錢 送〇、一〇

史前學講義要錄（第二部事實史前學）大山柏著 定價八十錢 送〇、一〇

史前學繪葉書 第一輯（外國之部）定價二十五錢 送〇、〇二錢

史前學繪葉書 第二輯（日本內地之部）定價二十五錢 送〇、〇二錢

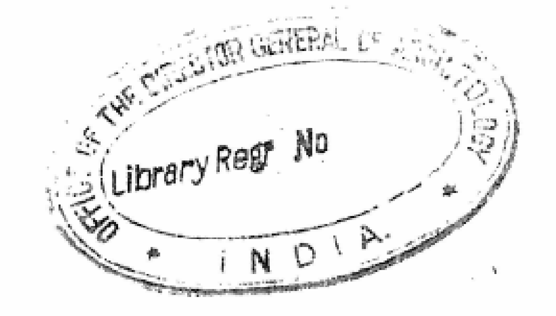
東京市澁谷區穩田一ノ九
史前學會
電話青山一二五五番
振替東京五八九六八番

INHALT

I. Abhandlungen

II. Kleine Mitteilungen

III. Verschiedenes



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)

2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung

3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf

- A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
- B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
- C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen

4. Mitglieder

Die Mitgliedschaft wird erworben durchjährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder

5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet

6. Rechte der Mitglieder

Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen.

Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen

7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft

8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden

9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich :

9. Onden Shibuya-Ku Tokio

Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei

Sumio Nakazawa Jookei Shibata

Vorsitzender Fürst Kashiwa Ohyama

für den Vorstand

Kiyoyuki Higuchi Keisuke Ikegami

Isamu Kohno Kei Kanno

Iwao Ooba Sueo Sugiyama

Kingo Tazawa Ryuichi Yamaguchi

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

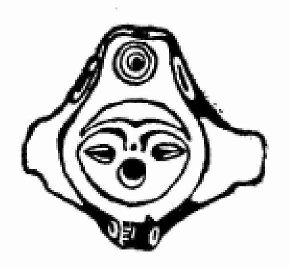
ORGAN DER JAPANISCHEN

PRAEHISTORISCHEN GESELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN

von

KASHIWA OHYAMA



6. BAND 5. HEFT

TOKIO

September 1934

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Shibuya-Ku Tokio.

史前學雜誌

第六卷　第四號

昭和九年七月發行

史前學會

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル

二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會合ヲ行フ。隨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ

四、會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル

入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込マレタシ

五、本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得

六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル

七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得

九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山史前學研究所内

史前學會

顧問　小金井良精　中澤澄男　柴田常惠

會長　大山柏

幹事　杉山壽榮男　田澤金吾　大場磐雄　甲野勇　大山柏　簡野啓　樋口清之　山口隆一　池上啓介

會計　岡田發一

(順序不同)

投稿規定

寄稿ノ範圍ハ史前學研究ヲ主體トシ、之ニ關連スル諸學ヲ包括ス。寄稿者ハ通常、會員並ニ會員ノ紹介アル者ニ限ル

原稿ハ返還セズ、但シ寫眞、圖表等ハ豫メ申出デアルモノニ限リ之ヲ返還ス

原稿掲載ニ就イテハ幹事ニ一任サレタシ

寄稿ノ別刷ハ豫メ申込ミアル場合ニ限リ、當分所要部數ノ實費及ビ送料ヲ申受ケ需ニ應ズ

昭和九年七月十九日印刷　第六卷第四號
昭和九年七月二十三日發行　定價一圓

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　池上啓介
發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一
印刷者　東京市神田區三崎町二丁目一番地　株式會社明章印刷所　鈴木赳武

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内　史前學會　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

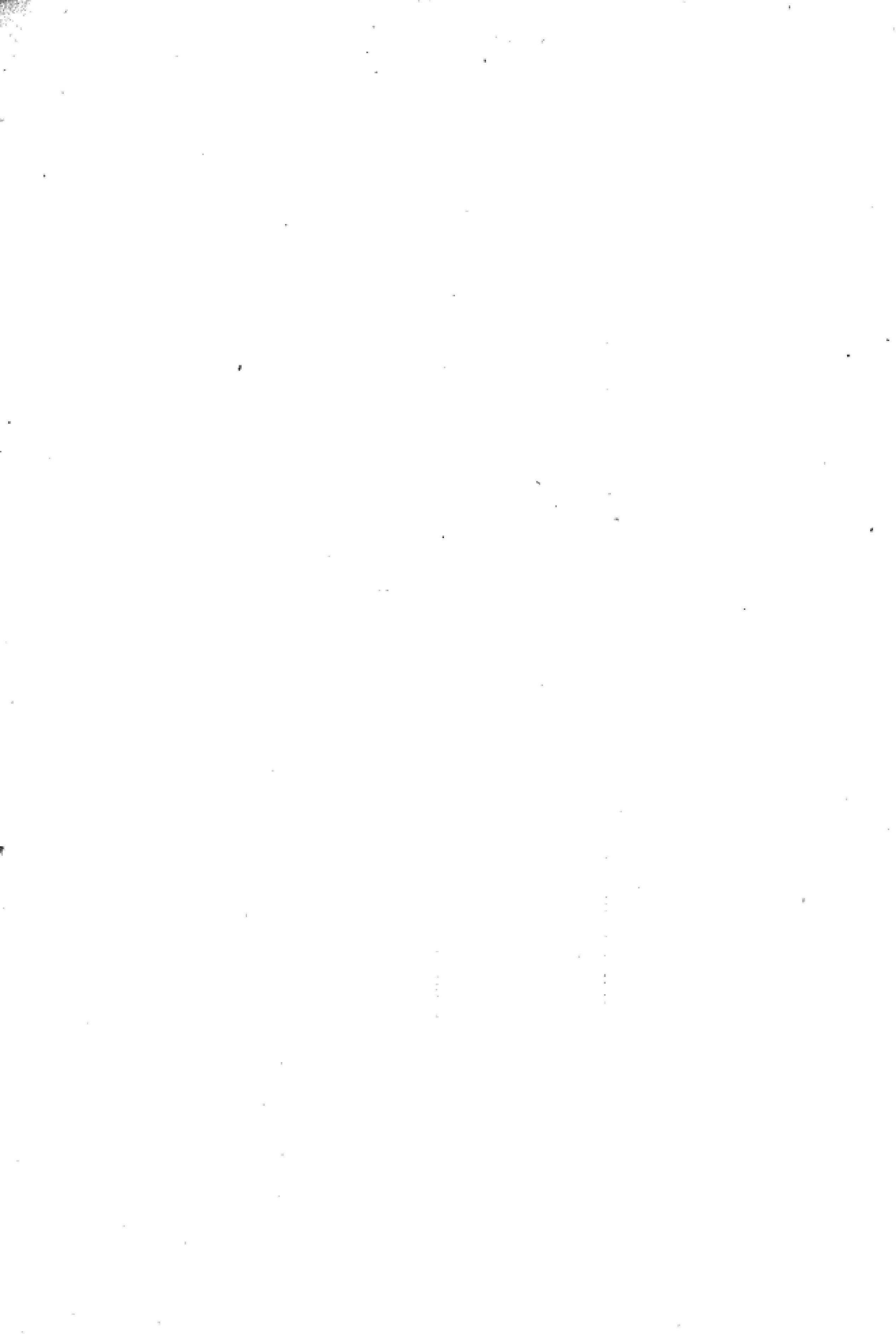
發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　岡書院　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

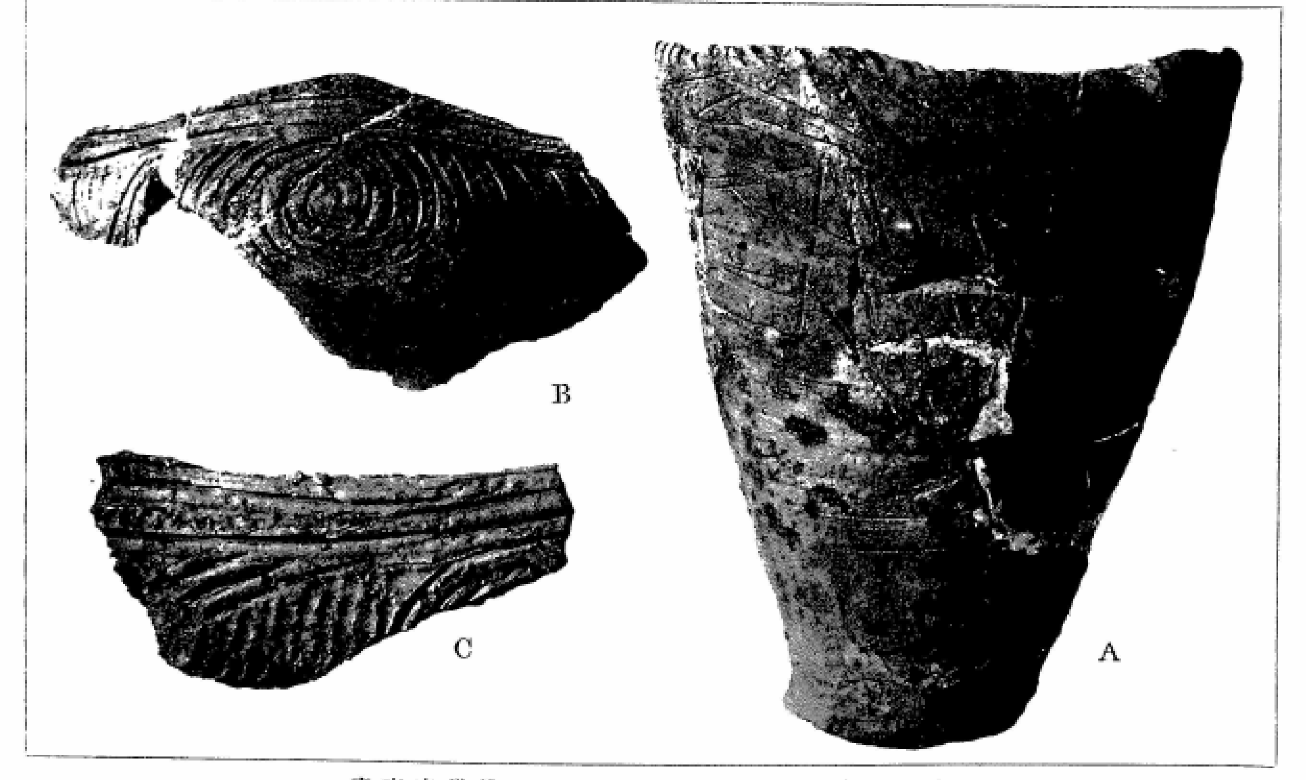
第六卷第四號

目次

資料



圖版第四（第六卷第四號） Tef. IV. (6 Band. 4 Heft)



東京市道灌山石器時代遺物包含層發掘土器

Keramik aus Fundstette Dookanyama, Tokio.

大和に於ける縄紋式土器

島本一

C　大和繩紋式土器の特質

D　餘　説

一　端　書

關西の彌生式土器論に對して、關東北の繩紋式土器論は今や我國考古學界に於ける中心論たる事は云ふ迄もない。彌生式土器の研究は少壯學徒の一團によつて近時[1]明白の度に拍車を加へつゝあることは誠に喜ばしい現象であると同時に繩紋式土器の研究はそれ以前に飛躍的な發展を爲しつゝある今日に於て、稍ゝ消極的な一方案に萎れつゝあるのではないかと思はれる。が、兎も角二つの對立的な研究に棹してゐる事實は見逃し難い。翻つて關西、殊に近畿の分野は、繩紋式及び彌生式の兩式土器の相錯交する所に存する兩者の考察は極めて難であり危險が伴ふのではないかと思惟する。卽ち關東北の繩紋式系が近畿に勿論一脈が存在しても、以つて直に關東北式とは爲し得ないであらうし、又近畿に於ける該土器實年代が關東及び奧羽と如何程の差異を持つものであるか、[2]樣式型式が設定し得られ時差の場合に於ける文化系が統一を爲し得らるゝであらうか、吾々は各地域を限定し、その地域内に於ける個々の特色(樣相)の諸相を全地域を一單位としての統一性を把握し、そこに繩紋式土器の確然性を樹立し、再び個々の地域に歸つてその特異性を見返さなくてはならない。

彌生式土器が九州の一地域に出發し、中國・近畿・東海・關東の順次に發展する如く、繩紋式土器が南漸へあるひは北漸へ（いづれにしても）の進化過程の歸一性を求める事、及び、現在の如く變化に富む土器名稱が、吾々の如き後學者を如何程に迷ひ苦しむものであるか此等を劃一的の名稱の存在が欲しい。

吾大和の如く彌生式土器の飛躍發展の中に終始する繩紋式土器に到つてはあたかも關東北の從屬的無意識的存在の如く取扱はるゝに於て甚だ不愉快に感ぜざるを得ない。

此處に於て、既に試みられたる、河内國府や、播磨の大歲山、等(3)に於ける如き、近畿は近畿としての獨自性の研究を求めねばならない。

此の意味で今自分は大和の繩紋式土器に就て先輩の高論を再敲して、他日自分の貧しい記錄の一篇に止めたい。幸ひ諸賢者の切なる御教示に預りたい。

二、彌生式土器及び石器との關係

大和の繩紋式土器を論ずるには、第一に彌生式土器との關聯を一考し、次に石器の問題を論ぜねばならない。

先づ第一の問題たる彌生式土器に對しては、現在の吾大和の諸遺蹟中、大略低地に於ては彌生式系遺蹟存し山岳地に於ては繩紋式系遺蹟の存在を見る。然乍純彌生式系遺蹟が存在するも純繩紋式系遺蹟が存在しない。換言すれば、彌生式系遺蹟の單一相があり得ても、繩紋系遺蹟の單一相無く復合相を存してゐる。卽ち此の事實は、低地に稀に存する少量の繩紋式土器が殆ど彌生式により近似し、山岳地に於ける稍々量の多い該種土器は、次の概念によつて大略窺はれる。

卽ち彌生式土器が櫛目文土器と九州遠賀川系土器の二樣相の存在が、大和の低高地のいづれの遺蹟にも見受けられ、しかも低地が山岳地に比してより原型を保全してゐる事實は、かの繩紋式系が山岳に存在し、彌生式系が低地に存し文化の進展する頃兩者が後者の文化高潮に際して融合したと解する說(5)も妥當であると思はれる。故に、低地に於ける彌生式土器は原型と進化型の兩者を存し、山岳地に於ける彌生式土器は進化型を繩紋式土器中に含

有されてゐる譯である。先述の縄紋式系遺蹟が單一相にあらずして復合相であることを證され得たと思ふ。

次に第二の問題たる石器に關しては、石器それ自體が誠に多種多樣であつて複雜化されてゐる爲、一概に論じ難いのみならず、いづれが縄紋式及び彌生式土器に共伴するかの事實は容易に解決出來ない。自分は大體純彌生式土器出土遺蹟に及び、復合相ではあるにしても大樣縄紋式土器出土遺蹟に是を求め、兩者の分類的考察を先頃『大和石器時代研究』中の「大和の石器」の一稿に於て詳述したから此處では割譲し、低地と山岳地の石器の相違は大略窺知され得ると思ふのである。卽ち山岳地の打製石器にして精巧を極め薄肉小形で鋭利なるもの多きに反して低地は磨製品往々多く、多肉的にして實用をはるかに遠ざかるもの多いと考へ得られる。此等は一々分類上に就て計數的に爲し得て初めて效果を擧げ得られる。勿論これのみにては明瞭でなく兩者の單一遺蹟（山岳地の復合なるも稍々單一に近い）に就て、層序列關係のより完全なる學的調査に於て初めて認識される。從來吾大和に行はれた遺蹟地の發掘調査は、彌生式系遺蹟の數例に對して縄紋式系遺蹟は宮瀧の一例に過ぎない狀態である。これも京大の末永氏の御報告の公刊を見ない迄は十分納得されない。故に今日迄彌生式及び縄紋式土器に共伴する石器の確然性は保留の觀であると考へられる。

三、重要遺蹟の檢討

今日迄の吾大和に於ける縄紋式土器發見の遺蹟は、森本六爾、樋口淸之、吉田宇太郎三氏の大和人、大場、直良、小泉、猪狩等の諸氏並に此の共働者により既に十二三ヶ所の多きを加へ、大和の地域の劃然性を決定せられたものと云ふべく、吾々は多大の敬意を表する次第であるが、右の內代表的遺蹟を揭げ順次に補足を加へたいと思ふ。

差當り、是等の遺蹟に對する前提ともなるべきは、大和の如何なる地域に分布するかの問題であらねばならないが、前述の如く低地は稀にして且つ彌生式土器との判別に苦しむものであり、傾斜地山岳地に於て見得る複合性であることは云迄もない。然らば後者の高台地（傾斜地山岳地を一括して）のいづれなるかは容易に解決し得られるものであつて、先づ山岳地に於ける吉野川（下流紀ノ川）及び宇陀川（下流木津川）に沿ひ分布するものであり、傾斜地と見るべきは三輪（奥地に入れば宇陀川に到す）及び竹之内（西すれば河内國府に至る）である。吉野川沿岸には宮瀧・北六田・下淵を有し、宇陀川沿岸には榛原・大野を有してゐる。これ等の兩者はあるひは聯絡を思はせられる事は詳細を『大和石器時代』の一稿中「北六田の遺蹟遺物について」の拙稿に讓りたい。參照されたい。

Fig. 1. 遺蹟の地理的景觀

次に重要遺蹟を左に揭げやう。

一、吉野川沿岸　宮瀧、下淵 ｝山岳地
二、宇陀川沿岸　榛原、大野 ｝
三、大和川沿岸　三輪、竹之內、…傾斜地

行政上の所在地名

一、北葛城郡磐城村大字竹之內

二、磯城郡三輪町大字三輪金屋
三、宇陀郡榛原町大字天神森墨阪神社
四、同　三本松村大字大野
五、吉野郡大淀町大字下淵吉野高女校
六、同　中莊村大字宮瀧役場小學校附近

（一）竹之內例

本遺蹟は學的發掘の行はれたのではなく、幸ひ此の地に熱心なる蒐集家星川德二郎氏の三十年に亙る勞費の賜物に據つて幸ひ重要遺蹟としての價値を高むるに至つた。氏の所藏品は千數百點に上り、石器以外に最近に於て多數の繩紋式土器を採集せられた。此の遺物に就ての公表は森本、樋口兩氏の勞を多とせねばならない。

石器に就ては、樋口清之氏の發表があり、打製石器を主體とするのを大きい特色としてゐる。然し極めて稀に磨製石器も併存する。打製石器は薄手で鋭利に出來て居り、その型態が變種に富んでゐる。石鏃を最多とし、石槍・石錐・石小刀・皮剝等是に次ぐ。磨製石器は石庖丁・石劍・ハンマー等であつて、鐵劍形石劍の存在は低地遺蹟との一脈を考へられる。

樋口氏は、かゝる打製石器を主體とする文化特色を他の遺蹟に觀點を注意し、三輪、新澤、吉野、唐古等と共に標式的な存在として肯定し、低地遺蹟の打製石器は、加工に於て拙であり利器の要素が不充分であるに反して台地より山岳地に至る程石器の形態の變化多く且つ加工精巧であり利器として實用に近い要素を多く含むことを附加せられた。(6)

次に縄紋式土器に就ては森本六爾氏の論稿があり、少し借りる事にしやう。(7)

「縄紋土器は殆んど破片のみで完全品がない。所謂薄手式の系統を引くもので、縄文式末期、又はこれに近く比當されるべきであらう。器形は皿形、深鉢形、甕形の數型式で條線紋又は無紋の粗製暗黒色土器が主體をなしてゐる。稀に口邊に山形狀の突起を有するものもある。文様もまた種類變化共に乏しいが、頸部に一種の孤線文を主要素とする横文帶を繞らす破片が數個あり、中にも、皿形土器底一面に施された施文形式の如きは、所謂亀ヶ岡式土器との問題の聯々に於て把握さるべき土器様式で注意を要する。」

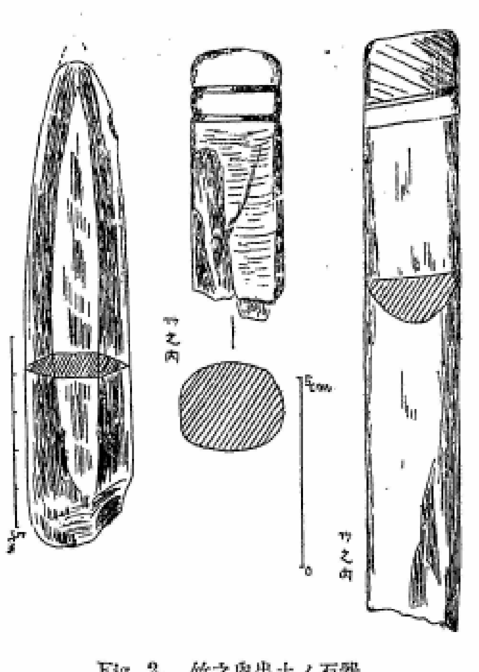


Fig. 2. 竹之内出土ノ石器

此の遺蹟の縄文土器は、附近の完形縄文土器出土遺蹟である河内國府若しくは大和吉野宮瀧遺蹟に比較して、厚手系を惹ける河内國府により遠く、薄手系をひく大和吉野により近い。」とせられてゐる。

竹之内遺蹟は彌生式土器の共存によつて復合相を物語つてゐる。即ち櫛目文土器と所謂安滿B類土器系の二類があり、文様を缺く場合に於ては縄文土器無文のものとの判別を誤るものを存するのである。

兎に角本遺蹟は末期的な縄紋式土器に加はるに彌生式土器を共伴する複合相の遺蹟であつて、間々兩者の判別が截然たらざるものの存する事實も注意を要する問題の一である。樋口氏に據つて注意せられた本遺蹟の著しい

特色たる打製石器はそも兩式のいづれの土器と共伴したかの問題の解決と相俟つて竹之内遺蹟の示相がより闡明にせらるゝであらう。吾々は今後星川氏の藏品を注意すると共に、星川氏の共働者となつて直接遺蹟への凝視を十分にしたい。

8cm

Fig 3.　下田出土

（下田例）添加

本遺蹟と關聯して簡述せねばならないのは、下田出土の繩紋式土器に就てゞある。これに就ては旣に吉田氏の詳細なる發表がある。(8) 要約されたる結果を次に示すと、

1. 黝黑色又は暗褐色の光澤ある燒成なる事。
2. 精選せる細密な粘土を原料とせる事。
3. 土器の全表面に繩紋を施せる事。
4. 口緣上部に繩目を有する事。
5. 頸部緊縛を表現せる結び目には、特に房狀の密集せる繩紋を以て美化せる事。

形態は吉田氏の云ふ「大コップ」形で高さ一三・五糎口徑一二糎、糸底部安定とし、厚さ口頸部に於て七糎内外の薄手に屬し、頸胴尻の三部に輪積の斷目がある。紋樣は大體に於て關東地方の繩紋に類し、布紋を不規則に押捺してゐる。

吾々が所藏者たる下田町郵便局長植島行雄氏を訪ひ遺物及び出土地狀態を綿密に拜聽したが、昭和三年某氏の鑿井中偶然發見したもので、葛下川當麻川の落合ふ附近下田橋十數間の地であり、地下約十尺の砂層中埋木及び

黒色の木葉埋積に混入して唯單獨に出土したものである。吾々の見る所では、此の土器たるや吾大和としては決して薄手でなく、製作法はむしろ劣であつて輪積式の然も接面傾斜を帯びてゐる點等は古式に屬するものであると考へる。單獨出土なるが故に又河床に當るを以つて偶然下流へ押流されたのではあるまいかとの疑念も生ずるが、若し事實とすれば葛下川當麻川の上流に是を求むれば竹之内遺蹟に相當し、（あるひは將來新發見さるべき異る地）を擧げられるが、さりとて土器の示相が全く相反するものであつて相關々係を考へる事の危險性を多分に感ずるのではあるまいか。

Fig. 4. 三輪發見土器，據樋口氏圖版

吾々は是の遺物を透して、此の遺蹟を他日に讓り考察を殘さなくてはならない。

（二） 三 輪 例

本遺蹟に就ては多年に亙つて研究されたる樋口氏の功績は極めて大である。今都合上、繩紋式土器を先に紹介し共伴物及遺蹟を後にする。

先づ繩紋式土器に就て、氏の高論を借らう(9)。

「自分の知見の範圍に於て約八十個近くの破片で、完全形は存在しない、全體の紋様は次の如くその土器の性質

と共に數種に大別することが可能である

（一）　線を以て限られた區劃内に縄紋を補鎮し、他の部分の縄紋をすり消したる、すり消縄紋（1―7）等で本類には曲線が最もよく發達してゐる。

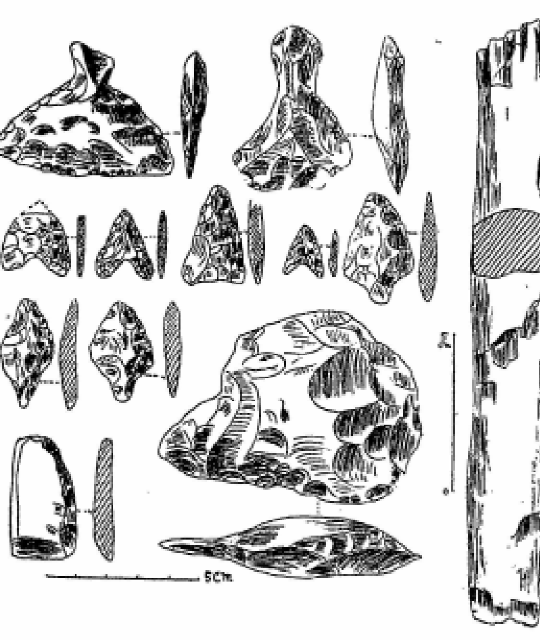


Fig. 5.　三輪發見石器

（二）　所謂諸磯式土器の代表的紋様であるところの爪形又は半截竹管紋（20―22）及び、帶狀に粘土を貼り附けてその上を點々と押しつけたところのやはり諸磯式土器の代表的紋様である貼り着け紋（19）

（三）　紋様表現が立體的で甚だしく豪壯で厚手縄紋式土器に近似せる一群（30―33）

（四）　縄紋甚だしく細かくなり、ほとんど關東彌生式土器の縄紋の如くなつて紋様も平面的幾何學紋であつて纖細なもの（34―36）

（五）　つゝき紋の平行（28）や極く退化した曲線紋（29）から成り縄紋は密に存在し口唇部にも點の連續を有する一群。

（六）縄紋のみを有する破片であるが、おそらくは他の紋様を複合して紋様を構成したであらうと思はれるがこの中には、羽狀縄紋（8、11、18）竪に走る縄紋帶（9）や其他の縄紋が存在してゐる。此等はその土器の燒成や縄

紋の性質から恐らくは大部分が所謂諸磯式土器の中に入れられ得るもの丶様である。

（七）共他、37 38の如き資料はほとんど彌生式土器の如きものであるが、なほ彌生式土器には見られないところの不規則な線より成つてゐる。39の如き資料は、その燒成と共に本遺蹟に於ては特に注意されなければならない存在であつて、その紋樣は彌生式土器の如きもなほ繩紋式土器の陸奥式のある物にも見られるところであつて、吉野郡宮瀧の遺蹟から類品が多數發見されてゐる。

次に樋口氏は右の六種に分類し、而して、

第一類　近畿としては珍らしい一類であり、その分布がよし廣く關東、近畿、中部、九州に存してゐても、是を諸磯式中若しくは國府式に插入出來ない。

第二類　諸磯式に屬せしめ國府式に入れられる。大和の下淵や宇陀郡其他の地方にも發見する。

第三類　厚手繩紋式土器の系統、近江山城に輕微に存す。

第四類　繩紋式系滅消直前の存在、近畿繩紋式土器編手確立の際に於ける重要なる役割を演ずるもの。

右の事實は、近畿の諸遺蹟と對比してその有する指示のフエイズには研究上最も注意を要するのみならず、他の遺物の共伴に就ても一考を要するものである。卽ち彌生式土器、石器の諸種、其他等であるが、先づ彌生式土器に就て[10]要素を借れば、大體に於て四種類に分類され、第三の一部第四は所謂土師器に含有されるもので、第四を除く外は、明白に石器を伴つてゐる事實を證せられてゐる。この分類別については今は此處では借らず、唯本遺蹟に於て最も多量にして且つ様式のバラエティを有してゐることである。然して、これは、土器編年の根據ともなるべき文化特色の差を示現するものとされてゐる。要するに、やはり本遺蹟も竹之內例の如く、複合遺蹟とし

て絶對價値を有する一であることを證される。次に石器に就ては打製石器が大部分を占めてゐる。石鏃に於ては薄肉精巧であり、三角凹底が大部分を占めてゐる事は大和の低地遺蹟に對して著しい差異がある。石棒は非常に大和としては珍らしく酸化鐵が一面に塗彩されてゐる。その他は借らず、要之、石器それ自體は土器に關聯する樣であるが大和の一般低地遺蹟と同樣のもの及び稍趣を異にするものとの二樣の存在を見、打石器の薄肉鋭利なることは後者に屬してゐる。スクレーパー形皮剝、石棒の存在は繩紋式土器共伴を示し、精巧な鑿形磨石斧、異形石庖丁の存在は彌生式土器の性質を説明する資料であるとされてゐる。

次に遺蹟地を見るに、三輪山麓一帶に擴がる傾斜台地上部及び低い部分に亙り、台地頂上部に薄く低い部分が厚いが水系に惠まれた附近程厚さを增してゐる。包含層は、必ずしも明確に區別された狀態でなく、繩紋式、彌生式、祝部式等が存在するのであつて、すべての關係が漸進的に變化してゐる。樋口氏は是はただ一層であると斷言されてゐる。(11)

Fig. 6.　下淵發見石器

現小學校附近の層位を表にすると左の如く簡約出來る。

(層位)	包含層	及び遺物
最下位	三〇糎	彌生式土器 石器
中位	四〇糎	彌生式土器 石器 繩紋式土器(極少量)

上位　中位以上　祝部式土器
鐵　鉢(多量)　}何時の間にか四〇糎—五〇糎
彌生式土器(純層)
石　器(少量)　}丘陵麓ノ一米ノ層

尙、其他樋口氏自身の層位研究中、焚火址と敷石の存在の二様相を得られた事は特記せねばならない。又注口土器の注口部一個や土獸等も採集せられてゐる。兩式のいづれにしても大和に於ける問題は大きい。其他「ふいごの火口」の發見は「特に注意すべきは製鐵關係の遺物であつて、之は金屋部落の地名や、製鐵業に關係深き出雲民族の存在と重要な關係にある歷史的事實と共に本遺蹟の文化價値は大である。」

以上の如く、三輪遺蹟は極めて重要なる位置を占むるに至り、樋口氏の勞を謝すと共に、大和繩紋式系遺蹟及び彌生式複合相に於ける傾斜地遺蹟として益々その存在を可能ならしめる。

(三) 下淵例

本遺蹟に就ては、最初の紹介者森本氏の遺蹟と石器[12]次いで樋口氏は土器に於て紹介され[13]兩者に據つて完成せられた譯である。今兩氏の本文の要素を摘出しやう。

「地は洪積層の台地に近接した南面の一丘陵を爲し、眼下に美しい吉野川の流れ」がある。

「土器の破片及び石器、石屑等の發見區域は約一町歩以上に及んでゐる。今は農耕の爲遺物散布地と化し土器の如きは三寸以上の破片を見ない。」「本來の狀態は表面の耕土が約一尺內外あつて、その下に黑色の有機質土が存在し、これが厚さ一尺內外で、その間に石器や土器の類を包含してゐたらしい。」本遺蹟の層序的は繩紋彌生祝部の三者如何であつたか知られない。

石器は「類別すると石鏃、石錐、石匙、石斧、砥石等で、多量の石屑の存在を認め得る。製作は打石器が多くて磨製品は僅に三四點。」は前述竹之内遺蹟と類比して相當興味を以つて迎へられる。「打製品中の石鏃は發見石器の大部分で玻璃質安山岩が多數白色石英質一個」存在した樣である。「石鏃と共に特記すべきは石匙で小形の横式何れも撥形に近い。「石器としては特に注目すべき遺品を見ないが、その大和の遺跡に多い普通品であることは土器の特徴あると對照して別個の意義を有すものとして價値。」を見出されてゐる。以上森本氏。

扨て問題の中心となるべき土器に就ては、以上の如き石器の中に彌生式祝部式と共に含有せられるが、後者は「その特色とする所少く共に薄手なるを舉げ得る程度。」でその數量も極めて少い。「繩紋式土器について本遺蹟が持つ第一の特色として擧ぐ可きはその發見數の極めて多き點であり」樋口氏の採集の結果は、繩紋式土器三〇對彌生式又は祝部式一の割合である由である。然して「本遺蹟を以てたゞちに三輪、河内日下等と類を一にする危険性」を思惟されてゐる。

Fig. 7. 北六田發見土器

「繩紋土器はすべて薄手にして、脆弱に、吸水度極めて大に石英粒子の含有亦多し。破片中には完形に復見し得る程度の物無く、わづかに腹部肩部底部を知る。」「破片中六割迄紋樣を有す。」るもので、紋樣は四種に大別し得べく繩紋、爪形紋（半截竹管紋）凸帶紋、曲線紋に在り、「繩紋中には羽狀繩紋を含み凸帶、爪形紋又平行相交の二種あり。」と述べられてゐる。據以上樋口氏　　氏のアイヌ式土器拓本（考證一七ノ八六七頁）參照。

現今の當遺蹟は元縣立農林學校農園を大淀町大淀第二小學校となり既に校舍建設され遺蹟の面影を存してゐない。昨年夏訪問の際には吉野高女(元農林學校舍)にも小學校にも何等の遺物なく唯遺蹟地に於て極僅に碎片を止むるのみとなつた事は誠に殘念である。

Fig. 8. 宮瀧出土土器

元來吉野川沿岸遺蹟(下淵、北六田、宮瀧等後述)はその北岸にして南方に傾斜し、所謂第二段丘に位して居り、現在の下淵聚落は第一段丘川岸に存してゐる。此點沿岸遺蹟としての一般的通有性である。[14] 此遺蹟は吉野川沿岸に於ける最も早く知られた所であり、從つて遺物も相當多く散佚してゐるが、打製石器に著しい特色を持つものであつてもこれが兩者のいづれの土器に共伴したかの層予列的問題は未解決である。けれ共彌生式土器の出土量が繩紋式土器のそれに對してより少量とすれば稍石器と繩紋式土器と意識づけられると思ふ。[15]

自分が北六田遺蹟に於て檢出せる石器[16]はその石鏃に就て顯著なる特色としては打製でありその形態が三角凹底なることを出土數量の全部に見受け且つ精巧薄手であつた事と思ひ合すれば下淵遺蹟と聯關的認識を深めるであらう。北六田に於て發見せる繩紋土器はその紋樣が極單調であつて所謂繩席紋であるが、彌生式土器の存在の少量なることは下淵に近似の狀態に置かれる。然し北六田は未だ試工作にあるから將來を劃圖せねばなるまい。

（四）宮　瀧　例

山岳遺蹟として含有地域の最も廣汎にして且つ遺物の最大なることは吾大和隨一であると云つても過言ではない。重大考古學教室の末永雅雄氏の多大なる勞費と綿密周到なる方案により爲された事は學界に過大の裨益を持つものである。昭和六年以來未だ今日に至るも繼續され公掲されてゐないから今はその機でない。が、略報を二回齎らされたから、(17) それによれば、

「吉野川紀ノ川流域に於ける石器時代遺蹟としては、和歌山市外の鳴神貝塚を以てその最も著名なるものゝ、其他吉野の下淵に少數の石器時代遺蹟の曾て發見された位が先づ一般に知られてゐた所の遺蹟で、……最近宮瀧の對岸字御園にも更に亦上流の國樔村にも同樣な狀態を究知するに至つたのも、要するに大和の奥地より發して和歌山に入り、遂に瀨戸內海に通ずる所のこの吉野川紀ノ川流域に於ける、先史遺跡の分布が決して僅少でないことを示現するものなるは今更言を俟たない。」

「從來の本遺蹟の調査は主として吉野離宮址推定に基く考察の爲」であり、濱田博士の實地檢討に際して「石鏃土器片等の遺蹟採集に初まり遂に石器時代遺跡（更に繩文系の）考究といふ課題」のもとに爾來三ヶ月「發掘豫定地第一區第二區のうち約五百坪を發掘し、併せて偶然な機會から發見された第五區の一部をも調査した。」

次に之が發掘の次第に就ては、石葺の下に石器時代遺物が存在するのであつて、「地質の狀態は、多少砂を含むも黝黑色を呈し表土との區別し難くして、概ね地表より三尺三寸――三尺五寸を以て普通とし、石器土器の類は石葺下約二尺を上下する厚さの層位內に包含されてゐる。」「特に濃密な石葺の地域を中央より切斷して發掘した場合、僅少ながら繩文式土器が彌生式土器の一例よりも深い位地から發見される傾向を稍〻認められる。」のであ

るが、此の石葺下の遺物は、石器、彌生式、縄紋式、或はその中間形式の土器が大部分であつて、「畿内附近の他の先史遺跡に比して斷然縄紋式が優勢を示す點が、本遺跡の特異性と爲し得るであらう。又彌生式と縄紋式の中間形式とも稱すべき土器を見ることも注意を要する現示である。」彌生式土器に於ては「文樣上には著しい特殊性を有しないが、高坏及び石を以つて蓋とせるもの、大小の土器を合せ口として埋沒した數例を徵し得た。然し此の土器は形が小さくて、北九州に多い甕棺の大なるには比し難い。」この工作に就て、「屍體を容れたのよりも土器を以てした蓋と解する事が妥當」とされてゐる。次に石器に就ては、「磨製の石斧、石鉈、石鏃、石錐、石刀、石棒等があり、打製品には石器としての利用を疑はれる程度の粗雜」なものが多い由である。「磨製石器は比較的優秀品が多く、就中冠石、(或は石鉈?)の如きは稀覯に屬し」て居り、「石刀は內反及び刀背に樋を刻するが如き特殊形式」があり、「石鏃中には纖細な加工の迹を示し」てゐる。「磨製石庖丁や抉入石斧を得なかつたのは、よし今後發見さるゝともその量は多くはなからう」とされてゐる。最後に特記せらるべきは、第一區の西南隅に於て、表土下三尺を上下する地層內に「厚さ四寸、廣さ約一平方坪の周圍に數個の塊石を不規則に配置し、縄紋系の緣の高い鍍形土器が東方に存し、人骨は木炭灰土器破片石屑等と共に雜然と存在し、然も獸骨と混在して何等秩序的遺存狀態を認められない。のみならず骨は總べて表面に無數の斷裂を生じ、明かに火中に燒かれた事を首肯せしめ」られたのであつて、金開博士は成人及兒童の下顎骨を族出せられたのであつた。以上歷史と地理二九ノ五

當時の諸新聞は末永氏の歸廳每に新資料を滿載し吾大和石器時代隨一の誇を高らかに奏したのである。吾々は直接遺跡を訪れ、その後も親しく末永氏に御意見も拜聽したが、此の中莊村役場の縣道を中心に左右に亙る廣汎な地域は總て一樣でなく、東するに從つて縄紋式土器が薄く又全然認めない由であつて、反對に彌生式土器が多

量に出土した譯である。つひ先頃、小學校を此地に移建するに際して再び土器が出土しつゝあるが、是等は彌生式系であつて可成土器そのものに特色を有してゐる。末永氏は此の珍らしい合口式のもの等に對して「宮瀧式」としての假稱を附して可なりと云はれてゐる。

此の遺蹟は全く不可思議極まるものであり竹之內、下淵等に比して打製石器の伴ふ著しい特異性たるに反して可成相違ある樣に思はるが今此の遺蹟に對する考察を爲すべきでない。次に繩紋式土器を窺ふに、かの竹之內遺蹟に於て見らるゝそれに多くの類例を求め得らるゝのであつて、竹之內の頃中、森本氏が「大和宮瀧により近い」とせられた一稿が適當である樣に思はれる。關東北の所謂「陸奥式」と稱せらるゝ一群に類するものである。

多くの期待する此の宮瀧遺蹟に關する諸相を示現する報告の公刊を一日も早からん事を切望する。

（五）大野例

此の遺物に就ては猪狩氏の報文がある。(18) 氏によれば、「石器は打裂に屬する異形品で、製法は大和に多いサヌカイトの用材に第一打裂を與へ其の周邊に少しく打缺きを試みた」もので一個を舉示せられた。土器に就ては、「繩席紋の地紋を有し淡黑褐色」であつて「比較的緻密な粘土に砂を混じた堅緻な燒」である。原形は大形な鉢形土器と想像せられ、河內國府の繩紋土器の大形な鉢形土器に類似のものであるかも知れぬとされてゐる。注目すべきものとして、「紋樣や個々の手法、特質に於て認められる彌生式土器との類似點である。既此土器と彌生式土器との間には截然とした製

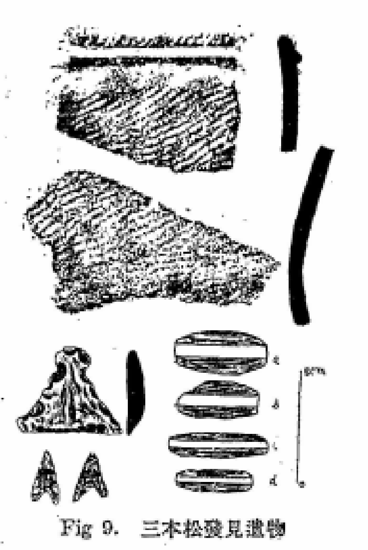


Fig 9.　三本松發見遺物

作上の區別を律せんよりも、寧ろ兩土器の間に多分に認められる手法上や特質上の類似に興味ある注意を惹く。」と論ぜられた。氏の報ぜられたのは土器二個石器一個であつたけれ共、其後今日迄の間に所藏者橋本由太郎氏の熱心な蒐集によつて石鏃及び土錘等を得られた事は誠に喜ばしい極である。自分は今猪狩氏の續報として次に紹介して置かう。

（一）石鏃、二個ではあるけれ共、誠に完形品であつて兩者共三角凹底、サヌカイト製であり裂面細詳精巧薄手で鋭利ある。大和に於ける山岳地帯に多分に出土する範疇に屬し、繩紋式土器に伴出する部類に編入し得られる譯であり、猪狩氏の報文を十分に裏書し得ると思ふのである。

（二）石匙、一個であるが誠に精巧であつて喜田博士の激賞せられた事も不可思議ではない。形態は把手の基に正三角形を附加した如き觀がある。三輪、竹之內、下淵等の繩紋式土器等に伴出する該石匙とは等均なる類似點を見出し得るのも面白い事實である。

（三）土錘、四個存する。aは中孔の兩側に丸味を多く帶び、cは細長い。bは一部欠出してゐるが他は皆完全、aとdは少量の石英粒を含有してゐる。色はaが黑色bが灰白色、cが褐色でdが灰白色で他より堅緻である。

以上簡易に遺物を追補し得たが、最後に、遺跡に就ては橋本氏よく實地檢證せられ詳細なる實測圖を作成保存せられつゝあるが、宇陀川より去ること約百尺の所にして南面し、遺蹟地を中心としてあたかも圓形を呈する如く屈曲してゐる。川床より凡そ二十尺の高地に存し、洪水位十尺としても尚十尺の台地となるのであつて背面は愈激なる山を爲して居り、かの吉野川上流に於ける宮瀧の地形を縮圖せる如く思はせるものである。

電燈會社建設の際、凡そ五尺の層を採土せる爲、土石器の包含層は全く除却せられ、その工事が橋本氏に報ぜ

らるゝ以前に擧行せられたから今の所何等證する資財に乏しいから層位研究上最早絶望である。

（六）榛原例

日本石器時代地名表を見開くと左の遺蹟がある。

1. 榛原町荻原天ノ森　土器　山本藤壽郎
2. 同　同　田切　石鏃　井上　賴壽
3. 同　同天神ノ森　同　同
4. 榛原町北方　土器 石器　小泉　顯夫

右の内繩紋式土器出土遺蹟は、大樣二大別する事が出來る。卽ち神武天皇が皇祖天神を奉祀せられた鳥見靈畤及び舊墨坂神社境内たる天ノ森である。此等の出土品は、同神社司太田氏及び榛原町の縣立宇陀高女鄕土室に保存せられてゐるが、此等を親しく拜見する事が出來又太田社司から詳しい御意見を拜聽するを得たが、天ノ森のは二三の破片、鳥見靈畤のは數十個の微破片であるが兩者に相當の時間的差異を持つものであるかと考へられる。卽ち天ノ森例は暗褐色むしろ黑褐色であり口緣部に著しい凹凸帶を繞らし製作上稍〻飛躍さを持ち、かの三輪に出土せる一群に類似し彌生式の共伴が認め得られない（勿論現在迄であつて將來は不明）のに反して、鳥見山例は卽ち赤褐色であつて純繩紋帶を施し彌生式土器との共伴著しく、むしろ彌生式的色彩に富むものであり、三本松村大野との共通性が大である。先年元榛原權宮司二宮氏及太田氏等の試掘によれば鳥見靈畤の祭壇と思はれる土壙中に及びその西方附近に全くの破片となつて地下凡そ一尺の下位に一尺——一尺二寸の層位を有して繩紋彌生兩式土器が混然と共存してゐたものであつて大和山岳各地の繩紋式土器伴出遺蹟との共通性を多分に暗示して

ゐる。然乍その混存分量は縄紋式土器に出色を見る由である。

鳥見山遺蹟に於ては是と共伴の石鏃三箇を拜見したがいづれも三角凹底で薄手精巧裂面少さい。いづれの土器に共伴するかは明かでないが、恐らく山岳遺蹟一般の通有性として縄紋式系のものではないかと思ふ。

四、總　括

以上の諸遺蹟を總括的に眺むる時、先づ水平分布帶の觀察が必要である。自分は曩に之を水系に據る分布を示したが、人類生存の必須用件の一たる水系が此等遺蹟遺物に重要なる役割を占據する事は勿論である。吾大和に於ける遺物の分類上に於て可成複雜なる諸相を示す上に就ては近畿に及ぼすべき場合は勿論吾大和に於ても水系類別も一の見逃し難い考察であらねばならない。

近畿の縄紋式土器遺蹟の水系類別に就て直良信夫[19]は是を左の四種類に區別せられてゐる。

一、太平洋沿岸帶（鳴神、大歳山、福良）
二、日本海沿岸帶（中ノ谷、石濱）
三、琵琶湖沿岸帶（京大農學部構內、岡崎、尾崎沖、醍醐、伊吹）
四、中央近畿帶　1. 木津川區帶（三本松）
　　2. 大和川區帶（三輪、櫻川、新澤、國府）
　　3. 吉野川區帶（下淵）

直良氏の提携せられた所謂中央近畿帶は、國府遺蹟を除けば他は全部吾大和に存在する。故に勿論狹義に於ける大和帶として觀察する事も無解でもあるまい。

A、大和に於ける諸遺蹟の水平的景觀

一、木津川區帶、高見山に發した芳野川、龍門山塊に發した宇陀川が榛原にて落合ひ、宇陀川の流となり、下流するに從つて名張川木津川の名稱が存する。龍門山塊に發した宇陀川中に、松山遺蹟、本流宇陀川中に……榛原遺蹟、三本松遺蹟。

二、大和川區帶、大和川は大和平野を圍繞する所謂「青垣山」に發した諸川が王寺附近に合流し大和河内の中間、二上山塊の北部に存する龜ノ瀨、明神山(兩者は近年地辷を以つて云々された)の段層を通過して西して河内國分遺蹟を含み大阪灣に注入する。元より大和川に注ぐ支流は大凡大和平野を通過せねばならない。

(1)二上葛城兩山の中間竹之内峠附近に發し下田に於て小流合し葛下川となり大和川に合流する、葛下川……竹之内遺蹟

(2)初瀨町附近の天神山初瀨山等に發した諸小川は初瀨川の名稱を以つて大和平野の中央を南東から北西に諸聚落を淀しつゝ大和川に合流する、初瀨川……三輪遺蹟

三、吉野川區帶、吉野連峯中の大台ヶ原山、白髮岳、伯母峯等に發した吉野川上流及び高見山に發した高見川の兩川が國樔村に合し上市下市五條を通過して紀川となり大平洋に注入する、吉野川……下淵遺蹟、宮瀧遺蹟(北六田、御園、南國樔等を加ふ。)

B、大和に於ける諸遺蹟の垂直的景觀

大和盆地は標高三、四十米から約百米に亙る高さを持ち花崗岩を主體とする四周の山地に圍まれてゐる。嘗て地表の垂直的肢節を削り準平原化を受けた後に隆起し、同時又は後れて斷層通動が起り盆地を形成した譯である。

(第三期末に於て)從つて周圍に箇々のブロックを此際作成せしめたもので、盆地に臨める現在の山地塊たる、(1)金剛山脈(1112m) (2)生駒山脈(642m) (3)笠置山地(4—500m) (4)法隆寺丘陵(100m) (5)龍門岳(604m) 等がそれであり、恰も擂鉢の底の如き位置になつてゐる。[20]

日本石器時代地名表「大和」を開けばその發見地が百七十個所に近く、然もその九〇%以上が大和川流域の沖積地たる大和平野に局域内に發展せる彌生式系遺蹟と、一〇%に滿たない山岳地洪積層上に繩紋系遺蹟が存在するのである。遺蹟の存する附近に於て、宇陀川の三百米、吉野川の百五十米——二百米、初瀬川の百米、下田川の上流の百十米となりかの彌生式系遺蹟が百米——五十米に對して兩者の對立を考へさせられると共に、又いづれにしもその遺蹟が自然的單位として此の河川流域に生活の方法と外形を同一に溶解せしむることは人類の根本原則として認識せられるが、繩紋式系遺蹟が諸川の最上流に占據してゐる事實は何を物語るものであらうか。

C、大和繩紋式土器の特質

前述の如く諸遺蹟が何れも獨立遺蹟として存する事なく彌生式遺蹟と混在する複合相であり且つその量比が著しく彌生式土器より小量である。又宮瀧遺蹟に於て末永氏の概要の如く層位關係は朧げながら繩紋式土器が下列に存するものも在るが大略他の諸遺蹟は正しい層序列を肯定し得られない。又、三輪の如く兩式土器の上下關係が平行してゐる事實等に徴して、繩紋式土器が彌生式遺物の從屬的關係と考へられ又、直良氏の如く遺蹟自體の本質が、既に特異な表相を有する上に、それ等の遺蹟より發見せられたる繩紋土器が、他の本邦發見の繩紋土器とは、等似性に乏しい所がある。」と考へられる事に同意するものであり、兩者の複合相は、「彌生式土器との心相上に於ける類同が認められながら、尙その中に於て、繩紋土器としての固有性を失ふこと無かつたのである。あ

たかも今日朝鮮人が内地に住して日本語を辨じながら生活狀態が全く朝鮮式であるのとは大同小異である。

然らば吾大和各遺蹟出土の繩紋式土器に就ての自分の樣式觀を掲げたいと思ふ。

かの關東北に於ける諸磯式と稱する一群に類するもの、及び龜岡式と稱する一群に類する二樣相を發見し得られる。元より此の樣相に就ては所謂繩紋式土器の普遍妥當性の内にある特色を有する發展性であつて還元すれば等しい相と見る事が出來ない譯である。此の類似相を透して自分は前者をＡ者土器、後者をＢ者土器と假稱したいと思ふ。更に外形上Ａ者土器は極めて單純素朴であるに對して、Ｂ者土器は豐富なる複雜華麗さを把握してゐる。從つて製作技工よりすれば、Ａ者が鈍飾なるに反してＢ者は精巧である。故にＢ者の持つ華麗さ精巧さはＡ者よりもはるかに一段高次的文化の域に發展したとも云へる。今此の二樣相を遺蹟に就て分類すれば、

(一)Ａ者土器……三本松、榛原、下淵、北六田、三輪、下田等

(二)Ｂ者土器……宮瀧、竹之内

となる。然乍、當然各々の遺蹟に於ては多少の特色を有し且つ劃然性を率直に判別する危險性を認めて置かねばならない。

兩者土器の地理的觀察は既に了した如く、Ｂ者が大和川及び吉野川に存在する事になり、傾斜地及び山岳地のいづれに於ても占守する譯である。

便宜上畿內の繩紋式土器を分類するに當つて木津川を界線とし、畿北畿南の兩稱を附し前者には厚手式を伴頼後者には薄手式を伴出する。自分の考ふる處に就ては、よしそれが二分割し得ても、時間的に相違はあれそこにはより高い文化を持つ彌生式系の合成があり原始繩紋土器の特色をいつしか失格されたであらう。それ故に吾大

和に於ては（又は畿南）割合に早く合成された事は認容されると思ふ。

右を事實として肯定出來得れば、原始縄紋土器がやがて彌生式土器に合成されてゆく時は何時頃であるか、吾吾は次の如く解釋し得ると思ふ。

先づ彌生式土器自體の大和に於ける存在は九州立屋敷の東漸せるＡＢ兩者土器であること、關東北の原始縄紋土器に對して大和の類似縄紋土器の存在が一は古式系とされるＡ者土器と一は新式系とされるＢ者土器のあること、純彌生式土器發見遺蹟が吾大和平野に許容されるに關らず縄紋式土器が傾斜地又は山岳地に彌生式土器との複合相を見ること、以上の三點を關知すれば、彌生式系が大和平野を中心として愈々强力なる文化の燃上する頃、低い文化に滿足した縄紋式系が合成されたとの考へ方に同意したいと思ふ。從つてその合成迄の彌生式系に於てはその示現する樣式の一なる古式彌生式系が大和平野に根據擴充し更に二なる新式彌生式系の轉住に據つて縄紋式系が合成されたと見るべきである。然らば縄紋式系の二樣相は如何なる姿に置かれてゐたか、自分はこの姿に對してやはり第一次にＡ者土器、第二次にＢ者土器が移動してゐたのではあるまいか、かくして各々の生業樣素の相違がしばらく持續の姿に於て對立を見、新高次文化把持者によつて合成されたと解したい。勿論此の對立は嚴然たるものでなくて融合的な立場にあつたであらう事は、例へば新澤に於ける施紋法が縄紋化された彌生式土器の存在することは證明せらるゝであらう。

吾大和の縄紋式土器が以上の愚論によつてその樣式式型燒成紋樣等々より類推して、又高次的文化保持者たる彌生式土器の中に合成せられたる上は、單なる關東北乃至は中國四國九州のものと對比し關係づけるものでなく更に縄紋式土器の分布帶並に含量の微少なればなるだけ、吾々は是に對ずる關知性を十分ならしめ、縄紋式土器

の普遍性の中に大和としての型に對する特色を考へねばなるまいと思ふ。

D、餘說

近時學界に漸く提示さるゝに至つた生業問題は、文化階梯を追ふて順次發展する、狩獵、漁撈、農耕、牧畜の四者が、繩紋彌生兩式土器民族に對して如何程迄に文化價値を有してゐるかの問題が、吾大和の遺跡に就ての深い關心が未殘である以上、概論をさへ許さない。殊に繩紋系に立到つては、彌生式系が稍發展性を持つに反して尙更未解決の途上に在る。從つて生業的價値を本研究に見出す事の困難を感ずる。卽ち、(一)、完全なる層位學的研究の欠除、(二)純繩紋式遺蹟の未發見、(三)、文化的な食物[21]の大部分が有機質であるが爲に、直接的遺物の存在を示さないから唯今の本報告文中には朧げながら僅に住居關係な蹟として三輪を擧げ他は除外して置かねばならないであらう。

然しながら右を以つて滿足とせず順次此の方面の研究を新しく見返へしていづれかの機會に於て發表を試み度思つてゐる。

其他にも尙幾多の問題が關聯してゐるけれ共大略此の底度に止め長拙稿を終る。

【註】(1)　東京考古學會を中心とする近時の勞作に就てゞある。

(2)　奥羽地方石器時代實年代の下限　喜田博士　歷史地理六三ノ一

(3)　河內國府の石器時代遺跡　濱田博士　京大考古學敎室報告書二
　　近畿地方に於ける繩紋土器の研究　直良信夫氏　考古學雜誌一七ノ四

(4)　今や關東北の繩紋式土器名稱は主唱者の複雜化によつて、同一土器に對して異名稱を附せられたり、又、主唱者自身の體認によるのみにして他者の首肯し難い場合も無とは云へない。繩紋式土器研究の飛躍的發展は學界の慶賀に堪へないが、一面該土器が關東北獨占の狀態に在る。これが關西と如何なる關係に立脚するか、又日本全土に分布する該種土器の系統を、統一され單純された根據ある稱呼を望むもの

である。畿西の該種土器に對して關東北の何々式との稱呼法は、元より吾々に望ましくない。

（5）大和の彌生式土器　森本六爾氏　單行本「大和石器時代研究」
（6）大和竹之內遺蹟發見の石器に就いて　樋口清之氏　大和考古學二ノ四
（7）大和竹之內遺蹟　森本六爾氏　考古學四ノ七
（8）大和下田村出土の縄紋土器に就て　吉田宇太郎氏　考古學雜誌一九ノ四
（9）三輪の遺蹟とその遺物の研究　樋口清之氏「大和石器時代研究」
（10）同　同　大和考古學三ノ五
（11）同　同　同　二ノ四
（12）大和大淀町の石器時代遺蹟　森本六爾氏　歷史と地理一一ノ六
（13）大和雜報（共四）十二、下間の縄紋土器　樋口清之氏　考古學雜誌一七ノ八
（14）（16）北六田の遺蹟遺物について　島本一　大和石器時代研究
（15）大和の石器　島本一　大和石器時代研究
（17）宮瀧の遺蹟　略報一
同　二　末永雅雄氏　歷史と地理二九ノ五
大和石器時代研究
（18）大和宇陀郡三本松村大字大野の石器時代遺跡に就て　豬狩忠英氏　考古學雜誌一四ノ四
（19）近畿地方に於ける縄紋土器の研究　直良信夫氏　同考古學雜誌一六ノ六
（20）大和に於ける史前の遺蹟　森本六爾氏　考古學雜誌一四ノ一〇
（21）史前生業研究序說　大山柏氏　史前學雜誌六ノ二

人骨を材料とする骨器?

今から五年前、早稻田第二高等學院史學會員だつた柴三九男君が友人數名と共に、千葉縣矢作貝塚の發掘を行つた事がある。その時の遺物の中に、多分人骨と思はれる材料で製した骨器があつた。果して人骨だつたら大變貴重な資料だと思つたので、專門家の鑑定を求めようと、其後該遺物を借り出そうとしたが、卒業間際であつたのと、採集者にそれきり會ふ事が出來ず、又採集者の姓名まで御丁寧に忘れてしまつたので、殘念ながらその儘になつて居る。

遺物は多分尺骨と思はれる部分で製した、長さ二十糎ばかり、一端は破損し、一端はよく研磨されて尖つた骨錐様のものであつた。此の遺物を思ひ出す度に、遺物を見せられた時の自分の不用意さが、無暗に恥しくなる。人骨を材料とした加工品の例がありましたなら御示教の程を此の機會に御願ひ致します。（池上啓介）

東京市道灌山石器時代遺物包含層發掘報告

土岐仲雄

一 緒言

昨年秋より、本年三月にかけて發掘した、東京市荒川區渡邊町一〇三五番地（道灌山）所在の石器時代遺物包含層に就いて報告する。此等の遺物の研究調査及その發表に關しては、大山公爵はじめ、史前學研究所の諸氏、殊

に池上啓介氏、竹下次作氏の非常なる御骨折に與かつた。此處に深謝の意を表する。又發掘を許るされた樺島氏にも敬意を表する。

二　遺　蹟

(一)包含層の位置

道灌山は、有史以前當時、武藏野台から東方に突出した三大半島中の最北のもので、對岸下總台の一突起と共に、奥東京灣口を扼してゐるところの、上野半島とも云ふべき台地の、中央部にあたる地點で（史前學研究所・縄紋式石器時代の編年學的研究豫報第一圖參照）、標高約九・五米、嘗てこの台上は、到るところ散布地を有してゐた如くである。此の台上及附近に於て、從來報告された石器時代遺蹟を列記すれば、左記一〇箇所に達する。

1 下谷區上野公園新坂貝塚（彌生貝塚）
2 下谷區谷中領玄寺坂貝塚
3 荒川區日暮里九丁目延命院貝塚（土器は大森式）
4 同區同丁目南泉院散布地（新報告、土器は大森式）
5 瀧野川區中里貝塚（彌生貝塚縄紋式、祝部式土器と多少出土した）
6 瀧野川區西ヶ原町昌林寺貝塚（土器は主として大森式）
7 瀧野川區西ヶ原町高等蠶絲學校構內
8 巣鴨區染井墓地西北隅

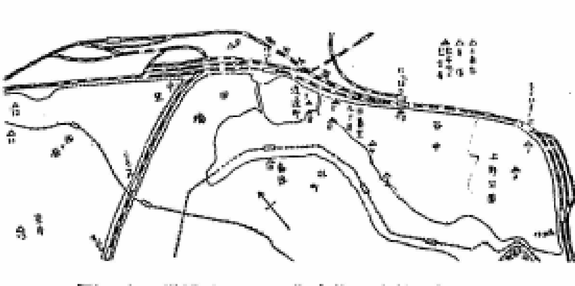


Fig. 1. 道灌山石器時代遺物包含層附近略圖

9本郷區動坂貝塚

10本郷區彌生町貝塚(彌生式貝塚)

11本郷區湯島切通岩崎邸内貝塚

此等の外日暮里九丁目諏訪神社に於ても、石鏃、土器等があつた事を、現物は見ないが、採集した人自身から聞いて居るし、その他第一圖にも一部示めした樣に、彌生式土器、祝部土器の出土地も相當にある。此等諸遺蹟のうち、本遺蹟は、中里貝塚、延命院貝塚、向ひ側の動坂貝塚に、最も接近してゐる。(第一圖參照)

本包含地は、上野方面から、飛鳥山へ、嶺づたひに拔ける舊道に、大體沿ふてゐる。市電道灌山停留場前の大通を、三河島の方へ數町進み、省線電車のガードに至る約半町の塀に沿ふて坂を登ると程手前の所で、東京開成中學校(この道がその舊道である)崖端に出ようとする手前、左側に二軒長屋がある。その背後に當つてゐる。もつとも此の庭は、反對側の樺島氏邸の裏庭つゞきで、今は家屋が新築されてしまつたが、當時はつゝぢ畑になつてゐた。(第二圖參照)

Fig. 2. 道灌山包含層所在地點圖

(二)包含層の發掘

昨年の春、自宅の庭を偶然掘り返した際、二三の縄紋土器片を發見した外、地つゞきの東京開成中學校に於ても、數年前及昨年、同校々庭取擴げの爲、崖崩し

を行つた際、彌生式土器、祝部土器、同校保存)、土偶(?)等を發掘したる事もあり、此の附近の各所に遺物が包含されて居る事を察知し、一度試掘しようと思つてゐたが、昨年十二月初旬、漸く機會を得て、先づ最初に一米位の幅に、長さ二米、深さ一米程を掘つて見たところ、果して間違のない縄紋土器片が數個現はれた。これに力を得て、それから一週間程、毎日穴の擴張、深化に從事し、その後も昭和九年二月末まで、暇ある毎に發掘して終には、第三圖の如く、幅平均三・八米、縱約八・二米、表面積約三一・二平方米、深さ約二・三米に及んだ。

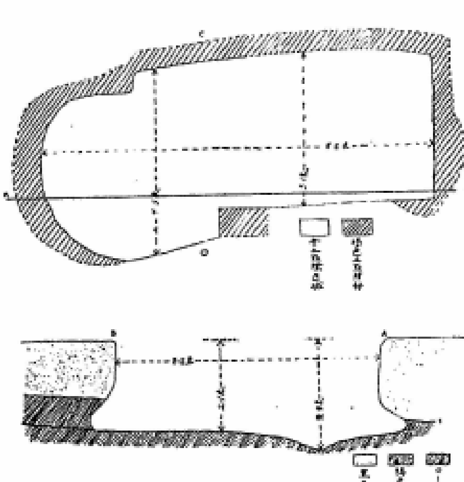


Fig. 3.　道灌山包含層發掘部位鳥瞰圖及AB横斷面圖

一體本包含地に於ては、ソイルの發達極めてよく、平均一・五米位で、漸く黒褐土層に到達する。更に平均約〇・八米で所謂立川層なるローム層が現はれて來る。

遺物は厚いソイルの下部の方にも、點々存在してはゐるが、黒褐土層に至つて數を増し、ローム層の直上からは、概して大きい破片を得た。土器量は中位である。自然遺物は、後にしるす如く、自然石の外何も發見し得なかつた。殘念ながら、爐趾或は竪穴等の住居趾にもぶつからなかつた。A面の一部を除いて、人工的に攪亂された痕跡は認め難い。C面に於ては、地上建設物の危險を慮り、B面に於ては立樹の根に妨げられ、A面に於ては層序亂れて土器量非常に少くなき爲、何れも發掘を中止した。唯、D面丈は、時間と、樹木の關係で、發掘出來なかつた。(第三圖及び第四圖參照)その外、同じ庭のうちで、他の二ヶ所を試掘して見たが、略々同樣の狀態に於て、縄紋土器片が出土し、そのうち一箇所に

於ては、淺いソイル中から、(地表下約六〇糎)比較的完全に近い彌生式土器を發掘した。

三　遺　物

(一)　自然遺物

自然石

種々なる形體の、大小幾多の自然石を、ソイル、黒褐土層の何れからも、等しく發見した。それ等のうちには多少石器製造の破片らしきものを含んでゐる。その他燧石の破片一個、石質不明の美石一個、丸い大きい輕石一個をも出土した。然し、此等以外の自然遺物は、本遺跡に於ては、一個も發見し得なかつた。

(二)　人工遺物

(a)石器

磨製石斧1個

Fig. 4. 石　器

青黝色で、石質は不明であるが、兩面とも粗雜、一面にはその中央に、深い自然の割れ目が縦についてゐる。長さ八糎、幅最大五糎、もとのところ三・五糎、刃幅四糎、關東に多い兩刃で、刃は曲線を爲し、勿論刃は一端丈である。

(b)土器

(I)形態を知り得るもの1種

全器形の、縱われ、約5分の3。口徑一六・二糎、底徑六・五五糎、高さ一八・八糎、厚さ〇・二糎、底の厚さ〇・二五糎。全高の約三分の一迄は、略圓筒狀を爲すも、それ以下は漸次すぼまつた壺形である。口唇は外そぎで、大體は水平口であるが、全體に、多少たくまざる高低あり、半圓に約四十四の、口唇に直角な刻みがある。口唇から胴部にかけて、一見カヤマ式土器に見る如き、幅約〇・一糎の直線紋が、交錯してついてゐるが、底に到るにつれて、無紋に近くなつてゐる。この交錯直線紋の更に上から、薄い、細い、多少波狀を爲した曲線が、約一糎程の上下間隔を置いて、一條又は二條重なつて、土器を取まいてゐるのも認められる。內面及底の內外面は全く無紋である。色は口邊部は煤色、それから底部に到るに從つて、赤色になつて行く。所々に眞赤になつてゐるのは、表面が剝離して出來た斑紋である。內面は全部煤色の粗面。土器質は脆弱に近く、つなぎは少量のさらゝに、多少砂を交へて居るらしく、器形製成の手法は捲き上げによつて居り、底部は、あとから、別に取りつけたものの樣に思はれる。口唇から約一・五糎のところに、外から抉つた直徑約〇・七糎の貫通孔があり、勿論これと向ひ合つた部分にも、それと對のものがあるのであらうが、缺損してゐて不明である。これは最初からあるものでなく　一種の廢物利用的の意味のものらしい。（圖版第四A）

（Ⅱ）略形態を知り得るもの4種

（イ）主片外5箇の土器片。

口徑二五・八糎、厚さ一・二糎、口唇は水平で縱にまるく、四本乃至五本の餘り深くない平行沈線紋が、口唇に平行について居り、口唇より約三糎下には一箇所鳥渡脹くらんだ部分があつて、是れ以下の胴部に於ては、次第に周邊が小さくなり、口邊部に存すると同樣の沈線紋は、五本乃至八本づつ帶狀を爲し、此度は口唇に對して、

直角の方向をとる。この帯は場所によつて、互に相ひ接觸し、或は交錯してゐる。大體は乳白色を呈し、所々に相當な面積の鼠色黑斑がある。質は稍々堅緻、底部は不明であるが、普通の丸底と思はれる。(第五圖1)



Fig. 5. 土　器

(ロ)口邊部5個　胴部以下32個

口徑約一四・六糎。厚さ一糎。口唇には約一糎毎に一個づつの凹凸があり、口唇は兩そぎで無紋、器面全體に、自然に出來た篦目樣のうすい條が見える。色は黑褐色、場所によつては黑色、質は相當に堅緻、底部の破片から見ると、全器形は(I)の完形土器と、略同樣の形態らしく思はれるが、正確な高さは不明。

(ハ)口邊部2個　胴部以下11個

口徑一九・六糎、厚さ〇・九糎、口唇は兩そぎで波狀を爲し、內曲してゐる。土器面全體に、口唇と斜交する繩紋がついてゐる外、無紋である。たゞ波狀を爲した口唇の下部約一・五糎のところに、諸磯式の一特徵である例の臍の樣な突起がついてゐる。(第五圖3)色は一見紫に近く見える部分から、鼠色、黑色、又場所によつては淡褐色の部分もある。土器の質は、脆弱でなく、つなぎに纖維と、砂が入つてゐる。底邊について知り得ないのは殘念である。

(ニ)口邊部3個　胴部以下約29個

口徑一二・四粍。厚さ〇・八五粍。前の諸土器に比して小型である。口唇は兩そぎの水平口。全く無紋であるが、場所によつて多少光澤がある。この土器の破片に限つて、割れ目が粗なのは、粘土の質が粗大である爲か。色は赤褐色、黑褐色乃至場所によつては光澤ある黑色。薄い割に質は堅緻、底部は之も不明である。

(Ⅲ)口邊

(1)口邊以下多少の破片あるもの14種41箇

(イ)口邊の水平なるもの6種13箇

うち二種は淺い細い沈線紋(うち一種、口徑二四粍、厚さ〇・七粍)他の二種は鼠色の無紋(うち一種口徑二〇粍、厚さ〇・七粍)殘り二種のうち一種は浮繩目紋(口徑三四粍、厚さ〇・九粍)一種は蓮田式によく見る貝殼紋に似てゐる。(口徑不明、厚さ〇・六粍)

(ロ)口邊が内曲してゐるもの黝色のもの2種外黑斑ある褐色のもの1種。都合3種8箇。

黝色のものは兩者とも大型で、一つは少くなくとも口徑五〇粍以上、厚さ一・二粍。口邊に附着線紋があり、それ以下には繩紋がついてゐる。他の一つは、更に大型で、厚さ一粍、多輪沈線紋と繩紋とを有してゐる。褐色のものは無紋で、多量の砂と貝殼粒とがつなぎに入つてゐる。口徑一二粍、厚さ〇・九粍。

(ハ)口邊の波狀を呈するもの6種20箇

うち1種は内折緣を有し、器形頗る莊大で、内折せる口唇は波狀を呈し、その高くなつた部分は、突起は着いてゐないが、恰も把手の如き觀を呈して居り、勝坂式等を想ひ起こさせるに充分である。(これと同じ樣式で、口

邊が直角に近く內折し、やゝが更に大きく突出してゐる、線狀紋のある一個の口邊も存してゐる）第二のものは淺鉢形（？）で、多少內曲してゐる口唇は兩そぎで、この口唇に沿ふた數條の沈線紋と、その線に接する渦狀紋とが、諸磯式の特徴を最もよく現はしてゐる（口徑二八・二糎、厚さ〇・九糎）。（圖版第四Ｂ）他の三種は粗奔な生肌を持つた樺色の土器で、沈線紋。波狀口唇の頂點に、一つは二箇、他は一個の小突起を有する。前者に類似し。ものは、蓮田式にも認められる。更に他の一種は、口邊に沈線紋があり、口唇上に不規則な刻み目が入つてゐるた

（２）口邊のみのもの

（イ）無唇のもの15箇

うち口唇に刻み目あるもの二個。口唇の薄くなつてゐるもの七箇。厚くなつてゐるもの二個。殘りは普通の直唇で、そのうち一個は、口唇から約一・五糎のところに、そとから抉ぐつた直徑一・一糎程の貫通孔があり、薄い波狀線が、約二糎程の間隔を置いて、一本づつ口唇に平行にはしつてゐるのが微に見える。

（ロ）沈線紋のもの12箇

うち二個に浮線紋がついてゐるが、（圖版第四Ｃ）に示めしたものは、口唇にのみ浮線紋を有し、それ以下の部分は、はりつけ粘土のかたまらない中に、その上から沈線紋を施こしたらしく思はれる。その他、內曲したもの二箇、刻みの入つたもの一箇、殘りは尖唇のものと、水平直唇のものとである。

（ハ）浮繩目紋7箇

內曲したもの一箇。（第五圖２）內折したもの一箇。裝飾あるもの一箇。他は水平直唇。

（ニ）繩紋のもの32箇

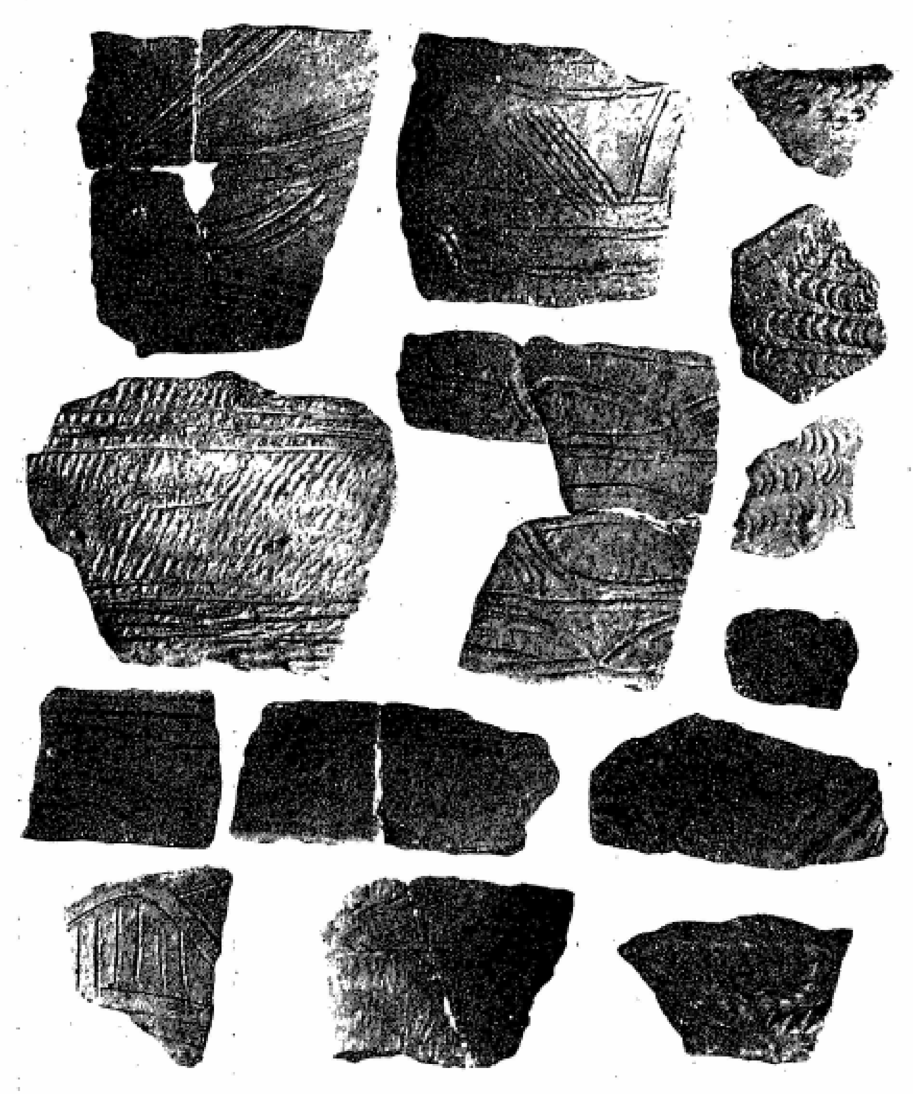


Fig. 6. 道灌山出土土器

絹目の如く細いもののうちに、外曲した口唇を持つものが數個あり、他は大概水平直唇。

(ホ)深きアバタ紋あるもの4個

うち二個は沈線紋、口唇は水平直唇、一個は刻み目ある水平直唇。

(Ⅲ)胴部破片

(1)爪形紋3種7箇(第六圖A、B、C)

無紋の表面に半切竹管紋を施したもの二種、平行沈線紋の間に、爪形紋を符したもの一種。そのうちの一種は纖維土器である。

(2)浮縄目紋35種60箇

うち約十種は、極めて多量の貝殻粉をつなぎに入れてゐる。浮縄目紋は大體直線が多く、縄目の方向は、一つの線と次の線と反對の方向を示めすものが遙に多く、線の幅は〇・三糎乃至〇・一糎。(第六圖ⅠⅡ及びⅢ)他に一個、浮縄目紋の感じを、沈線紋をもつて、器面に模寫したものがある。(第六圖Ⅲ)

(3)浮線紋6種7箇

(イ)附着紋線を上からゆつくり壓しつけたもの(ロ)約〇・六糎位の間隔をおいて、線の中央を、眞上から抑しつけてゐるもの(ハ)約〇・二糎位の間隔をおいて、〇・一糎位の幅の竹篦様の器具の先端で、浮線の一方の線邊のみを抑しつけてゐるもの(ニ)浮線紋、器面の區別なく縄紋のあるもの二種(ホ)手法稍ゝ不明のもの一種

(4)沈線紋39種91箇

(イ)主片外八箇。〇・二糎程の間隔ある平行線に、それと約三〇度の傾斜をもつて交はる數條の直線が配してあ

る。色は淡黒褐、器肌は粗なるも、質は相當堅緻である。（第六圖１及２）

（ロ）主片外五箇。數條の平行曲線とそれと約四〇度位の角度を爲して交はる數條のＸ狀曲線とからなり、色は薄い黒色、質は相當堅緻（第六圖３）

（ハ）主片外三片。〇・二糎程の間隔をもつた幅〇・一糎程の相當深い二條の平行線と、それと同じＯ型の線とが主紋で、器面にはうすく約一糎程の幅をもつた繩紋も見えてゐる。淡紫色で、質は脆弱（第六圖４）

（ニ）主片外一片。約〇・一五糎の幅をもつた平行線が、種々面白い自由な組合はせを示して器面にあらわれてゐる。土器の質は餘りよくないが、多少纖維が混じつて居る。色は褐色。（第六圖５）

（ホ）主片外九箇。一見厚手の如き土器。厚さ約一・二糎、現存部でも、直徑五〇糎以上あると思はれる。立派な條紋の上から、可成無秩序な深い七、八條の一群の平行沈線紋が、約四・五糎の間隔をおいて口唇に平行についてゐる。樺色で、所々に黒色に近い斑紋がある。（第六圖６）

（ヘ）主片外一箇。圖の如く、大森式に見る如き沈線紋、質は堅緻で、淡褐色。然し他に同じ模様をもつた、黒色の一片もある。

その他直線乃至曲線沈線紋のみのもの23種57箇。繩紋と平行沈線紋とのもの５種10片。此等のうちには、纖維土器も數種あり、質は相當堅緻なるもの多く、色は種々雜多である。特殊なものとしては、軟らかい粘土の上から施紋した如く、線の水々しく脹くらんだものが一箇ある。

（５）無紋93種203箇

器面に多少光澤あるものも存するが、概して粗面多く、色は赤褐色、淡黄色、黒色、淡黒色が多く、厚さ一・

二糎乃至〇•五糎。

（6）縄紋約155種160箇

諸磯に多い縄飛び紋のもの二〇箇程あり（但し貝紋の疑あるものは一箇もない）他は殆んど沈線の如くにも見える、細かい連縄紋のもの、乃至、頗る荒目の縄紋のもの等ある。色は淡褐色多く、この中には、他の土器の小破片も多數混じてある筈である。

（Ⅴ）底部破片69種72片

此等のうち全底形の半分以上あるもの三種で、その一は倒底平直底、圓底の直徑八•七糎、厚さ一糎、無紋で黒褐色、その二は梯平直底で、同じく圓底、その直徑七•九糎、厚さ一糎、側面に沈線紋があり、色は赤褐色、その三は倒梯平直底で、その低型七•二糎、厚さ一•四糎、色は淡黄色である。此等以外は底及底邊の小破片で、何れも圓底らしく、尖底は一個も認め難い。又何れも比較的小形で、底の表に、縄紋等のあるものは一個も存しない。

（Ⅵ）その他

半圓形をなし、その縁邊に刻み目ある把手らしきもの一個、無紋黝色の、糸底らしきもの二個を採集したが、此等の屬すべき部位は、今のところ決定し難い。

四　結　語

1、本遺跡に於ては、住居趾及動植物性の自然遺物等を發見し得なかつた爲、本遺蹟に關する史前民の生活様態を決定する事が出來ないのは、甚だ殘念であるが、大體に於て、遺物包含の狀況は、決して特殊なものではな

く、既に發見されたそれ等と同樣、純然たる石器時代遺物包含層の一つである。

2、唯、此處に聊か注目すべきは土器である。本遺蹟出土の土器は、浮繩目紋の壓着法のみから見ても、頗る變化に富んでゐるが、爪形紋、渦狀紋、浮繩目紋、平行線紋、飛び繩紋の存する點等から見ると、此等の諸土器は疑ひもなく諸磯式に屬するもので、唯、無紋のもの相當に多き點、既に一見大森式の如き土器の存する點、把手、台脚らしきものの存する點、口邊の波狀の大なるもの多き點(卽ち勝坂式土器を想はせしむるものある點)等は、他の諸磯式には餘り見られない諸點で、結局此等は諸磯式の弱い形式、云ひ得べくんば、諸磯式文化の末期に屬するものと、結論されるであらう。(尙、附近中里貝塚は前記の如く彌生式土器貝塚であり、西ヶ原及延命院兩貝塚は大森式土器を出土する。その他に關しては、未だ知り得ない。然し以上分つてゐる土器の樣式から推測すると、本遺蹟の土器は、斷然古き式に屬するものの如くである)

(了)

其の後の佐賀縣戰場ヶ谷遺蹟と吉野ヶ里遺蹟に就いて

七田忠志

其の後の戰場ケ谷遺蹟

爰に吾人が史前學雜誌第六卷第二號に「佐賀縣戰ヶ場谷出土彌生式有紋土器に就て」と題して發表させて戴いた佐賀縣神埼郡東脊振村寺ヶ里戰場ヶ谷より其の後、相當量の、しかも、紋樣至極鮮明なる土器片を採集し得て、整理した結果、從來の當地方彌生式獨占論にも思ひかけぬ結果を齎し、著しく其の性質が明らかになつて、しかも、彌生式有紋土器なる表題を取消さねばならぬ事實の存在を見出したので、本誌上に爾後の遺物を報告、且つ卑見を披瀝し、未熟凡々の身故、諸賢の御示教を仰いで、尚一層啓發させて戴きたいと思ふ。

本誌第六卷第二號に發表した當時採集し得た土器は紋樣至つて不鮮明なるものであつたが、其の貧弱なる材料を以てしても同紙上に報告した通り、其の燒成や色調、紋樣及び伴出石器等に於いて、附近の彌生式土器と比較して、著しい相異の存在する事は認め得た。

爾後に於いて、吾人の最も多數採集し得たものは、杉山壽榮男氏の所謂、型紋（八幡一郎氏の楕圓捺型紋）土器であつた。斯に於いて、吾人は、彼の蠟石製玦狀耳飾の一種と認む可き、有孔垂飾物及び遠州式石斧等と關聯して、潔白に、「彌生式有紋土器」なる名稱を取消し、特種紋樣土器として認知するの必要を認めた。

整理の結果は明確に彌生式土器と認め得るものは平均十中三に過ぎ無い狀態にして、平均十中七は所謂、型紋系の土器であつた。彌生式土器は刷毛目紋及び口緣部に打痕鋸齒帶を有するもののみで、明らかに紋樣を持つ所のものは認め得なかつた。遺蹟が砂質上の散布地なるため、層位的研究の出來難いのは遺憾である。吾々は次の如き遺物によつても、其の繩紋式系統のものらしい事を知るであらう。

其れは、通常、彌生式土器には一般に伴はない尖頭蛤型双及（所謂遠州式）の半磨製石斧及び無孔打製石庖丁の出土である。

まして、玦狀耳飾の一種と認む可き蠟石製有孔垂飾物（本誌第六卷第二號第六圖參照）の出土に於いてをやである。九州出土の玦狀耳飾は肥後國宇土郡轟村宮の庄貝塚（繩紋式）の二箇のみであつた。故に玆に出土例を一つ增し得た事になる。



Fig. 1.　池附近より戰場ヶ谷遺蹟を望む

第四圖に示せる如く、土器の紋樣は楕圓形（最下段左より二三、下より二段目左端及び右端、最上段左二つ及び上より二段目右端及び左より二番目）のものばかりで無く、球を二つに等分せし如き、半截球紋（第四圖下より二段目左より二番目及び下より三段目右端）や小粒紋（第四圖下より三段目右より五番目）、ヂグザツク式の羽狀紋（第四圖下より三段目右より二番目及び最上段右より四番目）、楕圓連繫紋（沈線……第四圖第一段第二段）、波狀曲線自在沈紋（最上段右より三）、壓押點紋（下より二段右より三番目）等の存在ある以上、八幡氏が最初に謂はれたる如く、やはり、楕圓押型紋なる名稱は誠に不適である。杉山氏の所謂型紋、或は押型紋なる名稱が最適のように思はれる。而して、當遺蹟出土土器の一部に見出す、半截球紋土器の如きは未だ自分の知見をしては未聞の特種土器である。何れの土器に於いても、砂粒の混在せるを見出す。特に楕圓連繫紋土器に至つては黑色雲母片の混在（少量）せるを見る。器形に就て

Fig. 2.　戰場ヶ谷附近遺蹟分布圖

は、完全なる遺物、復元し得可き破片の無きため不明であるが、口縁部の變曲度が極めて緩に「く」字形を呈する事と、二三の底部（平底及び絲切底、共に徑三、五六糎前後）より推して、壺形（B型）土器が主であるらしく思はれる。紋樣は局部的で無く、全面に施されてゐるらしく推考される。特に半截球紋に至つては兩側に施紋しあるを認むるものもある。紋樣の方向は種々で一樣ではない。彼のヂクザツク式の羽狀紋に於いては、吾人は其の方向の≪なるものと、≫なるものとを明らかに口縁部破片に於いて見出した。

Fig. 3. 竹之内出土土器

　以上、紋樣に就いて一言したのであるが、未だ此の遺蹟に於いては一片の縄紋を施したものさへ發見しない。だが、斯る縄紋系の遺物出土の一新事實に依つて、吾人は次の事に注意するの必要を感ずる。

　從來、彌生式の獨占地域と目せられてゐた、北九州が近年に至つて、著しく其の範圍を縮減されつゝある現象を示してゐる時、先に述べたる如く、戰場ヶ谷出土の土器並びにその伴出物が、多くの點に於いて、縄紋系なるを認め得る時、吾々は北九州中部地方が彌生式の獨占地域であると謂ふ、其の獨占なる文字は削減せられ、著しく、其の獨占なる文字の力の弱くなりつゝある事を知らねばならぬ。……彌生式土器の最も古いものの存在と、彌生式一般の分布が最も濃密であるといふ事を非認するのではない。やはり、彌生式は古く、且つ濃密である……。我々は當地方仁比山村城原に於いても此の種の楕圓形型文土器の存在するを認めた。（現著者藏）



Fig. 4. 楕圓形型文土器

　此の戰場ヶ谷及び城原の遺蹟が、從來彌生式土器の獨占地域

と目せられてゐた範圍の略々中央に發見せられたといふ意味に於いても、遺蹟の重要性は甚大である。

吾々は、此の戰場ケ谷並びに城原出土の繩紋系土器によつて、遠賀川式土器等と關聯して、强く彌生式土器の再吟味を叫ぶ力を持つであらう。そして、一部の人に依つて、其等型文土器が繩紋石器時代土器中、最古型式の土器と推定されてゐる事實と、尠くとも、現在に於ける材料を以てしては、其の分布が中部以西に著しく、特に南九州に著しく濃度を持つ事を見出す時、繩紋式土器の再檢討たりや、より以上必要ではなからうか。彌生式土器が遠賀川式土器の研究を契機として、見返されつつある如く、繩紋式土器も今一度見返さねばならぬものではなからうか。日本考古學の研究は、決して飽和狀態ではない。寧ろ、前途遼遠と稱す可きである。斯る意味に於いて、吾人は繩紋土器の再吟味を喚起したい。

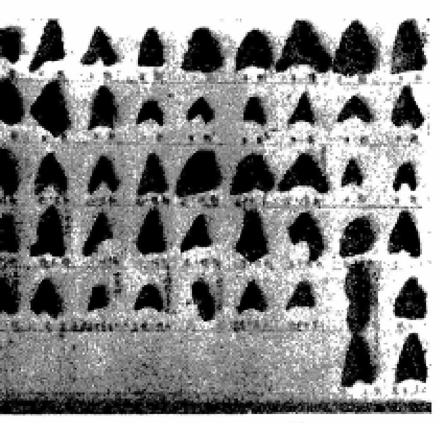


Fig. 5.　石　　鏃

よし、其等の叫びが認められないにしても、吾々は、やがて、認め得られる時の事實として現れ來る事を豫測する。

Fig. 6.　北部九州に於ける重なる繩紋系遺蹟分布圖

現在に於いて此等一群の土器が中部以西に、特に南九州に其の濃密なる分布をもつ事は次の如くである。

薩摩國出水郡出水町尾崎貝塚
伊佐郡菱刈村下市山字塞ノ神
伊佐郡羽月村下殿字藏小學校側
伊佐郡大口町木崎字木崎原
伊佐郡大口町下青木字星ケ峯
伊佐郡山野村小木原字日勝山頂上
日向國宮崎郡生瓜野村柏田貝塚

宮崎郡生瓜野村大師原
宮崎郡生瓜野村直經寺
西臼杵郡高千穗村三田井
東諸縣郡高岡町花見城ヶ峯貝塚
肥後國下益城郡東阿高貝塚
豐後國直入郡城原村小學校敷地
直入郡嫗嶽村中角字名子園
肥前國神埼郡東脊振村寺ヶ里戰場ヶ谷
神埼郡仁比山村城原
伯耆國西伯郡高麗村妻木字大道原
飛彈國大野郡大名田町江名子
信濃國諏訪郡金澤村木舟ケツヨリ竪穴內
諏訪湖底ソネ
上伊那郡伊那村栗林峇込
上伊那郡上片桐村原畑
下伊那郡新田原
下伊那郡松尾村明集會所附近
下伊那郡伊賀良村中村ようじ原
南佐久郡北牧村地藏平
東筑摩郡筑摩地勝弦十五社平

更級郡聖山
相模國三浦郡初聲村三戸

此等と類位の紋樣土器は南滿洲及び印度支那半島や北米ノース、カロリナ州や歐羅巴ロシヤ中央のトバーヤノブゴロド地方出土の土器にも見受けられる由で興味淺々たるものである。日本に於いて、南九州と信濃の兩極端に濃密なる分布を示してゐる事は此れを如何に解釋す可きや疑問である。信濃地方に多いのは、調査の精密によるものと思はれるが、關東以北に此の類の土器が發見さるれば、その性質はより以上明らかになるであらう。現在、南九州に特に此等一群の土器の分布が濃密を示してゐる時、南洋方面にも此の種の土器の出土を聞く時、吾人は、奄美大島、沖繩列島の研讚を待つや切である。

特に此等一群の土器が、南九州に於いて、夥しき石器を一般に伴ひ、其の古さを示してゐる時、吾人は其の南方系に多分の色彩を與える事は出來ないであらうか。

此等一群の特殊型文土器に就いては、

諏訪史　鳥居龍藏博士
先史及原史時代の上伊那　鳥居龍藏博士
相模三戸遺跡(考古學雜誌十九ノ一一)　赤星直忠氏

東京帝國大學人類學教室報告
豐後國直入郡地方の石器時代遺跡と遺物（考古學雜誌一七ノ一）　長山源雄氏
南佐久郡の考古學的調査　八幡一郎氏
樽圓捺型紋土器（考古學雜誌三ノ六）　八幡一郎氏
所謂樽圓捺型紋土器の發見例（考古學雜誌四ノ一）　倉光淸六氏
南九州に於ける縄紋土器の一形式（考古學雜誌四ノ五）　木村幹夫氏
佐賀縣職場ヶ谷出土彌生式有紋土器に就て（史前學雜誌六ノ二）　七田忠志

等に研究報告され來つたのであるが、此等一群の土器に對して、其の施文法、並びに、その時代的文化的關係を考察する事は今後の問題であらう。

併し、最後に特に附記す可きは、斯る施文法が縄紋系のみで無く、彌生式土器にも存在する事である。吾々は此の小粒狀文のある土器を神埼郡姉貝塚に於いて發見した。姉貝塚は、上黑井、詫田貝塚等と共に、有明海北緣に於ける彌生式貝塚で、此の土器も純然たる彌生武土器である。

以上、爾後發見の遺物に則り、一考察を試みて、前言（史前學雜誌六ノ二）を正した積りである。彌生武土器の最も古いものの存在の承認さるゝ北九州の略々中央に於いて、發見した事は興味ある一新事實である。此等一群の型紋系土器の動向こそ、今後如何に展開するや、興味ある問題であらう。御批判を乞ふや、切である。最後に、報告の範圍を脱した事に就いて、御諒恕を乞ふ次第である。

附記　第　圖最上段左より二番目の土器の緣邊近くに、兩側より、えぐつて通したと思はれる穴がある。莖でも通したらしく思はれる。

圖示說明

第一圖　A・B共ニ型紋系土器出土遺蹟
第二圖　×……職場ヶ谷遺蹟及び城原遺蹟（左）
P……銅鏡出土地
○……共ニ合口甕棺赤色塗料人骨出土地
●……合口甕棺包含地
△……伊勢塚古墳
◉……クリス型銅劍鎔范出土地

吉野ケ里遺蹟

一、緒言

彌生式文化研究の進展は、第一系土器と第二系（遠賀川式）土器との存在を見出し、北九州彌生式遺蹟の重要視されつゝある

折柄、何故か、北九州西部地方が、北九州東部地方に比して、あまりにも、かへりみられないのは如何なる理由に基くものだらうか。

Fig. 7. 吉野ヶ里丘陵遺蹟分布圖

元より、當地方に郷土研究の機運が醸されなかつた事も、一つの重なる原因をなすものであるが、吾人は拗くとも、北九州彌生式の研究は今一度び考古學研究の處女地帶たる佐賀、長崎縣地方の遺蹟、遺物を研讃、見返つて、然る後に北九州史前文化の一般を整理す可きものではなからうかと信ずるものである。ましてや、一度び古來に於ける大陸との交渉關係を考究する時、耶馬臺國問題を再考する時、特に吾々は、今後に於ける北九州古代文化研究上の重要性は此の地方に與ふ可きものではなからうかと思ふ。

千古の扉を鎖してゐる、筑後川下流の肥沃なる沖積大平野に於ける貝塚群を見出す時、幾多の池溝に圍繞された住居址を見出す時、筑紫平野の文化的解剖も又其の重要性を失はないものであると思ふ。彼の繼體天皇の時、筑紫國造磐井は如何にして、叛亂を勃起せしむる程の勢力を養ひ得たか。時恰も、原始農業問題の云云されつゝある折柄、我等の前途に其の解決の鍵を與へんとするものは、我々の謂ふ筑紫平野の研究ではあるまいか。吾々は今後に於ける、

此の地方の研究が、吾が考古學界に多大の指示を提供するであらう事を疑はぬ。

此處に其の筑紫平野北緣の一遺蹟の概況を報ずる事も、徒勞ではあるまい。

今、其等に就いて、概報し得るの機會を與へられた事は誠に感謝に堪へない。遺物は目下、鄕里に藏してゐるので、個々に就いて、精確に實測等を提示する事の出來なかつた事は、誠に遺憾である。此等の不足に對しては、何れ、稿を改めて詳報したいと思ふ。手元にある材料によつて、その概況を報じよう。

大方諸賢の御叱正と御示導を得ば、之れに過ぎたる事はあるまい。

二、遺物の位置及狀態

長崎線神埼驛より東北方を眺めた時、近く其處に見出す、脊振山脈より南へ、ゆるやかに、なだれた洪積層の臺地、この丘陵こそ、我等の謂ふ、志波屋吉野ケ里丘陵の姿である。今、此處に其の一端を概報せんとする吉野ケ里遺蹟は、この廣汎に亘る志波屋吉野ケ里丘陵の末端に位置する、一小部分に過ぎぬけれども、其の北端、戰場ケ谷に於いて、古式繩文土器と目せられつゝある押型文土器の出土を見、且つ又、夥しき横穴式石室墳の一群、而して、東肥前屈指の伊勢塚古墳を見、肥前風土記所載、神埼郡の條の僧寺一に推定す可き、新に、從來の靈仙寺說を覆さんとする、廢寺址を辛上に於いて發見し、且又、合口甕棺の包含夥しきを觀る時、一小部分に過ぎぬと雖も、當地方古代文化の考察上、看過す可らざる重要性を帶びた遺蹟であらう。筑紫平野一圓の門發が、此等甕棺と何等かの關係を持つであらう事を思ふ時、特に重要なる遺蹟ではあるまいか。此の丘陵は、北より南へ、緩かな傾斜を以て延長し、其の兩側に、二清流(田手川 石動川。志波屋川。更に少し西して城原川)が存在し、南に肥沃なる筑紫平野を眺觀するの絕好の丘陵末端である。此の附近一帶(槪筑平野全般についても同樣)が夙に開けてゐたと云ふ事は以上に述べ來つたものゝ外、現在、尙ほ歷然として殘る條里制の遺名の存在によつても其の一端を覗ふ事が出來るであらう。此の吉野ケ里そのものゝ地名も亦、條里制の里に關係のある事は明かである。

辛上廢寺阯に就いては、何れ松尾禎作先生の詳細なる報告を待つ事として、直ちに若干の遺物について記さう。

三、遺物

1、合口甕棺(第8圖甕棺包含狀態)

此等甕棺は原始葬制の一樣式にして、金石併用時代の提唱等々によつて、吾々の注意を喚起して來たが、最も多く存

在し、當遺蹟の最も重要なる遺物である。其等の型式、様式の分類、其他その編年的研究等に就いては何れ稿を更めて書く事とする。一般に地下二三尺の所に緩傾斜を以て埋含されてゐる。當遺蹟包含の甕棺は、その地質のやゝ水分多きため、土質の浸入を以て一般に充填されてゐる状態である。

Fig. 8. 甕棺出土狀態

2、土器（第9圖1及び第12圖8）

A。第9圖1は甕棺包含地東方臺上に於いて、去る三月、有光敎一氏等と踏査の際、採集し得た、大甕の破片と思はれる土器片にして、特に注目す可きは其の腹部突出帶にX字型沈點帶の存する事である。焼成は至つて粗にして、若干の砂粒を含み、吸水性は良好とは謂ひ難い。厚手の土器である事を附言する。

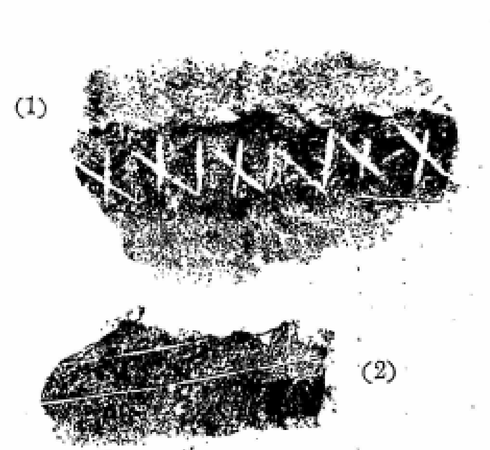


Fig. 9. 彌生式有紋土器

B、第9圖2及び第10圖上は共に當遺蹟出土甕棺の腹部に於ける初歩紋様帶とでも稱す可きものである。

C、第10圖下及び第11圖（上段イ）甕棺包含地に於いて、採集したる甕棺底部（平底）にして、其の庭面に第11圖（上、イ）に示すが如き十字紋を陰刻したるものである。Aと關聯して注目すべきで後世に於ける祝部

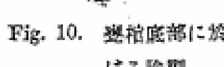


Fig. 10. 甕棺底部に於ける陰刻

土器に見出す紋印とでも稱す可きものゝ祖源かと思はれる。或はマヂック的意味を含んでゐるかも知れない。兎に角面白い資料である。

D、第11圖上、ロは、堀割の南方一町の處に於て採集したもので、鼓形土器臺でEより餘程洗練さを示してゐる。

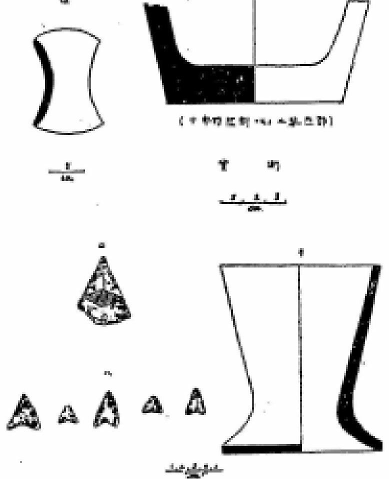


Fig. 11.　石器及び土器

E、第11圖下、イはメガホン型器臺とでも稱す可きもので、第12圖3と共に、地下二尺の地點に包含されてゐた甕棺側一尺の所で、斜に位置してゐたものを發掘したものである。史淵（九大史學會發行）第四輯「彌生式土器論と北九州」なる、山本博氏の論文の遠賀川立屋敷遺蹟の項に於いて「その形狀は正に北九州の一異例と稱す可く云々」とある土器と同種のものである。色調茶褐色。燒成堅固なるも左程上等の部類ではない。若干の砂粒の混在するを見受ける。

第12圖5は丹鐵塗布の、刷毛目のある尖底壺形土器である。

Fig. 12.　吉野ケ里出土彌生式土器

第12圖7は一方の開いて、小さく開いた方に通孔のある用途不明の厚手の土器。コシキと稱するには疑問を持つ。

第12圖9は徑二寸、高二寸五分、厚一分半位の、丹鐵を塗布したる、丸底湯谷型土器。

第12圖2は管狀土錘にして、東側に田手川あるを以て、河川漁業に使用されたものではあるまいかと思ふ。

F、第13圖14は、當地方貝塚に於いてよく見す處の紡錘形の土器で、南洋土人の使用せる石彈の如き形態のもので

用途は不明。

G、第13圖13は、よく當地方彌生式遺蹟に於いて見出す。
直徑一糎半前後の土製無孔丸玉である。

3、石器(13第圖參照)

Fig. 13. 吉野ヶ里出土石器・土器

A、石斧……安山岩製双刄半磨製のもので、その特徴は認め難い。

B、石庖丁……暗赤色粘板岩製のもので片刄及にして、その貫孔に當つて周圍を損傷せしめた瑕疵が存してゐる。(第13圖5)

C、石鏃……黒耀石及びサヌカイトの打製。(第11圖下參照)

D、輕石……研磨用に使用されたものであらう。輕石は田手川川床に於いて、其の層を見出す。

E、磨石。

F、第13圖6は甕棺包含層地下一尺五寸の所で發見したる安山岩質の、表面及び角邊等よく研磨せられた石塊であつて、圖に示す如き、斷　貝殼狀の凹みが腹部に存在して、一見玉砥の觀ある石地であるが用途は明らかでない。

G、石鏃の破片と思はれるもの。
第11圖下、ロに示すもので、黒耀石製にして、其の周緣は入念に小打製を施してある。

H、凹石(第13圖11參照)
一面に一孔を有するものにして、最初磨石として使用し、後に凹石に用ひたものと思はれる。

I、第13圖10 12の石塊はFと同質の、小さき石塊で、吾人が甕棺内に於いて、五個檢出せしもので注目を要するものであるが、用途は不明である。

以上述べ來つたところは當遺蹟出土の石器についての概要であつたが、黒耀石、安山岩等の石屑の多數散在し居るを以て、當遺蹟に於いても此等石器を製造せしは明らかである。特に其の性質の解明を必要とするものはFとIであらう。

4、玉類(第13圖11參照)
一個は甕棺包含地の堀割に於いて採集せし石製品と思はれるもので、その貫孔狀態は幼劣である。……淡青色
一つは散布地に於いて採集せしもので、硝子製のものと推

察される。……青色。

此等は何れも表面採集なるを以て、甕棺と如何なる關係を有するかを闡明し難きは遺憾である。よく注意すると彼の須玖岡本の如き關係が此の遺蹟に於いても成立するであらう事を我々は憶測するに過ぎない。

5、貝輪（第14圖）

圖に掲示する貝輪は、貝を縱に輪切にしたものである。自然脆壞の人骨紛のある甕棺内に於いて檢出したものであるが、その貝質種全く不明である。表面は白く風化してゐる部分と、石灰質が分解して粒末を生じてゐる部分とから成る。裏面の一部に於いては尙かすかに、眞珠光澤を見る。個數は破片なるため明かでないが二個らしく思ふ。特に注意す可きは、圖に示すが如き半圓狀加工の狀態で、その精巧さより推して、略〻金屬器具を使用したであらう事が覗れる。斯くの如く精巧なる加工を有する貝輪は、その貝質に於いても同樣、吾人の知見を以ては未知のものである。大陸製品であらう憶測を吾人は有するものである。兎に角、珍稀な、甕棺時代人の裝制を覗ひ知る一資料である。

Fig. 14.　甕棺内人骨伴出貝輪

特に、吉野ヶ里北方なる辛上に於いて、數年前に於いて、一合に甕棺内より、人骨と共に銅劍（型式不明）の出土せし事を傳聞したので附言して置く。

以上を要約すれば、當遺蹟に於いて吾人の採集し得たところの遺物は概ね次の如き物であつた。

一、彌生式土器

甕棺。有紋、無紋の壺形、甕形土器。皷型器臺。メガホン型器臺。管狀土錘。紡錘形土製出。土製無孔丸玉。

二、石器

石斧（半磨製）。石鏃（打製）。石鎗破片。石庖丁。凹石。磨石輕石、甕棺内人骨伴出石塊。用途不明玉砥狀石器。

三、玉類

四、貝製腕輪

以上の私一個人の採集遺物によつても、當遺蹟が如何に、權威者による古代文化貌觀の解明を待ちつゝあるかゞ覗知し得られるであらう。當遺蹟に就いては、三友國五郎氏の詳細なる論文（考古學雜誌二十四ノ五）が有るので御、參照になれば有益と信ずる。

東京市大森區久ヶ原町一〇二六番地貝塚

齋藤房太郎

序言

本貝塚は都市膨脹の結果、住宅地の建設、道路開鑿の爲久ヶ原彌生式竪穴が發見され久ヶ原庄仙遺跡が發掘された當時同樣な理由の下に發見された一小貝塚である。

併しながら人家中に在る爲と餘りにもさゝやかであるが爲に今日に至る迄全く認められずに來て居る。而して加速度的な人家の稠密は本貝塚を漸次消滅へと導き現在では僅かその名殘を示すのみとなつて居る。此處に於て自分は後日への記錄として且備忘錄として本小稿を草する次第である。

種々御配慮を煩はした簡野啓氏伊藤隼氏に對して衷心より感謝の意を表する。

位置

本貝塚は所謂多摩溪谷の左岸武藏野臺の一溪谷――呑川溪谷の一入江を圍む久ヶ原臺地の北端。凡東に緩く傾斜する東京市大森區久ヶ原町一〇二六番地(舊字庄仙)に位する彌生式一小貝塚にして一小入江を狹んで雪ヶ谷遺跡と南は久ヶ原小學校附近遺跡と相對し東北方は呑川沖積低地を隔てゝ大下、上池上の遺跡に相對する。

Fig. 1. 道路面(北側)に表はれた貝層

概況

前述の如く現在にては道路面（北側）一農家の生垣

の下に僅かその存在を認め得るのみで發掘不可能な爲遺憾ながら明らかには爲し得ない。露出せる貝層は Rome 直上厚さ 30 c. m. 巾 1. 4m 許にして Rome 層に可成深く迄食込んで居る樣に思はれる。道路面(南側)には貝層と凡同位置に Rome 層中約 1.35m. 巾 45m許の燒土が認められる。遺物は特に貝層附近に豐富にして比較的廣範圍に存在して居たらしく同一〇三七番地伊藤邸の南側に迄及んで居る。同地點に於ては土器（加曾利式、堀之內式、彌生式等）磨石斧、打石斧、土錘等が認められるが繁雜を防ぐ爲此處では省略する。

遺　物

I自然遺物

A自然石

B燒石、燒土

C貝類

ハマグリ(多)　カキ　シホフキ　オホノガヒ等

獸骨魚骨類は全く認め得ない。

II人工遺物

土器

土器として擧げ得るものに蓮田式と若干の諸磯式、加曾利E式？彌生式がある。併しながら本貝塚の主體を爲すものは蓮田式にして、他の各式中殊に加曾利E式の如きは伊藤邸南側より入込んだものと思はれる。

A蓮田式

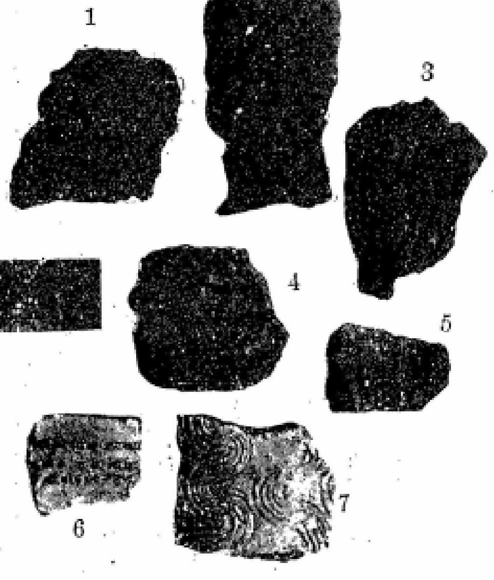


Fig. 2. 蓮田式土器

出土土器の大部分を占める。形態を推測し得るものは一個もなく僅かに上半部を窺ひ得るもの一個を數得るに過ない。口邊部は總て平緣にして凡正圓口を、底部は平底を爲し餘り變化を觀ない。卽ち形態は該式土器に普通觀るが如き單純であると思

はれる。質は粗弱にして吸水性に富み多く黒色、暗褐色を呈し纖維の混入は普通該式に覩られる程度にして各部分時に異る。文樣は殆んど大部分に認められ而かもその過半が縄圓同方向の縄蓆文である。その他の文樣には爪形文波狀文刺突文等が認められるが總て角張つた施狀のもので施されて居る。

B諸磯式

乏しい資料中明かに該式と認め得るものは僅かに數片に過ぎない。何れも餘りに小破片なるが爲明らかには爲し得ないが縄蓆文？竹管文を用ひたことは認め得る。質は比較的硬く小砂、雲母片を混ず。

Fig. 3. 土　器　拓　影

C加曾利E式？

數片を擧げ得る。併しながら前述の如く伊藤氏南側より入込んだものと觀たい。

D彌生式

貝層とは關係なしに黒土層上部に極めて僅か認められる。比較的硬質無文の彌生式と稱するよりも寧ろ土師に近いものと思はれる。

結　言

今本貝塚と谷川溪谷に於ける類似貝塚とを比較して見やう。

遺跡	遺跡	遺跡	遺物	遺物
	貝塚	竪穴	土器（含土製品）	石器
一、久ケ原町一〇二六番地	淺上面積小 一、主鹹	?	○蓮田式、諸磯式、彌生式、加曾利式？	?
二、鵜ケ谷	淺上面積小 二、主鹹	?	○蓮田式、諸磯式（十三菩提式）、勝坂式、乃至加曾利E式、土錘、彌生式	凡擧形石器、石槍、磨打石斧、凹石、石鏃
三、上池上	淺上面積小 二、？	?	蓮田式、諸磯式、彌生式、土錘	磨打石斧

○印は貝塚の主體土器、自然遺物除外

この中特に蓮田式のみについて見やう。

	異形線	尖底	異方行縄帶文	隆起文	波狀文	ツヽキ文	直線文	爪形文	撚絲文	貝殻文	口邊部突起	石器
一、	−	−	−	−	+	+	?	+	−	−	−	−
二、	−	+?	+	−	+	−	+	+	+	?	+	+?
三、	+?	−	−?	−	+?	−	+	−	−	−	+	+

Fig. 4. 蓮田式口唇部形態

以上三表にて三貝塚の比較は大體爲し得たが我々がこの表を見た場合直ちに隆起文及び貝殻文の皆無を認め得る。——尤も故友齋藤武一氏は雪ヶ谷より貝殻文の出土を擧げられて居られる樣であるが自分は肯定し得ない。若し是を示めたとしても多摩右岸に於て該式に多く見るのに比して何故僅少なのであらうか？　今左岸に求めるに全く之を見ず諸磯式に若干例擧げ得るのみである。隆起文に就いても凡同樣なことが云へる。

次に爪形文撚絲文に就いても自分の乏しい資料中數例を擧げ得るに過ぎない。比較的多く認め得るのは箆狀のもので施した波狀文不規則な直線文である。而して最も多く存在するのは細帶文である。即ち裝飾的には餘り發達を見ないのである。

次に生ずる問題は蓮田式が諸磯式彌生式と伴つて居ることである。この事實は獨り三貝塚のみ許りではなく該式土器出土遺跡には殆んど多くの場合何等かの形式に於て認め得る。蓮田式と諸磯式との關係は既に諸先學の努力に依つて或程度迄の解決が與へられた。然しながら彌生式との關係は殆んど全く顧られて居ない。多くの場合層位的關係は認め得られないにはしろ其處に遺跡の持つ重大なる意義が存在するのではあるまいか？

(——34. 6. 30)

資料

東京市久ケ原町庄仙出土の異形石器に就いて

簡野啓

玆に圖示したる、黒耀石製異形石器は、余が大森區久ケ原町庄仙の、遺跡に於て採集したものであるが、餘り他の地方からの出土例を耳にせず、從つて之れが用途に就いても、全く不明に屬するを以て、採集後種々と考察したる結果漸く、寫生圖に於て見られる如く、釣絲を緊縛裝備して使用する、釣針としての目的の下に、製作せられたるものと思はれるに至つたので、玆に石器時代に於ける、漁撈法研究の一資料として報告する次第である。

從來余は、東北地方より往々發見せられる所の、石鏃類と其の石質及び製法を一にする、獨鈷形小石器を、丁形釣針の一種と見て、注意して居たものであるが、本石器は其の形態上より觀察して、原始的の釣針たる、丁形釣針より、有拘釣針へ發達する階梯に位置する、所謂半月形釣針と認めるものである。外國の事例として、大山公は其の執筆に係る、『日本舊石文化存否研究』の、漁撈始原概說中に、ボルネオ土人の現用に係る、T形釣針の例を擧げられてゐる。

Fig. 1. 庄仙出土の異形石器

Fig. 2. 釣絲緊縛の想定

尙 A. Gruvil 氏の假定の半月形釣針（同書二一頁挿圖E・Dの二例）を示されて居るが、其のE・Dの釣針と之れを比較して見るとき、庄仙出土の本石器は、同じ半月形釣針としても、更に一進化を示してゐるものの如く、考へられるのである。今

兩者の優劣を簡單に述べて見るなれば、E・Dの二器に於ては、釣絲を裝置し又は、之れを取り外すに手數を要するのみならず、且つ不安定にして、其の緊縛の不完全なる場合は勿論、强力なる牽引に遇へば、直ちに反轉する虞れあり、從つて折角の漁物も之れを、逸脫する機會多き等、幾多の缺點を思はせるに反し、本石器は圖示するが如き、小突起を持つことに依つて、前者の缺點は全く除去せられ、釣絲の裝置並に取り外しは至つて簡易であり、且つ如何に强力なる牽引と抵抗に遇ふも、よく安定は保たれ、絕對に反轉することなく、從つて漁物の逸脫をある點まで、完全に防止し得る等、漁撈上優秀なる效果を發揮したものと信ずるのであるが、此の遺跡よりは他に三箇の類品が、發見されてゐる所を見ると、之の石釣針？は、庄仙に於ける先住民に依つて案出せられ、特に此所にのみ發達したのではないかと、考へられるのである、尙此の遺跡の土器に就いては、本誌第四卷に、中根君郞氏の武藏久ケ原庄仙出土の土器片、なる報告あり、考古學雜誌第二三卷には、齋藤房太郞・齋藤武一兩氏の、執筆に係る、東京市大森區久ケ原町庄仙の土器、と題する詳細なる報告あるも、遺跡の種類並に、石器類に就いての記述を缺くの憾あるを以て、此の際簡單に補足して置く、卽ち同遺跡は廣さ約十町歩に亙る地域より包含層の如き狀態にて、遺物は發見せられ、其の間に爐趾を持つ竪穴が點在してゐるが、其の中二箇所に貝塚を構成せる場所が認められる、遺物としては自然遺物に、

ハマグリ、アサリ、シホフキ、アカガヒ、カキ、マテガヒ、キセルガヒ、サヽエ、アカニシ、サルボウ

等の貝類の外、鹿角が出土してゐるが、他に就いては、未發掘の爲め詳細は不明である。人工遺物には、余の所謂石釣針？の外に

土器、打石斧、磨石斧、石鏃、石劍、玦狀耳飾、磨石、凹石、石皿

等を擧げる事が出來るが、尙この遺跡に於ける面白き現象は、遺物の出土狀態であつて、夫れは他の遺跡と頗る其の趣きを異にし、何等混亂の形跡なきローム層中より遺物が發見せられることで、之れは地質學方面より、研究せられるなれば、相當興味ある問題を、捕捉し得られるものであろう事を、信ずるものである。

釣針樣石器の數例

樋口清之

本誌に簡野啓氏が釣針樣石器の例を報告されると聞いたから、自分もかね〲その例を注意して來たので、只今ノートに散見する數例を擧示して、この簡野氏の報告の後に附け度いと思ふ。

元來石器の中にもおそらく骨角器同樣に釣針として使用された物もあるであらう事は、單に諸外國の例證のみならず、又土俗例等にも徵して推想し得るところではあつたが、本邦の遺物にはその明確な物が發見發表された事を自分は知らない。勿論東北地方等から出土する石英製の精巧小形鋭利な石器の中に、中央の兩側面が挾入する柳葉形の物等があつて、この部分を緊縛して一種の釣針樣の用途に當てられたのではないかと想像し得るものも存在してゐる。しかし玆に自分が示す數例はそれよりもより釣針としての想像の可能性の強いものであつて、いづれも弦月狀を呈するものである。

(1) 羽後國飽海郡吹浦村丸池出土。半透明乳白色硅岩製。兩端輕く反轉し、薄肉精巧斷面菱形を呈する打製。山形縣東田川郡東榮村添川、鈴木盾三氏所藏。

(2) 美濃國加茂郡和知村牧野出土。灰黒色サヌカイト製。全體輕く灣曲して弦月狀を呈し、兩端尖つてやゝ厚肉精巧なる打製。岐阜縣太田町林魁一氏所藏。

(3) 大和國磯城郡川東村唐古出土。黒色サヌカイト製。前例と

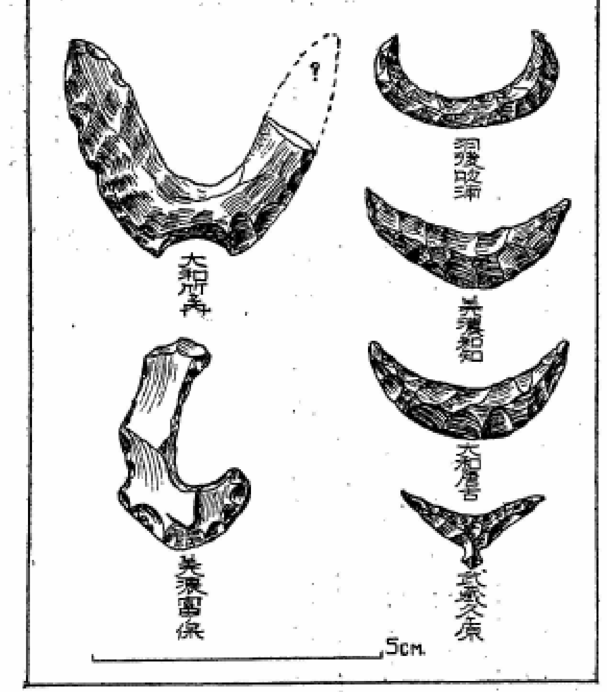


Fig. 3. 鈎針樣石器

ほゞ同じく、輕く灣曲し兩端尖れる弦月形、斷面菱形を呈して厚肉。奈良縣北葛城郡磐園村秦鳳月氏所藏。

(4)武藏國東京市大森區久ケ原町庄仙出土。黑色黑曜石製。小形精巧銳利、斷面菱形を呈し、弦月狀の下端に一個の突起部分を有し、精良なる打製。東京市大森區齋藤房太郎氏所藏。(立正大學考古學會展覽會所見)

(5)大和國北葛城郡磐城村竹之內出土。黑色サヌカイト製。薄肉精巧銳利なる加工、斷面薄き菱形を呈し、全體ほとんど六十度近くの灣曲をなし、底邊は前例とは反對に僅かに上方に向つて凹入する。奈良縣下田町南今市木原某氏所藏。(奈良縣畝傍町畝傍考古館所陳)

(6)美濃國武儀郡富ノ保村栗野鬼谷出土。灰黑色サヌカイト製。全體の加工やゝ粗なれども周邊は精巧綿密にレツウシエを施しこれが未成品ならざるを示す、鈎部先端は破損し現在銳利さなし。全體はあたかも骨製釣針に見るが如き形を呈し、鈎部は强く反轉して完全なる鈎狀を呈し、その後方には僅かの突起を有して鈎針としての效果を大ならしむるが如く、その柄部亦緊縛に適して懸垂に便なるが如し。岐阜縣太田町林魁一氏所藏。

右に示したが如き數例は之を左の如く分類することが出來る。卽ち、

一、片鈎形釣針

二、双鈎形釣針

　A、弦月形

　B、突起部附弦月形

　C、凹入部附弦月形

第一の物はこの柄部と見做される部分を緊縛懸垂したとの推想のもとに、第二の物はこの弦月狀の中央部を緊縛懸垂したとの推想のもとに假りに使用した名稱である。而してもし假りにこの名稱が、本石器の用途と使用方法とを暗示してゐるものであるとすれば、玆に我國石器時代釣針にも諸外國の如くやはり石製の物も存し、かつその形式にも骨角製のものに見られなかつた弦月狀を呈する双鈎の物が存することを知り得られる。殊に武藏久ケ原、大和竹之內の二例は均しくこの推想を强く誘導するものである。

往々遺物の型態に對して附けた假稱が、やがてはその遺物の用途を決定するが如く誤つて判斷される危險性を吾人は見受けると同時に、又遺物の用途を全然考慮の外に置いた考古學の研究の傾向も見受けられる。勿論遺物の用途以上に重要な研究分野の存することは自分が改めて述べるまでもなく明白な事實で

はあるが、それが決して用途の研究を考慮の外に置かしめる理由にはならない。少くとも考古學が、與へられた物質的遺物による古代文化の研究を目的とする限り、遺物の用途の研究は重要な一研究課題であつて然る可きあると自分は考へる。

横濱市根岸町競馬場附近發見の貝紋土器片

土岐仲雄

本年四月六日所用あつて横濱に赴いた歸途、貝類採集の爲、三溪園から、根岸の海岸に廻り、夕刻同海岸の築港工事場の邊まで進んだが、同町の競馬場附近に貝塚がある事を聞いてゐたので、それを訪問する爲に海岸に沿ふた道路を横切つて、非常に急な坂を登つたところ、果して豫想通り競馬場の南の土手のところへ出た。其處からその土手に沿ふて、右に歩きはじめたが、道は坂を下りて街の方へ行つてしまふらしいので、止むを得ず人家の間を抜けて、臺地に出で、其處から競馬場の正門に行く道を横斷してしまつて、丁度競馬場のスタンドが、眞正面に見える向ひ山に出た。此の競馬場の、何れの地點に貝塚が存したのか、遂に聞きはぐつたが、道路面から、何丈と云ふ高いところまで、數丁に亘つて、きれいにすつかり赤土が切りとつてあるところを見ると、既に貝塚等は跡形もなく片附けられてしまつたのかも知れない。其處から、海の見える臺畑を西へ西へ進んだところ、畠道の側に相當大きい土器片を發見した。先づ大森式に屬するものであらう。すぐ先に墓地があつたので、可成丁寧に探査して見たが、此處には、土器らしいものさへ落ちていなかつた。止むなく、墓地に沿ふた道を、更に西に進んだところ、この道の方が却つて土器片が多く散亂してゐる。不思議に思つて、尚一二丁注意しながらすゝむうち、土器片の混じた麥畑を發見した。圖示したのは、此の地點で得た土器の貝紋である。

Fig. 4.

本誌第一卷第六號所載の、石野瑛氏「相模國八幡臺石器時代住居趾群調査報告」中の神奈川縣內先史遺蹟分布圖を見ると、此の附近に三箇所の貝塚が存した事になつてゐるが、附近に一個も貝殼が散布してゐなかつた點から想像すると、此の地點は、その貝塚ではなく、單に包含地であらう。歸りかけてゐる農夫に地名を聞いたら、塚越と云ふ所で、附近に土器塚があつたと敎へて吳れた。參謀本部の地圖を參照して見ると、根岸町大字坂下字塚越と云ふ場所らしい。貝紋のついてある土器片は、何れも六糎平方位あり、色は淡黑褐色、厚さ〇・七糎、一方は口邊で、何れも非常に多くの纎維がつなぎに入つてゐる。所謂蓮田式に分類して差支へなき土器であると考へられる。して見れば包含地ではなく、或は旣に知られてゐる貝塚であるかも知れないが、兎に角非常に興味のある遺蹟たる事に、間違はない樣である。若し、附近を發掘調査して見て、住居趾まで掘り當てる事が出來たら、蓮田式土器文化に、新らしき一項目を加へる事も可能であらう。何となれば、此の系統の土器に關する住居跡は、未だに一つも發見されてゐないからである。旣に日沒で道が見えなくなりかけて來たので、再調を期して急いで急坂を下り、一つの街と、一つの川をこして、横濱市電瀧頭停留場に出て歸途についた。

雜報

一九三六年、ヲスローに於ける史前、原史學大會

一九三六年、ノルエーの首府ヲスローで國際史前學、原史學大會の開かるゝ通諜が、先頃きたから其會則に就て一應これを御紹介する。又原文(佛文)の翻譯の勞をとられた山口氏に御禮を申し述べる。(大山)

千九百三十一年五月二十八日、ベルヌに於ける
常設評議員會に依り裁決せられたる總則

第一條　國際先史原史學會は、千九百三十一年五月二十八日、ベルヌに於て設立せるものなり。本學會第一次大會は、千九百三十二年ロンドンに於て開催せらるべし。爾後の大會は事情に依り多少の變更あるも原則として每四年を以て開催す。大會は特別の事情無き限り同一國に於て兩回繼續して之を行はざるものとす。

第二條　先史學、原史學の名目の許には、斯學の發達に貢獻すべき一切の學科を包括するものとす。卽ち、先史、原史兩時代に關する限度に於ける地質學、古生物學(動物、植物)、人類學、人種學、民俗學、考古學等とす。

第三條　本學會の組織は、關係諸學科の攻究を現に職務とする學者中、ベルヌの大會に依り、一國に付一名又は二名宛選出せられたる評議員を以て成れる常設評議員會に於て、指導監督せらるゝものとす。評議員は、又、確固たる政府の指名に依る者たることを得。餘地ある場合に於ては同樣の條件に依つて指名せられたる書記の出席を認む。評議員中缺員ある時は、常設評議員會の指名したる人員中より大會の選擧に依り補充せらるべきものとす。

第四條　常設評議員會は、大會の傳統を保持する外、規約の遂行を監督し、次期大會の開催地に關する大會會員相互間の合議を指導し、その他、豫期せざる困難事を處理する任に當るものとす。

第五條　本會は既往の先史人類學考古學會との眞の聯絡を確保し、その長く且つ光輝ある傳統が本會に繼承せられんことを希望し、同學會舊常設評議員會評議員諸氏が本會名譽委員會(名譽顧問會とすべきか)を組織せられんことを乞ひ、又、老齡のため、第三條によつて本會常設評議員會評議員たるを得ざる著名の學者をも名譽委員會員たることを希望す。常設評議員會評議員が名譽敎職年齡に達し、第三條の條件に適合せざるに至りたる場合は、當然、名譽委員會に入り、其の經驗と識見とを以て、將來の大會の成功に助力するものとす。

第六條　大會に出席を希望し、會費を支拂ひたるものは、大會に出席し、且つ、大會記錄に對する權利を有するものとす。

第七條　本學會は大會の終了に際し、次期大會開催地及び其の日時を定め、且つ其の會長及び數名の書記長を選出す。

第八條　次期大會を開催せらるべき國は、其の國より選任せられたる常設評議員、主體となり、準備委員會を組織す。準備委員會は、該國の學者にして、事務遂行に助力を與ふ可き者を以て組織す。準備委員會は、正確なる大會開催期及びその期間、分科會の數、會員等を決定す。又、招請狀の發送、參加申込書の收受、會員證の交附等の事務を行ひ、大會場の準備、分科會の整理等に付き、一切の物的用意を爲し、大會開催數ヶ月前にプログラムを印刷し、配付す。

第九條　大會分科會は次の如く分つ。

(一)、日程當日の特殊問題に關する研究(一人、三十分間)

(二)、斯學最近の、特に大會開催國に於ける進歩に關する各

題の發表（一人、二十分間）

（三）、研究及び調査の組織に關する質問、並びに記念物、記錄等の保存に關する經濟的方面より見たる質問（一人、二十分間）

發表は一人三件に限る。

最高級の興味と價値とを有する發表に對しては、評議員會は、如上の規則に就き、豫め例外を設くる權能を保留す。

分科會の外、評議員會の同意を得、大會開催國に於ける特殊問題、又は他の一般的問題に關し、公開講演を行うことを得。

第十條　大會最初の會合に於て、從來の準備委員會は、實行委員會として事務局を設立し、其の幹部は大會出席者の比較多數式選擧に依り之を補充す。事務局は、局長一名、次長六名、會計一名、書記長二名を以て必要人員とす。

第十一條　大會の書記課及び會計は、大會記錄の出版を確實にし、事務局の監督下にある金錢出納を檢査し、決算不足額を生じたる場合は、之を次期大會に繰越す。記錄は一大會一冊とし、此內に其大會に於て發表されたるものゝ要約を載せ、此要約は、發表の長短に從ふ。但し、三頁を越ゆることを得す。

第十二條　獨逸語、英語、西班牙語、佛蘭西語、伊太利語は等しく大會に於る發表、及び其の印刷に使用さる。但し、大會の公式記錄及び議事錄は佛蘭西語に依り編纂せらる。

第十三條　大會々期中、大會に提出せられたる物件及び一切の書類は、總て大會開催國に取得せらる。其保管所は事務局に於て之を決定す。

第十四條　本總則變更に係る一切の提案は大會出席者二十名の署名と、其署名者中五名が評議員たることを要し、且つ其の提案は、事務局に提出すべきものとす。大會解散後、評議員會は新に提出せられたる提案を含む報告書を、其大會の記錄中に加へて印刷し、該提案は、次期大會最初の會合に於て提議さるべきものとす。其際、之が裁決は、口頭を以てし、論議を行はず、「諾」「否」の二語に依るものとす。

會告

入會

東京市杉並區上荻窪町五六八播州學生寮　淺田芳郎氏

東京市世田谷區太子堂一〇一酒詰方　土岐仲雄氏
東京市澁谷區代々木西原町九六二　江馬修氏
山形縣新庄町　伊藤文雄氏
東京市京橋區銀座六ノ三銀緊館三階十一號　唐端勝氏
秋田縣南秋田郡脇本村　天野源一氏
鳥取縣西伯郡淀江町　倉光清六氏

轉居

東京市世田谷區東玉川町三、五九一　松本信廣氏
東京市本郷區上富士前町七三細川壽一郎方　湊晨氏
東京市目黒區上目黒五丁目二六〇七（昭和女子薬專裏通）　樋口清之氏
滿洲國吉林省吉林顧問公館田中公館内　田中春雄氏
東京市本郷區丸山福山町一五福山アパート内　中川德治氏
小倉市上富野一、一四八　海法成一氏
東京市目黒區鷹番町三八森田方　下村正信氏
東京市大森區堤方町一、〇〇一　齋藤房太郎氏
朝鮮總督府博物館慶州分館　有光敎一氏
臺灣、臺北市榮町一丁目七番地（海野ビル）丸善株式會社出張員事務所　富田省吾氏
東京市淀橋區下落合四ノ一、六二三　大給尹氏
東京市中野區鷺ノ宮一ノ一三五　山内清男氏

退會

松田蟻氏　坂口保治氏　上原準一氏

死亡

那須章彌氏

INHALT

I. ABHANDLUNGEN

II. KLEINE MITTEILUNGEN

III. VERSCHIEDENES

TAFEL



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durchjährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich :

9. Onden Shibuya-Ku Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei
Sumio Nakazawa Jookei Shibata
Vorsitzender Fürst Kashiwa Ohyama
für den Vorstand
Kiyoyuki Higuchi Keisuke Ikegami
Isamu Kohno Kei Kanno
Iwao Ooba Sueo Sugiyama
Kingo Tazawa Ryuichi Yamaguchi

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

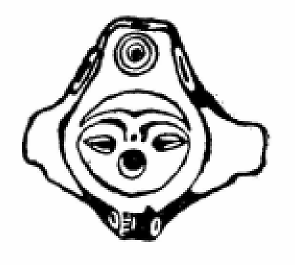
ORGAN DER JAPANISCHEN

PRAEHISTORISCHEN GESELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN

von

KASHIWA OHYAMA



6. BAND 4. HEFT

TOKIO

Juli 1934

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Shibuya-Ku Tokio.



史前學雜誌

第六卷　第三號

昭和九年六月發行

本邦上代の洞穴遺跡

大場磐雄

史前學會

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル

二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌（年六回隔月發行）及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會合ヲ行フ。隨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ

四、會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル

入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込マレタシ

五、本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得

六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル

七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得

九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穏田一丁目九番地　大山史前學研究所內

史前學會

顧問　小金井良精　中澤澄男　柴田常惠

會長　大山柏

幹事　杉山壽榮男　田澤金吾　大場磐雄　甲野勇　大山柏　簡野啓　樋口清之　山口隆一　池上啓介　（順序不同）

會計　岡田義一

投稿規定

寄稿ノ範圍ハ史前學研究ヲ主體トシ、之ニ關連スル諸學ヲ包括ス。寄稿者ハ通常、會員並ニ會員ノ紹介アル者ニ限ル

原稿ハ返還セズ、但シ寫眞、圖表等ハ豫メ申出デアルモノニ限リ之ヲ返還ス

原稿掲載ニ就イテハ幹事ニ一任サレタシ

寄稿ノ別刷ハ豫メ申込ミアル場合ニ限リ、當分所要部數ノ實費及ビ送料ヲ申受ケ需ニ應ズ

昭和九年六月十一日印刷
昭和九年六月十五日發行
第六卷第三號
定價一圓

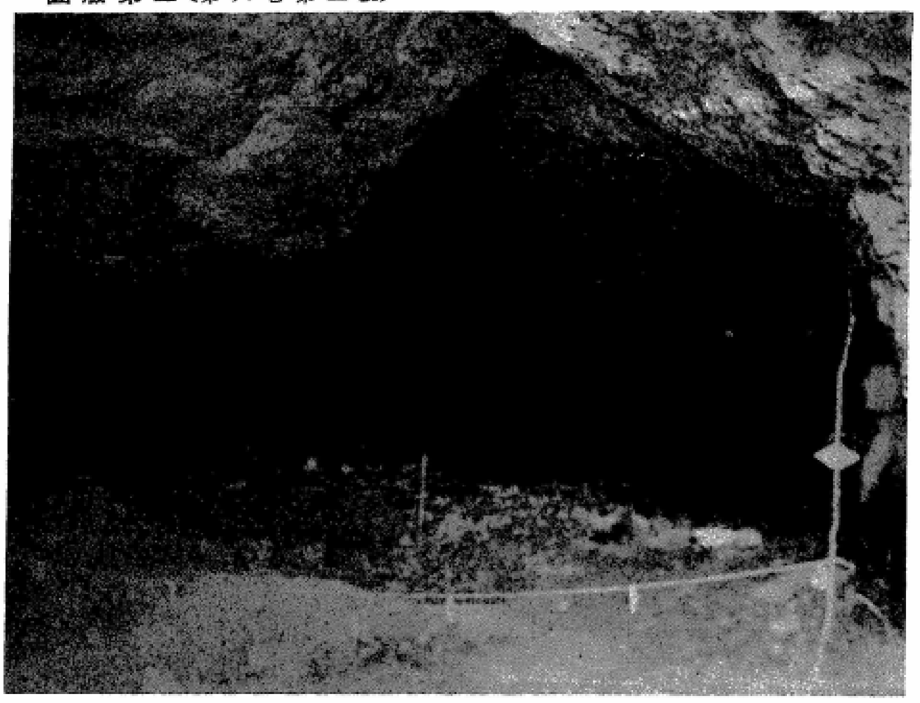
編輯者　東京市澁谷區穏田一丁目九番地　池上啓介

發行者　東京市澁谷區穏田一丁目九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目一番地　鈴木起武
株式會社明章印刷所

發行所　東京市澁谷區穏田一丁目九大山史前學研究所內　史前學會
電話青山一二一五番
振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　岡書院
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番





陸前國矢作村梅ノ木洞穴（八幡一郎氏撮影・大山公爵貸與）

Umenoki-Hoehle beim Dorf Yahagi, Kreis Kesen, Gau. Rikuzen.

oben. Inneres

unten. Wahrnehmung beim Blick vom Grund des Hoehle zum Eingang.



平面

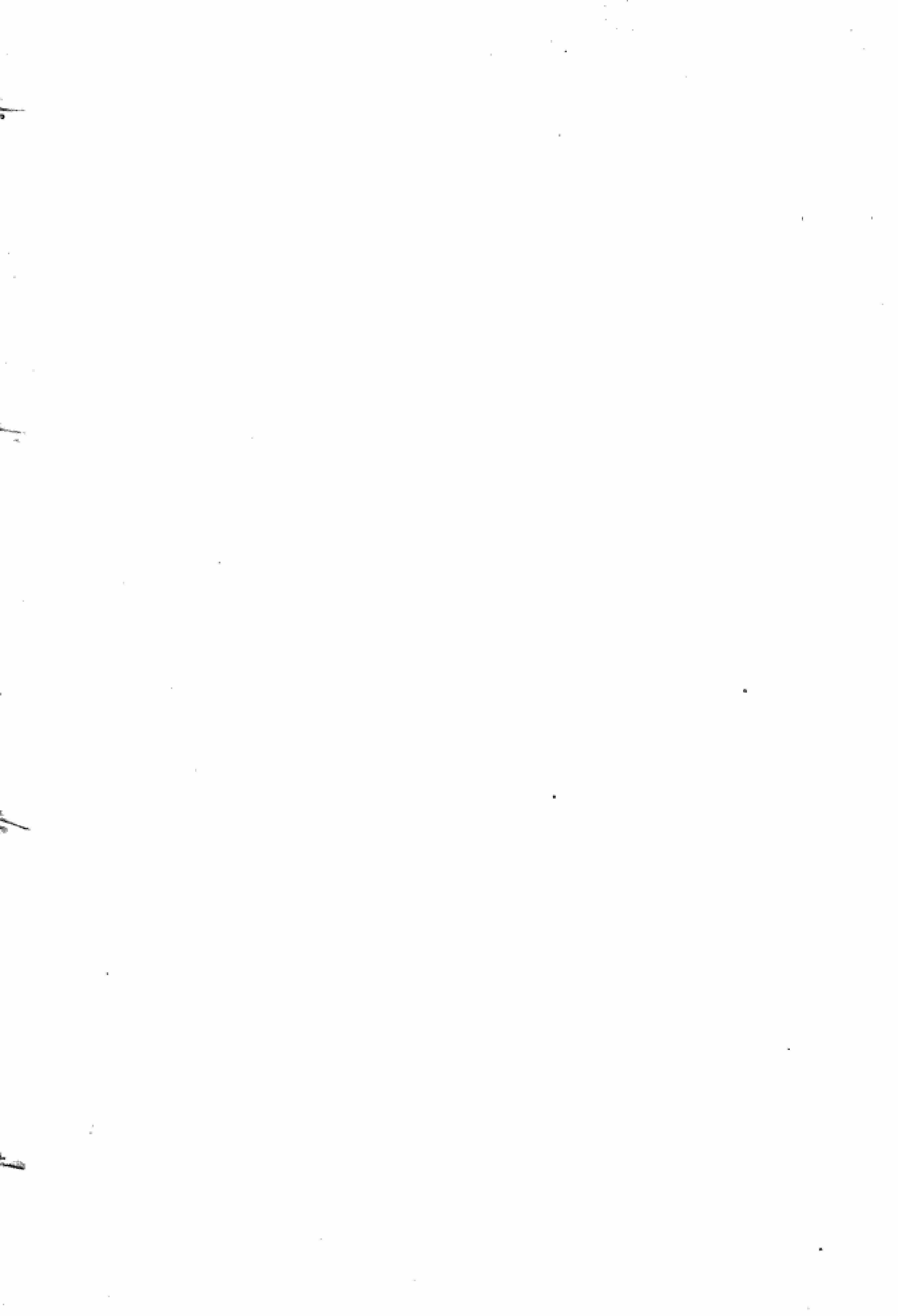
ハニ斷面

イロ斷面

縮例尺

上總國守谷荒熊（小浦）洞穴實測圖（田澤金吾氏測定）

Skizze der Moriya Hoehle, Prov. Kazusa.



史前學雜誌　第六卷第三號

本邦上代の洞穴遺跡

大場磐雄

目次

本邦上代の洞穴遺跡

大場磐雄

昭和七年三月安房神社境内發見の洞穴遺跡を調査する機會を得て、二三の考察を施してゐる中に、漸次興味を促され、廣く同種遺跡の綜合的考察を企てるに及び、資料の蒐集に努めたが、翌八年七月國學院大學上代文化研究會公開講演の席上に於いて「日本上代の洞穴住居」と題してその概要を述べるに至つた。本篇はその折のノートを整理したもので、大山公爵の慫慂に基き未完成ながら提出させて頂いた次第である。恐らく資料に不備な點や考察に誤謬が多々存在してゐるであらうと衷心危惧の念に堪へない。備へに諸賢の御叱正を希ふものである。なほ本篇の起草には少なからぬ先輩友人諸氏から御示教御鞭撻を得た。就中全體に亙り種々有力な助言を頂き、或は貴重な資料を貸與せられた大山公爵の御厚志、及び柴田常惠先生・小金井良精博士を始め、東北地方に於ける多數遺跡の實際に就き、煩瑣な質問に解答せられた小田島祿郎氏、同じく各地の資料に好意ある助言と報告とを與へられた田澤金吾・川村眞一・後藤守一・村崎勇・鈴井經次・清水吉彦・岩澤正作の諸氏に深甚なる謝意を捧げ、併せて本篇の記載に當り、貴重な紙數を割かれ、特に六卷三號全部を提供して下さつた史前學會の御好意を銘記する次第である。

第一章　序　說

緒　言

凡そ人類が地上に生活を營むに當つて、先づその環境に對し能う限りの注意と利用とに考慮を繞らすことは、古今東西變ることなき通則であらう。殊により多く自然に順應すべき原始時代に於いては、その程度更に大なるものがあつたことは言ふ迄もない。故に海岸を始め河川の谿谷又は山野に、おのづから開口せられる自然洞穴が、夙に人類の利用する所となつたのは當然の事實に屬する。而してその利用の目的と範圍とは彼等の文化程度に比して必ずしも一定しないであらうが、就中最も普遍的に行はれたものは住居であつた。現在の文化人間に於いても一部にその事例を徵する事が出來、更に未開人間に求むれば一層顯著な土俗例を有するのであるから、上代に溯つて考古學的資料を探索する時は、實に夥しい遺跡を發見する事が出來るのである。殊に氣候その他の環境現在と著しく相違し、棲息せる人類亦頗る原始的であつた舊石時代にあつては、最も好適な住居として盛に利用せられたので、當時の文化は洞窟を背景としたものと言ふべきであつた。蓋し獸類が穴に棲み、鳥類が巢を營むのと、僅かに一歩を先んずる程度に於いて、最初に人類の住居として撰ばれたものが洞穴であると言ふべきであらう。而して住居に利用せられた洞穴は、單に一時期の假寓にのみ終る場合も多かつたであらうが、自然と文化との變化に應じ後代迄も利用せらるゝ價値を失はなかつたであらうから、その或ものは數代の居住者によつて占めらるゝに至り、且つ占居區域におのづから制限を加へらるゝが爲に、各時代の生活殘滓は貴重な文化層を造成し、現代考古學者を稗益する所大なる場合が往々に存する。洞穴遺跡が考古學上重要な資料たり得る資格は

一に茲に係けられてゐる。

次に洞穴は必ずしも住居のみに利用せられたものではない。殊に一方に於て人工住居が營まれる頃に至ると、住居以外の利用も亦當然發生し得べきである。卽ち墳墓の如きはその一である。それは住居と併用せらるゝ場合も多い。又極めて稀ではあるが祭祀又は之に關聯する宗教的對象物とせらるゝ事も有り得られる。然しながらそれ等は洞窟利用の本領から派生した第二次的利用の例と見るべきであらう。

日本に於ける洞穴利用の痕跡を探ると、古典の記載によれば上代人の一部に住居とした諸例を認める事が出來るのみならず、近來考古學的研究の結果によれば、相當に見るべき遺跡が擧げられてゐる。しかしそれ等は西歐諸國に於いて多數に發見せられてゐるもの、殊に舊石時代のそれとは著しい相違が存し、些細ながら本邦獨自の點をも認める事が出來る樣である。以下主として考古學上から本邦所在の洞穴遺跡を考察し、併せてその特質を記述しよう。

日本に於ける洞穴遺跡研究の沿革

我國に於いて洞穴遺跡が學術的調査を試みらるゝに至つたのは比較的近年に屬するが、强いてその嚆矢とも見るべきものを擧げるならば、北海道小樽市手宮公園内に存する古代文字彫刻を有する洞穴の調査であらう[1]。然しながら右は遺跡の性質他と趣を異にし、その主眼たる彫刻物に對しても兎角の議論が存するので、なほ攻究の餘地を存すべきものと言ふべく、研究史の冒頭を飾るには適應しかねるものであらう。故に眞に洞穴遺跡研究の最初となすべきものは、大正七年度に於ける富山縣氷見郡大境洞穴遺跡の研究である。これは内地に於ける最初のものであると同時に現在迄知られてゐる這種遺跡中の最も典型的なものとせられてゐる。柴田常惠・松村瞭・佐藤

傳藏・上田三平の諸先輩が調査並に報告に從事せられた[2]。之に刺激せられた結果であらう。洞穴遺跡に對する關心は漸々濃厚となつた。次で大正十一年鳥居博士は郷里徳島市城山に於いて一遺跡を發見調査せられた[3]。間もなく大正十三年には神奈川縣三浦郡鴨居の洞穴に就いて同地の赤星直忠君の調査及び報告があり、帝國大學人類學教室からは小松眞一氏が出張調査され[4]、又同年八月には千葉縣夷隅郡興津町守谷に數個の洞穴遺跡が知られ、發見者江上波夫君の報告によつて山崎博士の調査が行はれ、次で内務省から柴田常惠・田澤金吾兩氏が出張された[5]。かくして斯界の注目を昂むるに至つた時、翌大正十四年八月には大山公爵・小金井博士・八幡一郎の諸氏による大規模な且つ計畫的な調査が岩手縣方面に行はれた[6]。それは或意味に於ける洞穴遺跡調査上の一エポックを劃したものと言ふべきであらう。この一行はかねて報告せられてゐた同縣下氣仙郡・東磐井郡所在の數個所に就いて發掘調査せられた。更にこの時隨行した同地の小田島祿郎氏は、その後同地方に於ける這種遺跡の多數を報告せらるゝに至り、東北地方が數に於いて冠たる狀態を呈する事となつた[7]。後昭和二年には江上波夫・增井經夫の兩氏により千葉縣守谷町所在の數個所(先年調査せられたもの以外に就いて)が報告せられ[8]、同六年には寺石正路氏が高知縣香美郡佐古村に雄大な石灰洞内に於ける住居趾を調査報告された[9]。同七年には幸にも自分が千葉縣安房郡に於ける一遺跡を調査する機會に惠まれ、その報告を發表したが[10]、これには再び小金井博士を煩はし、特に人骨に就いて御研究を請ふた[11]。更に同年山本博氏は福岡縣關の山洞窟を報告され[12]、翌八年には長野縣上水内郡柵村洞窟について同地研究家の報告が[33]あつた。

上述の如く我國の洞穴遺跡は比較的近年の研究に係り、且つその數も亦決して多いとは言ひ得ない。恐らく將來に於いては更に多數の貴重な資料が發見せられ、漸次その眞相が究められるであらう。自分は偏へにその機の

早からむことを切望してゐる次第である。

【註】(1) 遺跡は明治前後外人によつて注意せられたが、後我國多數の學者によつて研究せられ、大正十年には史蹟に指定せられた。なほ彫刻文字に就いては僞造説が一部に説かれてゐる。右に關する主な考説を列擧すると、渡瀨莊三郎氏「札幌近傍ピット其他古跡ノ事」(人類學會報告第一號)、鳥居龍藏氏「北海道手宮の彫刻文字に就て」(歷史地理二十二卷四號)、中目覺氏「我國に保存せられたる古代土耳其文字」(尙古第七十一號)・「北海道手宮洞穴の就鞨語凝誌について」(歷史と地理一卷六・七號)、喜田貞吉氏「北海道手宮洞窟内彫刻に就て」(東北文化研究一卷六號)等

(2) 柴田常惠氏「越中國氷見郡宇波村大境の白山社洞窟」(人類學雜誌三十三卷七號)、佐藤傳藏氏「地學上より見たる越中氷見の洞窟(地學雜誌三十二卷三百七十七號)、松村瞭氏「新發見の洞窟内遺跡(敎育畫報七卷一號)、上田三平氏「越中氷見郡大境洞窟内の彌生式遺蹟」(歷史地理三十二卷四號)等、更に以上を綜合して富山縣史蹟名勝天然記念物調査會報告第三號に詳述せられてゐる

(3) 鳥居龍藏氏「德島城山の岩窟と貝塚(敎育畫報十六卷五號)及び栗山周一氏著「少年國史以前のお話」

(4) 赤星直忠氏「鴨居洞穴の發掘」(考古學雜誌十四卷十二號)・「其後の鴨居洞穴發見遺物」(同誌十四卷十三號)

(5) 山崎直方氏「上總國守谷洞窟に於ける史前時代の遺跡に就きて」(人類學雜誌四十卷三號)、千葉縣史蹟名勝天然記念物調査第二輯

(6) 大山柏・八幡一郎氏「岩手縣南部石器時代遺跡調査旅行」(人類學雜誌四十卷十號)、なほ詳細な報告は未發表に屬する

(7) 第五版石器時代遺物發見地名表所載に係る陸前國氣仙郡・陸中國東磐井郡・上閉伊郡・下閉伊郡所在の洞穴遺跡の報告を見よ

(8) 增井經夫氏「上總興津町附近自然洞穴發掘報告」(考古學雜誌十七卷十二號)

(9) 寺石正路氏「土佐龍河石灰洞古代穴居遺蹟發見」(史蹟名勝天然記念物六集十一號)、高知縣史蹟名勝天然記念物第三輯

(10) 拙稿「官幣大社安房神社境內發見古代洞窟遺跡調査報告」(神社協會雜誌三十一卷・八・九號・同三十二卷一・四號)

(11) 小金井良精氏「安房神社洞窟人骨」(史前學雜誌五卷一號)

(12) 山本博氏「福岡縣關の山洞窟とその遺物」(考古學雜誌二十二卷四號)

(13) 神田五六・金井喜久一郎氏「上水內郡樽村追通石器時代洞窟の調査報告」(信濃二卷六號)・「同補遺」(同七號)・「追通洞窟採集のクルミに就て」(同十號)、八木貞助氏「樽村先住民遺跡洞窟附近の地質」(同六號)、金子富雄氏「長野縣上水內郡樽村追通石器時代洞窟住居阯」(史前學雜誌五卷五號)

第二章　資　料　篇

順序として最初に從來報告せられたもの及び私の知り得た洞穴遺跡の個々に就いて概要を記し、その基本的資料を羅列することゝしよう。

遺跡の分布

從來學界に報告せられ又は自分のノートに存在する洞穴遺跡は、その數左迄多からぬが、今五十三個所を算し、更に類似遺跡が九個所に達してゐる。今これを地方別に示すと左表の通である。

地方別／數	洞穴遺跡	類似遺跡
關東地方	一〇	二
東北地方	二六	（北海道手宮）一
中部地方	六	一
北陸地方	七	｜
近畿中國地方	｜	二
四國地方	二	｜
九州地方	二	一
南島地方	｜	二
計	五三	九

第一圖は右表に基いて大體の分布圖を作製したものである。扨て如上の少數な現在の知識に基いて、種々な考察を施すことは些か無暴の企てと言ふべきであらうが、假に想像を逞しうならば、第一に思ひ浮ぶ事實は、全國の古代遺跡數（先史時代及び原史時代に亙る）に比して甚だ少數なる點であらう。例へば石器時代遺物發見地名表所載の遺跡數を見るも、内地のみで一萬餘を算する。故に洞穴遺跡は實に九牛の一毛たる觀を呈してゐるといふべきで且つ將來なほ相當發見率の可能を考慮に加へるとしても、



Fig. 1. 洞穴遺蹟分布圖

本邦に於いては他の古代遺跡に比し、遙かに少數であると言ふことが出來よう。次に地方別にすると、東北地方が斷然多數を占めてゐる。固よりそれは自然地理上の制約も存在し得るであらうが、なほこの現象に就いては他に考慮を廻らすべき問題が含まれてゐると考へる。これ等の考察は一應遺跡の實際を敍べた上、徐々に觸れて行くことゝする。

各地洞穴遺跡の概要

以下本邦各地に存する遺跡の個個に就いてその概要を列擧するが、便宜上前述の地方別に從つて記すことゝする。

(1) 關東地方

相模國三浦郡 浦賀町鴨居

赤星直忠氏の發掘報告に係るもので、遺跡は鴨居海岸に突出する鳥ヶ崎の一端に存し、水蝕に成る自然洞穴である。高約七尺・巾約十五六尺・奥行十五六尺、奥部に至るに從ひ狹低となり、且つ貝塚を積成してゐる。貝塚と赤土との間には灰層が認められる。發見遺物は



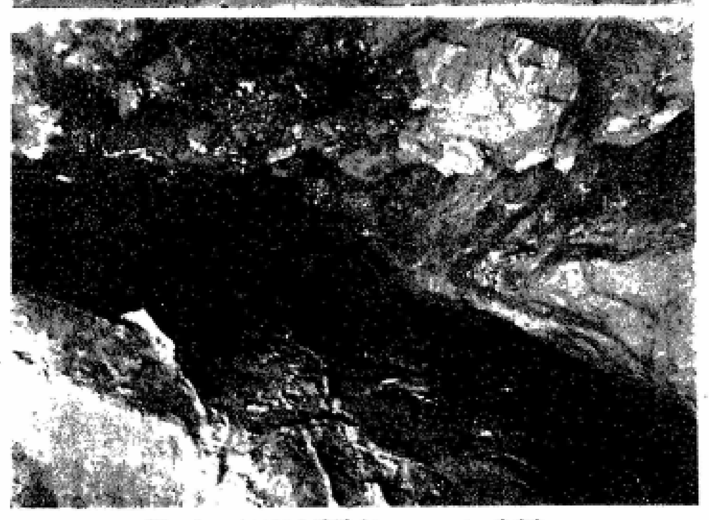


Fig. 2.　鴨居洞穴遺跡（上ハ入口下ハ奥部）
（川村眞一氏貸與）

多數の人骨を始め、土師器・骨鏃・銛・銅釧・鐵鏃・鋺・滑石製勾玉・鹿角製刀子柄・臼玉・貝製腕部裝飾品等が發見せられた。なほ洞穴の上方には十數個の横穴群が存在し、多數の副葬品が發見された。本洞穴も遺物の內容から見て、

それ等の横穴と密接な關係を有するものと考へられる。

上總國君津郡竹岡村洞口

湊町在住夏目氏の調査並に談話に據る。前記鴨居と東京灣を隔てゝ斜に對する西上總の海岸に存し、同じく自然洞窟で、入口廣く奥行約四間、底部に約二尺の砂層があり、層中に遺物を包含してゐる。嘗て房總線工事に際し、多數の人骨を發見したが、更に夏目氏の發掘によれば、人骨と共に繩文式土器片・彌生式土器片・貝輪等が出土した。人骨は何れも不規則に存したといふ。なほ繩文式土器は第五圖の如く小破片で型式を詳にしない。又貝輪は笠貝製で、他の洞穴遺跡からも發見せられてゐる。



Fig. 3. 鴨居洞穴內遺物發見狀態
（川村眞一氏貸與）

安房國安房郡館野村大綱大巖院裏

村崎勇君の報告に據る。遺跡の內容は詳でないが、同君の言によれば同じく自然洞穴で、相當廣い面積を有するといふ。同君は內部から繩文式土器二片を得られた。土器の型式は明瞭でないが、所謂古式繩文土器に類似してゐる。その外人骨及び龜甲等が伴出したといふ。

同國同郡神戸村佐野白萩字いわゐ堂

八幡一郎氏の詳細な報告が存する。(1) 洞穴は相當破壞せられて、僅かにその一部を存するのみである。第三紀凝

灰岩層の下部に存する自然洞穴らしく、內部は土砂が充滿してゐた。發見遺物には多數の人骨と輕石・貝殼（鮑・赤貝）・獸骨（鹿・鯨）及び人工品には貝輪一個と大理石製有孔裝飾品三個がある。殊に注意すべきことは貝輪と有孔石製品である。前者は二枚貝の一片を輪狀に抉り周圍を硏磨したものであるが、更に外部に三個の抉込を附し、四個のひとで狀突起を作つてゐるもので他に餘り類品を見ない。後者は何れも半環狀を呈する石製品で、一端に孔を穿ち、一見玦狀石製品の一半か、異形勾玉に類似してゐるが、同じく類品に乏しい貴重な資料である。その他の遺物は不明である。人骨に就いては小金井博士の言によれば特に舉ぐべき點は認められないといふ。

Fig. 4. 鴨居洞穴發見遺物
（赤星氏作圖ニ依ル）

同國同郡同村安房神社境內

昭和七年三月以降數回自ら調査に當つたもので、その詳細は前記報告を參照せられたい。今簡單に概要を摘出

すると、洞穴は附近の丘陵を構成する第三紀凝灰岩の下部に穿たれた自然水蝕に成るもので、入口廣く奥に至るに從ひ狹低となる。東北に開口したらしく、その端は丘陵の盡くる所で、現在の海岸から約九町を隔てゝゐる。全長約六間、巾はほゞ中央部で約一尺、入口近くで五尺、奥部は上昇し且つ上下壁が母岩の走向に沿ふて斜と



Fig. 5. 竹岡村洞口洞穴發見土器拓影



Fig. 6 大 網 洞 穴 (村崎君貸與)

なつてゐる。內部は殆んど全部有機質より成る黑土と落盤とを以て充滿され、下底部には若干の砂礫層が水平に存した。發見遺物は多數の人骨と貝殼(鮑・蛤・タマキ貝・笠貝類)・獸骨(鹿・猪・狸等)・鳥骨・魚骨を始め、木炭・燒土・灰・石塊等の自然遺物と、土器・石槌・貝輪・小玉が存在した。その包含狀態は殆んど支離滅裂で、或は何等かの理由で攪亂せられたかとも思はれる樣を呈してゐたが、僅かに中央より少し奥の下底部に於いて砂層に沒し完全な頭蓋骨とその傍に一個の完全な土器及び鮑貝が存したのは注意すべき點であらう。遺物中特筆すべきものは人骨であつて、小金井博士の調査によると約二

十人餘の骨骼が存し、就中十五例の成人骨には全部拔歯の風が認められ、その様式は何れも上顎の左右第二門歯と犬歯四枚及び下顎の門歯四枚を缺除してゐるといふ。その外土器は完形品一個破片二十八個、前者は小形坩で土師器に屬し、後者は二十六片が同質の無文素燒土器、他の二片は繩文式土器に屬する。次に貝輪は頗る多く、タマキ貝製約百八十個(破片共)、笠貝製十個、赤貝製二個、蛤製一個を算し、タマキ貝製は全部打製粗造品、笠貝製は全部磨製精製品であり、且つ前者は入口に近い灰層附近から集團して發見された。小玉は三個で何れも滑石製品である。なほ洞穴内の所々に焚火の跡らしい個所があり、火中した貝殼・石塊・人骨片等が認められた。

なほ附記しておきたいことは、右の洞穴に近い布良村方面にも多數の水蝕洞穴が存在し、中には種々な傳說を附帶するものもあるが、未調査の爲めに内容は不明である。**又同郡西岬村砂山**には自然の洞穴を利用して一部に加工した横穴古墳が存在し、人骨及び管玉・金環が發見されてゐる。同じく**同村字土珊瑚所在鉈切船越神社**の背後にも一洞穴が存し、入口巾十九尺三寸・奥行約十間を有し、嘗て骨片や土器類が發見されたと傳へ、彼の著名な刳舟も亦此處に存在したといふ。(2) 共に類似遺跡として擧げるべきものであらう。

上總國夷隅郡興津町守谷荒熊(小浦)

山崎直方・柴田常惠・小金井良精・田澤金吾の諸先輩を始め、多數の人々によつて踏査せられた洞穴で、海岸に面する斷崖に存し、第三紀凝灰岩が海蝕によつて作られた自然洞穴である。入口はほゞ三角形を呈し底巾約四米、奥に至るに從ひ狹まり、中央の高約二・八米・奥行十四米を算する。底部はほゞ水平で遺物層が存するが、その厚さ入口に於いて約一・五米奥に從つて薄てくなる。次に發見遺物は人骨片・獸骨(鹿・猿類)・貝殼・木炭等と土器片である。なほ田澤氏の實査された部分の堆積層は第八圖に示す如き狀態を呈して居た。卽ち上から順に數へて

Fig. 7. 守 谷 小浦洞穴

第一層は表土（厚八寸）の下に砂層が存し、砂礫に貝殻・獣骨・魚骨類が包含され、稀に鐵片を混じて居り、次に第二層は土砂中に灰と木炭が相重つて層を成し、獣骨（猪が最も多い）及び貝殻・魚骨等が混在する。第三層は黄色砂土中に小量の貝殻及び獣骨が混じ、落盤と思はれる七八寸大の石片が多數認められ、更に東南隅西へ約一尺一寸（表土から約二尺）の個所で頭蓋骨片が出土した。第四層は黒赭色土層で落盤少なく、貝殻（ニシ・アハビ）・獣骨・鳥骨・土器片が發見され、殊に下底部には夥しく土器片が存在した。第五層は柔軟な灰層で黄色を呈し、木炭層も存する。又貝殻が多數に集積せられ、落盤は殆んど無く土器片が發見された。第六層は最下層で岩盤上にあり、堅緻な灰層中に木炭層を諸所に混じてゐる。ほゞ中央部に大鮑三枚と土器片が多數出土し、又下顎円歯一個を發掘した。更に同氏は入口より約十米の奥部を發掘されたが、その部分は堆積層頗る薄く入口に近い

Fig. 8. 守谷蓬熊洞穴層位圖（田澤金吾氏測定）

方で厚一尺五寸、内部は砂土層で木炭と灰が相重なり、發見遺物は前と同様貝殻・獸骨・魚骨類と、少量の土器片が認められ、更に表土から五寸位迄には近世の陶器や鐵釘等が混在し、後世利用の痕を物語つてゐる。なほ出土遺物中の土器は全部を通じ何れも土師器に屬し、伴出遺物から見ても石器時代のものとは認め難いといふ。なほ山崎氏はその堆積層の斷面から見て、それが何れも水平に沈澱された狀を示し、且つ層位的區別が現はされてゐるとの理由から、この地が現在迄に四回の隆起と二回の沈降をなしたと説かれてゐる。又房總資料に人骨十二と陶器二個を出したと記載せられてゐる洞穴も恐らく同一のものであらう。



Fig. 9. 守谷本壽寺洞穴發見の遺物
（左端は辨天崎發見の土器）

同國同郡同町守谷辨天崎

山崎氏及び增井經夫氏の報告に係る。前者と同様海岸に存する洞穴で、成因も亦同じである。今は相當崩壞せられてゐる。入口幅十二尺・高六尺四寸・奥行十一尺一寸を算する。遺物包含層は厚約三尺五寸で土砂・落盤・灰等を含む。發見遺物には人骨・貝殻（鮑・牡蠣・笠貝・石ダヽミ・サヾエ等）魚骨等の自然遺物と、土器・石器類及び銅釘（?）等の人工遺品が發見された。增井氏の報告によると、土器は所謂彌生式土器であるが上中下三層各々様式を異にし、最下層は厚手粗造で、内外面に櫛目様の文様を附し、中層は薄手で外面のみに櫛目文を附し、上層は明かに轆轤を使用して作つたものであるといふ（第九圖向つて左端上は中層下は下層出土土器片）。然し自分の實見した所によると、その

間若干の用途は認められるが、等しく土師器に屬すべきものと考へられる。石器は一個で小球形硬質の自然石に中央から孔を穿つたもの、用途は不明である。なほ人骨は四肢分裂して不規則に存在したといふ。

同國同郡同町守谷蝙蝠穴

増井氏の報告に係るもの、前者と同質同成因の洞穴で頗る狹長、奥行百三十尺に達し奥部に於いて二分する。遺物包含層も亦厚く砂層・貝層・粘土層・落盤等が比較的整然と堆積されて居る。發見遺物には人骨・貝殼(鮑を主とす)・灰・笹葉等の自然遺物と、陶器片が存し、且つ人骨は一種の屈葬と考へられる狀を呈し、骨盤の上に大なる圓石が載せられてあつた。

同國同郡同町守谷本壽寺

増井氏所報のもの、同質同成因の洞穴で入口幅十三尺餘・高七尺四寸・奥行二十四尺八寸、堆積層は薄く上表より砂層六寸・炭層四・五寸、再び砂層一・二寸で岩盤に達する。又杉皮や葉を平らに敷いたと思はれる跡があり、その他人骨・貝殼(鮑・笠貝・石ダヽミ・蛤等)・魚骨・獸骨・鳥骨・蝸牛殼・木片等を始め、人工遺物には土器・貝斧・角器・圓石・朱(鮑貝に入れた)等が存した。その中土器は第九圖の右に示す如く、明かに繩文式に屬し、且つ製作文樣上から薄手式中の所謂安行式と呼ばれるものに當る。又貝斧は同圖中央に示す如く大形厚肉のカキを利用したもの、共に特筆すべき遺品であらう。

扨て以上は三浦半島と房總半島の海岸地帶に發見され、遺物の出土確實なものを舉げたのであるが、同地方は今後更に多くの新發見が期待し得られる。故に地方有志の注意を切望する次第である。

上野國吾妻郡岩櫃山中郷原字古屋

同所の北方中腹に鷹の巣と呼ばれる洞穴が存する。地質・成因は不明、高さ二丈・幅八間・奥行二三間、平地約十坪を存する。昭和三年内部より彌生式土器數個を發掘し、更に人骨齒・角製品・貝殼等があつたが、同四年には貝輪破片が發見された[3]。なほ詳細は後日の調査に待つべきであらう。然し山嶽地帶の洞穴として注目すべきものと考へられる。

【註】(1) 八幡一郎氏「安房國安房郡神戸村の古人骨埋沒地」(人類學雜誌四十卷三號)、千葉縣史蹟名勝天然記念物調査第四輯
(2) 西村眞次氏「鉈切船越神社所藏の刳舟」(人類學雜誌三十一卷十號)
(3) 金澤佐平氏「吾妻郡原町史蹟」(上毛及上毛人百六十四號)

(2) 東北地方

陸前國宮城郡鹽釜港字崎山園

永澤讓次氏の報告に係る[1]。鹽釜灣の西に臨む第三紀層の斷崖に存する自然洞穴で、東方に開口し、間口一六米・奥行五米・高六米を算し、底部は平坦上壁は奥に向つて穹窿狀を呈する。内部はもと南方の半部及び北方七八分が土砂に埋もれてゐた。發見遺物には人骨七體分とその副葬品と考ふべき管玉・小刀子・砥石・骨角器・土師器・陶器等が存し、更に入口に近い南隅から穴の前方に係けて貝塚が積成され、貝層中からは繩文式土器・紡錘車・獸骨類が發見せられた。洞穴と貝塚との關係は不明に屬する。因みに現在も本洞穴を利用して鈴木氏の住宅が存してゐる。

なほ山内清男君の談によれば、松島中の宮戸島にも洞穴が存し、土器と人骨が發見せられてゐるが、土器の型式は繩文式末期か又は彌生式に屬すと認められるべきものであるとのことである。

陸前國氣仙郡日頃市村關谷

大山公爵・小金井博士・柴田常恵・八幡一郎・小田島祿郎諸氏の調査があつたが、未だ詳細な報告は發表せられてゐない。私は主として大山公爵と小田島氏の教示に基いて概要を述べよう。洞穴は古生層中に存し水蝕に成る石

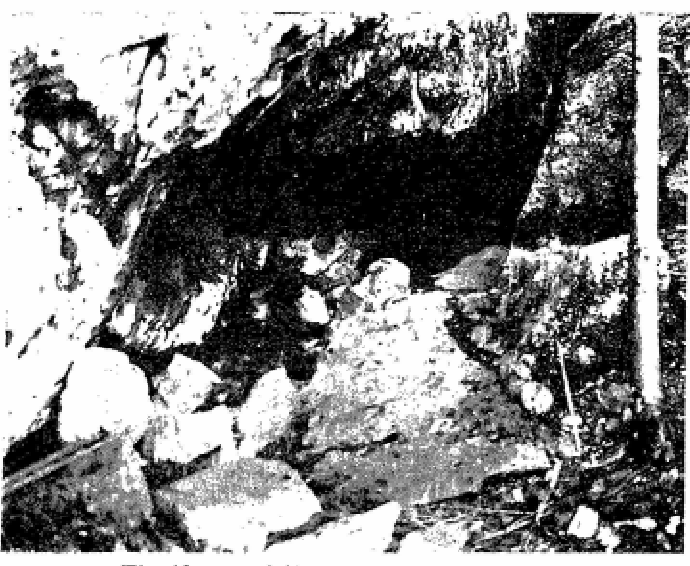


Fig. 10. 日頭市村關谷洞穴（八幡一郎氏撮影）

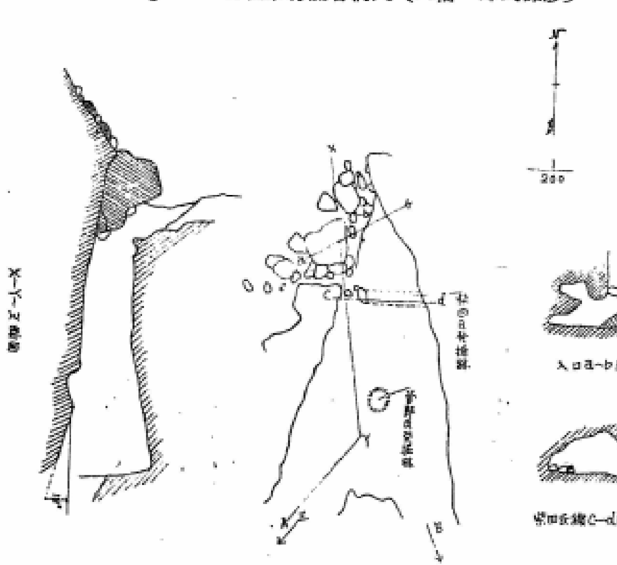


Fig. 11. 日頭市關谷洞穴實測圖（大山公爵測定）

灰洞で、入口狹く內部は直ちに幅三間奥行八間の空洞となる。その北方は左右に二分し、暫時にして再び合する。奥部に池が存し、その傍のにも小支洞が認められる。內部は落盤その他の堆積層相當厚く、且つ一部に貝塚が積成せられてゐる。大山公爵の發掘によれば堆積層は表土約四〇糎、その下に灰と燒砂の薄層各〻五糎があり、更に土層一〇〇糎を算した。發見遺物は獸骨・貝殼（カキ・アサリ・

蛤・沖シヾミ等）と土器・石匙・骨角器（銛・串・骨管等）・玦狀耳飾・砥石類で、土器は繩文式土器、型式は薄手式と厚手式とを混ずるといふ（小田島氏に據る）。

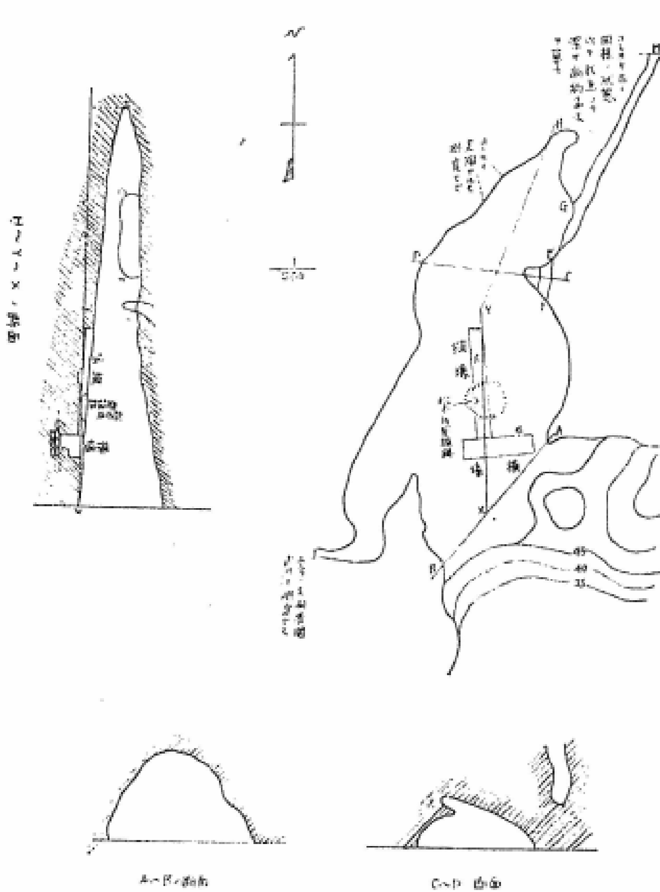


Fig. 12　梅ノ木女神洞穴實測圖（大山公爵測定）

同國同郡矢作村梅ノ木女神

前者と同時の調査であるが、大山公爵・八幡一郎氏の旅行記が存するのみで詳細は未發表である。今公爵の御好意によつて全部の資料を貸與せられたので、右に基いてその概要を記述しよう。成因は前者と同じく石灰洞で北方に開口する。入口幅約六間・高約三間半・奥行約十五間を算し、奧部に至つて漸次底部上昇し狹低となる。入口より直ちに北方へ支洞が存し又最奥部に於いても左右に分岐する。左方は不明であるが右方は頗る狹長となり十數間に達してゐる（圖版第二・第十二圖）。公爵は入口に近い中央部を横縱に發掘せられたが、その横壕をa區、縱壕をb區とする。a區に於いては堆積層の厚約一一一糎にし

て礫塊に達し、その間表土迄十六層が認められるが、全部を通じて發見せられたものは、獸骨(鹿・猪・犬?狸等)を始め骨角器(針・銛)・貝器・土器・石器(石鏃)で、その中土器は縄文式と彌生式とが混在し、前者は全部所謂薄手式で且つ奥羽式を主とし何れも小破片(第十四圖)、後者には土師部に屬すると思はるゝものも含み、刷毛目文様を有するものや、轆轤使用の痕あるもの、底に木葉を印するもの、朱を塗布するもの等が認められる。又兩式の何れに屬するか不明のものも存在する。次に骨角器は第十五圖に示す如く、針及び串と、精巧な兩頭銛が發見せられてゐる。なほb區に於いては遺物層は二層となり、發見遺物はa區とほゞ同樣である。なほ堆積層には層位が認められるが遺物類は上下同種のものが混出してゐる。小田島氏に據れば右の外人骨や厚手式土器・紡錘車形土製品等が發見せられて居り、又大正十三年には入口近くの洞壁下より多數の獸骨を發見したといふ。

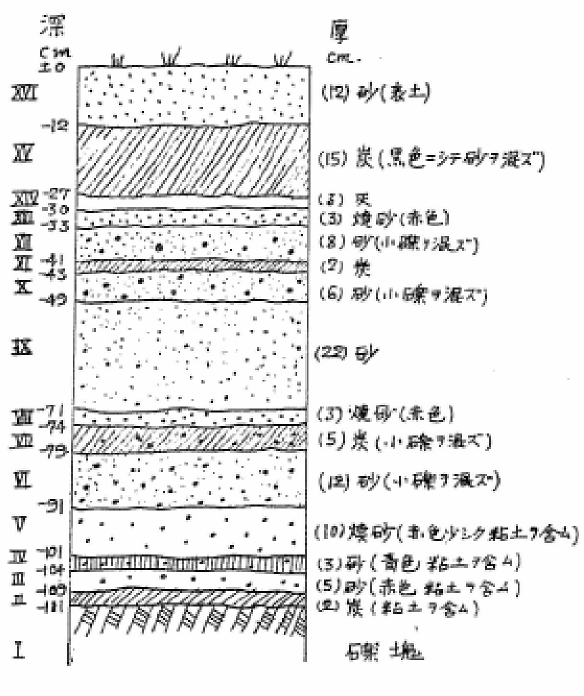


Fig. 13. 梅ノ木女神洞穴内層位圖
(大山公爵測定)

同國同郡同村木戸口蝙蝠穴

同じく大山公爵及び小田島氏の教示に據る。洞穴は石灰洞で奥部不明、入口は二個所に分れる。内部の廣い所

で幅三間、全體屈曲多く且つ狹長である。遺物には鳥獸骨・貝殼・石屑を始め、小量の土器が存するが、それは何れも繩文式で且つ薄手式末期のものに屬してゐる。

同國同郡同村的場

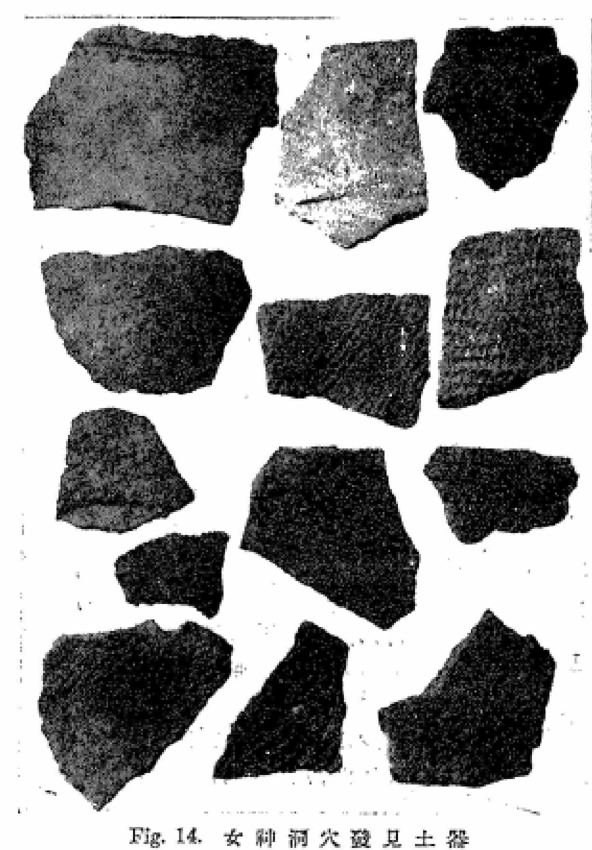


Fig. 14. 女神洞穴發見土器

小田島氏の報告に據る。石灰洞穴で入口狹く內部も亦同樣、その幅六尺から九尺位、長三間餘、奧は狹まり幾多曲折し、且つ湍水が存し雨の際は側壁に沿うて流水がある。發見遺物には獸骨（鹿・猪）と小量の繩文式土器が存する。土器型式は厚手式に屬するといふ。

同國同郡八日町蛇王窟

松本彥七郎氏と小田島氏の調査報告に據る[2]。有住川西岸岩壁に存する石灰洞で、道路開鑿の爲破壞せられ、今奧部のみを存してゐる。幅二間二尺・奧行一間一尺・高四尺六寸を算し、內部は殆んど天井迄土壤と落盤が堆積してゐる。松本氏によれば遺物層は六層となり、第三層から第六層迄は石器時代遺物が包含するといふ。發見遺物には人骨・獸骨（猿・エゾアシカ）・貝殼（アサリ・アワビ等）及び土器・石鏃・石匕・貝輪等である。人骨は熟年女子で第四層と第五

層の間に淺く掘り凹めて仰臥屈葬せしめ、東枕とし頭部は一個の石片を枕とし、兩膝を强く折り脊柱を約四五度屈せしめてゐた。なほ小田島氏によれば小兒人骨一體が存したといふ。土器は繩文式で所謂關東薄手式に屬する。

同國同郡世田米村上城

小田島氏所報のもの、石灰洞、幅一・二間で狹長な洞穴である。發見遺物は小量の土器が存するが型式に就いては不明である。



Fig. 15. 女神洞穴發見石器骨角器

陸中國東磐井郡長坂村

磐井里小豆用熊穴

大山公爵・八幡一郎・鈴木貞吉氏等の調査報告が存する。[3] 今大山公爵貸與の資料と、鈴木氏の報告に基いて概要を記述する。洞穴は猿澤川流域西岸に存する狹長な石灰洞で、入口は三角形を呈し幅一間餘・高一間半、奥行は不明、奥部に漸次上昇する。入口より約十六間半で右折し、更に二間餘で段があり、左折して五間餘で再び段に遭ひ、梯子を架して登れば再び約六間にして左折する。更に三間餘で段となり、それより上は未調査であるが、但人の言によれば、なほ深く幅廣い個所が存するといふ。遺物は入口附近に若干を存し、それより奥部約二十九間二段を越して左折せんとする一角に相當多數を發見した。發見遺物には人骨十數體分、獸骨及び土器・

貝輪等で、人骨は粉砕したと思はるゝものが多く認められたといふ。土器は縄文式で涌手式に屬する。

Fig. 16.　長坂村熊穴洞穴（八幡一郎氏撮影）

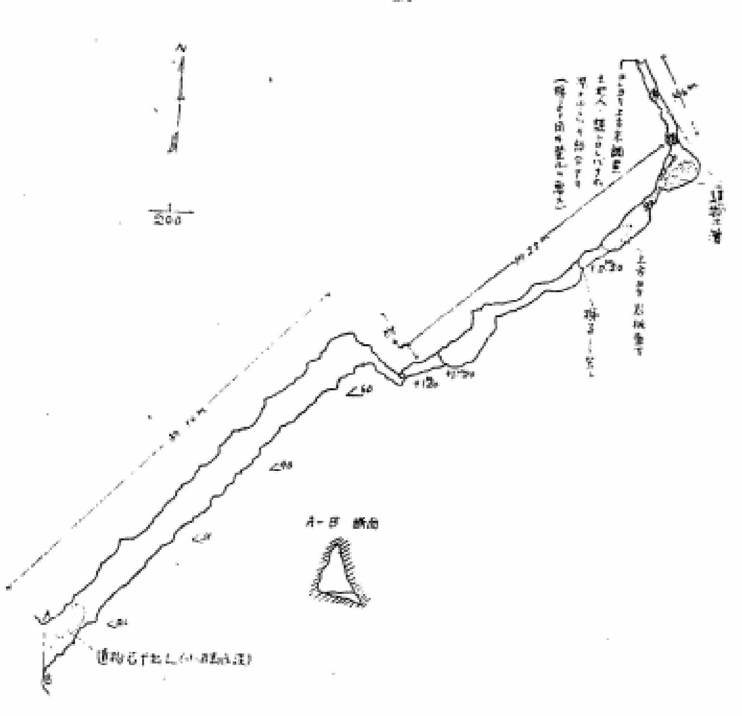


Fig. 17.　長坂村熊穴洞穴實測圖（大山公爵測定）

同國同郡同村石川

同じく大山公爵・八幡・小田島氏の調査報告に係るもの、洞穴は石灰洞、入口幅十尺・奥行十四尺・高三尺五寸、遺物は小量の獸骨・貝殻と、土器・骨製耳飾（朱塗）・貝輪等である、土器は前者と同一である。

同國同郡同村羽根堀長田山

前者と同じく三氏の報告に據る。山の頂上岩壁面に存する石灰洞で、入口幅五尺、更に幅六尺より八尺位で約三間を進めば狹まつて二間と三間の主洞に達す。その奥は上部屈折反轉して二階の如き狀を呈する。遺物には石屑・獸骨・貝殼類と土器が發見せられてゐる。土器の樣式も前者と同一である。

同國同郡田河津村横澤(箕穴)

小田島氏及び田澤金吾氏の報告に係る。同じく石灰洞で入口狹く匍匐して入る。約四間位は幅一間以內、その奥に幅二間二尺・奥行二間四尺の空洞が存する。遺物は少量の獸骨、貝殼類と、土器・貝製裝飾品が發見されてゐる。土器の樣式は前と同樣である。

同國同郡同村高金

小田島氏に據る。石灰洞穴で、入口一間二尺、約五間程は幅一間四尺、次で幅五間四尺・奥行八間の主洞に出る。側に一小流がある。遺物には人骨(?)・獸骨(やゝ多量)を始め、土器・貝輪が發見されてゐる。

同國同郡門埼村布佐

小田島氏に據る。狹長な石灰洞穴で、長さ數十間を算し、內部に小流及び奥部に瀑布が存する。遺跡の大部分は流失したらしい。發見遺物には土器・打製石斧が存する。土器は繩文式で且つ薄手式に屬してゐる。

同國同郡大原町坂本

小田島氏に據る。石灰洞穴で、入口幅五尺、直ちに幅一間五尺・長三間の空洞があり、これに續いて第二・第三の空洞が連接する。發見遺物には少量の土器があるが、その樣式は前者と同樣である。

同國上閉伊郡上鄕村沓掛觀音

小田島氏報告、石灰洞穴、入口幅五・六間・奥行十餘間、奥は狹長となり內部に流水がある。發見遺物は少量の獸骨と土器で、土器の樣式は前者と同樣である。

同國同郡同村沓掛鑄錢窪

小田島氏報告、石灰洞、入口幅二・三間で內部は狹長、發見遺物も亦前と同樣である。

同國同郡大槌町大槌馬場野

小田島氏報告、石灰洞、入口の幅は廣いが向つて左方に石垣を築き山神碑その他を建てゝ居り、且つ岩面の露出する部分があるので、遺物包含部は幅十五尺・奥行二十二尺五寸で、殊に入口附近洞穴左側に遺物が多い。發見遺物は少量の獸骨と貝殼及び土器である。土器の樣式は前と同樣。

同國下閉伊郡岩泉村大北川横穴

小田島氏報告、石灰洞穴、間口八間・奥行六間、內部は流水で洗はれたと思はれる。遺物には小量の獸骨片と土器が存する。土器の樣式は前と同じである。

同國同郡同村大北川瓢穴

小田島氏報告、石灰洞で瓢形を呈してゐる。入口幅九間・奥行十一間半・高二間、第二室は幅一間・長四間。遺物は獸骨・貝殼(小量)・土器・石鏃等で、土器は比較的多量、樣式は前と同じである。

同國同郡同村大北川明戸穴

小田島氏報告、石灰洞、間口十四間・奥行七間半、遺物包含層は極めて淺い。發見遺物には小量の土器が出土

してゐる。その様式は前と同様である。

同國同郡同村尼額松坂穴岩

小田島氏報告、石灰洞穴、開口五間半・奥行三間、奥に上下の二狹洞が存し、數十間を入ることが出來る、下洞は時々浸水せられる。遺物は入口附近の半洞穴狀の個所に多く發見され、その種類は獸骨(鹿・猿)・人骨(?)及び土器・骨針・貝輪等がある。土器は繩文式で厚手式に屬する。

同國同郡岩泉町岩泉皆畑蝙蝠穴

小田島氏報告、石灰洞穴、入口幅七尺八寸・奥行七間、左右に分岐し、右方の支洞は更に三分する。遺物は小量の獸骨と土器で、土器の様式は繩文式薄手式に屬する。

同國同郡同町岩泉白土穴ノ口

小田島氏報告、石灰洞、入口一間、内部は幅二間・長四間・高六尺、瓢形を呈してゐる。發見遺物に鳥獸骨・貝殼(小量)及び土器片が相當に存在した。土器の様式は前者と同様。

同國同郡同町外川目赤穴

小田島氏報告、石灰洞、入口幅五間半、内部は幅二間半・長四十間以上に達する。次に匍匐して第二洞に入る。長十一間餘、更に第三洞が存するが未調査。入口附近に支洞が存する。發見遺物には鳥獸骨(多量)・貝殼(小量淡水產)と土器・石鏃・骨針・骨角器・貝輪等である。土器はその量多く様式は前者と同様である。

同國江刺郡岩谷堂町根岸

小田島氏報告、安山岩質礫岩に開口する洞穴で、幅五間五寸・最大幅七間一尺五寸・奥行三間、内部に爐趾が存

する。發見遺物は石屑と小量の土器で、その様式は縄文式厚手式に屬する。

同國紫波郡赤澤村漆山

小田島氏及び佐伯敬紀氏報告、石灰洞、入口狹小匍匐して入ると、三間に五・六間の主洞があり、これに接續して狹長な第二洞に至る。支洞を伴ふ。發見遺物は獸骨・人骨を始め土器・石棒・石斧等で、その中土器は相當量を存し何れも繩文式、型式は關東薄手式及び奥州式の兩者が存する。

以上東北地方には多數の洞穴遺跡が存し、その多くは山間丘陵の谿谷に存する石灰洞であつて、關東地方のものと稍〻趣を異にしてゐる。且つ遺物を通じて見ると、その殆んど全部が繩文式土器を主とする石器時代の文化楷梯にある住民の利用したものであることが認められる。

【註】（1）永澤讓次氏「陸前國鹽釜港字崎山囲洞窟の石器及び古墳時代遺跡に關する略報」（史前學雜誌三卷一號）
（2）松本彥七郎氏「陸前國氣仙郡蛇王洞窟の石器時代遺跡」（人類學雜誌四十二卷二號）
（3）鈴木貞吉氏「猿澤川筋大洞窟遺跡發見に就て」（考古學雜誌十四卷十四號）

(3) 中　部　地　方

伊豆國賀茂郡下田町附近

清水吉彥氏の報告に據れば、下田町近傍に於いて、凝灰岩質の自然洞穴から人骨の出土した例があるといふ。遺跡の性質明瞭を缺くが、類似遺跡の一とすべきであらう。南豆の海岸は地質並に地形を始め、各種の現象安房と同じく、古代の遺跡遺物亦頗る類似を示すものが認められるから、なほ精査すれば這種遺跡の發見は困難でないと考へられる。

信濃國小縣郡長村横澤組岩谷堂

小山眞夫氏の報告に係るもの(1)、その詳細は知り得ないが、發見遺物に土器が存する。その様式は繩文式で薄手式に屬するといふ。

同郡依田村御嶽堂區岩谷堂

同じく小山氏の調査報告に據る(2)。同所岩山の中腹に存し、風雨の削蝕に成る自然洞穴で、入口の幅五尺九寸、奥に至るに從つて斜に上昇し狹くなる。發見遺物は人骨を始め直刀二口・鐵鏃・倣製鏡・滑石製紡錘車・土器(多數)陶器(一片)等で、人骨は西枕に伸展葬してゐたらしく、直刀は入口南壁に接し表面七八寸の個所から發見され、土器類は主として入口附近に埋沒してゐたといふ。同種の遺跡は既に述べた如く他にも事例が存するが、洞穴利用の古墳といふべきで、小山氏は岩窟古墳と假稱してゐる。

同國北佐久郡三井村香坂字口明

大野延太郎氏の略報がある(3)。同所斷崖の絶頂に存する自然の洞穴で、内部は八疊敷程の面積を有し、發見遺物は附近の閼伽流山明泉寺に所藏せられて居る。その種類は人骨・石鏃・管玉・曲玉・石棒・石槍等である。しかしその全部が果して洞穴中から發見されたか否かに就いてなほ攷究の餘地が存するといふ。從つて遺跡の性質も亦詳ではない。又同所斷崖の下から繩文式土器・土偶・彌生式土器等が發見せられてゐる。

同國諏訪郡四賀村岩窪

兩角守一氏の調査報告に據る(4)。洞穴は海拔一一〇〇米の岩山の一部、安山岩の集塊岩より成る岩壁に存する自然洞穴で、東南に開口し、入口幅約二間・高約九尺・奥行左方五尺右方約九尺、奥に至つて狹小となる。底部面積

二坪餘で凸凹が存する。入口近くは堆積層厚く他は攪亂せられてゐる。發見遺物は人骨(十四片)・鐵鏃・彌生式土器・陶器(一片)・石製刀子(一個)等で、人骨と鐵鏃は入口近くから發見された。土器は何れも破片であるが、坩形・高坏形のものが多く、中には文様を有するものも存し、明かに彌生式に屬してゐる。遺物の狀態から見て一種の古墳と見られるが、兩角氏は現在のまゝでは頗る地域狭小且つ不安定であるので、舊くはなほ前方に突出してゐたものが、漸次削落崩壞したものであらうと推定してゐる。なほ最近同氏より聞く所によると、右の附近に小洞穴が認められ、その一部に凹所が存して、中から碧玉製小玉・瑠璃製小玉合せて約三十個を發見したといふ。

同國上水內郡栅村追通荷取

神田五六・金井喜久一郎・八木貞助・金子富雄氏等の調査報告に係る。裾花峽谷の北岸斷崖の中腹標高六五〇米の地に存するもので、集塊岩中の凝灰岩が浸蝕によつて成つた自然洞穴である。嘗て縣道開鑿の爲め一部を破壞せられ、現在は入口高一・六三米・幅約五米・奥行二・三米を算する。底面は水平、天井は奥部に向つて斜降する。奥壁及び向つて右壁に石塊が集積してゐる。遺物層は相當に厚く、且つ大體四層に分類せられるといふ。卽ちこれを表示すると上圖の通である。

	厚	包含層
A	15 cm	上部は淡褐色の乾燥した輕い粘土、下部は濕氣を有する。落盤多く遺物介在す
B	5 cm	黒褐色を呈する堅緻な土層で、落盤並に遺物を包含する
C	66 cm (不定)	濕氣を含む灰白色砂交りの灰層、落盤少なく、遺物最も多い
D	—	緻密な軟質砂岩、落盤無く、遺物も存在しない

次に發見遺物は獸骨片・同齒牙・胡桃實・桃實・石屑と共に土器・石槍・石鏃等、その中果核の多數に存するのは

興味を惹くが、更に往々小孔を穿つたものが認められる。土器は全て縄文式に屬し型式は薄手式であるといふ。

同國同郡同村座禪岩

前者に接して存する同種の洞穴で、嘗て土師器・陶器を發見してゐる。なほ附近には象の鼻洞穴・蝙蝠岩・長久保口洞穴等があり、やゝ離れて佛澤洞穴・鬼無里村親澤洞穴等が存し、精査すれば更に古代人利用のものが存在する可能性があらうと考へる。

【註】(1) 第五版石器時代遺物發見地名表所載。
(2) 小山眞夫氏「信濃國小縣郡の岩窟古墳」(考古學雜誌二十二卷二號)
(3) 大野延太郎氏「信州旅行調査報告」(人類雜誌二十卷二百二十七號)
(4) 兩角守一氏「信濃諏訪郡四賀村古岩窟原史時代遺跡に就いて」(人類學雜誌四十三卷一號)

(4) 北陸地方

佐渡國佐渡郡内海村鷲崎セコノ濱

本間周敬氏の報告に據る。(1) 佐渡島の北端海岸に存する自然洞穴で、間口八間・奥行六間を有し、内部は寄洲となり貝塚が積成せられてゐる。發見遺物には獸骨(猪・犬・狐等)・鳥骨・魚骨・貝殼(海水產)と、土器・陶器・角針・骨槍・石鏃等が存する。土器は彌生式に屬するといふ。

越中國氷見郡宇波村大境白山社境内

大正七年の發見調査に係り、本邦洞穴遺跡調査の先驅をなした遺跡で、同十一年史蹟に指定せられた。遺跡は富山灣の西岸第三紀層の丘陵が海岸に迫る所に存し、石灰質の砂崖より成る岩壁が海水の浸蝕によつて作られた

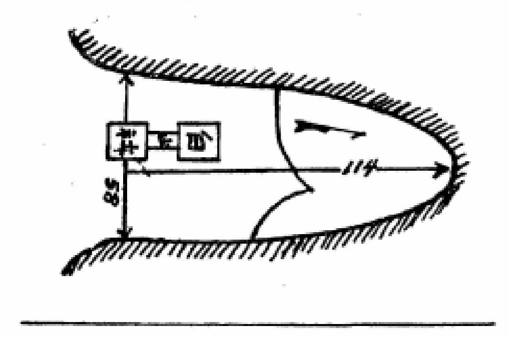
自然洞穴に屬する。內部に白山社が鎭座する。發見の動機は同社殿の改築に當り附近の地下四・五尺を發掘した際、偶然遺物の發見に遭遇したのであつた。形狀は天井穹窿狀を呈し、入口開き奥に至るに從ひ狹く且つ低くなる。入口幅約五十八尺・高約二十四尺・奥行約百十四尺である。次に遺物包含層は入口に近い部分に多く、その面





Fig. 18.　越中大境洞窟

積八十坪程であるが、內部は多數の落盤と土壤の堆積から成り、厚さ約八尺を算し、最下底は細砂層となる。而して最も注意せらるゝ事實は、遺物層が上部より數層に區別せられ、その間遺物の內容を異にしてゐる點であつて、卽ち古代より近代迄長年月に亙る洞穴利用人類の遺物編年が層位的に認められた點である。各遺物層は厚薄必ずしも一定せず又區劃の明瞭を缺く場合も存するが、大體に於いて第二十圖の如く六層を認める事が出來る。發見遺物は大體その層位によつて異なり、第一層からは釉藥ある陶磁器・小刀その他の金屬器等近世のものを出土し、第二層は須惠器及び金屬器類、第三層は須惠器・土師器・人骨等が發見され、相當厚く五尺に達する場合が認められ、第四層は薄く二寸乃至八寸位で或は缺除する所



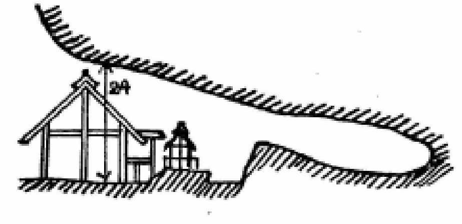


Fig. 19.　大境洞穴實測圖

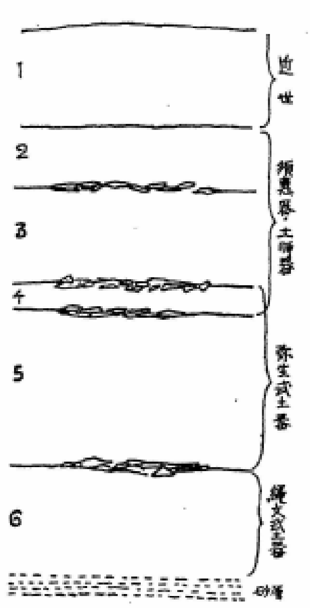
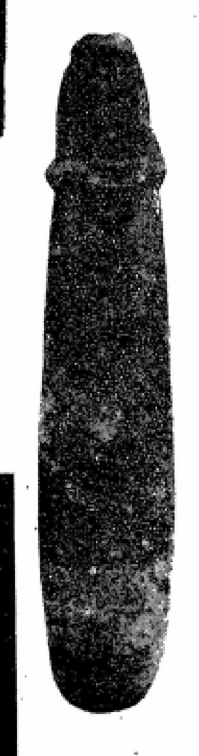


Fig. 20. 大境洞穴遺物層實測圖
（佐藤氏ニ據ル）

もあり、須恵器と彌生式土器及び骨器等が存し、第五層は頗る厚く主要遺物層を成して居り、人骨・獸骨・魚骨を始め、彌生式土器・石器・貝輪等が發見され、又厚約二尺以上の貝層が存し、一種の貝塚を形成してゐる。第六層は獸骨・魚骨類と縄文式土器・石器が伴出し、その下部は砂層で遺物の包含は認められない。なほ入口近く向つて左方底部に一二寸の丸石を敷き詰めた個所が存し、又反對側には少し凹所があつて多量の木炭・灰・土器等が發見され、なほ全體に亙り諸所に木炭・灰層等が認められた。

次に遺物を一瞥しよう。先づ人骨は約二十體分が存在し、中には老人や小兒の分も認められた。第五層中の左側に最も多く發見されたが、その中頭蓋骨のやゝ完形のもの三個について松村氏の測定した結果によると、二個が中頭一個が長頭に屬するといふ。更に興味深い事實はそのあるものに赤色を塗つた事例があり、又上下の犬歯を拔去した痕跡の存するものがあつて、本邦發見古人骨中の異彩とせられてゐることである。次に獸骨類には鹿・

猪・カモシカ・猿等、魚骨には鮪の存在が認められ、その他鳥骨及び貝殻には赤貝・牡蠣・鮑・蛤等が存在する。人工遺物には先づ石器に石棒・石庖丁・錘石・敲石等がある。その中石棒は左壁第五層中に横はつて發見された。長







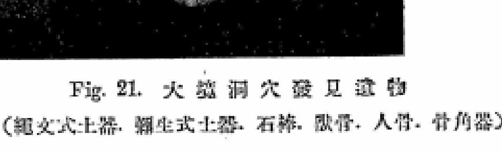


Fig. 21. 火竈洞穴發見遺物

(縄文式土器. 彌生式土器. 石棒. 獸骨. 人骨. 骨角器)

三尺二寸二分でその形狀縄文式土器伴出品と頗る異にしてゐる。一般に石器は僅小であつた。次に骨角器には鹿角製弓筈・同銛・鏃及び骨製針等、貝器には貝輪と鮑貝を磨いて作つた小圓形有孔裝飾品が存し、貝輪には朱が塗布せられてゐる。なほ骨角器の製作には金屬器使用の痕跡が認められる。最後に土器は最も重要な遺品で、前述の如く三種を認め、上層に須惠器と土師器・第五層を中心に彌生式土器・最下層に縄文式土器が存在した。その中彌生式土器が最も多量を占め、その形狀にも高坏・坩・盌等を始め各種のものが認められ、全體に刷毛目文を有するものが多く又往々口緣部内外に一種の文樣を印するものも存在する。縄文式土器は少量ではあるが、その型式厚手式に屬する。

以上を通じて見ると、本洞穴は最初石器時代繩文式土器使用人によつて利用せられ、次で彌生式土器使用者が蹤を追つて來り、更に原史時代に及び同じく人類の利用が繼續して近世に至つた事實が、遺物層の示す所によつて編年的に知り得られる。故に考古學界に於ける貴重な遺跡たることは先人の説かるゝ如く更に贅言を要しないであらう。

同國同郡同村大境

前者と接して存する同樣な洞穴で、柴田常惠氏の略報にかゝるもの、[2]入口幅約七十尺・高十八尺・奧行六十尺程で、維新前多數の人骨を發見した爲め、舊主より費を給して埋葬せられたといふ。一部に殘存する包含層中には人骨・獸骨・貝殼と彌生式土器が認められる。なほ附近には同種の洞穴が存在し、殊に大字宇波にあるものには古來椀貸傳説が附帶されてゐる。精査すれば更に人類遺跡の發見があらうと考へられる。

越前國南條郡河野村甲樂城（カツラキ）

古く高橋健自氏の調査があり[3]、後上田三平氏の報告がある[4]。敦賀灣の東北岸に存する自然洞穴で、入口幅二間四尺・高四間一尺・奧行十四間を有し、中軸は西三十度北に向ひ、奧壁は頗る狹く一尺餘に過ぎない。底部入口に於いては低く海水の浸入があり、礫石が堆積され、奧に至るに從つて漸次上昇し細砂を混ずる。奧壁から約六間程入口に近い個所の底部に砂質の部分があつて遺物が包含し他は攪亂されてゐる。本洞穴は古來南北朝當時恒良親王の潛居し給ふた所と傳へられ、古來地方に於いては史蹟として喧傳せられてゐたので夙く發掘せられた。高橋氏の調査に係る明治四十一年頃に存在した遺物には、骨鏃（弓筈？）・骨器（串）・繩文式土器片・彌生式土器片・坏一個・須惠器片・刀身片・刀身金具（切羽）・火打鎌・簪脚・寛永錢・文久錢・近世陶器片・庖丁片・船釘・獸骨（鹿・熊・猪・

猫・犬)・魚骨・人骨・貝殼(レイシ貝・クボ貝・ヨメガサラ)等で、古くは石器時代の遺品から原史時代に及び、更に近世の遺物も混合し、犬・猫の骨片等は明治以後と思はるゝものであつて、各時代に亙る遺品が發見されてゐる。その包含狀態は不明である。又上田氏の報告にも獸骨・人歯(?)・貝殼類と、彌生式土器・須惠器・骨製弓筈及び近代の鐵器等が擧げられ大體に於いて同樣である。なほ彌生式土器は刷毛目文樣を有するもので、河和田發見品と同一であるといふ。

同國坂井郡雄島村崎浦・梶浦

同じく上田三平氏の報告に據る。(5) 同所海岸に存する自然洞穴で、その中俗に辨慶拔穴と稱せられるものから遺物が發見されてゐる。貝殼(特に螺蠑が多い)と彌生式土器類である。

同國同郡東十鄕村長屋

後藤守一氏の敎示に據る。その報告並に遺物は帝室博物館に提出せられてゐる。遺跡の詳細は不明であるが自然洞穴で、發見遺物には石庖丁・砥石と彌生式土器(壺形五・鉢形一・高坏形二・椀形一・坏形一)が存する。なほ附近から一面の小形倣製漢式鏡が發見されてゐるが、洞穴との關係は詳かでない。

同國丹生郡茂原村赤壁・長須

齋藤　優氏の報告に據る。(6) 海岸に開口する自然洞穴で、赤壁に四個長須に五個を存するが、同氏の調査した長須所在の一洞穴に就いて見ると、入口幅九尺・高(現在)三尺餘・奥行二十五尺、內部の高約九尺を算する。內部は落盤甚しく發掘に困難であるが、中央向つて右壁に近い個所を試掘すると、包含層約二尺を有し、上より約五寸で灰・木炭・貝殼(サヾエ・鮑カキ等)が出土し、更に獸骨・土器類が伴出した。土器は土師器らしく、大形甕の破片

と高坏下部等が存する。

【註】（1） 本間酒川氏著「佐渡の史蹟」中「石器時代遺跡」の條

（2） 柴田常惠氏「越中國氷見郡宇波村大境の白山社洞窟」（人類學雜誌三十三卷七號）

（3） 高橋健自氏「越前國甲樂城浦の史蹟に就きて」（考古界八篇七號）

（4）（5） 福井縣史蹟勝地調査報告第一册及び上田三平氏著「越前及若狹地方の史蹟」

（6） 齋藤　優氏「福井縣丹生郡茂原村附近洞穴の遺蹟」（考古學雜誌二十二卷十一號）

(5)　近畿中國地方

同地方には明瞭な洞穴遺跡の發見を聞かない。僅かに人類學雜誌十二卷百三十七號所載の竹內利道氏談によれば、**淡路國津名郡岩屋町**に岩窟遺跡が存し、石鏃の發見が記されてゐる。遺跡の詳細に就いては何等知る事が出來ない。尙ほ今後の調査に待つことゝしよう。

次に中國地方に於いても、從來同種遺跡の存在を知られてゐないが、調査の不充分に據る爲めであらう。僅かに**出雲國簸川郡鰐淵村所在鰐淵寺**に於いて、寺後の洞穴中から多數の佛像・佛具・鏡類が發見された事例が存する。もとよりその性質は上記のものと全く相違し、洞穴が神祕化せられた宗教的遺跡の一とすべきであらうが、洞穴利用の一例として參考迄に擧げることゝする。尙ほ這種の洞穴遺跡は他にも存する。

(6)　四國地方

阿波國德島市城山

鳥居博士の調査報告に據る。徳島市の中央舊城址所在の小丘陵麓に數個を存し、結晶片岩質が水蝕によつて作られた自然洞穴である。その中同氏の調査せられたものに就いて見ると、入口は三角形を呈して狹く、右方は傾斜して天井となり、左方は側壁と底を形成してゐる。内部は落盤土壤及び貝殼を含む堆積層約五尺が存した。更に發掘の結果によると、左方は一段高く床狀を呈し、右方は低く陷落して溝狀を呈し、且つ貝殼が堆積して貝塚を作つて居り、更に入口にはドルメン樣の築構物が存在し、周圍から彌生式土器が發見された。又奥部には狹長な一室が接續してゐる。發見遺物は獸骨・鳥骨・魚骨・貝殼(海水産)及び石器・土器類で、土器は繩文式土器(薄手式)彌生式土器の兩者で、洞穴内部からは主として前者が發見され、後者は前述の如く入口近くの特殊施設附近から發見されたといふ。尚ほ附近の山麓に貝塚二ヶ所が存し、一方からは人骨が二體發見され、伴出物に繩文式土器(薄手式)・石器(石斧・石庖丁)・貝輪等が出土した。



Fig. 22. 徳島城山洞穴

土佐國香美郡佐古村逆川龍河洞

寺石正路氏の調査報告に係る。石灰洞で全長約一千米に及び、内には瀧や流水の存する個所があり、高低・曲折して、支穴多數に存し、鐘乳石・石筍等無數に垂下直立して實に奇勝甚だ見るべき洞穴であるといふ。遺物の發見されたのは入口より數百米の奥部、頂上に近い個所であつて、所々の巖陰に土器が散在し、且つ地下からは

貝殻（海水産）・獸骨類が發見される。土器は全部彌生式土器で完形品も相當に發見されて居り、甕・坩・高坏等がある。最も興味深い事實は洞穴一部に棚様の個所があつて土器が存在した點と、同じく一個の土器が約三分の一を鐘乳石中に捲き込まれてゐることで、當時に於ける土器所用の狀態及びそれが悠久な年代に亙つてそのまゝに遺存せられた狀を髣髴として見ることの出來る貴重な資料といふべきであらう。

(7) 九州地方

豐前國田川郡闘の山

山本博氏の報告に據る。同所の山頂八・九合目に存する自然洞穴で、内部は三段となり、入口は狹く匍匐して入ると一段低く四疊敷位の一室が存し、それより斷崖を降れば第二室となり廣さ約八疊敷位、更に第一室の下部に約六疊敷位の第三室が存する。内部は何れも濕潤暗黑で所々に鐘乳石や石筍が存してゐる。發見遺物は主に第二・第三兩室から發見せられたらしいがその存在狀態は不明である。種類は獸骨（鹿・猿）・と木炭片（第二室）・煤の附着した石塊及び多數の土器並に土製勾玉・石庖丁各一個等である。土器は何れも彌生式土器で坩・椀形が多く、中には外面に朱を塗つたものも認められる。土製勾玉は下部を少しく缺損してゐるが、這種遺跡からの出土例に乏しいものである。石庖丁は粘板岩製半月形で二孔を有し極めて精巧な品である。本洞穴はその所在地並に發見遺物に就いてなほ攷究すべき點が存するであらう。

日向國東臼杵郡恒富村愛宕山麓

鳥居博士の調査報告が存する。(1) 同所愛宕山の北麓岩壁に存する。道路開鑿の爲め洞口一部を破壞してゐる。奧

室に於いて間口高八尺一寸・奥行六尺一寸、中央に於いて幅七尺・高六尺五寸、內部は上方に貝層が存し、その厚一尺一寸、その下は砂層となり、深さ一尺五寸の個所に組合石棺が存し人骨が埋葬せられて居り、かつその下方にも同樣の遺構が二個所存在し、更に入口にも同じく組合石棺が二個存在して人骨が發見されたといふ。その他の遺物としては獸骨(鹿・猪・狐・狸)・魚骨・貝殼類と石錘・土器が存し、土器は繩文式に屬するといふ。鳥居博士はこれをアイヌの墳墓であらうと述べて居られる。

なほ**筑前國沖島**には古來**御金藏**と稱する自然洞穴があつて、多數の遺物が發見され、江藤正澄・柴田常惠兩氏の報告が存するが(2)、その性質頗る上述のものと趣を異にし、一種の宗教的關係遺跡ともいふべきものである。前述の鰐淵寺所在の洞穴と共に、殊殊な洞穴利用遺跡として參考迄に記載しておく。

【註】(1) 宮崎縣史蹟調査第七輯東臼杵郡之部

(2) 江藤正澄氏「瀛津島紀行」(東京人類學會雜誌七卷六十八號)及び柴田常惠氏「沖島の御金藏」(中央史壇十三卷三號)

(8) 南島地方

琉球方面に於ける同種遺跡として確實な例を擧げることは出來ないが、東京人類學會雜誌十七卷百八十八號所載加藤三吾氏の報告によると、**首里區金城大阿母**に洞穴遺跡が存し、石斧の發見が記され、又**中頭郡宜野灣村大山ミソカイマホラ**にも同種遺跡があり、磨石斧・盃形凹石が擧げられてゐる。その內容性質を詳にせぬが、暫らく類似遺跡として記載しておかう。

第三章　考　察　篇

以上に於いて現在私の知つてゐる本邦上代洞穴遺跡の資料に就いて記載した。次には右を通じて如何なる特質が窺はれ、又如何なる歸結が生れるであらうか、以下項を分けて些か愚考を開陳することゝしよう。

遺跡に就いて

洞穴所在の位置

先づ上述の洞穴遺跡が如何なる場所に存在してゐるであらうか、それは言ふ迄もなく個々の事實が示してゐるが、今それを通覽すると、大體海岸と溪谷と山上の三に分類することが出來る。卽ち房總半島や三浦半島及び日本海沿岸に存するもの等は第一であり、陸前・陸中の各所に存するものが第二、信濃及び豐前の關の山に存するものは第三に該當する。もとよりこの事實は洞穴所在の自然地理的條件によつておのづから生じた結果であつて、人爲的に撰定したものではない。然しながら他面に於いてはこれがそれ等洞穴利用者の生活様式や文化の問題に或程度迄關係を有してゐることを顧る必要があらう。

成　因

次に洞穴の成因に就いても考古學的觀察からは別問題に屬するが、その研究に際しては基礎的知識の一として概要を知る必要があらう。さて上述五十餘例の所在地は、その地質主として古生層又は第三紀層に屬して居り、且つ前者に於いては多く石灰岩質、後者に於いては凝灰岩・砂岩質中に存在してゐる。故に言ふ迄もなくその造

成は水蝕に成るものが大部分を占め、風化崩壞作用を受けて出來たと考へられるものは極めて少ない。卽ち石灰岩質の場合は雨水その他の侵潤溶解と崩壞により、その他の場合は水蝕並びに岩層節理に伴ふ自然的崩壞等が主たる原因となつてゐる。故に言ふ迄もなく全部が自然洞穴であつて、人工を加へられたものではない。但し特殊な場合に一部分を加工したと考へられるものが存するが(安房砂山古墳の如き)、これは寧ろ異例に屬する。卽ち上代人は自然のまゝに開口する洞穴を發見し、その利用を試みたと言ふことが出來よう。

形狀と型式

形狀は前記の成因によつておのづから大小廣狹の差が存在する。石灰洞の如きは當然の性質として頗る長大且つ高低曲折を有するものが屢々認められ、或は諸所に狹廣が出來又は支洞を有し段や崖が形成される。東北地方に存する臙谷・女神・熊穴を始め、土佐龍河洞の如きはその好例であらう。次に石灰洞のあるものや、海蝕洞穴の多くに見られる如く、その形狀入口が廣く奧部に至るに從ひ狹く低くなるものである。その中には往々複室のものや段を有するもの等の存在も認められるが、前者に比しては遙かに小形である。房總半島や日本海沿岸の海蝕洞穴を始め、これに屬する形狀のものが最も多い。更に前者に似て一層奧行が淺く、僅かに雨露を凌ぐ凹所の觀を呈するもので、陸前・鹽釜崎山闕や、信濃國岩窪・同岩谷堂等はその一例であるが、全體から見ると甚だ少ない。乃ち如上の形狀に基づき、私は大山公爵の洞穴型式分類に據つて、第一を純洞穴、第二を半洞穴、第三を岩陰と呼ぶことゝする。(1)

內部の狀態

悠久な古代に開口した洞穴は、長年月の間に種々な自然的變化が行はれ、更に人類の利用によつて一層數多の

現象を呈するに至る。故に我々が調査に際して先づ注目せらるゝことはその内部狀態に就いてゞある。而して先づ殆んど全部に共通する自然現象としては落盤の存在であらう。卽ち洞穴の上部又は周圍をなす母岩が、剝落崩壞し大小の石塊となつて堆積したものである。次に半洞穴に多く見られることは、長期間開口せられてゐるが爲めに、外部から土壤の侵入があり、又海岸に於いては特殊な地形的變化(例へば陸地の沈降の如き)によつて、海水の浸入と共に多數の砂礫等が堆積される場合等があり、それが爲めに內部が埋められてゐる例に屢々遭遇する。以上は自然による變化であるが、なほ人類が利用した場合は、これに附屬する種々な器物や、有機物の殘滓が、おのづから積成せられ、所謂遺物包含層が形成される。今假に自然によるものを堆積層(自然層)、人類によるものを文化層と呼ぶことにする。この兩層は場所により混交錯雜して存在するを常とし、中には全く不規則に攪亂せられた如き狀態を呈してゐる場合も往々に認められる(安房神社內洞穴の如き)。

さて我々が洞穴遺跡に於いて最も重要視するのは言ふ迄もなく文化層である。その所在は洞穴利用者の目的によつて異なるが、大體に於いて現在の入口から程遠からぬ個所に存在するを常としてゐる。しかし時には後述する如く意外の奧部に存する場合も認められ、又特殊の施設が行はれた例も見受けられるので、一樣に律することは出來ない。更に注意を要することは、往々文化層の序列に關する考察である。遺跡の性質として限られた範圍に長期間人類の利用が行はれた場合、各年代の文化層がおのづから序列をなして重積せらるゝことは當然の結果であり、それが又洞穴遺跡の最も價値を有する點ともなつてゐる。例へば上總荒熊・同辨天崎・陸前關谷・同女神・陸中蛇王窪・信濃荷取・越中大境等はその好例である。それ等の示す事實は、或は間接に地形の變化を物語る場合や、年代による生活樣式の差及び同じく年代による遺物上の變化を考察する等、種々重要な役割を演じてゐるが、就

中大境洞穴の如きは、最下層に縄文式土器、中層に彌生式土器、上層に原史時代遺物、表面に近世の遺品を出土し相異なる文化内容を有するそれ〳〵の遺物が層位的に積成せられ、恰も日本考古學の縮圖を示現するが如き狀態を呈して居り、頗る興味深き遺跡として學界に知られてゐる。

かくの如く洞穴内部の狀態はその堆積層並に文化層が他の遺跡と趣を異にする場合があり、種々貴重な資料を提供してゐるが、更に調査の結果を綜合すると、種々な施設の附帶が認められるのである。

其他の施設

第一は貝塚の存在である。貝殼の混在は多くの洞穴内に認められるが、それが一個所に集積され、小貝塚狀を呈する場合も亦往々に認められる。例へば相模鴨居に於いては奥部に存し、上總荒熊・陸前關谷・越中大境等では、文化層中に認められ、又陸前鹽釜や阿波城山では洞穴の前方或は入口の一方に貝塚が作られてゐる。次には爐址と思はるゝもの丶存在であつて、大境では向つて右方入口に接する個所に、四所があつて木炭・灰・土器片等が發見され、又陸中岩谷堂根岸に於いても爐と思はれる跡を存する。その他多數洞穴の堆積層中に灰層・木炭層の存在が認められ、或は焚火の跡と思はれる燒跡や煤けた個所が壁面に殘つてゐること、又は同樣の跡を留める遺物類の存在によつて、洞穴内に於いて火を使用した事實は明かに認め得られる。なほ上總守谷本壽寺に於いては杉皮や木葉を平かに敷いた痕跡が存したといふ。

以上は主として住居關係の施設として見るべきものであり、その事實は洞穴利用の目的を如實に示してゐるものであるが、次に注目せられることは死體埋葬に關する事例である。各地の洞穴中から人骨の存在する例は相當に多い。而してそれには散漫的に何等の設備を施したと思はれない狀態に發見される場合と（上總守谷辨天崎・

同洞口・安房神社內・大境その他)、特に埋葬したと考へられる施設を認め得るものとが存する。後者について見ると鴨居に於いては一體が臥葬され入口(南方)に頭を置き頭部は岩塊を以て覆ひ、腹部にも亦石塊が配せられ、且つ副葬品と思はれるものが發見されてゐる。又守谷蝙蝠穴では一種の屈葬とし、骨盤上に圓石を載せて居り、安房神社では下底部にほゞ完全な一體が伸展葬(?)され、頭蓋骨の傍に一個の坩と鮑貝が置かれてあり、鹽釜崎山園に於いては人骨の胸部邊に玉類・骨器・刀子等が副葬され、陸前蛇王窟では上から第四層と第五層の間に、淺く掘り凹めて屈葬とした熟年女子骨が認められ、陸中熊穴では入口から五〇米の奥部に多數人骨が集團して發見され、更に日向愛宕山では一種の原始的石棺が存在したといふ。以上の外安房砂山・信濃岩谷堂・同岩窪等の如く、洞穴利用の墳墓も認められる。

かくの如く洞穴中には屍體を埋葬したと考へられるものが往々存するが、それは亦前記住居關係遺跡と別趣に洞穴を利用した一面を窺ふべきものであらうと思ふ。

【註】(1) 大山柏氏「歐洲舊石器時代」(考古學講座所收)及び同氏「日本舊石文化存否研究」(史前學雜誌第四卷)に據れば、洞窟と岩陰の二者とせられてゐるが、更に其後公爵よりの教示によつてかく三類式とした。

遺物に就いて

洞穴發見の遺物全部を綜括してその種類を窺ふと、相當多數を數へることが出來るが、先づそれを自然遺物と人工遺物の二者に大別して記述することゝしよう。

(a) 自然遺物

前述遺跡の條に於いて一部記載した落盤や石塊・鐘乳石及び燒土・灰・木炭等を始め、木葉・木片・木皮・竹葉等が先づ擧げられる。次に主として人類食料の殘滓たる多數の獸骨・魚骨・鳥骨・貝殼・果實等が存在する。獸骨中には鹿・猿・馬・犬・狐・狸・貂・鯨等、鳥・魚骨はその詳細を研究せられてゐないが、相當多數に亙るものが存し、貝殼は附近の狀態によつて鹹水產又は淡水產の各種類が發見され、且つ前記の如く往々貝塚の存在を伴ふ場合があり、果實には胡桃・桃等が信濃栁村荷取洞穴から多數檢出されてゐる。而して如上の遺骨類は多く一體をなして發見されず、何れも各部が細かく分離切斷されてゐる場合が多いので、明らかに食料に供した痕を認めることが出來、又安房神社內洞穴發見の貝殼中には、二枚貝の頂殼部を打碎したと考へられるものが多數に發見され、恐らくはその肉を採取する一方法を示すものであらうと推定されることや、(1)荷取發見の胡桃核に一方から穿孔したものが多數に存すること等は、(2)それ等が食料品とせられた。積極的證左とすべきであらう。次に人骨の所在も洞穴遺跡の顯著な事例で、その發見個所頗る多く、二十個所以上に達してゐる。その發見狀態を見ると、獸骨と同樣不規則に分裂して存する場合と、特に埋葬されたものがあり、後者には副葬品の存在も認められてゐる。その發見數も一洞穴から相當多數に上る場合があり、鴨居では二十體、守谷荒熊では十數體(房總志料による)、安房神社內二十體以上、大境も同樣、陸中熊穴が十三體、その他守谷辨天崎・上總洞口・安房白薮等何れも數體を出土してゐる。又その種類には成年の男女は勿論老人小兒の遺骸等も發見せられてゐる。なほこの人骨所在數は、一面に於いて一洞穴に於ける家族の員數を示す場合があらうと考へられ、この方面からも興味ある事實を認めることが出來よう。なほ極めて特殊な例ではあるが、大境發見人骨の一例と、安房神社內發見の十五例とには共に拔齒の風を示し、前者は上下の犬齒を拔き、後者は全部上顎左右の第二門齒と犬齒四枚、下顎の門齒四枚を除去してゐる。な

ほ大墳發見の一頭蓋骨には朱を塗つたものが存在する。拔齒及び朱を塗つた人骨の例は、他の遺跡に於いても相當に發見せられ、種々の報告や論文が發表せられてゐるが[3]、何れも上代に於ける特殊な風習を示すものとして注目せらるべきものであつて、殊に全國古代の遺跡數に比較して僅小な洞穴遺跡から、二個所迄も發見の事例を擧げてゐることは考慮を要すべきものであり、且つその二例が共に彌生式土器を伴出する點に於いて一層興味深く感ぜらるゝのである[4]。

(b) 人工遺物

內容は遺跡によつて一樣でないが、先づ大體の品目を列記すると次の通りである。なほ近世に屬する遺物と、類似遺跡發見のものは省略する。

(1) 土器　繩文式土器・彌生式土器・土師器・須惠器
(2) 土製品　錘・勾玉・裝飾品(紡錘車?)
(3) 石器　石棒・石斧・石鏃・石槍・石匙・石槌・石庖丁・錘石・砥石・有孔丸石
(4) 玉類　石釧・勾玉・小玉・臼玉・管玉
(5) 骨角器　針・銛・串・弓筈・鏃・骨管・耳飾(背椎骨製)・其他の裝飾品
(6) 貝器　貝輪(二種)・貝斧・鮑製裝飾品・鮑貝を容器の代用とせしもの
(7) 靑銅　釧・漢式鏡
(8) 鐵器　刀子(鹿角製柄を有するものあり)・鏃・其他破片
(9) 石製品及石製模造品　釧・紡錘車・刀子

等、二は利器(主に狩獵具)で石鏃・石槍・弓筈・骨鏃等、三が漁撈具で錘石・土錘・銛等、四は身體裝飾品類で玉類・貝輪・耳飾・石釧・骨角器裝飾品等、五は副葬品類で土師器・須惠器・玉類・釧・鏡・刀子・鐵鏃・石製品及石製模造品類が含まれる。なほこれを時代的に觀察するならば、繩文式土器及び彌生式土器と之に附屬する石器・骨角器・貝器等が、石器時代に包括せられることは言ふ迄もなく、次で土師器や須惠器並に副葬品たる金屬器及びその他の遺物が、原史時代以降に屬すことは贅言を要しないであらう。又各種遺物の種類及び量を、他の遺跡に比較して見る時は、繩文式系石器時代遺物は、他の貝塚その他の遺跡から發見せられるものに比較すると、著しく種類に乏しく且つ小量である。土器の如きも多くは小破片が若干發見される程度が主であつて、完全土器の夥しく存在する東北地方に於いて寧ろ意外の觀を有して居り、その他の土製品例へば土偶・土版・耳飾等の如きに至つては殆んど發見例がない。更に石器に至つては實に寥々たるものである。然し骨角器貝器は或程度迄豐富に存在するが、然しそれは必ずしも繩文式系遺物のみと言ふことが出來ない。次に彌生式系遺品に屬するものは、前者に比すると、その內容に於いて稍〻富んで居り、更に土師器をこの系統に含むならば一層その感を深くする。原史時代以降に屬するのは、他の古墳・橫穴發見の遺物と同樣な內容を有してゐる。最後に洞穴遺跡を代表する遺物として特別顯著な事例を摘出することは困難であるが、强いて求めるならば骨角器と貝器を擧げることが出來よう。もとより他遺跡からも同種の遺品は出土してはゐるが、洞穴全體を通じて比較的顯著に認められるものは右の二種類であり、殊に貝器中貝輪が最も多量に存すること、及び貝輪中笠貝科ヨメガサラ製品の存在、又安房國白狄發見

(10)　其　他　朱(鮑貝に附着)

右の內容を更に用途上から分類を試みると、第一が家什類である。土器・石槌・石匙・石庖丁・砥石・骨角器・貝器

の異形貝輪や、大境發見の朱塗鮑貝製裝飾品並びに陸中田河津村箕穴發見の貝製裝身具等はその一例であり、骨角器に於いて東北地方發見の裝飾品や耳飾、又大境や甲樂城發見の弓筈等は注意すべき遺品であらう。なほ大境發見の石棒と、安房白萩發見の大理石製釧等も他に類似乏しいものとして、この中に加へてよいであらう。

要之するに洞穴遺跡發見遺物は、その種類は大別して日常生活に關するものと、埋葬關係品であり、兩者を通じ同時代遺跡發見遺物に比較して特に顯著な特質を求めることは出來ないと言ふ事が出來よう。

【註】(1) 拙稿「官幣大社安房神社境內發見古代洞窟遺跡調査報告」（神社協會雜誌三十一年九號）

(2) 前出信濃二卷六號・同七號所載の梅村洞窟遺跡の報告參照。なほこの穿孔に就いては人工でなく鼠等によるともいはれてゐる

(3) 拔齒の風に就いては小金井博士「日本石器時代人の齒牙を變形する風習に就いて」（人類學雜誌三十四卷十一・十二號）を始め多數諸氏の報告論文があり、朱色を塗る風に就いては同博士の「日本石器時代の赤き人骨に就て」（人類學雜誌三十五卷十一・十二號）及びこれに對する鳥居博士の考說等が存する

(4) 小金井博士「安房神社洞窟人骨」（史前學雜誌五卷一號）

洞穴遺跡の意義

上述の遺跡及び遺物の考察を經て、次に考慮せらるべき問題は、本邦洞穴遺跡の意義に就いてゞある。卽ち上代人が洞穴を利用した目的並にその理由等に關する考察に入るが、右に關しては從來試みられた先人の所說から觀察することゝしよう。先づ第一は住居說である。越中大境洞穴の調査後、その遺跡の意義に就いて當然考察が施されたが、親しく調査に當られた柴田常惠・松村瞭・小金井良精・佐藤傳藏の諸先輩は、內部狀態に存する種々な住居關係施設卽ち爐址や木炭・灰の存在、洞穴內の煤けた點、貝塚の積成等と、發見遺物の狀態から住居說を提唱

され、更に西歐に於ける舊石時代の洞窟遺跡や、現存未開人間の土俗と比較して說かるゝ所があつた。然るにその後右に對して喜田貞吉博士は異論を提出し[1]、住居說の首肯し難い點を列擧された。卽ち住居の傍に塵捨場が存すること、灰層が廣範圍に亙り灰中に土器が包含するのは爐と認め難いこと、又內部に於いて焚火をした場合煙が立籠めて住居に適せぬこと、人骨の多數存在すること等を記し、この遺跡は寧ろ墳墓か塵捨場で、灰は塵芥を燒いたものであらうとし、若し住居の場合は短時日の假寓に過ぎないであらうと說かれたのであつた。之に對して佐藤傳藏氏は地學雜誌上で反駁し[2]、未開人間に於いては洞穴內に焚火しても決して苦痛でなく、外國にも同例が認められると說き、又小金井博士は人類學雜誌に於いて同じく反對說を述べ[3]、人骨に埋葬の痕跡なきこと、特に洞穴內部迄塵芥を捨つる必要を認められないから、前と同樣住居阯であらうと說かれた。その後喜田博士は鳥居博士の德島城山洞穴に就いても、同じく住居說に反對し[4]、その洞穴の內部の側壁が斜面をなし、入口低く奧部高く且つ內部が狹小、入口斜面に貝塚が存する等常識的に住居と考へられぬ由を述べた。その後著しい考說の發表もなく、現在の學說は大體に於いて住居說に傾いてゐる樣に見受けられる。然らば果して本邦洞穴遺跡は住居阯のみと解すか、將た喜田博士の說かるゝ如く他に利用せられたものであらうか。

凡そ洞穴利用の動機は第一が自然に開口する好適の場所として人類の着目するに起り、それが人工を加へずして雨露を凌ぐに足り、且つ冬季には保溫夏季には自然の避暑地となり、加ふるに外敵(主として獸類等の)防禦の用を兼ぬる等、數々の便宜的條件が一層人類に利用の効大なるを覺えしめたのであらう。故に諸先輩も說く如く住居としての利用は當然最初に起り得る考へであつて、それは外國の事例に求め、未開人の土俗に徵する迄もなく、發見遺物や內部施設の實際から首肯し得られるのである。なほ喜田博士の懸念せらるゝ焚火の苦痛や、塵芥場の

混在等は、未開人から見れば左程苦難ではないらしく、既に他の未開人間に存する洞穴住居の如き、文化人からは頗る汚穢且つ非衞生的なものであるといふ。故に本邦洞穴遺跡も亦住居として利用せられたもの丶多いことは否定し難い事實であらうと考へる。然しながら一應考慮を要することは、その全部が長期間に亙る常住座臥の場所とせられたか否かに就いてゞあつて、中には一時の假寓或は避難所、又は狩獵その他に際し短期間の居住地として使用せられたものも相當に存在したであらうと考へられるのである。遺物の量の甚だ少ないものや、闘の山の如く山上に存するもの等は、その中に含まれるものではあるまいか、又假令それを日常の住居に充て丶ゐても、晝間は外出して活動し、夜間の寢室に洞穴を利用した場合や、冬季雪積の際、風雨雷電等の砌、又は外敵回避の爲めに籠居した場合等も多からうと想像される。故にそれ等の場合は寧ろ獨立遺跡としてゞはなく、他遺跡の附屬的遺跡と見ることも出來ようと思ふ。何れにせよ洞穴は期間の長短こそあれ、第一に住居として利用せられたことは否定し難いであらう。

しかしながらかくの如く解し來つた時、再び洞穴所在の遺跡遺物を回顧すると、單に住居關係のみによつて說くことの出來ない數々の事實に遭遇するのである。それは多數人骨の存在することや、それが特に埋葬の樣式を示してゐる事である。或はその事實も貝塚の積成と同樣、住居の一部に屍體を埋葬したと見るならば一應の解決は試みられるが、比較的小洞穴に二十人以上の屍體を存する場合等は如何に解すべきか、中には何等かの天災によつて瞬時に一族悲慘な運命に遭遇したと解し得る場合も有り得ようが、それにしては埋葬樣式を示す事實の解決に苦しむ。玆に於いて私は嘗て安房神社內洞穴の考察に述べたと同樣、それ等は住居と墓穴の兩樣に利用せられたと考へたい。卽ち生前家族の住居とした洞穴を、その族中に死者の出づるに從つて墓穴に充て、住居を他に

移したと解するのである。上代人に於いて住居と塋穴は決して別個の概念ではなく、生前に於ける生活安定の場所が住居であり、死後に於ける同樣の地が墓所であつて、兩者相通ずる思想の下に當然あり得べき現象と解し得られるのである。更に洞穴の一部には全く塋穴の代用に充てたと思はれる所謂岩窟古墳の例が二三存在するが、それは一方に横穴古墳の營造せらるゝ時期に於いて、自然の洞穴が利用せられたもので、第二義的な利用の事例に屬すべきであらう。

因みに類似遺跡として擧げた出雲國鰐淵寺や、筑前國沖島の御金藏の如き特殊遺跡は、洞穴に對する神祕觀念から生じ、延いて靈物を保護格納する神聖な場所とするに至つたもので、上述の事例と趣を異にするが、同じく洞穴利用の特殊現象として擧げた次第である。

【註】（1）歷史地理廿二卷四號上田三平氏報告の前に喜田博士の意見が記載せられてゐる

（2）佐藤傳藏氏「地學上より見たる越中氷見の洞窟」（地學雜誌三十二卷三百七十七號）

（3）小金井博士「日本石器時代の赤き人骨に就て」（人類學雜誌三十五卷十一・十二號）

（4）民族と歷史八卷四號所載學窓日誌中「德島舊城山岩窟内の遺蹟」

洞穴遺跡の年代

現在に於ける本邦上代の洞穴遺跡は、何れも新石器時代以降のものに屬する。而して更にその遺物に徴する時は、大體に於いてその相對的年代を認定することが出來る。今その標準となるべき土器に基づいてこれを見るならば、

縄文式土器を出土する遺跡　　　　二六個所

縄文式土器と彌生式土器を混出する遺跡　六個所
彌生式土器を出土する遺跡　八個所
土師器を出土する遺跡　三個所
土師器と須惠器とを混出する遺跡　六個所
須惠器を出土する遺跡　一個所

となる。卽ち縄文式土器出土の遺跡が全體の半數を越して居り、且つその分布地域は東北が大半を占めてゐる。次に右の縄文式土器を型式別に見ると、關東に於いては上總洞口・安房大網がやゝ古型式に入り、東北に於いては陸前的場・陸中松坂・同根岸等は厚手式、北陸で大境の六層が厚手式に入るの外は、全部薄手式又は奥州式に屬し、何れも縄文式土器の末期型式に入る。次に彌生式土器に就いて見ると、大境及び豊前關の山のみが石器を伴出して居り、上總洞口・陸前女神等では縄文式土器と混在し、ほゞ同時代のものと考へられるが、その他は特にその年代を想定するに足るべきものに乏しく、寧ろ廣義の土師器中に包含し得られるものが多い。次に土師器及び須惠器が原史時代以降に屬することはいふ迄もなく、更に副葬品の伴出するものは、その種類や形狀から同時代の古墳及び横穴と同期の遺品たることが認め得られる。

上述の如く土器を主として遺跡の年代を推定する時は、大體石器時代から原史時代に亙つて行はれた事が知り得られ、更に石器時代とはいへ、土器の型式から見る時は一部に縄文式土器の中期と考へられる厚手式土器の存在を認められるとはいへ、その殆んど全部は末期に屬するものであり、更に彌生式土器及び以降の土器を伴出する點から、その多くが石器時代末期より原史時代に降るものが主を占めて居ると推定する事が出來よう。

西歐諸國に於いては洞穴遺跡は舊石時代に於ける顯著な遺跡の一とせられ、その數も亦内容に於いても特筆すべきものが認められ、最近支那に於いても同種の洞穴遺跡が發見せられてゐる。本邦に於ける洞穴遺跡は上述の如く何れも新石器時代以降に屬し、殊に見るべき内容を有しないことは、外國の事例に比して頗る趣を異にするものといふべきであらう。然しながら大山公爵を始め直良信夫氏等によつて、日本に於ける舊石時代遺跡の存在を洞穴遺跡に求めんとせらるゝのは、一應考慮せらるべき問題であり、なほ今後の研究に屬するであらう。或は將來本邦に於いても外國に見ると同樣な舊石時代洞穴遺跡が加へらるゝ場合がないとは斷言出來ないであらう。

洞穴遺跡とその文化

洞穴を利用し、こゝに生活を營んだ上代人は、果して如何なる生活樣式を有し、如何なる文化を生んだであらうか。最後に些か右に關する考察を施して見よう。

先づ彼等の生活樣式を窺ふことゝする。遺跡遺物の示す所は、何れも他の同時代資料に示されたものと同樣、生活の資源を狩獵と漁撈とに置いたことは言ふ迄もない。狩獵に要する數々の器具や、多數鳥獸骨の發見は、その具體的事實を示すものであり、同じく漁具や魚骨・貝類の發見は漁撈の事實を反映してゐる。その他特に他と異なるものは認め得られない。たゞ洞穴を住居とした點が相違を有するのみである。然し同時代遺跡から發見せられた遺物と對比すると、若干の差異が認められるのであつて、例へば土器に於いても洞穴内發見品は何れも零細な斷片であり、且つ日常の什器のみに限られてゐる。又その他の土製品に於いても土偶・土版・耳飾等の實用以外の遺物は殆んど發見されない。石器に於いては殊に著しく、洞穴内のものは數に於いても甚しく小量で、且つ種

類にも乏しい。身體裝飾品は或程度迄存在するが、その種類は貝輪や骨角製品が主で、他に見る如き硬玉質玉類を始め優秀な製作品は認められない。その他全般を通じて洞穴發見の遺物は同期遺品に比し、その種類に於いても亦その質に於いても低下してゐるといふことが出來、遺物に立脚した當時の文化には決して特殊な點を發見することが出來ない。卽ち西歐舊石時代の洞穴遺跡に見られる所謂洞穴文化と稱するが如き特殊性の存在は認められないのである。

更に考慮を廻らすならば、洞穴を利用して住居を營むのは、原始民族の常とする所であるが、日本に於いては西歐舊石時代のそれとは著しく趣を異にする。卽ち同時代に於ける他の遺跡に於いては或程度迄進步した家屋を構築し、部落を形成して集團生活が營まれてゐるにもかゝはらず、その中にあつて家屋を構へず、所在の洞穴を利用して簡單な生活を營むものは、おのづから他より種々な能力に於いて劣つてゐると推定すべきであり、換言すれば文化程度の低下を意味するであらうと考へる。遺物の示す事實も亦よくこれを裏書してゐよう。しかしながら翻つて省るべきことは、本邦洞穴遺跡の內容が、その全てを永住的の住居とすべきでなく、或は一時の假寓又は避難所等を始め、墓穴として代用する等特殊な際に利用した場合が相當に認められ、或は獨立した遺跡でなく、他遺跡の附屬的位置に立つものが相當に存在すると考へられることで、そこに前記の如き遺物の乏しい點や、內容の貧しい事實が係けられてゐると見るならば、遽かにすべての洞穴遺跡の示す文化を他に比して低級なりと言ひ去ることは出來ないであらう。何れにせよ日本上代の洞穴遺跡は、外國のそれに比して種々な差異を有し、その內容も亦一樣でない。然しながら單に遺物に示された點から考察した場合は、そこに著しい特異性や別種の文化を有するものでなく、却つて一般に劣つてゐることを認めなければならない。

古典に記載せらるゝ洞穴住居

玆に於いて私は本邦上代の洞穴利用者に關する古典の記載に就き一瞥する必要を感ずるのである。それは單に考古學上の事實を傍證せんが爲めのみでなく、一面に於いて洞穴利用者の文化的位置をも明かにせられるからである。先づ日本書記神武天皇紀に、天皇東征の途吉野に入らせ給ふた條を見ると

更少進、亦有尾而披磐石而出者。天皇問之曰、汝何人、對曰、臣是磐排別之子云々

とある。磐石を排し披いて人間が出現したことは、恐らく洞穴住居の有樣を記するのであらう。次に同書景行紀十二年天皇の筑紫征討に際して土會等の狀態を述べた中に

到碩田國、其地形廣大亦麗、因名碩田也。到速見邑、有女人、曰速津媛、爲一處之長、其聞天皇車駕而自奉迎之諮言、玆山有大石窟、曰鼠石窟、有二土蜘蛛、住其石窟

と見え、更に豐後國風土記速見郡條にも同樣の記事を載せてゐる。又同紀四十年には東夷の狀を敍べて、

其東夷之中、蝦夷是尤强焉。男女交居、父子無別、冬則宿穴、夏則住樔

と記してゐる。恐らく此にいふ穴とは人工的の竪穴住居のみでなく、自然の洞穴を意味するものもあらう。又陸奥國風土記殘篇八槻郡の條には

古老傳云、昔於此地有八土知朱、一曰黑鷲、二曰神衣媛、三曰草野灰、四曰保々吉灰、五曰阿邪爾那媛、六曰栲猪、七曰神石萱、八曰狹磯名、各有族而屯於八處石室、此八處皆要害之地因不順上命矣

と見え、同じく石室住居の狀を述べてゐる。

以上の斷片的な記事によつて直ちに想像を逞しうすることは危險であるが、偶々古典に示された本邦上代の洞穴居住者は、主に地方の土酋であり、その生活様式の相違——文化の低級に基く——から、大和朝廷より賤稱せられた土蜘蛛・蝦夷・熊襲等であつた。殊に注意すべきは蝦夷の俗を記した中に、冬は穴に宿り、夏は樔に住むとあることであつて、こゝにいふ穴と樔が如何なる様式の住居であつたか、穴とは或は竪穴を指すものであるか、遽かに決定し難い點であるが、假に穴を以て自然洞穴を意味する場合とすれば、季節によつて住居を變へたことが窺はれ、洞穴利用の一例として擧げることが出來ようと思ふ。何れにせよ古典に示された洞穴住者の多くは當時大和朝廷より低級文化民とせられた人々であつて、恐らくその中には石器主用の楷梯にあつたものも含まれてゐるであらうと想像し得られるのである。曩に洞穴遺跡出土の遺物を通じて、是れが他の遺跡發見のものと比較し、一般に文北の劣性を示すものが多いことを擧げたことは、この點からも一致を示すことゝなり、その間相當の意義を有することを推定し得るのである。

第四章　結　語

以上敍し來つた本邦洞穴遺跡に對する資料並に考察は、何れも未だ充分なものとは言ひ難く、その資料に於いても將來の發見に俟つべきものが多く存し、考察も亦從つて動搖を保し難いのであるが、現在に於ける私の乏しい管見によれば上述の如き結果に導かれ得るのである。最後にこれを要約して本邦洞穴遺跡に對する假說を提示し、以て本編を終ることゝしよう。

洞穴遺跡が世界に認め得られる考古學上の一部門に屬し、長く人類の文化史上に跡を印するのみならず、土俗學上の事例に徵すれば、現在に於いても一部に殘存する風習であることは贅言を要しないであらう。我國に於いては石器時代當時より原史時代に亙つて行はれた事實を知り得られ、且つ種々な點で他遺跡と趣を異にしてゐる。即ち遺跡に於いては頗る少數であり且つ比較的東北地方に多く存在し、又住居のみならず墓穴にも充てられ、遺物にあつては全般的に少數で、劣質のものが多く、特に顯著な文化の存在を認め得られないこと等である。それ等の點に就いては、種々な憶測が廻らされるのであるが、第一は洞穴自身の存在如何による場合を考慮すべきであらう。しかしそれはなほ自然地理學上の援助に據らねばならないと共に、將來に於ける遺跡の發見を豫期し得ないから暫らく保留することゝする。第二は當時に於ける洞穴利用の意義並に目的に就いて大いに考慮を拂ふべきであらう。洞穴の利用は屢〻述べる如く、風雨露雪及び寒暑等の自然現象、及び猛獸その他外敵の防禦等から自然に回避し得る最も簡單な設備として、原始未開な古代人が先づ注目するに至つたのであつた。歐洲舊石時代存在の洞穴遺跡の如きは、實にその好例とすべきであらう。然るに本邦に於いては、何れも新石器時代以降のもの

に屬し、且つ當時の天然現象は現代に比してそれ程著しく相違を有せず、猛獸等の侵害も亦甚しく憂ふべき狀態ではなかつたと考へられる。殊に考古學上の遺跡遺物に立脚すれば、同時代に於いては日本全國に亙つて夥しい人類棲息の跡を殘存してゐるが、それ等は平地・丘陵又は溪谷・山岳等の住居に適した場所に於いて、竪穴その他の住屋を構築し、部落を成して集團生活を營んでゐる。故にその間にあつて洞穴を利用したのは、おのづから特殊の意義と目的とを有したものであらうと考へられるのである。卽ち先づ考慮せられることは、洞穴遺跡を以て第一義的な單獨遺跡でなく、當時附近に住居したものが、隨時に利用した第二義的の遺跡であらうと思はれる點である。その內容には季節による假寓を始め、狩獵漁撈その他生業に關して短時日使用した場合、又は特殊な避難所・寢室をはじめ、或は死體埋葬の墓穴代用等が想像せられる。遺物の貧弱なことや人骨埋葬の實例に接するのはその點からも解決し得られるのである。然し又一面に於いて遺跡のあるものや、古典の記事を考慮に加へると、當時に於ける低級文化民又は落伍者が、專ら洞穴を利用したとも考へ得られるのである。卽ち家屋の構築能力に乏しく、原始的な洞穴を唯一の住居として生活を營み、或は高塚や横穴を築造し得ないが爲に、洞穴をそのまゝ墓穴に充てたものと想定することも不可能ではなく、遺物の示す狀態も亦これを裏書してゐる。何れにせよ遺跡數の少ないことは如上の點から自然に推察することが出來、又特に東北地方に多いことは洞穴自身存在數の多いことゝ、現在と同じく冬季は嚴寒積雪等の自然現象と相俟つて利用率の增加が考へられ、又一面に於いて長く古典にいふ東夷又は蝦夷の古居地域であつたこと等から解決し得られるであらうと思ふ。又遺物に對する特殊な事例も上述する如く洞穴利用の意義によつておのづから說明し得られよう。

要之するに本邦洞穴遺跡はその內容西歐舊石時代所在のものに比すると、共通の點も相當に認められると同時

に相違する事例も亦少なからず存し、彼にあつては洞穴文化とも稱し得る顯著な特質を發見し得られるが、我に於いてはその積極的證左を擧ぐるに困難である。然しながら他面洞穴遺跡の考古學上に於ける重要性は決して他遺跡に比して劣るべきものでなく、おのづから特異な地位を保つてゐる。それは數ヶ所の遺跡に示された如く限られた地域に於いて、長期間人類の利用に供せられたが爲め、各時代の文化層が累積しておのづから文化の編年を示現してゐる事實である。次には我國に於ける洞穴利用の內容が、相當複雜であつて、發見遺物も他遺跡と趣を異にする點である。從來漠然と洞穴は住居關係遺跡の一として考察せられて來たが、實際に徵すると他の竪穴や住宅阯と同樣ではなく、從つて考古學上その性質を決定するに就いては充分に考慮する必要が存するであらうと考へる。最後に今後の問題に屬するが、甚大な興味と期待とを豫想し得られることは、日本舊石時代の存在と洞穴遺跡に就いてゞある。嘗て大山公爵は右の意圖の下に東北地方の洞穴調査を行はれたのであつた。その結果は不幸にして實現の機運に惠まれなかつたが、未だ遽かにその計畫の無暴を斷言するのは早計であらう。本邦舊石時代の存否に就いては他にも一二の人によつて研究が試みられ、その遺物と稱するものも提示せられてゐるが、眞にその解決を求むべき可能性を有する遺跡の一として、洞穴が先づ注目せらるべきは言ふ迄もなく、殊に各地に存する石灰洞集團地の徹底的調査は、本邦に於ける洪積紀人類遺物發見の有力な候補地として、將來刮目すべきものであり、本邦洞穴遺跡の重要性の一部は又こゝにも係けられてゐると言ふべきであらう。（昭和九・五・二一）

Höhlen ist ziemlich verschieden: im allgemeinen sind sie zwischen 20—50 cm tief, noch mächtigere sind nicht häufig: oft sind sie seicht, nur 5—10 cm tief und dann nicht selten arm an Kulturresten: es ist also im letzeren Fall so, dass die damaligen Leute die Stelle nur zu kurzem Aufenthalt benützten. Wir fanden in der Höhle oft deutliche stratigraphische Schichtung. Die Frgebnisse sind in der Regel: steinzeitliche Jōmon-Kultur liegt zuunterst, dann kommen Stein-oder Steinbronzezeitliche Yayoi vor. Darüber finden sich protohistorische, sodann historische Schichten.

Die Verwertung der Höhlen zur Totenbestattung begann schon in der Jōmon-Kultur des Neolithikum: die Kumaana-Höhle beim Dorf Osada, Prov. Iwate (Fig. 17 S.22) ist ein charakteristisches Beispiel davon. Man benutzte die Höhle zu Bestattungszwecken durch lange zeiträume der Yayoi-Kultur hindurch, und namentlich in der protohistorischen Zeit mehr und mehr häufig. Indessen im allgemeinen herrscht in der protohistorische zeit das grössere Hügelgrab vor: dieses verbreitet fast im ganzen Japan. Dann kommen Künstliche Höhlenbestattungen ebenfalls häufig vor. Verwertung der blossen Naturhöhle also zur Bestattung in der protohistorischen zeit ist nur gelegentlich vorkommend. Ferner fand man noch in seltenem Fall in der frühgeschichtlichen zeit Gebrauch der Höhle zum Religionsdienst.

Die Kulturreste aus Höhlen zeigen keine Besonderheit, sie sind dieselben wie die aus andern Funden. Bei den Jōmon-Funden findet sich den grösste Teile derselben nur in späterer Zeit.

3. Schluss

Die Höhlenuntersuchung in Japan bietet der Praehistorie keine besonders umwälzenden Ergebnisse: die Höhlen sind ihrerzeit nur gelegentlich benutzt worden und bildeten keine spezielle Höhlenkultur. In Japan war aus Gründen der Natur des Landes, besonders aus dem des gemässigten Klimas, die Höhlenbenutzung für die Wohnung nicht stark erfordert. Auch für Bestattungszwecke in der protohistorischen zeit baute man im allgemeinen Hügel-oder künstliche Höhlengräber und nahm auch dafür die Naturhöhlen nicht stark in Benutzung. Doch ergibt sich ein wesentlicher Wert der Höhlenuntersuchung dadurch, dass man oft in der Höhle stratigraphische Aufschlüsse findet. Als weiterer Fortschritt ergibt sich, dass man nicht nur die bisherige vom Neolithikum durch das Eneolithikum hindurch bis zum protohistorischen Bronze-Eisen gemischte Kultur deutlichen sieht, sondern auch die bisherige Höhlenuntersuchung des Fürsten Ohyama zur palaeolithischen Frage in Japan ergänztwird, trotzdem keine diluvialen Funde gemacht wurden. Für diese Frage ist immerhin bemerkenswertes beigebracht, weil aber all, das für die Lösung der Palaeolithik-Frage in Japan noch zu wenig ausreicht, müssen wir noch möglichst überall wetiere Untersuchungen anstellen.

Für die Mithilfe bei der Uebersetzung danke ich Fürst K. Ohyama und Prof. Th. Sternberg(Tokio).

HOEHLENFUNDE DER JAPANISCHEN URZEIT

(Résume)

von

IWAO OOBA

1. Allgemeines

Die Höhlenforschungen wurden in Japan schon frühzeitig begonnen und erzielten auch sehr bald einige Erfolge. Aber erst seit Untersuchung der Oosakai-Höhle, beim Dorf Unami, Gau Etchû durch J. Shibata u. a. im Jahre 1918 entwickelter sich stärkeres Interesse an der Höhlenforschung nachdem dort wirklich bedeutsame Funde gemacht waren. Wir haben in ganz Japan bisher ca 60 Höhlen, wie unten gezeigt, untersucht.

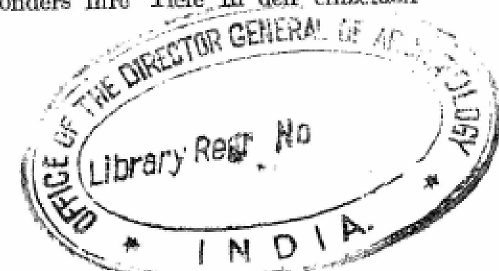
	Fundstätte	Höhlen	Halbhöhle u. Abri
1.	Tôhoku (Nord-Ost Hondo)	26	1
2.	Kwantô (Ost-Ebenengebiet im Mittel Hondo)	10	2
3.	Chûbu-Chihô (Mittel-Hondo ausser Kwantô)	6	1
4.	Hokuriku (Küstengebiete des Mittel-Hondo am japanische Meer)	7	0
5.	Kinki und Chûgoku (Süd-Ost-Hondo)	0	2
6.	Insel Shikoku	2	0
7.	Insel Kyûshû	2	1
8.	Inselgruppe Lyûkyû	0	2

(Vergleiche mit Verbreitungs Karte (Fig. 1, S. 129))

2. Funde

In ganzen sind 2 Typen der japanischen Höhlen zu unterscheiden, auch der Entstehung nach. Die erste Art ist die Tertiär-Höhle, die aus der Erosion des Wassers entstand, diese ist der Gestalt nach in der Längsrichtung nicht tief, und in der Form einfach; manchmal bildet sie nur eine Halbhöhle oder Abri; die zweite ist die Kalkhöhle, wie in Europa, und darunter finden sich oft schmale und lange oder solche mit mehreren Nebenhöhlen.

In den Höhlen fanden wir hauptsächlich Wohnspuren, jedoch ist auch die Benutzung als Grab nicht selten. Man fand gewöhnlich in der Höhle Kulturschichten, diese oft mit Feuerplatz; und zwar nicht nur allgemeine Erdschichten, sondern in den Küstengebieten finden sich auch Höhlenmuschelhaufen, zum Beispiel in den oben erwähnten Oosakai-Höhle. Die Schichtung ist nicht gleich, besonders ihre Tiefe in den einzelnen



Satzungen der Gesellschft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durchjährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich :

9. Onden Shibuya-Ku Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei
Sumio Nakazawa Jookei Shibata
Vorsitzender Fürst Kashiwa Ohyama
für den Vorstand
Kiyoyuki Higuchi Keisuke Ikegami
Isamu Kohno Kei Kanno
Iwao Ooba Sueo Sugiyama
Kingo Tazawa Ryuichi Yamague

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

HERAUSGEGEBEN

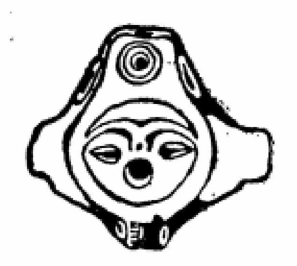
von

KASHIWA OHYAMA

HOEHLENFUNDE DER JAPANISCHEN URZEIT

VON

IWAO OOBA



6. BAND 3 HEFT

TOKIO

Mai 1934

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Shibuya-Ku, Tokio

史前學雜誌

第六卷　第二號

昭和九年三月發行

史前學會

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル
二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル
三、本會事業ヲ遂成スルタメニ史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會合ヲ行フ。隨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ
四、會員
本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル
入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込マレタシ
五、本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得
六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル
七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得
八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得
九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山史前學研究所内

史前學會

顧問　小金井良精　中澤澄男　柴田常惠
會長　大山柏
幹事　杉山壽榮男　田澤金吾　大場磐雄
　　　甲野勇　大山柏　簡野啓
　　　樋口淸之　山口除一　池上啓介
　　　(順序不同)
會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は通常、會員並に會員の紹介ある者に限る
原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す
原稿掲載に就いては幹事に一任されたし
寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和九年三月二十五日印刷　第六卷第二號
昭和九年三月三十日發行　定價一圓

編輯者　池上啓介
東京市澁谷區穩田一丁目九番地

發行者　岡田義一
東京市澁谷區穩田一丁目九番地

印刷者　鈴木趨武
東京市神田區三崎町二丁目一番地
株式會社　明章印刷所

發行所　史前學會
東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内
電話青山一二一五番
振替東京五八九六九番

發賣所　岡書院
東京市神田區駿河臺町一ノ八
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第六卷第二號

目次

資料

史前生業研究序説

大山　柏

一　はしがき

最近我學界の一趨勢として、原始生業が多々論題とせらるゝに至つたことは、悦ばしい傾向である。且つ我史前學乃至は考古學と云ふ方面よりの外、他の科學方面よりも觸れてきても居る。これ等は暫く別として、史前學それ自身の對象範圍に於て、これを史前生業として見ても、重要視せらる可きであり、研究を進めねばならぬことゝ考へる。勿論史前生業なるものが、史前文化研究の總てゞはない。これを史前文化研究を立前として眺めて見ても、其重要性は充分に認識し得ると同時に、猶他にも重要研究項目の多々存する所は、豫め承知して置かねばならない。この根本を辨へてから細部研究に入らないと、兎角、鹿を追ふの獵師の轍を踏むの恐れもある。又直接個々の狩獵、漁撈、農牧等の生業を取り扱ふにしても、史前生業の大綱は明にして置かないと、研究焦點の方向違も起るし、局部觀が總てゞあるかの樣に、視界狭少も生じ易い。こゝに開陳するものは、甚だ空漠たる研究ではあるが、全く參考資料が無いよりは、或は幾分の資にもと思ひ、かく起草したものである。又最初から個個に觸れて行く以前、其大局を一瞥して研究の基礎となし、然る後に直接我石器時代の生業研究に入りたい爲である。それ故史前文化一般傾向を述ぶるにしても、常に新石文化に主眼を注いで居るのも、其後に來るものゝ爲

に外ならない。更に本論を起稿するに至つた他の一理由は、私が最近、雜誌改造、本年一月號に、「日本石器時代の生業生活」と題し、主として專門外の讀者に、我が史前生業概念を得て戴く爲に書いた所、意外にも多方面よりの質疑に接したに拘はらず私としては、こうした方面は僅に二三を部分的に觸れて居つたのみで、[1]未だ取り纏つて發表もして居らなかつた關係上、中に重複する所も出來るけれども、かく本紙に於て專門見地の上で、所見を開陳して如上の責に答へる次第でもある。

二　史前生業の概念

史前生業とは、其時代に於ける人類生活に於て行はるゝ所の、生產行爲を生業と稱する。而して史前生業の目的とする所は、主として直接食料の生產にあつて、衣服、器材等爾餘の生產はこれに隨行する。且つ其生產行爲たるや、其殆んどが、自から消費せんが爲の生產であつて、石器時代始末期に於て、貿易交換の萌芽を認めらるるに過ぎない。

　史前生業の種類としては、狩獵、漁撈、農耕、牧畜の四者が其主要なものであつて、他に若干の他生業が行はるゝとするも、其多くは一般大局上、特異例とせらるゝものか、乃至は副產的に行はるゝものと見てよい。其主生業に於て、狩獵、漁撈等が天然動物を對象とするに對し、農牧はより文化工作を必要とする。勿論この外、天然植物の蒐集も行はれたであろうが、この生產行爲に對しては、只今附す可き名がない。

　これ等の生業は、同時に發生したのではない。文化階梯を追うて概ね順次に發展して居るのであつて、尙後述する所もあるけれども、其大局に於ては、舊石器文化に於て、狩獵を主とし、中石器文化に入つて狩獵の外、新に漁

勞を加へ、飼畜始原を見、新石文化に進むに於て、獵、漁、農、牧の各生業が悉く行はれ得るに達したのである。更に文化進んで青銅文化(我國では青銅鐵併用文化以下同じ)に入るに及んで、金屬利用は石器に對する一大文化革命である。これを單なる生業より見ても金屬製農具は農耕發展を著しく捉進せしめ、農地擴大の結果、生産剩餘は交易發展を致し、又各種製造工業の生業分化を生む等、各方面に産業革命を起さしむることゝなり、金屬器の發生過渡期を經過した後は、他の發展と共に文化相一變して史前文化より原史文化となり、生業より云へば史前生業より原史生業に移るのである。(2) 特に史前生業と原史生業との間には、如上の如き大きな開きのある所は、留意すべきであり、混同してはならぬ所と考へる。

又史前生業自身に於て、よしそれが新石生業として、獵、漁、農、牧の生業分化を見るからとて、或る獨自性は認めらるゝと同時に、互に孤立性を有するものとは考へられない。主生業はあつても、必要に應じ他生業をも併せ營み、そこには明確な生業分化を認められない樣な場合も相等に多かつたと考へる。これは史前生活なるものが、自給自足が立前であるから、自づと一生業以外にまで及ばないと自給し得ないからである。極端な場合には、正副生業を決定し得ない樣な場合も出來得る。この點も豫め辨へ今日の生業分化の目で見ないことが必要である。尙個々の生業研究に入る以前、各方面より生業關係を眺めて、史前生業を明にする爲、以下夫々の方面より見てゆく。

三　史前食料と生業關係

1　一般

人類として、其文化の有無高下に關せず、無くてはならないものは食料である。こんなことは申すまでもない。

單なる常識の一端に過ぎないに拘はらず、史前食料研究の如きは、餘りに閑却せられ過ぎては居るまいか。[3] 勿論食物其ものは殆んどが有機質であるから、通常直接遺存して居らないから、或る意味から研究の對象となり惡い點も、多く原因しても居る。さらばとて、出來ないのではない。骨角介殼等の如き、間接的資料の存することも餘りに明瞭な事實である。只これ等遺存資料の偏して居り、遺存良好の性質を有するものが、主體をなす爲研究上大きな困難の存する所は、よく認められもするけれども、それでも幾何まで研究し得可きかは、考へねばならぬ所である。

本來から云へば、史前食料研究の如きは、今述べんとする生業問題とは引き離ち、單にそれのみで研究すべき充分な範圍と內容とを藏して居るが、今回これを詳述する餘裕がなく、僅に其必要の範圍に止めて置く。

2　自然界の食料

食料は獨り人類のみでなく動物全般の要求である。今史前食料を見る以前に、一應天然界に於ける本能生活者の食料を一顧して置くことが、低文化との對照となる。特に人類に近い哺乳動物の食料を見ると、それが肉食なると草食であるとを問はず、定時に食料を採らないのが通常である。滿腹するまで食し、又空腹に食を漁る樣な、所謂其日暮しが通常であり、中には食料貯藏をも行ふものも存するが、一般的ではない。[4] 次に天然界の食料は生食のみであつて、調理加工や火食もない。又彼れ等に食物に對する嗜好のある點や、これに對する蒐集本能の或發達も認められ、毒物に對する認識本能も存し、平常的に於ける食物範圍にも或る限度がある樣であるが、果して饑饉等の非常的に幾何まで食料範圍の擴大に伴ふ變化が見らるゝものか。特に肉食獸に於て共際、同類相食む現象、卽ち人類で云へば食人風習の如きものが、[5] 行はるゝか否か等、一通り比較資料として、見て置くことが必

要と考へる。

3　舊石文化の食料

以上概雜ながら天然界の食料を眺めたのであるが、只今其文化を確認し、且つ其最も原始的である、舊石文化に於ける食料を見ると、前者に比し特出すべき文化工作たる火の利用に基礎づけられた、火食の肯定であつて(6)、他には只今考出して居らない。勿論舊石人の多くが其日暮しであつて未だ食料貯藏や定時の採食等は未だ行はれなかつた様に考へらるゝ。

4　中石文化の食料

中石文化に於ては、舊石文化の食料對象が遺存遺骸上陸棲動物が主體をなして居つたに對し(7)、中石人はこれに魚類貝類等の水産を加へたが、これ等動物質食料範圍増大に伴うて、どれだけ食料として文化工作が進められたかと云へば、漸く中石後期に入つて僅少な土器を有する文化が出現する。即ち北歐貝塚文化(8)と佛國平地のカンピニアン文化(第一圖)等である。この土器たるや人工の容器であつてこれに基いて或る程度の食料貯藏の可能性は認めらるゝ。勿論舊石文化にも或る種の容器はあつたらしいが(9)、それとは性質を異にし、新に粘土から工作せられた製作意志のより大であると認めら

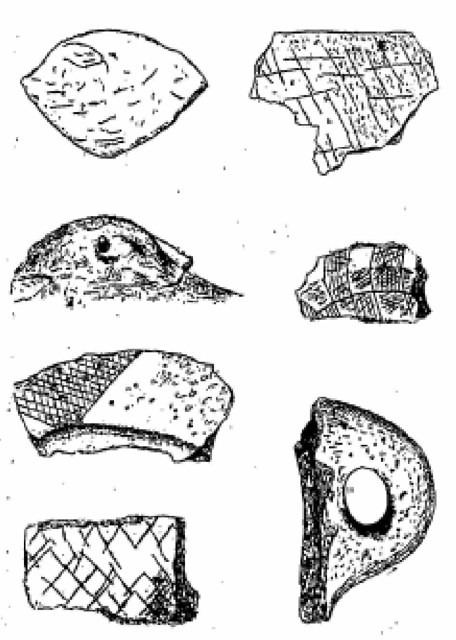


Fig.1. カムピニアン(中石)の土器
(Ph. Salmon, u. a による)

る丶土器の保有は、食料貯藏の可能性に、一段の確からしさを加ふるもの丶、尚考ふ可きものがある。それは中石文化に於ける生産食料は遺骸より見れば、動物質食料で植物質食料は殆んど不明である。中石文化後期に於ては或る種の農耕始原を見る樣なことも在り得るけれども、今日、文化植物として明確に肯定し得る程のものは未だない。この動物質食料たるや、寒暖によつて多少の差違こそあれ、直接生肉保存の可能期間は餘りに長くない。もし相當期間これを貯藏せんとするならば、原始ながらも何等か、保存の爲の食料加工工作を必要とする。然るに中石文化に於ては、食料加工の實證せられ得べき何物の發見もないことは勿論、文化進展の一般經過より見て、彼れ等の其動物質食料の水產にまで擴大せられたことは、著しい發展であつて、少なくとも動物質食料に對しては、或る充實を見たのであるから、恐らく更に一歩を進んで、これを貯藏して不虞に備へたり、或は採食の平均を求めたりするまでには達し得なかつた樣に考へる。更に如上の如き生肉直接貯藏よりも、見なければならないことは、中石人の一部は既に家犬を飼育した事實である。マグレモージアンに既に家犬があり(10)、北歐貝塚文化にもあり(第二圖)、決して新石文化に初現したものではない。其飼育目的や動機に就ては色々云はれもし、中には犬肉需用(11)も或る一部である樣に云はれもするが、直接犬肉需用の場合よりも、人類が家畜を飼育し得たことが、より大きな意義ある樣に考へらる丶。卽ち飼育始原を見る以上には、彼れ等は何等かの機會に、他の野獸に對し、第二の馴化を試み得ることも起り得、終に牧畜生活に到達すべき、第一步を既に踏み出して居ることである。而してこの飼畜た



Fig. 2. デンマーク貝塚(中石)出土の家犬骨
(S. Müller, u. a による)

るや他に色々の目的はあるにせよ、食料から見れば、最も理想的な肉類保存でもあるから、上述した直接生肉貯藏よりも、こうした肉類保存に向ふ樣に思はれる。且つこれ等中石土器の出土量は各遺跡を通じ、甚だ僅少なものであるから、未だ土器の利用が充分に行はるゝまでには、達して居らない。從つてこの點からも、貯藏可能性を弱める。然しながら土器の保有は、他の一面、卽ち食物調理の上から云へば、火食の際、單なる焙肉より蒸燒に進み得る可能性を有し(12)、又或る程度の液體保存も出來たであろう。

然しながら、更に顧る可き重要問題は、植物質食料にある。舊石、中石文化を通じ、これ等の直接遺物は勿論ないが、人類が雜食性である以上は、其植物質食料を肯定せねばならない。勿論この兩時代共、單に天然植物のみであつたと考へる。この天然植物食料に就ても、研究を要する件々の存するものがあるが、單に其一つである其保存性に就て見ると、肉類とは異り、一般的に著しい開きがある。保存可能期間は全く夫々の種類によつて決せられ、一樣でない。他の一面、植物質食料の容積も區々である。水分の多寡も同樣一定してない。然しながら、これ等天然植物を一端採集し、これを住居に運搬し、又これを保存するには、何等か容器があれば、甚だ便利である。中には其採集に當つて、應急なり何んなりの容器がなくては、採集困難なものがあり、且つ採集量も限度が出來てくる。それ故、もし一度土器を所有した住民であるなれば、この樣な場合、容易に土器が使用せらるゝに至る機會には富んだことゝ見なければならない。

これを要するに、中石食料は水陸の動物質食料に、一段と範圍が擴大せられ、この方面に對し、或る充實さを見る上、新に飼畜始原を加へて、より一段と其充實性を增大したが、植物質食料には猶進展を見ず、僅に中石後期に入つて、土器の保有から、採集、運搬、保存等に對する有利な狀態となつたが、未だ其緒についたのみで、

これ亦進展はしてない。これから見ると中石人は、尙其食料には缺陷がある。兎に角動物質食料は、日々攝取も出來たであろうが、猶其日暮し的であり、これとて確然と定食的にまでは達して居らない。又其植物質に於て、最も缺陷を多く見たものと考へる。これが爲、一部には早くも或種の農耕始原は見たかも知れないが、これとて未だ、この植物質食料の缺陷を滿すまでには達し得なかつたと考へらるゝ。

新石文化の食料

これが新石文化に入るに及んでは、植物質食料の缺陷に對して、新に農耕によつて文化植物を生み、中石飼畜始原は、發展して牧畜となり文化動物を增すに至つて、動植物食料が或る意味に於て、始めて充實し史前人類としては、食料に對する多年の宿望が、解決せらるゝに至つたのである。猶且つ土器の如きが、普遍化して各自容易に作出使用せらるゝに於て、食料の採集保存等に對し、其要求を滿し得る姿となつた。特に文化植物の如きは、其多くが長期保存可能なるが故に、價値づけられもする。又植物なる性質上、收穫季があり、一時に多量の生產を見るのが通常であるから、逐次食用せらる可き性質のものである。此點は獵漁による天然動物の採肉とは、大に趣きを異にする。この點をよく認識しないと、飛んだ生產論も生れてくる。以上の樣に文化植物には、一時に大量生產があり、これに貯藏なることが隨伴する以上、次に生じてくる問題は、これが消費にある。其內でも食料が圓滑に分配せらるゝにしても、其消費期間は、其收獲量に比例して存したと認めらるゝ。例へば晩秋に收穫があつたとすれば、收穫量に應じ、數日、乃至は數十日に亙り逐次これが消費が行はれ得る。勿論これは白紙的意味より見たもので、文化植物の種類、耕地面積、天候、住民數其他色々の事情の錯雜するものがあつて、夫々決して一樣ではないにせよ、かく或る期間に逐次消費の行はれ得ると云ふことは、一面に於て人類として日々食

物を攝ること、卽ち定食なることが行はれ得る可能性が認めらるゝ。勿論最初はこの期間も短かかつたであらう。しかし一面から見ると、其期間に定食し得ることが、習慣づけらるれば、遂には年中定食性の要求も生れ、從つて收獲量の增大、貯藏手段の改善等こゝに幾多の進展を見得べき、動機は存する。勿論文化植物を有しても、他に天然動植物乃至は飼畜所產と併せ、動植物質食料相互の配當もあつたであらうから、定食性はより大きくなつたと考へる。

Fig. 3. スエーデン青銅時代犂農岩壁畫 (J. Hoopsより)

6 金屬文化の食料

新石文化以降、金石併用時代を經て、青銅文化に入れば、金屬器の普遍化に伴うて、夫々の生業にも及ぼす所が大きい。特に前述した如く、金屬製農具により、農地の擴大となると共に、歐洲の如き大陸では、牧畜の進展するものがあり、兩者相結んで、新石文化の土掻農耕乃至は鋤農に過ぎなかつたに對し、早くも牛？馬？を利用した、犂農(13)が行はれて居る(第三圖)(14)。

私はこれ等金屬文化に對する硏究をして居らないから、二三の比較資料以外こゝに語る可き多くがない。特に我國原史文化に於ては、如何あつたものか、私共の硏究と連關上、知り度ものと考へ、原史文化硏究者に御願する次第である。

7 食料と生業

食料と生業との關係は、自然界に於ては、生產卽消費であり、所謂「消費あつて生產なきもの」である。[16] これが舊石文化に入ると、生產行爲、卽ち生業に於ても文化の所產を認め得るものが生ずると共に、直に消費であるにしても、火食の行はるゝ如きことあれば、生業と消費との間にも、ある文化工作が見らるゝ。これが進んで中石文化に於ては、上述の如く飼畜の如き文化行爲が新に加はり、其後期に土器の出現等により、生業と食料との間には、漸次中間工作の曙光が見らるゝ。其新石文化に入るに及んで、全く文化工作に基く農牧の生業出現により、食料貯藏其他、生產と消費との距離は延びてき、其結果食料安定性が著しく增大する。又食料そのものに對する、色々の工作、例へば調理に於ても、貯藏に於ても、配合に於ても、發明せらるゝものがあり、生產せられた其儘の姿ではなく、所謂加工食料としての各種始源も生れて居る。[17] この顯著な一例とすべきは、歐洲では新石杙上住居跡より、原始的な「パン」の出土がある。更に降つて青銅文化に進めば、恐らく加工食料が、更に一段と進展もし、益々生業と消費との間に距離が出來、一面生業分化は、生產者と消費者との分化も生れ、其結果史前生業の自給自足であつたに對し、大きな相違ともなる。

四　天然環境と生業

天然環境の直接間接に生活樣式に及び、直に生業に反映することも、餘りに顯著である。これ等に就ても研究を要すべき多くがあるが、兎に角、人類生產の主體をなす動植物は、一つに天然界によつて消長するのであるから、天然界の變移は直に動植物に及び、引いてこれを對象とする生業に影響する。今日の如き進んだ文化ですらも、生產に豐凶がある所から考へれば、今日に比し文化工作の甚だ微弱であつた、史前生業が受くる所の交感の

如何に大である可きかは直に想像し得る所と考へる。これから順を推して見れば、史前文化の內でも、文化低い程、其交感も大となる可きである。又文化期間に於て舊石文化最も長く、且つ歐洲の如きはこの間、恐る可き氷河現象さへあつて、大きな消長も見た。[18] 中石文化は舊石から見ると比較にならぬ程、短いけれども、それでも北歐では、バルチック海に於て、少なくともアンシルス淡水湖がリトリナ海に變り、且つリトリナ上半期までは續いたし、この樣な地形變化にも遭ふて居る。[19] 新石文化になると所により相應な長短の差も見らるゝが、概ね中石文化より更に期間短く、且つ現代に近づいた關係か、特筆する樣な大局的な地形變化も、氣候變化も見ては居らない。勿論局部的な變差はあつたと考へらるゝし、更に見る可きものがある。

1 氣候環境と生業

氣候環境が動植物を支配する以上は、これを對象とする生業が亦これに支配せらるゝ。これに就ても見る可きことが多いが、一般原則として南暖地方では、植物質食料は豐富であり、勞少なく採集も出來、且つ其土地に於ては人類に適應しても居る。これと反對に北寒地方は、植物質食料も少なく且つ肉食が或る程度に要求せらるゝ。[20] これは一面舊石氷河時代の狩獵生活と思ひ合はするものがあり、又氣候溫向の中石文化に於て水產食料擴大に對しても、其背後に氣候環境の及ぼす所が深いことが考へらるゝ。[21]

更に我國の如き溫帶的である所は、總てが中間的である上、著しく季節に支配せらるゝ。それ故季節なるものが、我史前生業にも重大な意義を持つ。特に植物食料に於て然りであり、引いて蒐集、收穫に及ぼすのみならず、生業相互間にも連關し、所謂半農半漁と云ふた樣な、生業配合も起つてくる。この季節に對する理解は、最も多く農者に要求せらるゝものであり、日々の天候が、天然動物を對象とする、獵漁に大きな關係あるに對し、或る

期間を必要とする農耕の季節とを對比したならば、了解せられ得ること丶信ずる。

2　地形環境と生業

地形環境も直接間接に生業に及ぼす所が深い。これを我内地と限つて見ても、大陸島であり、狭長な島内は山多く地形が錯雜もし、特に海に因縁深いのであるから、文化全般からも特性が生れ易い。(22)これを生業上から見れば、夫々地形上に對し、其生活が最も容易である生業に走り易い。勿論民族としての傳統もあろう。習慣の或るものは、生業を動かすに充分なこともあらうが、歸着する所は、生活の容易安穩にある。只この原則の一例として我繩紋式文化の關東平地に於ける狀態を眺めると、貝塚多く、其漁撈生業に發展したことは、首肯し得る所ではあるが、これと同時に其一部が、飛信山地方向に發展して居る事實に對しては、單なる地形と生業關係上よりして、狩獵或は農耕等に、果して幾何まで適應したものか、單に此の如き方面のみよりは、解決に苦しみ、他の理由も併せ考へねばならない樣な現象が、共に存する。

尙見たい多くがあるけれども、何れは個々の生業研究を行ふの日に、又多くを見直して先きへ進む。只この最後に申して置くことは、史前生業なる一生活行爲も、土地と水とを離れて營まれては居らない。換言すれば史前生業なるものも、天然環境なる舞臺に於て、演ぜられてゐるに過ぎない。

五　社會相と生業

人類は何時より家族以上の或る社會生活を營んだものやら知るを得ない。勿論社會組織の多くが、單なる抽象的行爲である以上、今日の史前學上の資料からは、殆んど知ることが出來ず、僅に片鱗を摑み得るに過ぎないの

であるが、これ亦生業とは密接な關係がある。[23]

今これを最も簡單に、舊石文化より眺めて見ると、[24]歐洲後期舊石文化の如きは、其氷河環境上、洞窟逃入を餘儀なくせられて居る。只洞窟なるものは、天然の住居である代りに、これに何等の加工を施さゞる限り、大さは最初より定限がある。即ち制限住居であつて、野外に自から住居を構築して聚居するのとは、大に其趣を異にする。然し舊石住居跡の洞窟よりは、一文化階梯に屬する幅も深さも、數米に達する樣な獸骨層を見る所から、相應な人數が集團生活を營んだことが、肯定し得る。此現象は、よしそれが氷河環境の致す所であるにしても、人類として集團生活を營む以上には、そこに色々な社會現象が生れてくるのも當然と考へる。例へて見るなれば、家族の狀態、[25]乃至は男女の關係如きが如何あつたか。[26]又は一洞窟内に聚居するにしても、どれだけの社會統制が出來て居つたのか。等色々の疑問が生れてくる。これに對し彼れ等の姉妹文化たる「カプシアン」繪畫の示す所では、明に集團狩獵を物語り、又後期舊石人其自からの捕獸主遺骸である馴鹿、野馬等の習性から見ても、これを裏書きする。[27]さすれば獨り狩獵時に限らず、彼れ等の集團には、或種の統制が行はれてもよい。所謂酋長とでも云ふ樣な、權力者がないにしても、少なくとも大衆を指導する古老の樣なものがあつたと思はれる。個々の何等團結ない集合體では、集團狩獵の如きが、行ひ得ないと考へる。特に人對人鬪爭の繪畫が舊石人によつて畫かれて居る所も、或る參考資料を提供して居る。[28]かく何等か統制の存すべき、社會があり且つ集團狩獵を營んだことが、生業階梯上から見て置かねばならぬ點と考へる。

これが中石文化に入ると、氣候溫向の結果、人類は野外に開放せらるゝと共に、この野外住居に對し、人爲構築の芽ゆる所があり、後述して居る如く自から住家を營み得るに達する。[29]特に中石後期に入り、北歐の貝塚を見

ると、大體我貝塚と大差がない。貝層の面積、厚さ等も相應にあつて、我關東地方の中等程度の貝塚位なものが多い。然らばよし大集團と認められなくとも、或る集團生活は肯定出來る。して見ると漁撈生活者も、或る集團生活が出來たのである。只これ等の集團生活は、決して無意義に行はれたのではない。舊石集團の如きは、全く氷河環境の特産と見る可きことゝは考へらるゝが、中石集團は、野外何處にも住居し得るに拘はらず、自からの意思に基いて集團を形ち作つた以上、そこに集團生活が可能であり、且つ集團の方が利益であつたと見なければならない。これは獨り生業關係のみに止まらず、後述して居る保安其他色々の生活現象の綜合結果とも考へるが、單なる生業方面より見ても、直に連想せらるゝものは、集團漁撈である。(30)今これが詳細に亙つて研究する餘裕はないが、要は集團を滿すに足る、食料の豐富に基く所が多いと考へる。



Fig. 4. カプシアン（舊石）集團狩獵壁畫（H. Obermaierより）

これが新石文化に降れば、より古き階梯に集團生活が營まれた以上、本階梯に於て單に可能であるに止まらず、更に進んで、聚落相互間にも或る結合が生れても、不思議はない。(31)更に新石聚落を見ると、舊石の狩獵集團、中石の漁撈集團等の如き、天然食料のみを對象とするものとは、違ひがある。天然食料のみを對象とすれば、其貧富によつて支配せらるゝが故に、集團はより限定的である。然るに新石聚落は、獨り天然食料のみによらず、牧農等の文化工作を併せ行ひ得るによつて、この集團制限は著しく開放せられ、且つ聚落生活に必要な四周地積も、文化

工作に比例して縮少せられ得るから、聚落相互間の距離も縮少せられてよい。換言すれば、人口が濃密になり得る。從つて部落相互間にも、交通が容易となり、統制の上からも容易となり、又この現象は、文化中樞を形造る上に於ても、大きな關係が生れる。

こうした目で、我石器時代の文化を眺めると、色々摑み得ることがあると考へるが、其詳細に就ては、將來に讓りたい。只こゝで一言御斷りして置くことは、此の如き文化現象を見るにしても、それは大局上の問題であつて、社會進展が順序よく發展して行く場合であり、且つ地形に連關した文化發展方向や、乃至は文化衰退現象(32)等尚多くに觸れては居らない。又或る文化が大局上順調に發展して行くにしても一律一樣ではない。中には不揃なこともある。それ故新石文化で集團の結合增大を見るにしても同時に集團をなさないものも、又集團をなしても何等の統制もないもの等が混在して居つてもよい。要は彼れ等としては、食料充實し且つ平安に生活し得ればよいのであるから、天然環境や保安上等から、最も小さな團結である家族を編成するのみで、滿足して居つたもの等も少なくなかつたらうと考へる。今日でさへも、こうした孤獨的な生活者が田舍には隨分見られもする所からも、肯定することが出來る。

これが原始文化に入ると、總てが面目を一新して、略今日に於ける社會の、ある原始的な姿が見らるゝ樣に思はれる。歐洲では都城の樣なものが生れ、我國でも國家と稱する樣な、統制にも進んだ樣に思はれるから、社會相はより複雜となり、前述した生業分化と共に、貿易、金錢、等が發育して、自給自足を原則とした史前生業とは、全く異つた經濟生活に入つたものと考へる。

六　保安と生業

根本に於て史前民の保安に對する研究も重大な意義を有し、其研究分野も廣いに拘はらず、殆んど等閑視せられて居る。こゝでは、保安と生業關係、然かも僅に其一部に觸れ、兩者にも相關々係あることを、認識する端緒に備ふるに止める。

史前民の保安とは、生命の安全を期することであり、又不安なく生活せんとする行爲である。今日とは異り、總て自からに頼らねばならない。即ち自衞なのである。この現象は獨り文化を有する人類に止まらず、天然界に於ては、今日と雖も色々な現象が見られ、比較資料ともなるが、割愛する。[33]

この史前民の保安なることも、天然に對する保安、人對人の保安もあり、後述する住居の如きも亦、主として前者に對するものである。後者に對しては、直接武器を執つてする自衞行爲や、籬柵を設置するが如き、消極的な防衞も含まるゝ。この武器に於ては、生業用具、特に狩獵用具の多くとが、全く相一致するものがあるが、其個々の研究は將來に讓り、更に他を見る。其一つは、防衞術工である堡塞である。堡塞術工は、舊、中石文化にはなく、新石文化に入つて初現するもの、未だ發展するまでには達せず、原史文化に入つて、堡塞の擴大充實は都城たるに達し、其發展著しきを見るのである。勿論この堡塞術工中には、木柵の如き朽廢性に富むものが有り、[34] 今日これが存否を計り得ないものも存するが、中には、土壘の遺存するものがある(第五圖)。[34] 我北海道、[35] 東北地方には、よく「チアシ」と稱せらるゝ遺跡があるが、私は未だ研究して居らないから、果してこれが史前遺跡であるか否かに就てすら、只今白紙の狀態にある故、研究せられた方があらば、高教を得たいと考へる。

この様な保安工作は、必ず其必要に應じて發生したものであり、且つ其必要たるや、其殆んどが對人關係によ

つて成立するのであるから、獨り生業關係に止まらず、他部落乃至は、不安を醸する敵の共存を、併せ考へねばならない。即ち敵對行爲が肯定せらるゝ。又堡塞なる性質上、集團の爲の保安術工であり、ある統制下になければ出來惡い。且つ堡塞は後述する定住性を裏書きする。特に新石文化に於ける土工の如きは、石器を以てするのであるから、其勞作甚だ大であることを考へねばならない。それ故相當な理由なしには出來ない。又この堡塞設定は、一面に土地支配ともなり、其保有上からも起る。此點を生業から見ると、獵、漁の天然動物を對象とするに對し、農牧は土地の保有要求が一段と高い。特に農耕に於ては、耕地がなくてはならず、原野より耕地に開墾するには、大きな勞力投資が必要であるだけ、耕地の保有が要求せらるゝ[32]。又農耕は土に親む生業である以上、土工に對しても、土に親み少ない生業者よりも容易と考へる。かく述べてくると、農者のみが堡塞を要求する樣に誤解も生れ易いが、勿論堡塞設定は獨り生業關係のみより要求せらるゝのみではない。只生業との關係に於て、かく農者と結ばるゝのであつて、堡塞設定なるものは、恐らく農耕文化以降に發生したものと考へるのである。

Fig. 5. 中歐新石
レンギエールの堡塞 (Reallex. より)

七　住居と生業

住居と云ふても、遺跡學に見たそのものゝ研究も史前學上必要は認めるが、[37]こゝでは居住行爲が、生業と深い關係を有するから、これを見る。先づ天然界に就て見れば、哺乳類に於ても樣々で、中には自から住居を構築するものもある。[38]

後期舊石文化の洞窟生活に就ては、前述した通りであるが、由それが天然住居であつても、其天然環境に變化なき限りは定住性を持つて居る。中石文化にもアジリアンの如き洞窟住居者も居るが、中石後期のカムピニアンの如きは、立派な竪穴住居を營んで居る。[39]この竪穴住居たるや、舊石文化には未だ全く見ない所であり、人類として始めて、土を堀つて築營すると云ふ、大きな文化工作を見たと同時に、この構築は大きな勞作で、手輕には出來なかつたと考へる。もしもカムピニアン人が、放浪生活者であつたならば、決してこんな勞作は行はなかつたと思はれ、彼れ等にも或る定住性が認めらるゝ。北歐貝塚にも前述の如く、集團生活を認めらるゝと同時に、貝層等よりして、これ亦同樣に定住性が認め得ると共に、農耕始原以前に、竪穴構築の如き土工作業が先行して居る點は注目に價する。これが新石文化に入れば、今日遺跡を止むるものには、より大きな定住性を見てもよい。しかし歐洲では、杙上住居の樣な變つた住居跡もあれば、住居形式も圓形より角形に進んだものも多く見らるゝが、我關東地方の繩紋式文化の住居中には、敷石住居や多角形的なものも存するが、其多くが圓形であり、[40]且つ聚落も見らるゝ。

兎もあれ、石器時代文化に於て、定住性を認め得ることが、[41]生業と或る關係を生ずる。[42]卽ち生業地域の限定となる。定住する以上には、其住居を中心として、彼れ等の行動半徑は自から定めらるゝ。特に聚落生活を見るに

於ては其行動半徑内に於ける生產充實を見なければ、聚居は不可能である。又定住を立前として見れば、其行動半徑の制限よりして、生業も亦限定せらるゝ。其土地に於ける最も有利な生業を撰ぶのが當然に思はれる。生業を主として見れば、某生業に適應するが故に、定住するに至ることも起り得るが、夫々各生業に亙り、定住しながら、從事し得るかは、一つに其天然環境にあり、又文化の進展によつて、新に文化工作を併せ行ふことも不可能ではないが、定住性は動もすれば、生業を固着せしめ易いと考へる。特に一地に於て父祖より繼承する生業は、幼少の頃から見聞して體得する所も多かろうから、特殊の事情に出會せざる限りは、傳承せられ易く思はれる。又聚落になると、これが轉々移動する如きことは、定住性のない住民なれば容易であらうが、定住性を帶べるものであれば、決して易く行はるゝものとは考へられない。(43)

八 結言

以上甚だ雜駁であり、且つ夫々方面に於ては、抽出的に生業關係に觸れ、纏り惡くもあるから、了解せられ惡い點も多く存するとは考へる。私としても尙開陳すべき多くを保留もして居るのであり、こゝでは成る可く簡單に、且つ成る可く各方面より史前生業を觀察せんとしたが爲、かく何れも不充實な研究となつたのである。これも只今史前學者側よりの研究が、餘りこうした基礎的研究に向つて居られないで、漸く此程、生業研究に向つて進んできた悅ばしい傾向を見るのであるが、これを獨り生業研究のみが、先進するに於ては、必ずや生ず可き缺陷がある。例へば食料、保安、社會等より、或は天然環境の研究等多くが擧げ得る。これ等が相前後して研究が併進すれば、最も理想的であつて、互に夫々の研究に相關して不備相補うて深く究明し得ると考へる。勿論史前

文化研究の大道は、獨りこうした方面に止まらず、尙々多くの研究内容を有するから、進むべき多くがある。特にこうした抽象的に近い研究になると動もすると、机上に膠着し、史前學本來の事實、事物を對象とすることに遠ざかる傾向も生じ易いから、戒心すべきではある。只本論に於て多く費した所は、今述べた生業研究獨進に對する點に、餘りに考慮し過ぎたかも知れないが、さりとて考へ方によれば、單に生業研究のみ獨進してみても、其結果直に行詰りも生じ得る。この點から考へれば、豫め生業研究の基礎を廣くして置けば、それに基いて深くも推進せしめ得ると考へ、かく廣くも觸れたのである。勿論夫々廣く見るにしても、夫々方面の全貌には、容易に簡明に接し得ない爲、かくも片鱗にしか觸れ得なかつたのである。只例出した諸方面に對しても、研究せられた方々も多いと考へるが、此際御發表を願ふ端緒にもと思ふた節も少なくない。

又根本に於て、史前文化に於て文化階梯に對する認識が充分でないと、往々見當違も起り得る。これを生業から見ても生業文化進展の大綱を基礎に入れて置かないと根柢を誤る結果も生れる。例へたならば、歐洲後期舊石時代の農耕論の如きは、古い時ではあるが、其氷河環境を無視したり、又文化階梯に於ける生業一般を見て居らず、出土遺物に直面して、これが眩惑より生じた結果と考へる。(44) それ故現實に出會する以前に、史前生業に對する標準尺を認識して置くことが必要である。徒に發見にのみ追從することが、史前學の任ではない、發見に先行すべき組織がなくてはならない。勿論これが爲ある主觀の先行することも危險な場合も起ろうし、或は特異例とすべきことにも出會しよう。特に我縄紋式文化の如きは、歐洲新石文化などゝ對比して見ると、必ずしも總てが併行して居らない。例へば彼れに住居、墳墓等共構築術工の進展したものがあるに對し、我れには少ない。其代り我人工遺物の精良複雜な發展は、彼れ等に優る如きがあるから、生業文化に於ても、無條件で同等視は出來ない。

さりとて大局を省ず、無暗に暴進するは、考へねばならない。更に考ふ可きは、我史前文化の特異相なるものは、他との比較上、初めて成立するのであつて、自他を知つて、よく己れが明になるのである。かく我史前文化を研究するにも、其踏む可き順序があると同様、史前生業を見るにも、見るだけの順序が必要と考へる。勿論今日述べんとした所は、表題にも示した如く、序説として基礎的な概論にあり、將來は本研究を基礎として、個々の生業に就ても、研究して行く考へである。それにしても本研究は其考へに對し、所論の杜撰淺薄な所は、私も思はぬ節も尠なくない所は、豫め告白して大方の、忌憚なき御批判を御願して、一歩なりとも研究を推進せしめたいと考へる。

只私の云はんと欲して居る所は、我史前生業研究に對しても、其根柢を確立して進みたいのである。言ひ過ぎるとも思ふが、所謂定石を打つて行きたいのである。それでないと切角芽生へてきた生業研究を、或は邪道に陷れる恐れもある。これとて研究者に對し、決して故意に難解にし、難癖をつけて研究を阻止したり、或はこれを遲疑せしめ、又は放棄せしめんとする樣な、氣持ちは毛頭ない。寧ろ反對である。一人でも多くこうした方面の研究者の出でんことを希望して止まない。たゞこれに對し、甚だ僭越ながら、未だ研究に向はれざる方々に對し、其進路に對する一準據を開陳すると共に、自分の研究としても、批判を得て、共々に進みたい爲に、かく述べてきたのである。それ故、私の微意ある所を誤解なく、共働の勞を惜まれざらんことを、呉々も御願して本稿を閉づる。（昭和二一、二、一六稿）

（1）私として生業關係に論及した主要なものは、「神奈川縣下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告」（史前研究會昭和二年）に於て原始農耕の一端に、「日本舊石文化存否研究」（本誌、四ノ五・六代册。昭和八年）に於て、〔別註三〕漁撈始原概說（同書、一八―二四項）として其輪廓を述べたに過ぎない。倘部分的な二三は他にも觸れたものはあるが略する。

（2）私は元々史前學研究を專門として居るから、原史文化に就ては殆んど研究して居らない。それ故多くを知らないけれども、本文で述べた如く、比較上、原史生業とは理論的に大きな開きがある。特に我國史前生業を研究する上には、我原史生業との相關も對比も甚だ必要なことであるから、原史學研究者に於ても原史生業の研究も進めて戴き、互に研究を增進して行きたいと考へる。私は徒に姉妹專門に向つて批判がましき態度は、此際慎み、其專門諸兄に信頼して、其研究を待つものである。省みれば夫々自己專門にも御互に大きな不備缺陷はある。これを各々自己專門方面を幾分なりとも滿して行くのが、互に進む最も大なる効果的のことゝ信ずる。

（3）最近、大給尹君により「日本石器時代陸產動物質食料」―特に狩獵による食料―本誌、六ノ一。が發表せられたことは、我史前全食料から見れば、其一部に過ぎないが、兎に角、こうした方面に濟究せられてきたことは、悦ばしい傾向と考へる。どうかこうした方面の研究も、續々發表がありたいことと考へる。

（4）哺乳動物の食料保存に就ても、一應研究して見たいと考へては居るが、只今例證すべきものがない。僅に高桑良興氏、人間性と動物性（大正十五年）第二三〇項、動物の財產の所に、犬、北極狐、鼹鼠、スカンク等の多くの例をあげて居られるのを見たのみである。いづれ研究の上增補はする。

（5）食人風習に就ては、我國ではモールス以來、相應に論議研究せられたものがあり、又今日これを再吟味する必要もあるが、今回は總てこれには觸れて居らない。

（6）火食を肯定し得る燒骨の出土に對しては、少なくとも後期舊石文化には、相應例があつたと記憶するが、只今これを書いたノートを遺失したから、暫く實例は猶豫して戴きたい。然し舊石人の多くが、倘生食して居つたと考へる。特に冬期其植物質食料の不足の際には、保衛上特に生食要求があつたと考へらるゝ。

（7）舊石人が絕體的に水產を採取しなかつたとは、考へて居らない。現に舊石遺跡より出土した魚類例は前揭拙著、「日本舊石文化存否研究」第十八―十九項參照。

（8）北歐貝塚文化の土器は、拙稿、「デンマークに於ける貝塚構成時代」史學。七ノ三。第一九四項。第十圖參照。

（9）舊石文化の容器として、最も明に考へらるゝものは、カプシアン繪畫でアラナ洞窟發見の、「木登りして片手に容器?を持つ人」と云はるゝものがある。拙著、歐洲舊石器時代(考古學講座)。續編。第一二九項挿第百四十一圖。又今一つは佛國ローセル岩陰出土の浮彫「角杯で飲む婦人」(同前拙著、第一〇八項、挿第百十七圖)がある。只前者の容器が何物であるかは疑問とせらるゝ所であるが、今日まで舊石文化中に確實に土器が出土した例がない。(舊石土器問題に就ては、前揭拙著、「日本舊石文化存否研究」第三二—三三項、(31)參照)それ故、天然容器か或は有機質の容器であろうと想像せられて居るが、果して容器かも未詳である。又後者の角杯は、如何にも角杯らしく見らるゝが、よしそれが容器であつても、小形で食料貯藏などに用立つ程度のものではない。要するに舊石文化に或る容器の存在は認めらるゝが、貯藏に用立つ程度のものは、無い樣に思はれる。

（10）マグレモージアンの家犬に就ては、拙著「北歐に於ける中石時代、マグレモージアン文化概說」史前學雜誌、第三の第二、三號、第五一項、一覽表及び、第五二項參照。尙同表で示してある如く、マグレモージアンの三遺跡、悉くより家犬骨出土を見て居る所は注目に價する。

（11）犬肉食用に就て、こゝに直接關係はないが、奥村繁次郎氏、「犬肉食用考」(人類、十五、一六七、第一八四—一八六。)なる論文があり、主として我文獻上の研究がある故、參考に備へる。

（12）上田恭輔氏「料理術の起源及沿革」(人類第十三ノ一一三九號。第一—一八項）參照。本文中には、面白き未開土俗例が揭出せられて居る。

（13）土掘農、鋤農、犂農等に就ては、將來史前農耕を發表する時、研究させて戴きたいと考へる。

（14）本圖は J. Hoops; Waldbäume und Kulturpflanzen im germanischen Altertum. 1905. Fig. 3 であるが、同圖は Bohuslän とのみあつて、所在地名がない。Tegneby in Bohuslän の岩壁畫と考へる、大さ未詳。これと若干異るものが、O. Montelius; Kulturgeschichte Schwedens. s. 20. Fig. 127 にあるが、鮮明な前者をとつた。

（15）(2)參照。

（16）河上肇博士、「人類原始ノ生活」(法律學經濟學、研究叢書、第二冊)明治四十五年、第一五項參照。但し同書に於ては、何等直接史前文化階梯には及んで居らないから、この言葉が何れに當るものかは、解らない。太古原始の人類とあるのみである。從つて史前文化の存否に就ても觸れては居らないが、もしこの言葉を史前生活に當て嵌むるならば、本文の如く文化なき時代と見る可きであると考へる。

（17）動物質の食料、其內でも魚類の調理加工に就ては Ed. Krause; Vorgeschichtliche Fischereigeräte und neuere Vergleichsstücke. (Zeitschr. f. Fischerei. XI Bd 314 Heft. 1904) s. 276—288. 參照。又植物質食料に於けるものは、A. Maurizio; Die Geschichte unserer Pflanzennahrung.

1927. に色々述べられて居る。この後者の中で、特に歐洲方面で重要視せられて居るのは、「パン」の起源である。この「パン」に就ては、獨り本書に止まらず、諸家の見る所、其最初は本文に述べて居る如くスキス新石代上住居系文化に於て、「パン」と認め得べき現品の出土を見たとせられて居る。勿論この「パン」たるや、果して今日と同樣に「パン」と稱してよろしきものなりや。嚴重に云ふたら、本書の如く „Fladen" （和名未詳、未だ爐竈を用ひざるパンの樣に思はれる。將來研究の上、附名する）と呼ばるゝものと考へるし、この „Fladen" にまで到達するには工作道程もある樣であるから、何れ動植物の加工食料に就ても研究して見たいと考へて居る。兎に角、この樣な加工食料が新石marks期とは云へ、歐洲に見たと云ふ點は、含み置かる可きことゝ考へる。

（18）　拙稿、「舊石器人の盛衰」。（科學知識。第七ノ一號。昭和五年）參照。

（19）　北歐氷後期に就ては、（8）（10）等に引用した拙稿參照。

（20）　南北氣候に基く動植物食料の適否、現實等に就ては、藤原咲平博士、「氣象から見た人間生活の種々相」（科學と人間生活。昭和四年）に面白く平易に書かれて居るから、一讀を御勸めする。又有名な、E. Huntington ; Civilization and climate. 等、色々他にも多い。

（21）　同じく肉類であつても、獸肉と魚貝肉とでは、違があることも明であり、これ等の比較研究も一通りは心得べきことゝ考へるが、只今これ等に就ても良參考書を未だ見出して居らない。僅に澤村眞博士、「食物化學講話」（大正十五年）及び辻鶴太郎氏編、「肉食篇」、（明治二十八年）を見て居るのみである。然しこの後者には一部古代文獻に現れたる獸類等の記錄もある。

（22）　ヘルパッハ博士原著、「風土心理學」渡邊氏譯、（大正四年）の序論に「自然的環境」として人類に及ぼす所深き所以が述べられて居り、史前學上直接に參照すべきものはないが、間接に多くの資料がある。

同樣に井上長太郎氏、「人生と地理」（昭和二年版）中にも「人生と地形」其他があり、同氏「續人生と地理」（昭和二年版）には、今日の農業、牧畜、水產等の生業と地理學的關係に就て述べられ、間接資料が多く見らるゝ。

（23）　史前社會の研究は、專門の史前學者、考古學者が餘り多く觸れて居らないのに對し、社會學者、經濟學者等の方面からは、相當に踏み込んできて居る。特に我國に於ても、こうした傾向が見らるゝ。而して私共をして素直に言はして戴くならば、こうした方面からの研究には、敬服する點も多く、又啓蒙せらるゝ所も尠なくないと同時に、或る物足らなさを覺ゆる。恐らく同樣に、社會學者方面から史前學者の研究を見れば、吾人等の樣な、物足らなさがあることゝ考へる。これは御互に夫々に對する認識不足の致す所と考へる。互に歩み寄り方の不充分に基く結果と思はれる。それ故今後に於ても私共としても、尙一歩進んで、史前學の分野上、對象とすべき內容は充分な理解と勉强とにより、これが基礎を

確立した上で、こうした方向にも進みたいと考へる。徒に新奇にあせつて、我れ等の當然踏む可き所を、他學に屈し自からを卑下する必要はない。特に史前學、考古學は事實事物の上に立つと云ふ强い立場があり、抽象的な研究とは其根柢を異にする點は、忘れてはならない。極端に云へば、この强き立場を他學より侵略せられつゝあるとも云へば云ひ得る。或る見方をすれば、史前學と社會學の一部と互に重複した分野でもある。それ故、こうした研究が進めば、史前學を立前とすれば、社會史前學を、社會學の立場からは、史前社會學も生れ得る。今日はこゝまで進んで居らないから、上述の如き事態も起る。今これに就ても多くを述べ得ないが、參考とすべき一二を見る。モルガン著、荒畑氏譯、「古代社會」（改造文庫、昭和六年）は有名であり、色々得る所も多いが、本著は既に一八七七年の公刊（述文年月）であるから、多く史前文化に觸れるにしても、史前學上資料の甚だ不充分不整頓の時代である。（これに就ては、拙稿、「史前學研究史」（史學七ノ四）參照）從つてモルガンとしても、其資料が甚しく不備であつたが爲に、自分から野蠻、未開、文明等の文化階梯を細設したのであろうし、當時は特に土俗學の研究が盛んで、史前文化と常に對比研究もせられて居つた故、この兩者綜合の文化階梯も生れてきた一理由とも思はれるが、今日私共の立場からは、了解に苦む所もある。只この文化編年が、エンゲルス著、内藤氏譯、「家族・私有財産及び國家の起源」（一八八四年初—九一年四版）（大正十一年）に於て重用せられ、以降多くが用ひられ、更に多くがこの傳統を傳へるものがある樣であるが、これ等に對しても私共は、飽くまで史前編年を立前として現實にそくして見てゆく。尙この外、ラブレー著、長野氏譯、「原始財產」（一八七七年）（改造文庫、昭和六年）やミュッラーリャ著、鼓氏譯、「文化の諸相」（年代未詳）（大正十年）等邦譯せられたこうした方面から史前文化を見た著作も甚だ多い樣であるから、何れは取り纏めて參考に供する。

（24） 理論から云へば、文化を有する舊石時代のそれを直接眺むる以前に、天然界の社會生活に就ても、一通り見る可きを順序とするも、本研究が尨大となり過ぎるを恐れて略した。これに就ては、石川千代松博士、「動物社會」（明治卅六年）「動物の共棲」（同年）に平易に書かれ、高桑良興氏、人間生物學」（大正十二年）にも色々述べられて居る。只人類に近い哺乳類の集團生活に就ては、A. Sokolowsky; Genossenschaftsleben der Säugetiere. 1910. の好著がある。又特に、人類に最も近い、猿の生活に就ては、丘博士、「猿の群から共和國まで」（大正十五年）に群中には大將のあること（第六四項）が述べられて居る。又社會學的に見たものに、P. Deegener; Die Formen der Vergesellschaftung im Tierreich. 1918. Fr. Alverdes; Tiersoziologie. 1925. 等がある。

（25） 家族の狀態の知きは、通常史前學上からは殆んど知り得ないと考へる。原始文化の家族に對し色々の研究があり、中には史前文化のそれに觸れたものもあるが、多くが比較民族學上、乃至は動物界よりの類推等に基くもの丶樣である。これに就ても果して史前學上からは幾何まで觸れ得るかの、限界に就ては豫め研究して置く必要を認めるが、未だ着手しては居らない。これに就ては、河田嗣郎博士、「家族制度研究」（大正

八年）等があり、W. Scheidt; Einführung in die Naturwissenschaftliche Familienkunde. 1923. 其他がある。

（26）男女の關係は、獨り性的關係に止まらず、前述の家族とこれに連關した分業關係等、多くが存するが其現實はこれ亦殆んど知り得ない、其性關係に於て、ベルシェ著、（本田氏譯）性的進化論（大正七年）に動物界より人類に亘つて述べられて居る。この外ウエスターマーク、（島村氏譯）「人間結婚史」一八九一年譯）の如きは餘りに有名ではあるが、直接史前文化のそれに及んでは居らない。同様にエリス、（荒川氏譯）「性と文明」（原著年未詳）（昭和六年）の如きには、僅に原始社會に就て觸れて居るのみである。

（27）後期舊石人の集團狩獵に就ては、（18）の拙稿參照。

（28）舊石人の闘爭圖は、（9）の拙著、續編、第一二八項、挿第一四〇圖にある。又有名な、「矢傷を受けた戰士」なるものは、同編、第一二三項、第一三四圖にある。この前者は、中央の一名に對し、六名程で包圍攻撃と解せられて居る。其眞僞は不明であつても、人對人の闘爭が早くも舊石文化には起つて居る所は考ふ可きことゝ思ふ。これに就ては、拙稿、「原始人の闘爭」（科學畫報、八の六、昭和二年六月）參照。

（29）中石文化の內で、マグレモージアンは、住居跡の發見はない。（（10）の拙著、參照）又北歐貝塚にも、明確な糧跡（8）の拙稿、第三圖參照）はあるが、住居跡其ものは未だ發見を聞かない。恐らく後者の發掘調査が多く千九百年以前であつたが爲、餘り多くを着意せられて居らなかつたに基く結果と思はれる。

（30）集團漁撈を容易に肯定し得る一例は、鯨骨出土の如きである。死鯨骨を採集したなら兎に角、生きた鯨は單獨では取れない。相應な人數がいる。又小形な鰯の如きものゝ多出は、釣つたのではなく、網で取ることを連想せしむる。こんな目で北歐貝塚出土の水產動物（これが一覽表は、（8）の拙稿にある）を見ると、鯨はないが、ネズミイルカ、シアチ、アザラシ（各種）等がある。魚類にはニシンがあるけれど、出土量は不明であるから、何んとも申されない。前者の哺乳類ならば、或る集團獲得想像可能の樣に思はれる。

（31）聚落相互間に密接な關係を存したことを證明する一例は、歐洲新石末の一文化である杙上生活系文化の杙上村落相互間に、橋梁が架せられて居つたものがある。これに就ては、拙稿、「南獨フェダーゼー行の舊稿より」（本誌四ノ一）、第三八項及び第五圖參照。

（32）文化衰退に關しては、甚だ蕪雜ではあるが、嘗て觸れたことがある。拙稿、「史前學と石器時代研究」（本誌二の二。第七項、3。文化衰退。參照。

（33）保安に關し史前學上から研究した參考書は、不注意の故か未だ發見して居らない。只 M. Hoernes; Natur-und Urgeschichte des Menschen. 1909. Bd. II. S. I. に Die Sorge um Ruhe und Sicherheit の表題があるが、內容は火、料理、住居等に就てであり、私の考へて居る保安と

は、稍々寗襲の不合がある。勿論火の利用の如きは、保安上大切であり、家の如きも天然に對する保安ではある。今これ以外には、片鱗を認めるものしか、見て居らない。恐らく社會學、民族學方面では、多く觸れても居ることゝは考へるが、未だ調べて居らない。

動物の保安に對しては、保護色、塗彩、擬態、擬死、裝角、裝甲等々、色々の現象はある。これが一部は、前掲、高桑氏、「人間生物學」中、「動物の生活と人間の生活」（第三〇五—三二四項）に見らるゝ。

（34） 木柵の遺存せるものゝ一例とすべきは、歐洲に於ては、南獨フェーダーゼーの所謂水城なるものがあるが、其所屬文化は不明で、恐らく青銅時代と考へられて居る。これに就ては、(31)の拙稿參照。又我國に於ても、先頃東北地方に柵跡發見せられ、諸論を見たものがある。上田三平氏。「城輪柵阯」（昭和七年）其他參照。

（35） レンギエル (Lengyel) の堡塞阯は南ハンガリー、Tolnaer Komitate にある。文化階梯は純なる新石文化と認めらるゝが、若干の銅製裝飾品は發見せらるゝから、後期に屬するものと考へる。本遺跡より彩色土器を出土する所から中歐系新石文化の彩色土器系文化に所屬するものと認めらるゝ。この堡塞は高地上にあつて圖の如く楕圓形をなし、長徑六百米、短徑三百五十米程ある。土壘は上緣約三米底幅二米位の外濠を以て圍はれて居る。この塞中には釣鐘を伏せた樣な、深さ三—四米程、幅二—三米位の上に狹い入口ある竪穴住居跡が發見せられこの中には爐跡を見る外、多數の石器、土器、獸骨等色々發見せられ、塞の西及東隅に夫々墓地が發見せられ、西隅より約五〇、東隅より八十體以上の人骨が發見せられて居る。これに關しては、(33)に揭出した Hoernes; Bd. II. S. 116—117 及び Reallexikon der Vorgeschichte. Bd. VII. S. 234—236。參照。

（36） 社會學的方面の各書には、原始農耕の土地支配となり、且つ財産でもあつたことに就ては、高唱せられて居る。(23)に前揭、ラブレー、「原始財産」（第五三—五四項）、エンゲルス「家族、私有財産及國家の起源」（第三三二項）等參照。又史前學的方面からは、(32)前揭、Hoernes Bd. I. S. 541. にある。

（37） 史前住居に對する基礎的研究の必要は、豫てより痛感して居る一つではあるが、私として未だ取纏めて、愚見を開陳して居らない。何れは發表するの時がくると考へて居る。

（38） 哺乳類に於ける住居構築に就ては、(4)に前揭の高桑氏が部分的に觸れられたのを見る外、只今綜括的に書かれたものを見出してない。又個々の動物に就て見て行けば、ヲラングータン、ビーバー、モグラ、鼠の類等多くが數へ得らるゝが、取り纏めて見たことがない。又文獻に就ても搜索の上增補を期する。

（39） カムピニアンの竪穴住居跡の斷面圖は、（7）前揭、拙著、第二圖參照。

（40） 我が史前住居の研究に就ては、（37）にも述べて居る如く、近く愚見の開陳も期して居るから、こゝに一々の例證を略する。其文獻に於ても、柴田、大塲兩氏、「石器時代の住居阯」（昭和二年）等の外、其個々に就ても多くが見られるが、これ亦略す。

（41） こゝに述べて居る石器時代民の定住性は其全部に就てではない。今日遺跡として認めらるゝものに於てであつて、他に放浪的な生活者もあつたであらうがこれ等の痕跡が、今日の科學では、未だ摑み得ない。

（42） 住居を中心とする行動半徑に就ても、述べたきものがあるが、本論の尨大から割愛した。これ等は住居研究の際に開陳する。

（43） 聚落そのものに就ても、研究を要すべきものがあるけれども、住居研究の際に讓る。只これに關しては、直接史前文化のそれではないが、小田內通敏氏、「聚落と地理」（昭和二年）なる好著を紹介して置く。

（44） 舊石農耕始原論は、E. Piette や Nelli にあるものゝ如く其主張の基礎は、文化植物と考へらる、彫刻の出土と、彼れ氏等の石臼と認めた石器の出土に依るものらしい。これ等に就ても、將來詳細に紹介する時がありと信じ、こゝには單に上述の出典として、J. Hoops; Waldbäume und Kulturpflanzen. 1905, S. 277—281. を揭出するに止むる。又（32）前揭、Hoernes; Bd. I. S. 545. に於ても、本問題に對し「ピエトの錯誤である」と明に否定して居る。

戸山ヶ原上ノ臺に於ける史前時代遺蹟　後報

高　島　徳　三　郎

一

戸山ヶ原上ノ臺に於ける縄紋式遺蹟の概報を出して後、數日即ち昭和八年九月十一日であつたが前報中に記載の中村徳太郎氏宅地に北接する弦巻洋酒醸造所工場の改築のため同工場敷地内の一部を掘下ぐるに遭遇し、かねて同地域は遺物包含地として注意して居た關係上早速同工場主、弦巻乙一氏に交渉したところ工事中自由なる調査を許容されたゝめ、あらゆる機會を捉へて本遺蹟遺物の出土狀態と多くの土器破片及び石器等を蒐集する事が出來た。殊に堀下二米以上に及びたるため明瞭に本遺蹟の斷面を觀察することを得たことは意外なる收穫であつた。

今回本遺蹟の後報を出す理由は本遺蹟の文化的編年的考察を下す場合に一層豐富なる遺物の出土を見たることゝ其の包含狀態を觀察し得たゝめであつて、本報が本遺蹟自體をより分明ならしむると共に延いて關東地方に於ける後期縄紋文化の研究に一資料を提供し得ると信ずるからである。

二

今回堀下げた地點は中村氏宅地の北に接する約三五〇平方米の面積を有し、中村氏宅地より一・五三米低い。前號第二圖C點西方をD點とす、D點は方三米、深さ一・五米、E地點(D點の北方に接した所)は縦六・五米、横四・四米、深さ二・四米で前者は煙突建設のため、者は地下室を作るために掘下げたものであつて、他は基礎工事のため到る處一米程度の溝を掘つたのであつたが未だ赤土を露出するに到らず、深さ包含層に達せざる故か極く僅量の土器片を出土するのみにて殆んど包含し居らざる觀があつた。(第一圖參照)

本報所載の遺物は殆ど全部DE二地點の掘下げによつて出土したものであつて、多くは土工の作業を主とし、遺物蒐集を從とせざるを得ぬ事情にあつたゝめ、なほ多くの散逸はあつたことゝ思ふが、それでも私の指示を理解し、故意に隱匿するが如きことなく、零細の破片と雖もよく私に提供してくれたゝめ非常に便宜を得た。たゞ私は業務上連續して作業を監視し得なかつたゝめ多くは土工の任意蒐集に委すを餘儀なくせられたこと

は遺蹟であつた。

三

本地點は前述の如く中村氏宅地よりは一・五米低く、結局本遺蹟の最高包含層A地點よりは三米程度低位置にあり、更に本地點の遺蹟断面圖より舊地表面を容易に想定することが出來る。第二圖はE地點の断面圖であつて、赤土上に層位的三段の變化あるを明瞭に觀察し得る。赤土は東南端に於て約三〇糎高く、其上に黒色土層が平均四〇糎の層厚を以て被覆してゐる。本土層中には遺物を全然發見し得ない。黒色土層の上に平均四十糎の層厚を以て黒褐色土層があり、遺物はこの土層中にのみ發見せられる。黒褐色土層の上部には淡黒色土層があつて地表に達するのであるが、この層厚は本地點で平均七〇糎、内黒褐色土層と約一五糎を隔てゝ本土層中に極めて稀ではあるが祝部土器と思はるゝ破片二―三片を發見し得たことは甚だ興味あることであつた。既に前報告作製當時私は祝部土器の出土に對して全然無關心では無かつた。即ちA地點の東南方にピツトを穿ちたる際、表土層の比較的下方に祝部土器と思はるゝ小破片を手に入れ、且つ蒐集遺物

Fig. 1. E.地點發掘の狀況

Fig. 2. 遺蹟断面圖

中に一二混在するを不可思議に思つて居たのであつたが報告に記載する程の確心なきため躊躇したわけである。然るに今回は明瞭に、しかも興味ある關係個所より出土することを知つて私の研究慾を少からず刺戟したのであつた。

本地點は前述斷面との直角方向即ち東北より西南への斷面に於ては層位大略水平であつて、勿論層位的關係や遺物包含の狀態は同一である。

何故本地點が層位的に斯く三段の變化を爲し居るやは前報A地點のそれと比較して奇異に感ずるも、これらの點に就いては遺物全般の叙述を終つて後にゆづることゝする。

Fig. 3. 土器口緣部及び胴部土器

四

土器は前報同樣復元し得るものはなく多くは小破片であつて密度も小であつた。一般に中村氏宅地寄りの方に比較的密度を增加するもの丶如くである。蒐集した土器破片は總數四〇五個、內、口緣部七一個、底部二八個、把手一個、注口部一個、等で他は胴部及び異形の土器破片若干である。

土器の土質、燒成、色澤等は大體前報と同一と見てよく、甚だしき異例を見ない。たゞ部分的形態及び紋樣の點で前報の缺を補ふべき程度のもの少數を得た。

今前報の例によつて各部分の記載を試みる。

口緣部

平緣が大部分であつて今回は波狀緣五例を得た。(第三圖七、八、九、十)平緣上面は多くは平面であるが小瘤或は小刻を有するものもある。(第三圖六、第四圖三)其他一般に口緣部形態には甚だしき變化なく、これらの異例は少數であ

る。

口緣部の紋樣は前報と大差なく、各種紋樣の出土數量比も大體一致する。卽ち第三圖及び第四圖に揭出したものは蒐集遺物中に一二個を數へ得る少數例であつて勿論本遺蹟の主體をなす紋樣の意では無い。たゞ今回の蒐集によつて特記すべき點は土器口緣部内側に紋樣を有するものと、幾分立體的紋樣を附與したるものゝ混在することである。前者は第三圖一、二、三、及びその拓影は第四圖六、七に見られ内面施紋土器破片に於ては外面に

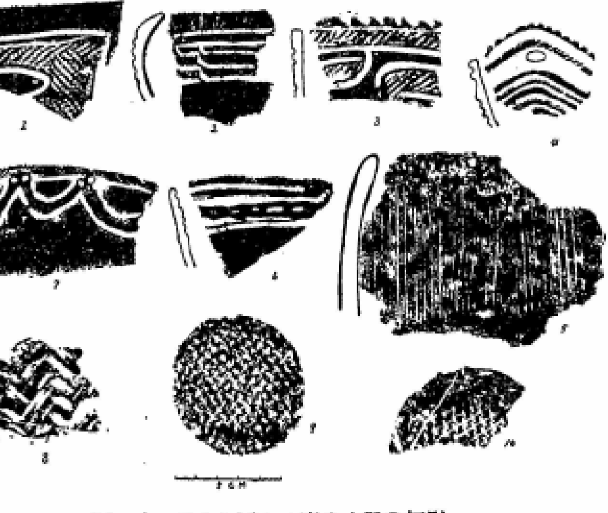


Fig. 4.　戸山ヶ原上ノ臺の土器の拓影

紋樣を缺いてゐる。後者は第三圖四、五、七及びその拓影は第四圖四に見られる。

第三圖中七は赤褐色、内面無紋、外面には平行浮線上に傾斜壓痕を連綴し、口唇部上面には小刻を附して鋸齒狀をなし器面光澤あり、把手に代ふるに楕圓形の穿孔を有する。本破片と同一樣式にして口唇部上面に8字狀の裝飾を附着したるもの工事監督者某氏持歸りたる故こゝに揭出し得ざるを遺憾とする。







Fig. 5.　戸山ヶ原上ノ臺の土器の拓影

底　部

底部形態は前報と同樣であつて異例を見ない。今回の分は圓形平底で直徑四－一五糎の間にあり底面の厚さ一・四糎位の部厚なものもあるが一・〇糎乃至〇・五糎位のものが多い。曲沈線の一部を殘したもの一個を得たのみで他は全部無紋であつた。底面には所謂網代紋を有するもの一〇個を算し、又木葉の押紋を有するものもある。今それらのうち比較的明瞭なものを示せば第四圖八、九、一〇の如くである。

Fig. 6. 戸山ヶ原上ノ塞の土器類

胴部

紋樣其他前報の缺を補ふ意味で第五圖（第五圖、四を除く）に示して置いた。總じて大なる特異例を見ない。第五圖八は内面に五條の沈線を横に並列してある。

把手

第六圖四、に示す如き形態をなし、頭部には8字狀をなす裝飾を附着する。

注口部

Fig. 7. 戸山ヶ原上ノ塞の石器

長さ約七糎、口徑二・五糎、德利狀をなす。全面に所謂工字狀紋を有し、其の沈線間の細長浮線上には不明瞭乍ら縄紋を殘してゐる。（第六圖一）

其　他

此の外異形の土器破片として魚の尾鰭の如きもの(第六圖三)及び管狀のもの(第六圖二)等を得た。

祝部土器破片

E地點より得た二個の祝部土器破片は厚さ〇・九糎及び〇・五糎であつて第四圖十一(拓影第五圖四)及び十二に示す如く共に土器內面を示す、前者は青黑色であつて內面に祝部土器內面によく見る圓心圓紋をかすかに見ることが出來る。後者は轆轤の痕を殘してゐる。土質は祝部特有の土を使用し居るも往々長石の小粒を含有してゐる。兩者とも外面無紋である。これらは最上層淡黑色土層下部より十五糎程度の處に見出されその發見數少なく且つ器形を知るに足るもの無き故これ以上の記述をなし得ない。

五

石器は前回A地點の發掘により磨製の出土すべきを豫想してゐた關係から少からざる興味を以て終始注意を怠らなかつたのであつたが今回果して完全なる磨製石器を發見し得たことは幸運であつた。

第七圖は九を除くほか全部今回の出土品であつて一は少しく楕圓形且つ扁平である。石質は砂岩、二―三個處打缺の痕あり、一見敲石の如く磨製である。二は乳棒狀をなし、表面滑で少しく反りを有し、自然石なりや否やは不明なるも疑問のまゝ揭出して置いた。石質は砂岩である。

五、六、七、八は何れも所謂分銅形石斧である。內五、六は打製で五は著しく使用の跡あり磨耗してゐる。七八は何れも表面滑で研磨されたものゝ如く、ただ刄部のみ打製である。卽ち普通に見られる半磨製石斧とは逆であつて、これを人工的磨製なりと考ふるや又は自然的に研磨された石を利用したものなりやは不明であるが刄部の打缺を最後に施したものであることは明かである。

七は半面剝離されてあり、恰も一個の既製石斧を二枚に引剝したるが如く見られる。石質は五、六、七、八の順序に粘板岩、オットレライト片岩、綠泥片岩、凝灰質砂岩である。十一は硬砂岩で磨製石斧の破片らしい。十はE地點の遺物包含層より發見したものであつて、私自身としても人工なりや自然石なりやは疑問としてゐるところであるが、前回A地點にて同圖九に見る如き、自然石としては餘りに整形なるものを得、今回これと形狀大きさに於て殆ど符合する一を有するものを得たゝめ離肪としたまでゞあつて、石質は九、十共に砂岩である。三は殆ど球形で石質砂岩。四は石質蛇紋岩で極めて美麗に研磨されてゐる。たゞし上下兩端のみは何等か粗鬆なる面を擦りたる如く、少しく稜角を有し粗面であつて一見形狀は從來稱へらるゝ磨製

石斧の如くにも思はれるが直ちにこれを石斧なりとは想到し得ない。

此の外包含層中には稀にフリントの破片を拾得することが出來、また雲母片岩類の川石等も發見し得られる。

六

以上本遺蹟今回の蒐集遺物上より遺蹟の特質は大體に於て前報の考察と一致するものであつて殊に分銅形石斧の多出するは關東地方に於ける薄手式遺蹟の例證と合致するものである。ただし一―二土器破片に於ける紋樣には一層年代的に下降を想起せしめ、且つ注口部に施されたる紋樣が中谷氏の所謂工字狀紋を以て稱さるゝとせば奥羽文化との關係を考究する上にも本遺蹟が好個の資料となるわけである。

本遺蹟より出土する祝部土器は破片のみであつて且つその數稀少なるが故にこれを以て年代推定の具に供するは甚だ危險多いことではあるが、將來本遺蹟が何等かの機會に一層闡明され、祝部土器の出土理由が判明したる曉にはその層位的關係より本遺蹟の編年的位置の決定には最も重要なる役割を演ずるであらう。

次に本遺蹟中A點とDE地點とは遺物包含狀態を異にしてゐる。卽ち其の斷面に於てA地點はDE地點の地層より、赤土上の黑色土層と其の上の黑褐色土層の一部乃至全部を缺除してゐる。これ一見兩地點は層位上別種の如く思はるゝも遺物上よりはこれを區別することの不可能なることは前述の如くである。然らばこれらの差違は如何に解すべきか、私は現地の測定と傳聞とDE地點の斷面より第二圖上段の如く、本遺蹟地の舊地表面を想定した。之に據る時は本遺蹟は赤土上に或程度の黑色土層堆積後の所產であつて位置的關係からA地點附近の土砂は雨水等のためDE地點附近に流出する結果斯くの如き兩者の差を生じたるものであらう。現在と雖もこの附近は土砂流出の事實を目擊し得、且つ位置によりて表土層厚を甚だしく異にしてゐるのである。しかし乍ら以上は勿論私見に過ぎない。

大體以上を以て本遺蹟の報告を終るのであるが稿了つて雜駁なる記述に對して汗顏禁ずることを得ない。しかし乍ら本遺蹟も漸く世に出ることを得たのは本遺蹟の發見者飛田潔氏、地主中村德太郎氏、弦卷洋酒工場主弦卷乙一氏等の厚意と助力に依るものであつて又石質の鑑定は御多忙の處和田八重造氏を煩した。こゝに是等の諸氏に對して厚く感謝の意を表する。

（昭八、十一、十二稿）

狐の穴

狸や狐が穴に住んでゐるといふことは「同じ穴の狸」との諺にもある通りでせうが一體、どんな穴に住んでゐるのか、それを以前から知りたく思つてゐました。ところが、最近、南河内のさる所で、その穴を見ることが出來ました。小山の山腹の南斜面の枯葉の散り敷いた地面に直徑三、四寸の穴があいてゐます。よく見ると、その穴は、朽ち果てた木の根を傳つて掘り込んだもので、穴の周圍は、ボロボロに腐敗した木質になつてゐます。土地の人は、これが狐の穴であり、狐は枯れつくした木の根の、一寸觸れゝばすぐ崩れるやうになつたのを見付けて、それを掘つて徙を作る習性を持つてゐると教へてくれました。こんなになつた木を掘ることは、地面に穴を掘るより容易であり、木の根の直徑が大體、狐等の體には適當でもあり、成るほどあの小利口らしい動物のやりさうなことゝ頷かれました。(山口)

佐賀縣戰場ヶ谷出土彌生式有紋土器に就いて

七田忠志

序

昭和六年十月、九州考古學會員名和羊一郎氏に依つて發見せられた福岡縣遠賀郡水卷村字立屋敷八劔神社下出土の彌生式有紋土器は、今や中山平次郎博士に依つて、新土器論の提稱となり、此處に遠賀川式或は彌生式第二系土器として出現するに至り、方に學界の視聽を集中しつつある折柄、吾人は更に本誌上に新發見に係る、有紋土器遺蹟を報じ、以て大方諸賢の御示教と叱正とを賜はる機會を得たことを幸甚と思ふ次第である。

繩紋土器遺蹟に乏しく彌生式遺蹟の分布最も濃密なる北九州に於いて、從來—極めて單純、しかも無紋を以て、彌生式土器の本領かの如く考へられてゐた折柄、立屋敷の遺蹟の發見卽ち有紋土器群の出現は、有紋と無紋の彌生式土器の對象となり、如何に之れを解釋すべきやに就いて、學界の視聽を吸收するに充分であつた。旣に新遺跡の發見以前に於いても、福岡縣下或

は日本各地方に彌生式有紋土器は世に知られてゐたのであるが、此の新屋敷の遺跡は、種々な意味に於いて彌生式土器の再吟味を叫ばしむるに至つたのである。今又吾人は佐賀縣下に於いて、二三の有紋彌生式土器を實見するに至つたので、以下その概要を報告して參考に供したいと思ふ。

一、戰場ヶ谷附近の概況

本遺蹟地たる戰場ヶ谷は、第一圖に示す如く脊振山脈大高山（標高五一五、九米）の南麓、佐賀縣神埼郡仁比山村志波屋と東脊振村寺ヶ里との村界附近に展開する、上三津西方一六一米高地の南方丘陵臺地に存在する。寺ヶ里部落の北端、志波屋部落の北東に當り、北方に脊振主梁山脈を東に三津丘陵、西に志波屋吉野ヶ里丘陵を負ひ、三面を山又は丘陵によつて圍繞せられ、南方を開きたる地で、古代人絕好の棲住地と認められる。

その行程は長崎線神埼驛より北へ仁比山村飯町まで乘合自動

車、それより徒歩で—志波屋を經、飯町より約一粁半にて達し得る。先づ附近の考古學的概觀を述べると、附近に夥しき横穴式石室古墳を見出し、又當遺跡の西方たる志波屋吉野ヶ里丘陵及び—三津權現社東側附近には、彌生式合口甕棺包含地を見出し、併せて夥しき彌生式土器・祝部式土器の破片の附近一帶に

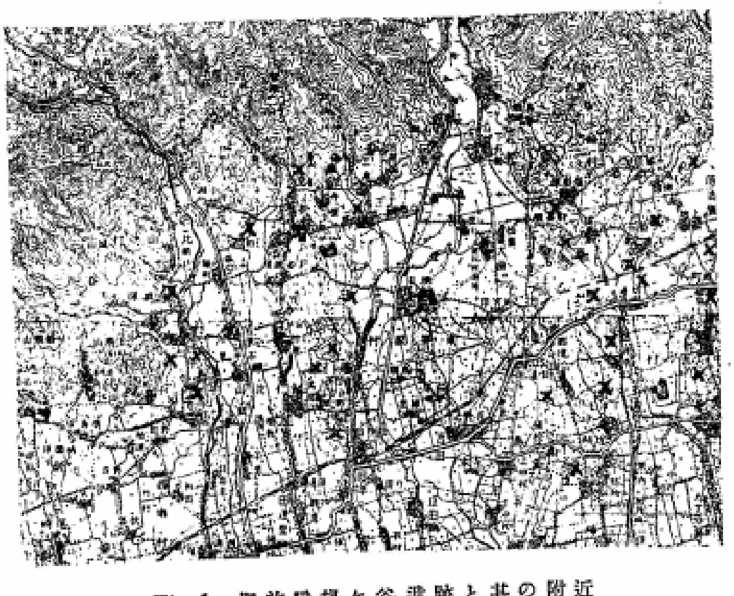


Fig. 1. 肥前戰場ヶ谷遺跡と其の附近

散在せるを知る。卽ち附近一帶は古代人が相當に文化生活を營んでゐた事實を明かに知ることが出來よう。その中古墳は、墳



Fig. 2.

Fig. 3.

輪圓筒の存在する志波屋伊勢塚の前方後圓墳を除いては、何れも圓墳であり、石室は總て横穴式に屬する。第二圖は、本遺蹟西側の丘陵上より最近出土せる仿製方格鏡である。又志波屋吉野ケ里丘陵に於いては、甕棺の包含も相當量を存し先に吾人は志波屋東方丘陵包含の一甕棺より、頭骨に朱…丹鐵を塗りたる一人骨を發見した。更に東方した西石動は彼の佐賀縣最初のクリス型銅劍鎔范の出土地であつて、殊に表裏二面に各々鑄型を有する點は學界に多大の興味を以つて見られてゐる。（第三圖）なほ吉野ケ里に於ける甕棺内より人骨伴出の貝輪二個を發見した。吾人はかゝる環境に於いて、左の如き新遺跡を發見するに至つたものである。

Fig. 4. 土器拓影

二、戰場ケ谷出土遺物及び其の特徴

有紋土器片の散布範圍は此戰場ケ谷に於いて、其の東臺地と西凹地との兩地に限られ、其の範圍は未だ精確には測定せざるも、二百米四方以上に亙るかと思はれる。然しながら數年前より開墾せられて現在その大部分は桑畑として使用されてゐるので、不知の間に遺跡は破壞せられつゝある、土質は一般に地上部は砂層で、次に粘土質の土層を以て構成せられてゐる。吾人が此の遺跡に注意し出したのは昭和四年であつた。無紋を通常とする彌生式土器に於いて、有紋の土器を見出した時、此の遺物が彌生式の或る種の文化考察上に至大なる結果を齎すべきものにあらずやと惟考したのであつたが、淺學なるが故に充分利用する事が出來なかつたのである。今に於て當遺跡出土遺物を附近出土一般の彌生式土器と對照する時、吾人は次の特徴を見出すことが出來る。

先づ土器は紋樣より推して、或る種の文化の想像さるゝに反して、其の生地や燒成の至つて拙劣なるを見出す。即ちその吸水性は中等度であるが、附近一帶に出土する彌生式合口甕棺及び其他の彌生式土器の燒成と比較する時、其の窯法の極めて劣れるを見出す。有紋土器の十中八九が暗褐色或は黄褐色を主と

し、赭色を呈する土器は至つて尠い。又か丶る遺跡に於いて未だ彌生式大甕の破片を見出し得ないのは注目すべきであらう。

次に當遺跡出土の土器で完形なるものは無いが、種々なる紋様の變化や燒成上の特徴を見出す時、遠賀川式土器との對照は特に必要かと思はれる。口縁部の彎曲が極めて緩で「く」字形を呈することも同式土器と共通である。然るに沈紋の多い遠賀川式土器に對して、當遺跡の土器に見る特徴は浮紋の多いことである。

1 2 3 4 5 cm.

Fig. 5. 職場ケ谷出土石鏃

今個々の紋様に就いて見ると、第四圖に示す如きものである。卽ち1は楕圓沈紋とも謂ふ可きもの、2 3 4共に同樣、5は波狀曲線自在沈紋とも稱す可きものである。浮紋は6の如き球を半截したものを點在せしめた半截球紋とも稱す可きものであつて、表裏共に同じ紋樣(6 6')を有するものと、11の如く表面にのみ之れを有するものと二種類を見出す。7は羽狀紋を有するもの、8は菱形浮紋にして裏面に8'の如き深き櫛目紋樣を有するものである。9は楕圓浮紋の點在するもので裏面に9''の如き深き櫛目紋樣を有する。10は口縁部近くに打痕鋸齒帶を有し下方に刷毛目を附してゐる。本遺跡に於いて吾人の現在までに採集し得た紋樣を有するものは概ね以上の如きものである。なほ底部は第四圖12に示す如き平底が主で、絲切底も二三採集する事が出來た。土器の厚さは一般に〇・五乃至一糎である。次に石器は吾人の採集品のみでも、打製石鏃二十三個、打製半磨製石斧十五個、石錘一個、磨石百二個、打製無孔の石庖丁（第五圖1）と思はれるもの一個、扁平な砂岩に石器を以て粗雜に穿孔したもの一個、其

他蠟石に二個の極めて小孔を有する裝飾品かと思はれるもの（第五圖7）が一個等である。石鏃は當地方に於いて全部無莖と稱して差支ない樣で、吾人は唯だ詫田貝塚（神埼郡城田村詫田）に於いて只一個有柄石鏃を見たのみである。石質は黒耀石・サヌカイト・石英・粘板岩等である。石斧は打製及び半磨製のものが主で、石質は安山岩及び粘板岩製である。

以上を要約すれば、吾人の採集した這遺跡土遺物は大略次の

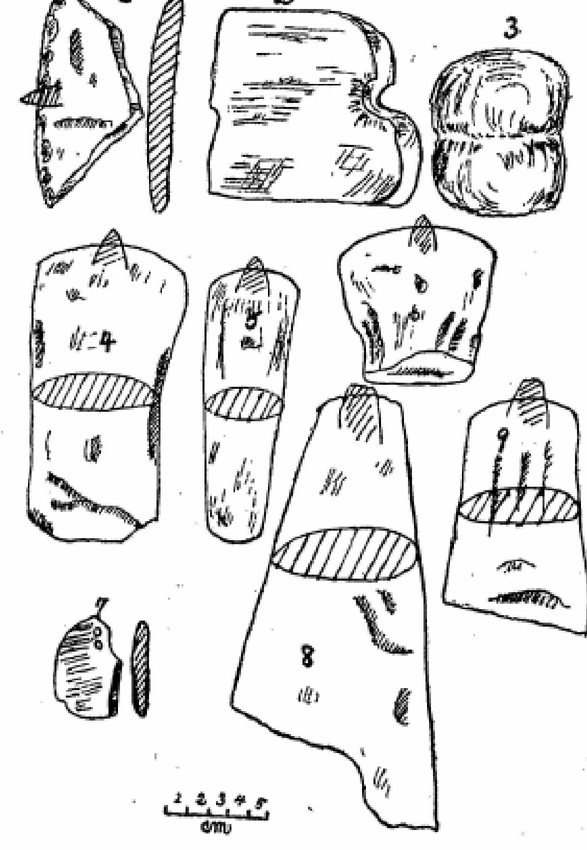


Fig. 6. 戰場ヶ谷出土石器類

内容を含んでゐる。

一、彌生式土器……有紋及び無紋

二、石器……打製無莖石鏃、石斧（打製、半磨製）、石錘、打製無孔石包丁、蠟石製有孔裝飾品、有孔扁平石製品

三、祝部土器…古墳附近に於いてのみ。

右は脊振南麓一帶に夥しく散在する彌生式甕棺遺跡及び有明海周縁貝塚群と共に是非究明を要するものであり、併せて今後研究不充分なる肥前地方古代遺跡遺物の解明を諸先生に懇願する次第である。

第一圖說明

1. 戰場ヶ谷遺跡
2. 青銅鏡出土地
3. 合口甕棺内赤色塗料塗布人骨出土地
4. 合口甕棺内赤色塗料塗布拔齒人骨出土地
5. 合口甕棺包含地…貝輪出土地
6. クリス型銅劍鎔范出土地
7. 伊勢塚古墳
8. 二子山古墳
9. 丸山古墳

× 其他ノ彌生式甕棺包含地

立正大學考古學會石器時代遺物展覽會目錄（昭和九年二月十八日）

樺太留多加郡河東村江之浦貝塚	（土、石、骨器）	久保君藏
同　太泊郡千歳村北貝塚鈴谷貝塚	（土、石、骨器）	同
同　大泊郡千歳村貝塚南貝塚	（土、石器）	同
同　大泊郡千歳村貝塚依田氏畑	（土、石器）	同
千島擇捉郡留別附近	（土器）	本會藏
北海道釧路國釧路市外東釧路貝塚	（土、石器）	久保君藏
同　十勝國	（石器）	同
同　石狩國名寄町名寄神社附近	（石器）	齋藤君藏
同　石狩國旭川市內	（土、石器）	同
同　石狩國上川郡神威古潭	（石器）	同
同　後志國余市郡余市町畚部（フゴツペ）村	（土、石器）	久保君藏
同	（石器）	佐藤彥彌君藏
青森縣西津輕郡森田村床鍔	（石器）	本會藏
同　西津輕郡舘岡町龜ヶ岡	（土、石器）	佐藤彥彌君本會藏
同　南津輕郡大鰐	（土、石器）	久保君藏
同　三戶郡三戶	（土器）	齋藤君藏
同　三戶郡是川村中居	（土器）	齋藤、久保君藏
同　三戶郡是川村一王寺	（土、石器）	同
福島縣	（土器）	佐藤彥彌君藏
茨城縣稻敷郡大須賀村福田貝塚	（土、石器）	本會藏
埼玉縣入間郡鶴瀨村	（土、石器）	齋藤君藏
東京府西多摩郡秋留村	（土、石器）	本會藏
同　南多摩郡淺川村	（土、石器）	同
同　南多摩郡川口村楢原	（土器）	鹽野半十郎君藏
同　北多摩郡國分寺村	（石器）	本會藏
同　北多摩郡武藏野彈乘寺境內	（石器）	日比野君藏
同　北多摩郡神代村佐須	（土、石器）	同
同　北多摩郡調布町布田	（土、石器）	同
同　北多摩郡多磨村	（石器）	本會藏
同　豐多摩郡高井戶町下高井戶	（土、石器）	同
東京市芝區白金三光町火藥庫附近	（土、石器）	同
東京府荏原郡目黑不動境內	（土、石器）	同
同　荏原郡桐ヶ谷（ドウメン）	（土器）	同
同　荏原郡居木橋貝塚	（土器）	齋藤君本會藏
		齋藤房太郎君藏
同　荏原郡馬込	（土、石器）	齋藤君本、會藏
同　荏原郡雪ヶ谷町圓長寺裏貝塚附近	（土、石器）	同
		同
同　荏原郡久ヶ原庄仙	（土、石器）	佐野文治、齋藤、齋藤房、直井、本會藏
同　荏原郡久ヶ原小學校附近	（土器片）	齋藤房太郎君藏
東京府荏原郡千鳥ヶ窪貝塚附近		慈惠醫大藏
同　荏原郡下沼部	（石、骨、土器、貝塚、腕輪）	齋藤君藏、本會藏、星野岡太郎君、直井君、水野君、日比野君藏
同　荏原郡池上町	（土、石器）	齋藤君藏
同　荏原郡上沼部	（石器）	本會藏
同　荏原郡世田ヶ谷町下馬	（土器）	八木君藏
同　荏原郡上沼部花野貝塚	（石器）	西岡秀君藏
同　荏原郡權現臺	（土、石器）	本會藏
千葉縣東葛飾郡小金井平賀貝塚	（土器）	本會、日比野君藏
同　東葛飾郡國分村堀ノ內貝塚	（土器）	本會、同
同　東葛飾郡柏井村姥山貝塚	（土器）	本會、同
同　東葛飾郡葛飾古作貝塚	（土、石、骨器）	本會、同
神奈川縣橘樹郡日吉	（土、石器）	久保君藏
同　橘樹郡日吉村矢上矢戶	（土、石器）	齋藤、久保君藏
同　橘樹郡大綱村篠原貝塚	（土、石器）	桑山、久保君藏
同　橘樹郡日吉村南加瀨	（土器）	齋藤君藏
同　橘樹郡橘村子母口貝塚	（土器）	齋藤君藏
同　橘樹郡稻田村字宿	（土器）	日比野君藏
同　都築郡新田村高田貝塚	（土器）	齋藤君藏
同　都築郡都田村折本貝塚	（石器）	齋藤房太郎君藏
	（土器）	本會所藏
同　橫濱市瀧名貝塚	（土、石、骨片）	桑山龍進君藏
同　橫濱市中區西戶部町池ノ坂貝塚	（土、骨片）	本會所藏
同　三浦郡三戶	（土、石器）	葉山君藏、本會藏
同　三浦郡浦賀町吉井貝塚	（土器）	本會藏
靜岡縣田方郡大島	（土器）	山本君藏
同　田方郡內浦	（石器）	本會藏
同　田方郡稻毛		久保君藏
山梨縣北都留郡上野原	（石器）	久保君藏
長崎縣南高來郡口之津村三軒谷貝塚	（土、石器）	桑山君藏
同　北高來郡有喜貝塚	（土器）	同
朝鮮慶尙南道金海郡金海貝塚	（土器、骨片）	同
同　昌原郡上南面貝塚	（土器）	旭藏
東京市大森區池上町久ヶ原貝塚		本會藏
		齋藤房太郎君藏
同　同　雪ヶ谷清明學園前		佐野又治君藏
同　同　下沼部		本會藏
東京府西多摩郡西秋留		同
神奈川縣都築郡鶴川村		同
千葉縣眞間弘法村		同
出所不明		同

三重縣志摩郡立神村天童山石器時代遺物發見地

池上啓介

一、緒言

昭和五年十月偶々表記の遺蹟の調査を行つた。本遺蹟は伊勢灣方面に於ける彌生式系統の遺蹟として有名であり古來より同地人間に石鏃の採集が盛んに行はれた所である。明治四十二年二月には大野雲外氏の附近の遺蹟の踏査があり（文獻一）又大正十五年には三重縣史蹟調査委員に依つて本遺蹟の調査が行はれ、石鏃、石槌、石錘、磨石斧、石匙、石鑿、小刀及び彌生式土器等多數の遺物を發見する石器時代遺蹟なる事を報告せられてゐる。（文獻二、私は不幸にして未だ此の報告を見て居らない。）

近來彌生式土器研究の進展と共に伊勢灣方面の石器時代遺蹟遺物が斯學間に注目されて來た折柄、私の踏査の概要を御報告致し、併て愚見を申し述べ度いと思ふ。

二、遺跡

遺跡は三重縣志摩郡立神村天童山にあり、卽ち御木本の眞珠の產地として有名な御座灣內に點在する群島中の天童山と稱する小島上にある。本地方は先志摩の南海岸に當り、第一圖並に第二圖の東京日日新聞社撮影の飛行寫眞に見られるが如く頗る海岸線に富み、多くの小島がその沿岸に散在する。所謂先志摩の海飾海岸として地形學上著明なる所にして最近の沈降運動特に著しく、天童山の島群は最大沈降を受けた部分に當り、各島の高度は十七米、二十五米等である。（文獻三）

天童山は手の掌を擴げた如く紆餘曲折し、縱橫に深く灣入支谷が見られ、あたかも多くの島が群集してゐる樣に感ぜられる。島の幅員は廣い所で凡そ百米狹い所で四米內外に過ぎない。島は馬の背狀をなして平地とてはなく斷崖狀をなして海上に起立する。島表面は早壯年期の開析を受けて耕作地として利用されてゐる所は少なく、小さな松樹によつて蔽はれ、所々に罌地を現してゐる。從つて、私の調査した地域には沖積土なく洪積層

が表面に露出する特種の狀態を示して居る。

遺物は島の枝狀をなしたその突角の最高地點に多く散在し、而も松の根本や青苔の上に發見した。從つて遺跡遺物は何等の層序的區別もなく、地表面に總て無規律に發見されるのであつて他の遺蹟に於けるとその條件を異にし、此の間の研究は殆ど行はれなかつた。今回、島を一巡して遺物を發見した地點は第一圖に見る如く十九箇所を算した。

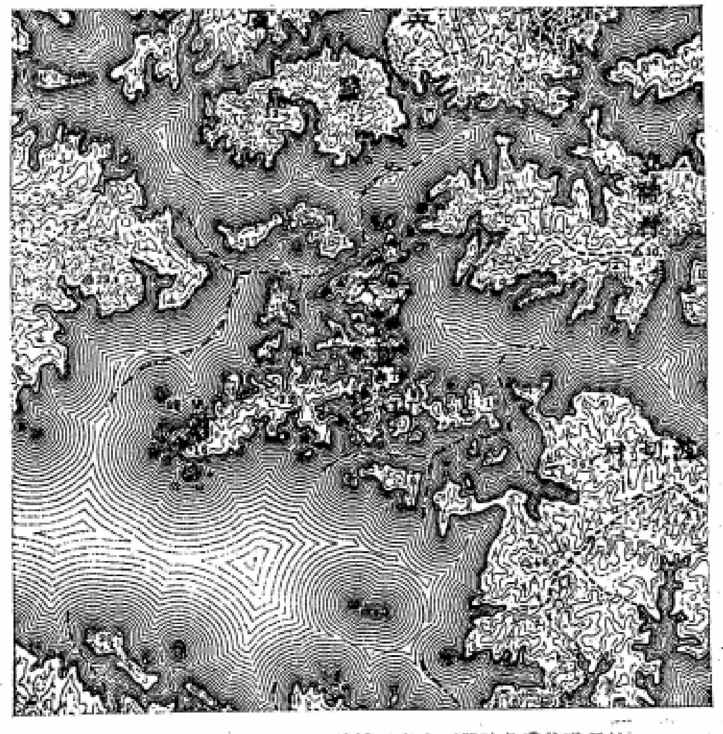


Fig. 1.　三重縣志摩郡立神村天童山石器時代遺物發見地
（▲印が遺物發見地）

三、遺　物

採集した遺物は何れも石器で、彌生式土器を一片をも發見し得なかつた事は甚だ遺憾であつた。然し乍ら石器は比較的多く、且つ關東地方を主として見てる私自身には其の地方色が濃厚に感ぜられた。遺物は打石斧、磨石斧、石錘、石鏃、凹石等である。次に此等の遺物の簡單な說明を行へば、（第四圖參照）

打石斧（十一個）

所謂下廣型で双部の方に廣がりを見せたものが多い。特徵として、石全體に亙つて打剝法をもつて製作せられたものでなく、自然石の手ごろのものに簡單な打剝を加へたもので、從つて石の自然面が多く表はれてる極めて粗雜な製法である。長さ十四糎內外のものが殆んどで、形態や大きさが揃つてるのも私には奇異にさへ思はれた。

磨石斧（四個）

一個を除く他は細片で全形を知るものがない。比較的精巧な

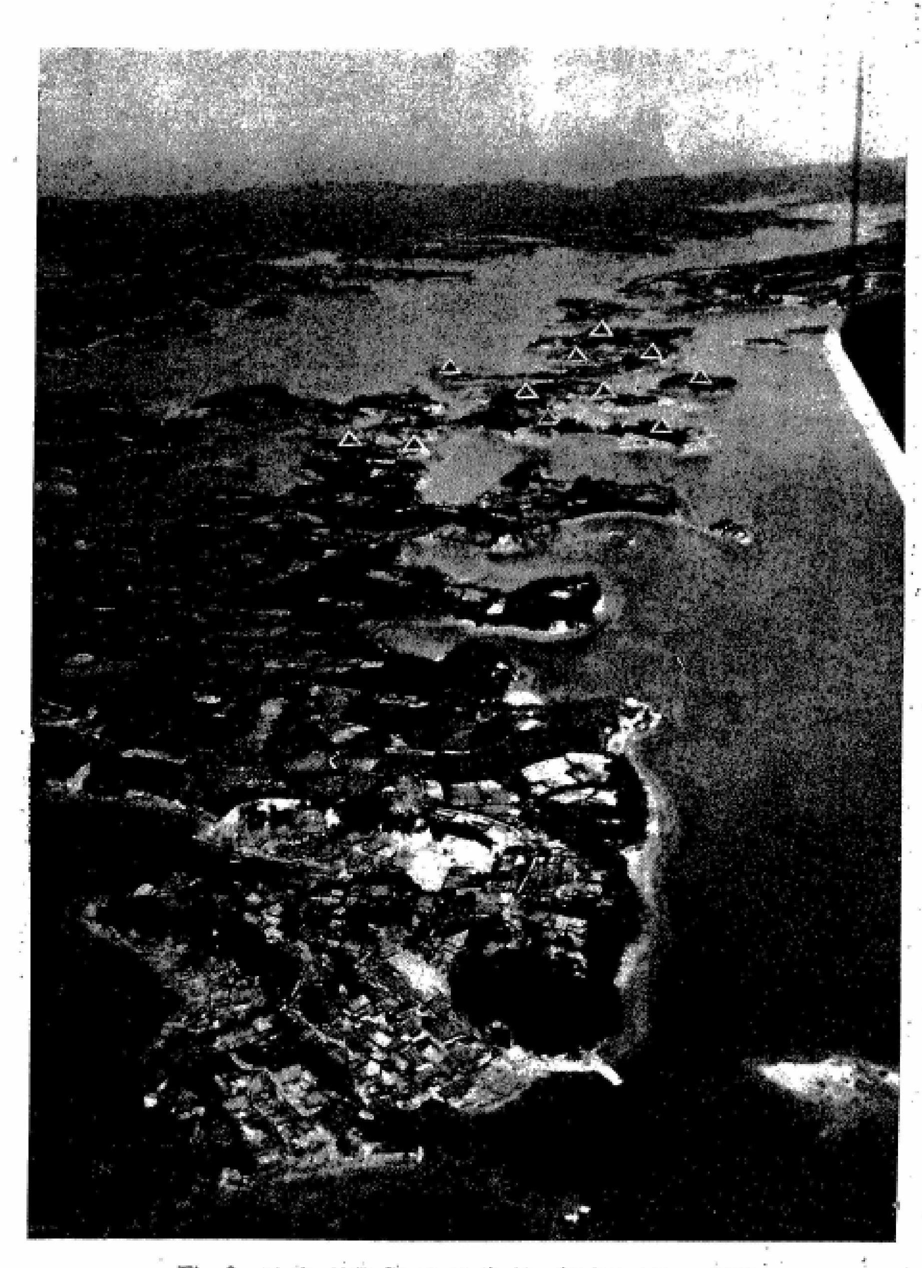


Fig. 2. 天童山附近飛行寫眞（東京日日新聞社撮影）

ものとは思へない。（第四圖3.8.9.）

錘　石（廿一個）

採集した遺物の主なるもので、何れも自然石の扁平な丸型のものに加工を行つたものである。大きさも重量も殆ど同じで、長さ八糎内外、幅五糎内外、重さ四十匁位のものが最も多い。加工は極めて粗雜に行はれ、入念に加工した痕跡は毫も見られない。特徴として横に打割による凹缺部がある點で、關東地方で多く見る縱に長い方の兩端に凹缺部があるがものとは頗る様式を異にしてるのが面白く見られた。（第四圖10—16）

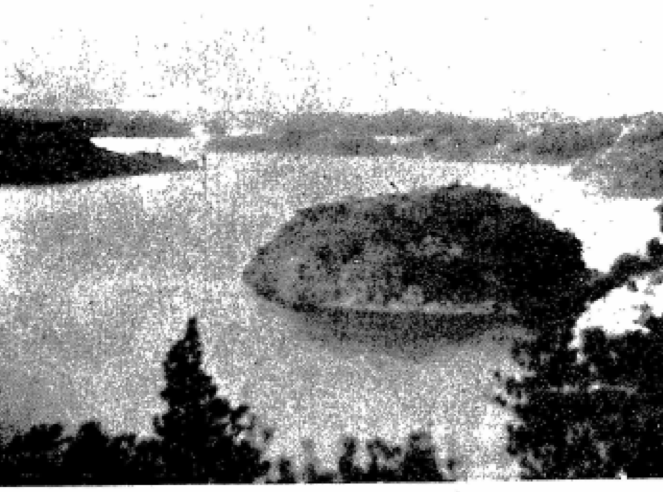


Fig. 3. 天童山遠望

石　鏃（五個）

私の發見した石鏃は僅に五箇に過ぎない。有柄のもの二個、雁叉狀のもの三個で何れも燧石を材料とし之れ亦粗雜な製法である。私の宿の主人（賢島、眞珠館主人）の談によれば往年は非常に多く發見された由で、私の採集したものを見て云ふのには、無柄のものが最も多かつたとの事である。參考にまで御報告して置く。（第四圖17—21）

凹　石（一個）

第四圖(22)に見る如く圓形で、而も中央の兩面に凹みのあるものである。石質は砂岩質で、他の遺物に比し、稍精巧で、全體よく研磨せられてゐる。長徑十二糎厚さ三糎あり。凹部の淺く廣い點、圓板狀をなせる點等、關東地方の所謂凹石とは少しく用式を異にしてゐる。

以上が遺蹟表面で採集した主なる遺物であるが、尚此他に、楕圓球狀の磨製せられた砂岩質のものを多數發見した此等の中には兩端に打痕の跡が見られるものもあり、或は所謂敲石と思はれるものも存した。而して此等の球狀の石は大きさ、重さ等が大體一致してゐて、極端に大きいもの、小さいものがなかつ

た。

四、結言

本遺蹟附近は地形學上の早壯年期の開析を受け、近年特に沈降運動が甚だしいとは云へ、石器時代にありても今日の狀態と大した變化なきものと考へて差支へあるまい。御座半島に抱かれた御座灣は、多數の大島小島が起立し、波浪穩かに、その豐富な魚介は先志摩の漁場として、縣下屈指の地である。且又、御木本の眞珠の養殖場として世界に冠たるものがあり、近年志摩電鐵の開通と共に、遺蹟附近の風光の明媚漸く天下に紹介せられんとしてゐる。

斯る惠れた自然環境に於ける石器時代人は漁撈者としての生活營爲に最も適したものと想像するに難くない。

然し乍ら此に再考を要する事は、遺蹟附近は前述の如く土地頗る狹隘で、大きな聚落を形成するには甚だ不都合である。殊に聚落形成に最も必要な飲料水を缺く點は石器時代人の住居遺蹟と解する事に不穩當でもあらう。

此の如く考察すれば、本遺蹟は日常生活に於ける大きな聚落地ではなく、附近の何れかに聚落住居遺蹟があつて、天童山は漁撈に際しての一種の根據地であり、而して原始的な舟による海上漁撈を行つた際の遺蹟ではなからうか。

此れを遺物上より見るに、魚骨其他の漁撈を直接に思はしめ

Fig. 4. 三重縣志摩郡立神村天童山發見の石器時代遺物

三重縣志摩郡立神村天童山石器時代遺物發見地

る自然遺物を發見してゐない。恐らく今後共遺蹟の性質上その發見は不可能でもあらう。又、骨角製の釣針や銛も亦同樣に發見して居らない。然し前述の本遺蹟の遺物の特徴である數多の錘石は漁網の錘として考察せられるものではなからうか。漁網の錘としては、多くの同形の而も同重量のものを同時に要した事であらうから、手ごろのものに簡單な打割を行つた前述の如き形式の錘石は、充分にその用を便じたものであらう。漁撈の際、自然石を利用する事は、今日尚同地の漁者の間に行はれてる由で、此間の事情を物語つてる樣である。

私は以上によつて、本遺蹟を漁撈者の或る意味の遺蹟であり、發見した錘石を以つて一漁撈具と考察するものである。若し、此考察が或點迄許容されるなら、本遺蹟は石器時代の而も彌生式文化系統の漁撈民の或る意味の遺蹟であると云ふ點に於いて頗る重要な考古學的意義を有するものであると云ふ事が出來る。

文獻一、人類學雜誌二十五卷、二七五號、大野雲外氏論文參照
文獻二、三重縣史蹟名勝天然記念物調查報告參照
文獻三、辻村太郎博士著、日本地形誌三四三頁參照

立正大學考古學會の石器時代遺物展覽會

昭和九年二月十八日、宗祖降誕會の當日、同大學考古學會々員諸氏の熱心なる努力によつて、遺物展覽會が同學內で開催せられた。出品遺物中の異色あるものは、樺太大泊郡千歲村の諸貝塚の遺物、東京近郊の繩文式土器等であつた。餘白を利用して當日の目錄を擧げて記念と致し度い。（池上）

——（四二頁參照）——

資料

石製品資料

樋口清之

一、卓狀石製品

Fig. 1. 卓狀石製品

東北地方石器時代遺物の中には實に奇妙な形の物が少くはないが、圖示の一石器亦自分には寡聞に屬するものである。圖によつても知られる如く長邊約十二糎の正方形に近い矩形であつて高さ約十糎、灰白色凝灰岩で、山形縣東田川郡手向村西高森遺蹟より龜岡式土器等と共に出土したものである。その最も大きい特色とするところは、上面平滑であつて、裏面にはやゝ粗雜ながら打缺によつて四箇の脚を造り出し、その脚は各〻中央やゝくびれて居つて、全體として、極めて恰好良く、安定に出來てゐる點である。かゝる石器の裏に四箇の脚を造り出す手法は、關東、中部、東北地方出土の石皿に少からず認められるところであるが、本品の如く、全く臺の如き形をなし表面平滑なものに附されてゐるのはその例あまり多しとしないと思はれる。例品なほ他に存するあらば、此機に是非各位より御教示に預り度いと思ふ。現在同村宮田春金氏所藏。

二、有溝石斧の一例

圖示の一石斧は青森縣中津輕郡裾野村十腰内遺蹟發見の、長さ十三糎を算する精磨な磨製に屬するものである。これは普通に東北地方方面に多い尖頭式の斷面三味線胴形を呈する磨製石斧であると云ふ點に於ては著しく特殊な興味をひくものではないが、その最も大きい特色は中位よりやゝ頭部に近く一條の缺限を以てする幅二糎足らずの溝がその周を巡つてゐると云ふ點に存する。かゝる手法は所謂兩頭石斧や獨鈷石のある物等に廣く認められるところのものではあるが、かゝる手法がこの種の

型式の石斧に應用されて現出する型態は、單にそれが、石斧の用法の或物を暗示すると言ふ點に於てのみではなく、又、異れる文化特色を暗示するかに似たる感を起させる。同じく有溝と稱しても彌生式土器に伴ふのみ型の片刄有溝石斧等とは全然その趣を異にしてゐる事は明かであるが、あるひは同種のより多くの集成は何等かの寄與を我々の研究に與へるのではないかと

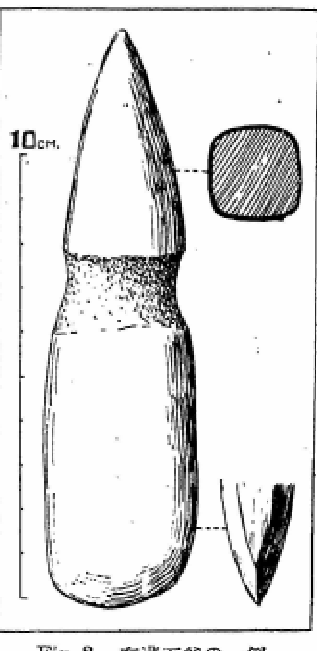


Fig. 2.　有溝石斧の一例

思はれる。殊にこれが龜ヶ岡式土器に伴つてゐる點は注意しなければならない。灰綠色綠泥片岩製。青森市佐藤蔀氏所藏。

三、變形石器

本品は山形縣東田川郡泉村川寨遺蹟發見、現在鶴岡市酒井忠純氏所藏の、長さ十一・五糎、厚さ二糎を算する灰色安山岩製に屬するものである。全體端平であつて、その周邊のみ僅に丸味

を帶びるが刄は無く、一邊はほゞ直線を成し、背部とも言ふ可きところに二箇の相對する突起を有してゐる。これは、この刄の無き點、鞍狀突起を有する點に於て著しく所謂獨鈷石との連繋を想はせるが、しかし又所謂御物形石器の變種との連絡も不可能ではなく、この兩者はいづれにも決定することは勿論出來ないが、しかし、要するに、或石器をプロトタイプとして、その形成化と言はふか退化と言はふかの變形であらうことは推察に難くない。

變　形　石　器

四、輕石製垂飾

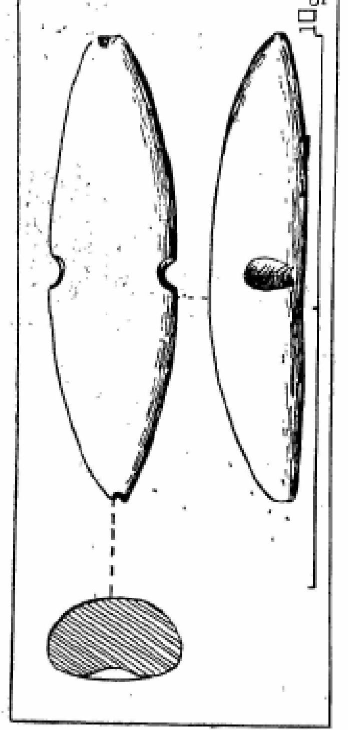
關東各地の貝塚からは往々にして輕石を楕圓形に加工し、時にはそれに一孔を有する遺物が發見される。本圖に示すところのものも亦その一例であるが、たゞ、他の例と異るところは楕圓形に磨かれて一孔を有する外に、圖の如く一面のみに、往々土版等に見るが如き四條の曲線を以て菱形を形成する紋樣を作られてゐる點である。これは決して緒すれの如きものではなく明かに紋樣として施されたものであるが片面のみに存するとこ

ろは一般の土版等とは趣を異にしてゐる。これはあるひは一種の岩版の如きものとして佩用されたものではないかと思はれる。これについて思ひ合されることは、世界の多くの海洋民族に見られる浮に對する信仰(Float Worship)である。あるひは本品も錘石の浮力に對する注意より起つたマヂカルタブレットであるかも知れない。茨城縣北相馬郡文間村立木字宮ノ前貝塚發見、同村大野一郎氏藏。

錘石製垂飾

五、古墳發見の石錘形石製品

圖示の如きつむぎ形を呈し、兩端及び兩側中央に各々切れ目を有するが如き形石の錘は本邦各地の石器時代遺蹟より發見されるところであるが、同樣の物が古墳より發見された例は從前自分の管見に觸れなかつたが、昨年北九州旅行中佐賀縣東松浦郡神集島(カシハジマ)と稱する玄海灘の一弧島に於て之を見ることが出來た。同島には、いづれ別の機會に發表しやうとしてゐるが、多くの方形有段式石塚や圓形石塚及び石槨墳が多數存在して居つて、壹岐、對馬と共に朝鮮も天氣の良い日には見えると言ふ古代文化傳播上重要な位置に在る島である。本品の出土したのはそのうちの石槨墳の一つであつて、鐵製刃身、鏃、馬具及び祝部土器等が伴出しガラス製小玉の類も多數出土してゐるところの古墳であつて、かつて某大家によつてドルメンとして發表されたことのあるものである。本品は長さ八・五糎を算し、平滑に良く磨かれた灰黃色滑石であつて、所々に赤色顏料の殘跡を認められる。その裏面は中央やゝ凹んで居つて、この點は注意に價するところである。本品の如きは所謂石錘としてはあまり精良美麗に出來過ぎてゐる觀を禁じ得ないが、必ずしも水中に入れた錘ではなく、あるひは他の異れる用途を有して居つたかも知れない。



古墳發見の石錘形石製品

人あるひはこれが發見地方の性質よりこれを以て一種の所謂結紐狀器として近來注意に上つた一遺品との連絡を想定するかも知れないが、たゞそれの最も大きい型態上の特色である中央部のくびれが認められない點趣を異にしてゐる。現在同島區長某氏所藏。

鳥の浮模樣ある土器

米村喜男衞

昨秋、北海道北見國網走川左岸河口臺地なる、モヨリ貝塚より高さ二一・五糎胴廻り六八糎ある挿圖の如き鳥を二羽づゝ向合せ四ケ所に八羽を配置した珍らしい土器が發見せられ筆者のもとに保存する事を得た。この土器の型式を見るにオコツクを中心として沿岸地帶から出土を見る。土器としては末期のものと見受くる。黑褐色の無地に首部下方には縄狀の浮文を二條配置し其れに小玉を付けたる如く四ケ配置され首の細部の一條は同じく縄文の如きも或は波狀を型とりたるものか其の上に水鳥樣の型を置きあるものにして、其の鳥に就き北海道帝國大學理學部教授犬飼博士の見る處によれば、白鳥なる事を知りたるが、此の地方は湖沼多く今尙白鳥の棲息地として有名であり、又同貝塚より白鳥の骨等の出土もあり、地方アイヌ人もまた多くの傳說を持ち等土器の模樣にまでとり入れるに至りし如く、鳥の模樣は珍らしいものとされて居る。

北海道網走發見の鳥の浮模樣ある土器

栃木縣芳賀郡中村八木岡發見の石器時代遺物

池上啓介

本遺蹟の遺物は、前號でお知らせした如く、飯沼包次郎氏が本研究所に寄贈せられたものである。本遺蹟は石器時代地名表(第五版)に記載ある遺蹟ではあるが、其の內容は未だ報告せられてゐない樣である。今回飯沼氏の御好意に報ゆる爲、寄贈せられた遺物を御紹介致し度い。

石器　打石斧五個、半磨石斧一個、石皿破片四個、

土器　破片十個

以上であるが、打石斧は五個共に撥形で、粗雜な製法である。半磨石斧と稱したのは第一圖(左上)の所謂下廣型のもので、スレート質からなり、刄部を若干研磨してゐる。石斧は何れも十三糎內のものである。

石皿は圖示しなかつたけれども、四個とも破片で、裏面に多數の孔を有してゐる。四個の中一個は石皿上緣部が僅に殘存す。此れに依れば上緣部が著しく隆起してゐる事が窺はれ、比較的精巧である。石質は砂岩質。

Fig. 1. 栃木縣八木岡發見石器

土器は何れも破片で、其の全形を知るものがない。而して少數であるため、その系統を明にする事は難しいが、勝坂式と大森式が混じてゐる樣に思はれる。即ち特別に隆起紋なく、比較的深い沈線紋に依つてゐるもので、土質、燒成の工合から見て勝坂式の要素を多分に含んでゐる。又、第二圖に見る二三の破片には、所謂薄手式の要素を含み、大森式の一部の土器に類似す

るものがある。

以上は寄贈せられたもののみに就いての觀察である。寄贈者の飯沼氏の採集談によれば、此れは模樣の面白いもののみを撰んで拾つて來たのであつて、他には勝坂式と思はれるものが多數あつたとの由である。

最後に貴重なる資料を贈られた御厚意に對し深く感謝する次第である。

人骨の納められてゐた彌生式土器に就いて

簡野　啓

人骨の納められてゐた、彌生式土器を發見したので、玆に事實を報告し、併せて其の發見物に就いての小考を試みたいと思ふ。之れが發見は昭和八年十二月五日、東京市大森區久ケ原町七四八番地に於て、道路に側溝を設けるに際し、工事中の人夫が、路面より四寸ばかりの下部から偶然に發掘したもので、人骨の在中してゐた關係上、地主より土地の駐在所に屆出で、其の檢視を受けたものであつて、檢視の結果人骨は遂に、警察より改葬を命ぜられたるを以て、之れを入手するを得なかつたが、土器だけは地主の好意に依つて、余の所有に歸したものである。今この發掘に關係した人々並に、直接これを臨檢した警官等の言葉を綜合し、且つ現場を親しく觀察した所に依つて、其の埋沒狀態を少しく述べて見やう。

先づこの道路は開設の當初に、約二尺ばかりの表土を取り去られてゐるから、實際の覆土は約二尺四寸と見るべきものである。然して土器は口緣部を北方にし、ローム層上に殆んど橫體となつて、發見されたものであつて、之の地點より北方約三十尺を距てゝ、一竪穴を認めたるも、土器の附近には口蓋となるべきもの及び、敷石は勿論、小石、木炭、灰等の存在もなく全く、單獨に埋沒してゐたものであつた。然して本土器の器型は、稍不安定を感ぜしめる壺形で、測定に依れば高さ、二八・二糎、口徑二〇・八糎、胴徑二一・六糎、底徑四・二糎、胴部の厚さ平均〇・二糎を示す、薄手のものであつて、表面には弱き刷毛目を見るのみにして、何等の紋樣もなく、內面には上層部に弱き刷毛目と、底部に向つて、稍強き箆跡が認められる。尙ほ色調は赭褐色を呈し、器質は吸水性に富むものであつて、一見土師器の如き感あるも、製法は全くの手揑式にして、上下二段を別々に製作したる後、接合燒成したるもので、之れは內部に明瞭なる、繼目を存する事に依つて察せられ、純然たる彌生式土器として何等の疑ひなきものであるが、然し同じ彌生式土器としても、

相當後期のものである事は、否めないものと思はれる。尙この土器に就いて、注意すべき一つの面白い事柄がある。夫れは内面の生地に、何等の變化を認めないにも拘はらず、外面の下半部には一帶に、夥しい煤の附着してゐた點で、破片を相當丁寧に水洗したるにも拘はらず、復原するに際し甚しく、手を汚損した程に濃厚なものであつたが、之の煤は果して吾人に何を物語り、暗示するものであらうか。

Fig. 2. 栃木縣八木岡發見土器

次ぎに人骨に就いての所見を簡單に述べて見る、この人骨は前記したる土器の内部に、抱藏された儘に發見されたものであつて、之れにも何等の共存物なく、骨と骨との空隙は、出土地點のものと全く同質の、耕土を以て滿たされてゐたのである。然してこの人骨には何等火葬を爲したる形跡なく、外見は白々として取扱ひに堪へるが如き觀を呈してゐたが、腐蝕度甚しく手を觸るれば、直ちに崩壞する有樣で、且つ發掘當時に鍬先きを以て、土器を打ち碎かれたる際に、人骨もバラ〳〵に混亂せしめられたるのみならず、この人骨は四肢骨並に肋骨の一部分のみが遺存してゐた關係上、其の性別年齡等を、推斷するを困難とするものであるが、先づ肉體的に相當發達した、二十歳前後の者の遺骨であると、推定して大過なきものと信ずるのである、尙この人骨は土器を檢出するに名を假り、細心の注意を拂ひつつ、調査したるにも拘はらず、頭蓋骨、齒牙、脊椎骨、骨盤等は全く、發見するを得なかつたことを附記して置く。尤も前述した土器容積から見ても、火葬骨なれば知らず、肉體の儘にては一歳未滿の者でも到底、收容する事は不可能で

あるから、之れは最初より頭蓋骨其他を、欠如してゐたものと見られるのである。

扨て以上にて土器並に人骨の記述を終り、更に之の發見物の意義に就いて、少しく考へて見たいと思ふ、然して之の問題を解釋するには、自ら二つの途があるやうに思はれるのである。卽ち第一は埋葬例として見ること、第二には食人例として見解であるが、順序として埋葬例から考へて見やう、先づ義の土器を合口甕棺の一種と認め得るなれば、人骨の一部分は他の一個中に當然殘存するものであるから、本土器に於て見られる如く、人骨の欠如してゐるのもある點までは、首肯し得るが不幸にして本土器は、全く單獨に發見されたものであつて、合口甕棺と認定し得ないものである。假りに之の土器一個を以て、埋葬したものとすれば、一體分の人骨は火葬となさねば肉體のまゝでは、到底收容する事が不可能であるのは、其の容積から見ても明らかであるが、この人骨には火葬を爲したる形跡は、更に認められぬのみならず、肋骨の如き腐蝕し易き骨片が、遺存し居るにも拘はらず、頭骨、齒牙等を檢出し得ないのは如何に說明せらるべきであらうか、然しながら更に一歩を讓りて、之れを埋葬用器と見るなれば、土器の外面に附着せる夥しき煤は果して、何を物語るものであらうか、頗る不可解なる存在と云はねばならぬが、この煤をも無視し强いて埋葬例と見るなれば、只一つの考へ方がある。夫れは死體を風葬に行ひ、其の朽骨となるを待つて、この土器に納めたる上、埋葬に附したものであつて、頭骨等の欠如せるは其の風葬中に、野獸の害其他に依つて失はれ、已むなく殘骨のみを埋葬したものと見られるのであるが、之れも年少者殊に全く形態を失はれたる、人骨を土器に納めてまで埋葬するが如き、手厚き方法が當時に於て行はれたものであらうか、頗る疑ひなきを得ないと思ふのである。次ぎに第二の食人例に就いて愚見を述べるが、斯る問を玆に述べるのは、徒に獵奇的想像を逞しくするもので、人を食つた意見だとの、誹りを受けるかも知らぬが、然し之の土器を出土して、久ヶ原は竪穴數實に八百以上を算する、彌生式時代人の一大集團地であつて、此所に生活を營みし當時の人々は（勿論一時にではなく年代的にではあるが）內輪に見積つても、五六千人は下らぬものと云はれてゐる。然して之等多數の人々は、附近に千鳥窪貝塚の如き、繩紋式遺跡が存在するにも拘はらず、繩紋式時代住民の如き、狩獵、漁撈及び收拾等に依つて支持されてゐた。生活樣式を全く放擲し、其の食料は幼稚ながらも、農耕を主體とした所產に依つて、支辨するに至つたものの如くであるから、必然に天候の不順又は、旱害等に依る饑饉の襲來、農耕技術の未熟並に、怠惰の代償たる農作物の收納不足、戰爭に於ける兵糧攻め或は耕作不能、其他幾多飢餓の恐慌に襲はれた

る事も想像せられる。然して之等の場合に於ては、有史以降に於てすら、死者、癈疾、老幼等を食料に供したる事實が認められるのであるから、況て社會制度並に道德觀念の、未だ發達せざる當時にあつては、當然飢餓を免れる方法として、人類を食料として擇びたる事は、想像に餘りあるものと信ずるのである。其他今日の現存蠻人間に於ける、食人風習を見ても單なる飢餓に依るものを初め、戰勝後俘虜を食ふもの、仇敵に對する怨恨又は復讐の爲めの食人、死者に對する冥福、英雄への渴仰、愛人への思慕、其他治病、呪ひ等の迷信に依る食人等を考慮に入れるなれば、彌生式時代に於ても相當に食人の習俗が行はれてゐたであらうとの想像は、ある點まで許されるものではあるまいか、然して本出土品の如く、外面に濃厚なる煤の附着を見るにも拘はらず、其の內部に何等の變化を認めないのは、之れを連續的に使用したものではなく、ある特殊の場合に人肉を調理し、これを調理して味食したものと信ずるのである。斯く見るなれば人骨の不足せる事、煤の附着せる事實等も、幾分說明し得られるのであるが、然し之の一例のみを捉へて直ちに食人例なりと斷ずるの早計は、自分も之れを認めるので、玆には單なる一資料として、參考までに記して置くものである。

文　獻

大和石器時代研究

島本一氏編、大和上代文化研究會刊行のもの、本書は大和石器時代研究家オンパーレイドと云つたもので、正に編者島本氏の本書に述べられたる如く、大和上代文化研究に於ける清算期に屬する諸氏に依つて執筆せられてる。

卷頭に島本氏は大和石器時代研究史を明治初年より現代に至る間の第三期に分けて詳細に發表せられ今やその諸先輩の業績の清算期とせられ最近に於ける諸氏の業績を簡にして要を得た解說を試みられた事は誠に多としなければならない。

又森本氏の「大和の彌生式土器の槪說」、島本氏の「大和の石器解說」、其他末永、樋口、島本諸氏の大和に於ける繩紋式系の

遺蹟の研究は、彌生式遺蹟の本場だけに特に興味を以つて拜見する事が出來た。此れには本書中にある北六田其他遺蹟の完全な層位的、編年的研究の完成を期待したい。

叉島本氏の提唱とせられる。

一、繩紋式系遺蹟が山岳地帶に多く未開拓に屬するが故に將來の視野の徹底、二、山岳と平地の接觸作用の研究

三、石、土器の形式樣式上の一般性、特殊性の分類統制、等は獨り大和のみならず、日本石器時代研究の目下の急務の中の一でなければならない。兎角にも東西、相應じて文化的編年的研究の關心漸く盛んとなつて來た今日本書の公刊を特に感謝をもつて迎へるものである。(定價一圓、奈良縣八木町、大和上代文化研究會發行)(池上)

大場磐雄氏著　日本考古學概說

本書は本年二月末日に出來た、最新の考古學書である。其序文に柴田氏が述べられて居る如く、近年の進展に應じた、新著であり、日本考古學として、手輕く取り纒つたものは、其多くが十數年を經過して居るに對し、新に本書を迎へたことは、斯學に對し喜ばしいことである。

本書は全卷を三篇とし、其第一篇を序說として、概論を、第二編を資料篇として、主力を注がれ、これを資料の性質と分類遺跡、遺物各說に分ち詳述せらるゝものがあり、第三篇に於て、考古學上より觀た上代日本として住民、年代、原始文化等の考察を行はれて居る。而して本書の特色とする所は、其例言に著者自から述べられて居る如く、其第二篇に於て、繩紋式土器時代、彌生式土器時代、古墳時代の三期に分類し、遺跡の章も遺物の章もこの區分を追ふて述べられて居る點である。從來殆んどが、各時代ごとに獨立して其文化を述べてあるに對し本書に如上の方式をとられたことが目新しく感ずる。勿論この點に就ては色色意見もあらうし、評者にも考はあるけれども、本書はこゝに特色づけられて、益々この創意を貫徹せられんことを望むものである。元々本書は著者の教鞭をとらるゝ國學院大學に於て講述せられたノートを取り纒められた關係上、其內容に於て著者の最も得意とせらるゝ所の、石器時代研究を尨大せしめず、各時代を通じて、略平均せしめた所に、著者の苦心と努力とが窺はれる。只最も惜く思はるゝ所は、これ亦例言に斷られた如く、紙數の關係上、考古學研究法と參考書を割愛せられた點にあり、これは第二版に於て是非增補せられんことを希望するものである。それにしても、この好著が餓へた斯學研究者へ供すべき糧の或るものたることは深く信ずる所である。菊版、二二八項、圖版四枚、挿圖五十五葉及び索引。定價二圓三十錢。日東書院發行。(大山)

會報

第二號の編纂に際しては前後四回に亙つて、幹事會を催し諸氏の御參集を願つた事は誠に感謝の他はありません。尚今後も諸氏の御盡力によつて益々本會の隆盛を計り度いと考へます。尚此際會員諸氏に於かれても、本誌を御利用の上、奮つて御研究の御發表を御願ひ致します。論說、資料何れにても結構で御座います。

第三號には大場磐雄氏をわづらはし、氏多年の御研究による日本石器時代洞窟住居址に就いての蘊蓄を御發表願ふ豫定になつて居りますから豫め御期待を願つて置きます。

最近特に史前學研究所の資料陳列室を見學に來られる、會員並に諸學校の諸氏が多數に昇つた事は、斯學發展の意味で誠に嬉しく存じます。最近では賀陽宮殿下同妃殿下を始め奉り、東京工業大學・國學院大學・日語研究會及び宮內省諸陵寮等の御參觀がありました。在京會員は勿論、地方會員で上京の節は御立寄を希望致します。私共でも諸氏の御期待に添うべく資料の整理に充分心がけ度いと存じて居ります。

終りに研究所最近の發掘調査の概要を申しますと、本年に入りましてから、下管田貝塚を始め東京近傍の貝塚を四ケ所、栃木縣西那須野方面の遺跡を調査發掘致しまして興味ある結果を得ました。此等に就いては後日、遺物整理の上發表致し度いと考へて居ります。(池上)

入會

朝鮮平壤府牡丹臺公園　平壤府立博物館氏
鹿兒島縣伊佐郡大口町　寺師見國氏
東京市中野區城山町二八添田方　片倉修氏
朝鮮釜山府寶水町二丁目　濱田俊象氏
東京市向島區吾嬬町西四丁目四八　稻生典太郎氏

轉居

朝鮮慶北、慶州博物館內　齋藤忠氏
盛岡市加賀生新小路　小田島祿郎氏
東京市澁谷區金王町七〇大襲館內　樋口清之氏
東京市外三鷹村牟禮四九〇　角田文衞氏
東京市澁谷區大山町二一　那須章彌氏
東京市目黑區三谷町三〇　森貞次郎氏
朝鮮京城府大和町一ノ一六福田辰方　藤井誠一氏
秋田市西馬口勞町　鏡野目乘藏氏
靜岡縣磐田郡見付町玄妙小路　鴇田忠雄氏

INHALT

I. Abhandlungen (Japanisch)

II. Kleine Mittellungen (Japanisch)

III. Bücher Besprechungen



Satzungen der Gesellschft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durchjährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendug nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich :

9. Onden Shibuya-Ku Tokio

Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei

Sumio Nakazawa Jookei Shibata

Vorsitzender Fürst Kashiwa Ohyama

für den Vorstand

Kiyoyuki Higuchi Keisuke Ikegami

Isamu Kohno Kei Kanno

Iwao Ooba Sueo Sugiyama

Kingo Tazawa Ryuichi Yamaguchi

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

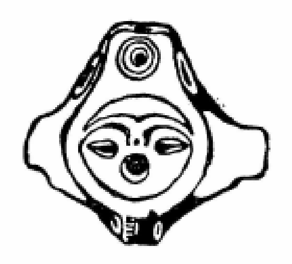
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

ORGAN DER JAPANISCHEN
PRAEHISTORISCHEN GNSELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN

von

KASHIWA OHYAMA



6. BAND 2 HEFT

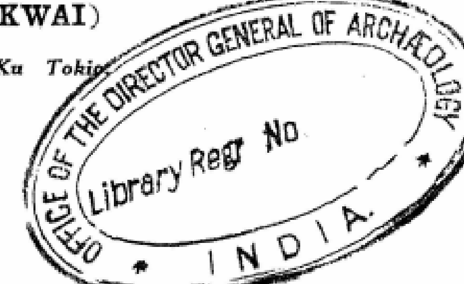
TOKIO

März 1934

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Shibuya-Ku Tokio



史前學雜誌

第六卷　第一號

昭和九年一月發行

史前學會

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル

二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會合ヲ行フ。隨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ

四、會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル

五、本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込レタシ

六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル

七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得

九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山史前學研究所内

史前學會

顧問　小金井良精
會長　大山　柏
幹事　柴田常惠　中澤澄男　杉山壽榮男
田澤金吾　大場磐雄　甲野　勇
大山　柏　備野　啓　樋口清之
山口隆一　池上啓介　(順序不同)
會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は通常、會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載に就いては幹事に一任されたし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和九年一月二十五日印刷
昭和九年一月三十日發行

第六卷第一號
定價一圓

編輯者　池上啓介
東京市澁谷區穩田一丁目九番地

發行者　岡田義一
東京市澁谷區穩田一丁目九番地

印刷者　高田壬午郎
東京市神田區神保町一丁目三十四
株式會社開明堂東京營業所

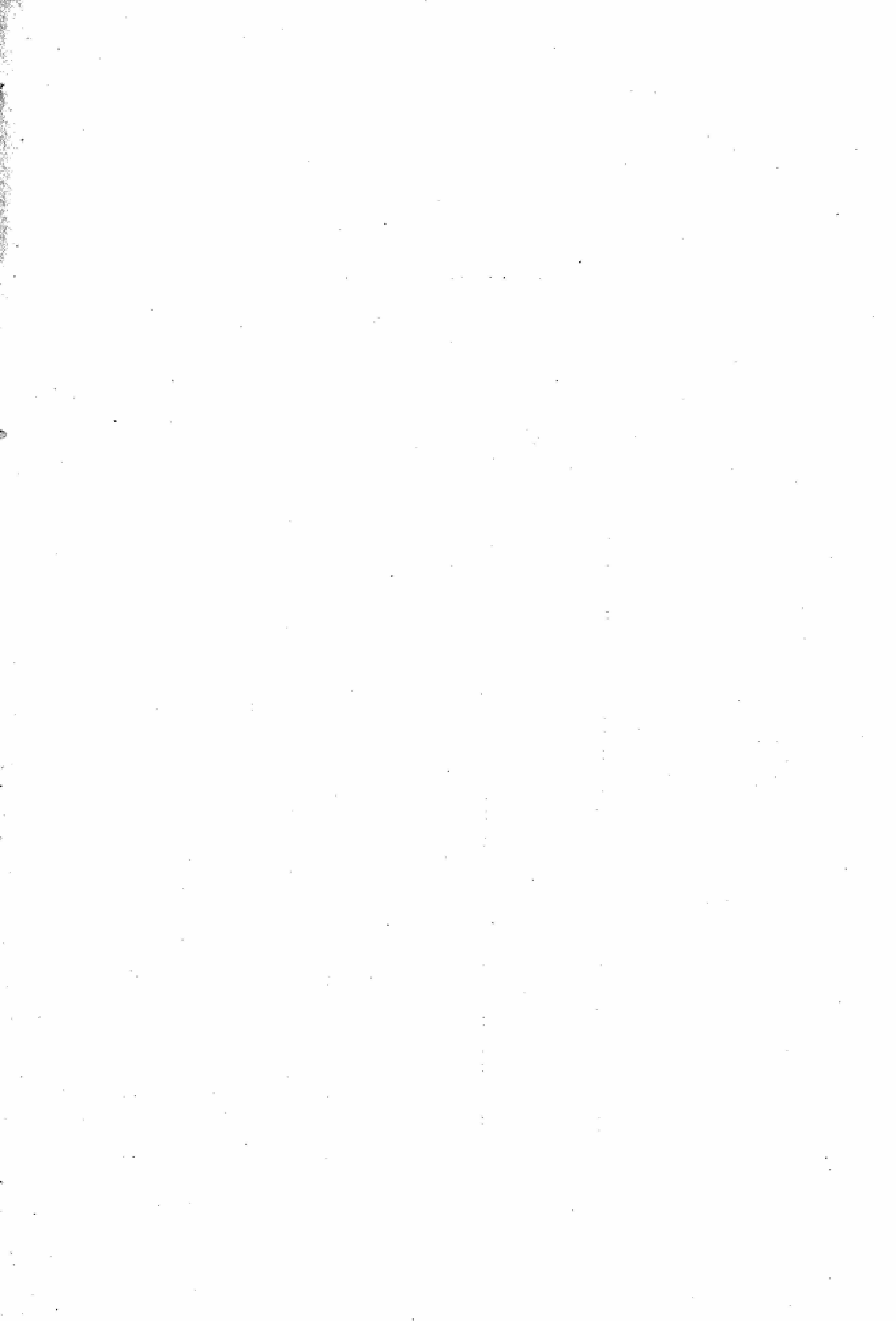
發行所　史前學會
東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所內
電話青山一二五番
振替東京五八九六九番

發賣所　岡書院
東京市神田區駿河臺町一ノ八
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第六卷第一號

目次





相模國中郡伊勢原町八幡臺石器時代住居阯（石野氏論文附圖）



相模國八幡臺石器時代住居阯群調査報告

石野瑛

一 緒言

神奈川縣の地には石器時代に屬する遺蹟並に遺物發見地が極めて多い。卽ち高峻なる丹澤山塊に於ては、殆んど發見することなく、また相模川氾濫原や多摩川三角洲等の沖積地には少いが、其の他の洪積層及び第三紀層等

—2

の地には、縣內諸所に可なり細かい密度で分布して居る。この密度を數字的に表すが如きは、他日に讓らねばならない。

而して從來發見された遺蹟の種類は遺物散布地・同包含地・貝塚工作場阯・住居阯・保塞阯・墳墓の順位となる。遺物散布地・同包含地・貝塚工作場阯・保塞阯の如き遺蹟は廣義に解せば何れも住居に關する遺蹟であるが、所謂住居阯としては極めて稀に存する自然洞窟を住居に利用したものゝ他は、多くは竪穴或は竪穴とまでは言はれなくとも多少地表を掘り凹めたものである。それ等の竪穴及び之に類するものは、今日まで其の痕蹟を遺すものは少い。これは言ふまでもなく當時の地表が、長年月の間に腐植土等を以て蔽はれ、曾つて地表又は竪穴の上に作つた掘立小屋の如き當時の造作物は湮滅に歸し、且つ土中のものであるから、未發見のものも多いことは言ふまでもない。

縣下に於て今日までに發見せられた主なる住居阯を擧げれば左記の八ヶ所である。

1 武藏國都筑郡都田村折本（爐母土）（拙著考古雜稿）
2 相模國津久井郡內郷村寸澤嵐（敷石）（同　前）
3 相模國津久井郡川尻村谷ヶ原住居阯群（敷石）（同前 調査報告（單行））
4 相模國津久井郡中野町川坂住居阯群（敷石）（考古雜稿）
5 相模國愛甲郡愛川村臼ヶ谷（敷石）（同　前）
6 相模國高座郡大澤村大島（敷石）
7 相模國高座郡田名村半在家（敷石）（八幡一郎氏報）
8 相模國中郡伊勢原町東大竹八幡臺住居阯群（敷石）（考古雜稿 調査報告（單行））

以上のうち、今回新たに發見された八幡臺住居阯群は其の位置上、構造上等、先史考古學の研究上注目すべき遺蹟の一である。本報告を稿するにあたり、遺蹟地の所有者比企野磯五郎氏並に永井參次氏等の深厚なる斡旋、山田寅元氏、堀江重次氏の調査に於ける援助に對して感謝の意を表する。

二　調査の經過

昭和八年五月二十五日、中郡比々多村三ノ宮なる永井參次氏（式内社比々多神社社掌永井健之助氏子息）より伊勢原町なる比企野磯五郎氏所有地東大所に於て、遺蹟を認むるものが現れたといふ通報があり、翌二十六日同氏は態々來訪せられ、右の遺蹟らしきものを農夫が發掘して居たから、之を中止せしめ、更に伊勢原警察署並に縣學務部史蹟係に申告せられたのであつた。其の翌二十七日に縣より該遺蹟地に出向踏査すべきを命ぜられたのである。恰も學校より六月一、二、三の三日間筑波、水戶、日光方面へ旅行を命ぜられたので、歸來直ちに出向の趣を答へた。

六月三日夜、日光より歸着、翌四日朝、神中鐵道平沼驛を發し、厚木より小田原急行電鐵に乘換へ伊勢原驛に下車した。驛前にて地主比企野磯五郎氏、永井參次氏、福井房次氏（前伊勢原警察署長）井上白羊氏（新聞記者）に面會し、伊勢原町及び附近の歷史及び遺・史蹟等に就いて語り合つたのであつた。それ等に就いては別に記すことゝする。

かくて予等五人は人夫四人を伴つて遺蹟地に至つたのであつた。遺蹟地の一帶は多くは今は麥畑となつてゐる。先づ此の地の耕作人から既往の事態に就いて聞く。其の語る所によれば昨七年十一月、本年四月二十五日等に石を掘り出したが、或る人家に病人があるので某氏に占つて貰つたところ、此の地の石に文字を彫つたものが

あり、其の下に刀がある、これを祀り石を清めれば病が癒ゆるであらうと、卽ち五月十五日の頃より多くの石を掘り出したのであるとて、畑の傍なる石を指した。百個に餘る石があつて、其の大きなものには長徑八四糎五粍（二尺八寸）短徑三九糎餘（一尺三寸）位のものもあつて、可なり大きな構築物があつたことを知る。

それ等の石を掘り出した跡は全く原形を失つて居るから、此の遺蹟の何物であるかを判斷するに甚だ因難を感じたので、尙此の種の遺蹟が附近の畑中に存在するを思ひ、作物の出來のわるい地點にボーリングを試み、永井參次氏が突き當てた場所、卽ち前記の遺蹟地より西方約四米四〇糎を隔つる地點を發掘して調査を進めることゝした。かくて掘り進むこと五一糎餘にして石を並べた面に及んだが、未だ直ちに其の何物かを斷定することは出來なかつたのであつた。然して更に遺蹟を東北に四一米五を隔つる山王塚を初め、東方なる八幡塚（七ッ石の一）を觀、八幡神社を拜し、其の境內及び附近なる七ッ石と稱するものを巡覽して、古墳及び古墳の名殘と考ふべきものの所在を確めた。

此の時伊勢原小學校長橫溝今次郞氏は同校訓導數名と共に、上級學年生徒數十名を引率して遺蹟地に來られ、予に鄕土伊勢原を中心とする神奈川縣の歷史に就いて一場の講話を需めらるゝのであつた。また伊勢原町民諸君も多く集まられたので、山王塚の周圍を取り卷き、予は其の一角に立ち、西方大山の翠峰を前にし、日頃より念頭を離れない愛する相模中部の一地點に於て親しむべき神奈川縣鄕土史の梗槪を、感激を以て餘時に亘り臨地講話をなした。話を終つて前記の發掘を續行し、敷石住居阯なることを知るに至つたので、勇を鼓して作業を進め、午後六時頃に及んで、殆んど一住居阯の全部を明かにすることを得たのであつた。そこで發掘關係者はこの住居阯を前に、マグネシユームを點じて記念撮影をなし、比企野氏は人夫に命じて遺蹟の周圍に嚴重なる柵を設け、

午後七時三十分頃引揚げたのであつた。

六月七日第二回の調査を行つた。縣屬山田寅元氏と同道、午前十一時二十六分伊勢原に至つた。比企野磯五郎氏、福井房次氏、永井參次氏立會のもとに、人夫二人の助力を得て遺蹟地の測量及び住居阯の實測作圖をした。前者は主として山田縣屬が之に當り、後者は主として予が行ひ、遺蹟地一帶を調査し、午後六時頃それ〴〵の作業を終へて引揚げた。

六月十一日に三度、同地に出向し、專ら地主比企野磯五郎氏と共に本遺蹟の保存に關して相談し、併せて伊勢原町及び附近の遺・史蹟の一として世に紹介し、町に氣勢を添ふる一端たらしめんとし、左記の施設を行ふこととした。

1　住居阯はバラックを以て蔽ふこと。

2　本調査記等を印刷頒布すること。

3　住居阯の傍に標札を建てること。

4　住居阯の傍に碑を建てること。

5　遺蹟地の古墳を洒掃して標札を建てること。

6　遺蹟地の繪葉書を作製頒布すること。

そして此の日「相模國中郡伊勢原町東大竹八幡臺石器時代住居阯群概記」を書いた標札を作つて遺蹟地に建てた。その後數日にして繪葉書等も出來てそれ〴〵頒布せられた。

六月十八日に四度、伊勢原に出向、前回に續いて本遺蹟の調査並に保存に關することを行つた。そして七月十

四日に開かれた縣の調査委員會に報告して、縣より保存指定をなすことゝなり、更に文部省に國の保存史蹟として指定を申請する手續をとられることとなつた。そして七月二十三日五度、遺蹟地を巡視し、併せて伊勢原に於ける史料の調査を行つた。

三　遺　蹟

（一）　遺蹟地に就いて

相模國中郡伊勢原町東大竹八幡臺石器時代住居阯群の存在する一帶の地は、其の郡名の示すが如く相模國の東西の境界より見て、ほゞ中央に位する。之を南北より見れば南方なる海邊並に平野地帶と、北方山嶽地帶とのほゞ接合地帶にあたる。

平野地區は主として所謂相模川氾濫原と稱せらるゝもので、東方相模原の洪積層臺地と、北方主として第三紀層より成る丹澤山塊と、西方第三紀層及び沖積地より成る大磯、秦野、松田、國府津を結ぶ不等四邊形の丘陵卽ち淘綾地塊との圍む沖積地である。



Fig.1

石器時代遺蹟が主としてそれ等三方の洪積層又は第三紀層の臺地に散在せる分布の狀態より推して、古くは相模川・花水川の流るゝこの平野地區は東は茅ヶ崎の臺地、西は大磯の高麗山の突端を灣口として、秦野町・伊勢原町・厚木町の線に近く灣入して居たことを考察するのである。さうした一大海灣をなして居たことはこの地方の口碑や傳說にも存して居る。（別著武相の古代文化・武相考古・考古雜稿等に記す）予は之を古相模灣と假稱することゝする。要するに本遺蹟地は古相模灣の奥部に位するものといふことが出來る。（神奈川縣內石器時代遺蹟分布並に古代地形想定圖參照）

本遺蹟地は標高五〇米の臺地にあつて、西北方比々多村一帶の古墳群及び大住國府（平安中期後、淘綾に遷る前の相模國府）古驛箕輪驛の在つた所と考ふべき串橋、笠窪附近、さては三ノ宮なる式內社比々多神社の森を隔てゝ約四粁餘にして大山〔雨降山〕（一二五三米）の翠巒は屹然として王座の如く後方に蛭ヶ嶽（一六七三米）丹澤山（一五六七米）の群峰を從へて聳ゆるを見る。それより西方善波峠・弘法山など相連なり、富嶽は其の後から覗き込んで居る。更に目を南方に轉ずれば足柄・箱根の山々が蜿蜒として連亙し淘綾地塊の丘陵、高麗山に至りて盡く。更に東方は隣村岡崎村の丘阜を隔てゝ、花水川・相模川の流るゝ綠野を俯瞰し、晴天の日には遠く、相模灣の碧波を望見することを得、頗る景勝の地で、氣淸く風溫に、しかも旣に述べたやうに有史以前の遠い過去にあつては海岸にも近かつたので、當時の民衆は此の地方に群落をなして、歡んで生を樂んだことを想見するので、此の地に住居阯群の存在するのは當に然るべしと思はれるのである。

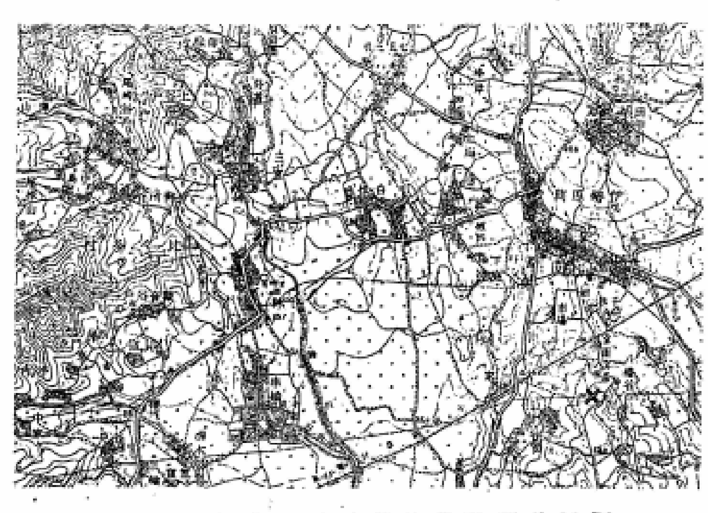
（二）遺蹟の發掘調査

昭和八年六月四日第一回の調査を行つたのであるが、調査の經過の項にも記した樣に、予の調査以前、東大竹

一三六九番地の耕作者によつて昨七年十一月、本年四月二十五日、五月十五日等數回に亘つて百餘個の石を掘出し、其の石のうちには長徑八四糎餘、短徑三九糎餘のものもあつて、若し此の遺跡を組織的、計畫的に發掘したならば大きな住居阯の原狀を見ることが出來たのであらう。耕作者は石を見るに從つて取出して了つたので、復原して考察することも出來ない。之は遺憾のことである。（住居阯調査以前發掘の石材寫眞參照）


Fig. 2. 八幡塞遺蹟調査以前發掘の石材

そこで新たに住居阯の所在を推定して、前記の住居阯より四米四〇糎を隔つる地點（東大竹一三六七番地の內）を發掘したのである。（住居阯群位置圖及び同所在附近地圖參照）掘り進むこと五一糎餘にして敷石面に及んだので、次に漸次其の四周を擴げ、其の西北凡そ七〇糎、即ち二個の石


Fig. 3. 八幡塞石器時代住居阯群位置圖

を隔てたる所より燒石及び木炭片を出せる徑約七〇糎の爐阯を發見し、それより西方六〇糎餘にして立石及び繩紋土器の破片を見出した。其の立石をたよりて漸次に北方に發掘を擴げ、西方より北方に連る立石を發見し、次で西方より南方に及べる立石を見出し、本住居阯の西側の限界を明かにすることを得た。そして其の北端に近く繩紋土器の底部、其の南端に近く土器の把手が出土した。次に其の東側に及ぼしたが、敷石の缺くる所多く、立石も正東より稍北に寄つて一個を存するのみで正東より土器破片が出た。かくてほゞ本住居阯の全貌を明かにすることを得たのである。其の敷石の數は大小約七十個、立石の數十餘個で、住居阯の平面形は南北六米（十九尺八寸）東西三米四〇糎（十一尺二寸餘）の楕圓形をなして居る。住居阯の全貌が現はれたのは午後六時頃で、實測圖を作製する時間もないから之を次回の調査に讓り、寫眞師を招きマグネシウムを點じて撮影をなし、住居阯の周圍に柵を設けて引揚げたのであつた。次で六月七日第二回調査を行ひ、縱横三〇糎毎に杭を打ち糸を張つて、三十分ノ一を以て方眼紙に作圖した。（實測圖參照）

Fig. 4.

本住居阯に用ひられて居る石は其の大なるものは長さ八〇糎餘、幅四〇糎乃至五〇糎厚さも一五糎內外のもので、大部分安山岩の板狀節理をなせるもので、所謂根府川石と稱せられるものであるが、更に調査委員堀江重次氏を煩して岩質の調査を需めた。氏の調査によれば緻密安山岩の板狀節理をなせるもの、粗粒安山岩の板狀をなせるものが、最も多く、其の間隙に充塡せるものには石英閃綠岩があり、また立石に用ひたるものは角礫凝灰岩即ち七澤石（又は日向石・大山石ともいふ）があるとのことである。敷石中には火にあつた燒石を二三個混じて居る。（圖版第一參照）本住居阯では柱穴及び周溝は發見することが出來なかつた。

相模國中郡伊勢原町八幡臺石器時代住居阯實測圖

Fig. 5.

四　遺物

(一)　出土遺物に就いて

遺蹟地一帶より從來石器、土器等の遺物が多く出土して居るが、今回調査の際に出たものは比較的に少い。其の主なるものを左に記す。

住居阯內　繩紋土器破片數個
同　爐阯　同土器破片數個、燒石・木炭片
住居阯附近　石器・繩紋土器破片

(二) 石器及び土器

本住居阯附近より出土した石器には

Fig. 6.

石斧　打製石斧十數個　磨石斧數個

石棒　破損せるもの一個

土器は全部縄紋土器の破片のみで完全なるものは一個も無い。土器破片を分類すれば

口縁部　九個　（厚さ四粍より八粍に至る）

腹部　五個　（同　前）

底部　四個　（厚さ一糎）

把手　一個

拓本に示せるが如く、口縁部の最大なるものや、底部及び把手等によつて窺へば相當大型のものであつたらしく、其の原形は甕形のものが其の多くを占め、次では鉢形のものであつたであらう。其の文様の多くは紐狀紋と曲直線を用ひ、

その間に縄紋を埋めてある。これ等の土器は同一系統のものであることは肯定し得るのであるが、把手の如きは厚手型土器の臭味もある薄手型のもので、其の文様は一般に精氣を缺き退化を意味せることを觀取するもので、（圖版一附近出土土器文様拓本參照）石器時代の後期に屬するものなることを推知するのである。

五　結　語

本住居阯に就いての具體的記述は以上に止めるが、さうした住居阯は既に記した樣に東方四米四〇糎を隔てゝ計畫的ならざる發掘によつて破壞し終つたもの、更に既往に於て耕地開墾の爲め無關心に石を掘出したる所も數箇所に及び、また今尙地下に深き眠りを續けて居る住居阯の存在せることを窺つたので、此の地に石器時代に於て群落があつたことを知るのである。

然して既に述べた樣に本地域は西方高麗山を灣口の一尖出として旭村・金目村・大根村・岡崎村・比々多村・伊勢原町・成瀨村・南毛利村に亘り、東方茅ヶ崎の丘陵を對岸の灣口として寒川村・有馬村・海老名村に及ぶ臺地が所謂相模川氾濫原を抱く。それ等の臺地の緣邊に近く石器時代遺蹟が點在して居るので、地形と遺蹟分布の狀態より推して、一帶の沖積地は古相模灣とも假稱すべき一大海灣であつたであらうと推定したのであつた。其の海灣は石器時代の終期より、次の古墳時代にかけて、次第に浮洲が出來て、そこに人間が生活し、それ等の浮洲が更に發達して、今日の一大沖積地をなしたのである。卽ち本遺蹟地はこの古相模灣の奧部に位せるものなることを知る。

本遺蹟地一帶の住居阯群に用ひられて居る石材は緻密安山岩、粗粒安山岩、石英閃綠岩及び角礫凝灰岩であることは既に述べた。角礫凝灰岩は所謂七澤石・日向石・大山石と稱せられ、この遺蹟に比較的に近い所から搬ん

だものであるが、安山岩は根府川石で、相模に於ける此の石の主產地は足柄下郡片浦村根府川であるから、當時この地方より多分舟にて、古相模灣內、奥深く搬び込んだものと思ふ。これまで發見された南多摩郡の高坂(かうざか)住居趾、津久井郡の寸澤嵐(すあらし)住居趾、谷ヶ原住居趾、川坂住居趾や、高座郡大島住居趾、愛甲郡臼ヶ谷住居趾の敷石は多摩川、相模川及び其の支流中津川等の河岸より得易い石英閃綠岩・礫岩・砂岩・凝灰岩等を用ひてあつて多摩、相模兩河の上流地域に存する地方色の濃い遺蹟であらうと考へたが、今回發見のものはよほど今日の海岸に近く存在し其の石材も安山岩の板狀節理をなす根府川石を用ひたるは、縣內に於ける此の種遺蹟中の初發見のもので、當時の地形・交通を考察する上に、極めて價値多いものであると信ずる。

また其の出土の土器は多く繩紋薄手型土器であるが、中には厚手型土器の名殘を存し、其の文樣は一般に精氣を缺き退化を示せるを以て、之によつて石器時代後期に屬するものなることを推知し、前記湘北の石器時代住居趾は多く厚手型土器より薄手型土器に進む長年月に亙る遺蹟なるべく、また本遺蹟の周圍なる多くの石器時代遺蹟、卽ち其の主なるものには大根村天神臺包含地（主として薄手）金目村五領ヶ臺貝塚（厚手、薄手）旭村萬田貝塚（厚手・薄手）新磯村勝坂包含地（主として厚手）海老名村國分宮臺・上今日水產川等の包含地（厚手・薄手）などがあるが、それ等も多く厚手土器より薄手土器に進む相當長い間の民衆の居住地で、大體からいふと相模國は三浦半島より湘南一帶の海岸地帶に及んで、凡ての生活樣式は進境（或は變化）を示したと思はれる「（原史時代より奈良、平安時代にかけては相模中部が相模の中心となつた。）從つて本住居趾及び附近の遺蹟は山間地帶と海岸地方との兩者の影響を受けて居るものと思ふ。また金目村・大根村・成瀨村・海老名村・茅ヶ崎町などには彌生式系の遺蹟が可なり多い。而して本遺蹟が相模古代文化の攷究上如何なる價値を有するか、また日本石

器時代文化の上に如何なる地位を有するかを記述するは、更に武相の各遺蹟に就いて愼重なる調査研究を重ねたる後に讓りたい。

（昭和八年八月稿）

英語の失敗

研究所の所長は獨逸語一點張りだ。英語はまづい。だから外人團がきても話さない。所が例年の如く某外人團が見學を申込んできたが、例の如く英語の通譯を要求した。さて一同見學が始まり、英譯說明も一通り濟んで、實物解說に入つた。見渡すと外國婦人が多い。これと知つてか、所長はしきりと通譯子を苦めながら、身體裝飾を說明する。果して大向ふの受けがよく、とても感興を引き、一同を緊張させる。所長は得意げに、これは身飾り、垂飾、腕輪、而してこの垂飾の如きは、ジエードですよ。昔から寶石を愛す氣持ちには何んの變りもないのですね。どうです、この留飾りなんか、モダーンなもんではありませんか。いやいやモダーン…クラシツクかもしれませんね。あのアメリカ、インヂアン婦人の結髮の様なのも流行するかも知れません。而してそれに、こんな留針と耳飾りなどさ！と云ふた調子に實物を頭につけながら、通譯子が閉口するのに頓著なしに、與太氣たつぷりに、辷べつて行く。其時實然一行中の唯一人光つて見へた、妙齢の一婦人が、マー驚いた。こんな大きな耳飾をどうして耳につけるんです。との質問。それを通譯子が通譯せねばならない所を、所長がいきなり、しかも英語で、エ、モーア、ナツシング、といきなり佳人に答へた。つゞいて、例のドイツナマリで二言三言。突然後方から太い男の聲。をや所長さん！貴兄は英語を御存じない筈と伺つて居りましたが。これは謹嚴な團長さんの聲だつた。いーや所長さんテレル〳〵。もう十日の菖蒲。駟も舌に及ばず、とは古諺。どうやらそれも胡魔化して、見學團の歸つた後。所長の言行審査だ。而してあれが見學團に多かつた、老婦人連であつたなら、あの所長の失言？も出ずに濟んだのではあるまいかとの判決。皆さんこの判決が正しいと思いませんか。（一審査員）

相模國大船町平戸山遺蹟

赤星直忠

序

「山の畑に貝が散らばつてゐるさうだ。」知人との話の中にこんな事が出て來た時「貝塚ではないか。」との疑を持つて其の地に出かけたのが昭和六年九月廿四日。ひどく探し歩いた末やつと見出したのは畑土にまみれてひどく朽ちた二三片の貝の破片だつた。これでも貝が散らばつてゐるには違いないので不服も言へない。しかも其の

貝がどうやら貝塚のものに似た朽ち方をしてゐるので頗る念入に附近を探したところ縄紋式土器の細片が發見された。更に石斧や石錘や土器片等の澤山投げすてられた土手を發見するに及んで疑もない先史遺跡である事が明になつた。此の事が幾日か後に新聞紙上にニュースとして發表された爲遠近の好古者が押寄せて忽ち遺物は洗ひざらひ持ち去られた事を知つたのは十一月中旬に再び資料を得べく出かけた時だつた。土器や石器が澤山投げ捨てゝあつた畑隅の土手はすつかり掘り崩されてゐた。空手で歸つたがどうも殘念なので十二月中旬三度訪ふた。畑にゐた顏見知りの農夫がひどく不機嫌に畑や土手の荒らされた事、其の後も何人かゞあちらこちらを掘り崩した事を訴へた。其の後其の畑の地主が偶然にも自分の教室にゐた小林君といふ生徒の家のものである事を知り其の採集になる遺物を見て資料を加へる事が出來た。しかし今までの資料のすべてが農夫が掘り出して投げ捨てたものであるから更に畑のあいてゐる時發掘して層位的に調査せねばならないのだが畑のあいてゐる時がよくわからないのと畑作の出來ない時期は自分が忙しくて出かけられないのとで未だ發掘調査が充分出來ないが一部發掘に依る狀況をもとにして記述し今後發掘が出來たとき更に補ふ事にしたい。此處の貝殼については「昔平戸御前といふ人がゐて貝を食つて貝殼をすてたものだ。」との傳がある。



Fig. 1.　平戸山遺跡位置

位置及現狀

神奈川縣鎌倉郡大船町（舊玉繩村）字山居通稱平臺（又は平戸山）にある。平戸山は標高六十米余の臺地狀の山畑で其の略中央部に遺物の分布を見る。遺物は主として一四五八番地一四五九、一四六〇、二六六、二六七、二六九、二七〇番地に渉つて散在する。これと北接及西接する地には彌生式土器の散在を見る。土器石器等が澤山集めて捨てられてゐたのは一四五九番地の東南端の土手である。此の土手の下にあたる一四五九番地と二六六番地の境附近に地下三十糎程のところに厚さ十糎程の薄い貝層（貝は海産種）があり遺物の多くは其の下に位置する。

Fig. 2.

遺　物

遺物は土器と石器である。土器はこれを五種に分ち得られ、其殆ど全部が農夫に投げすてられたものであることをことわつておかねばならない。従つて層位的の事は今後の調査に待たねばならない。

石器は石斧及石鏃を主とし凹石、石皿片、敲

石等で他に多數の石塊及黑曜石片があるが石鏃の發見は未だない。次に遺物について解說して置きたい。

土　器

資料として手もとにあるのが總數百七十片。これを內わけすると次の如くなる。

第一類に屬するもの七片
第二類に屬するもの百四十六片
第三類に屬するもの三片
第四類に屬するもの十二片
第五類に屬するもの二片

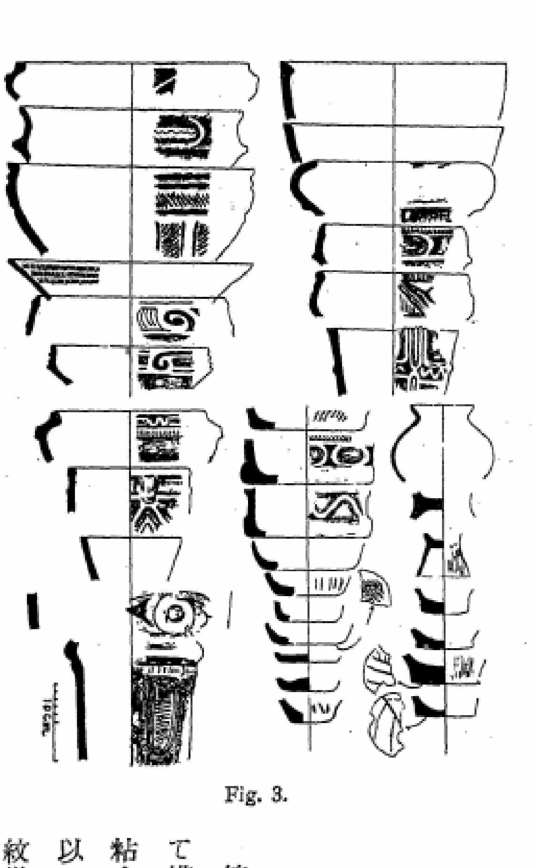


Fig. 3.

第一類土器は稍薄手にて撚糸紋と半截竹によりて描かれたる平行沈紋との交錯する紋樣のもの及粘土を紐狀に土器面に押しつけ其の上に竹の背を以て刻みをつけたる紋樣を有するものとの二種の紋樣に分たれこれは三浦郡三崎町諸磯小字新堀なる所謂諸磯貝塚出土の諸磯式土器と全く同じ物である。（第四圖47―51）

第二類土器は本遺跡土器の主體をなすものにて厚さ一、五糎內外のもの多く、其の紋樣は割竹の一端にて描きたりと思はれる所謂爪形紋全盛を極めこれに平行沈線が交錯して紋樣を構成するものにて其の間に隆起線紋及隆起渦紋が混ずる。此れの他に繩紋を有するものが混ずる。本類土器の特徵として擧げ得られる紋樣は第一に爪形紋

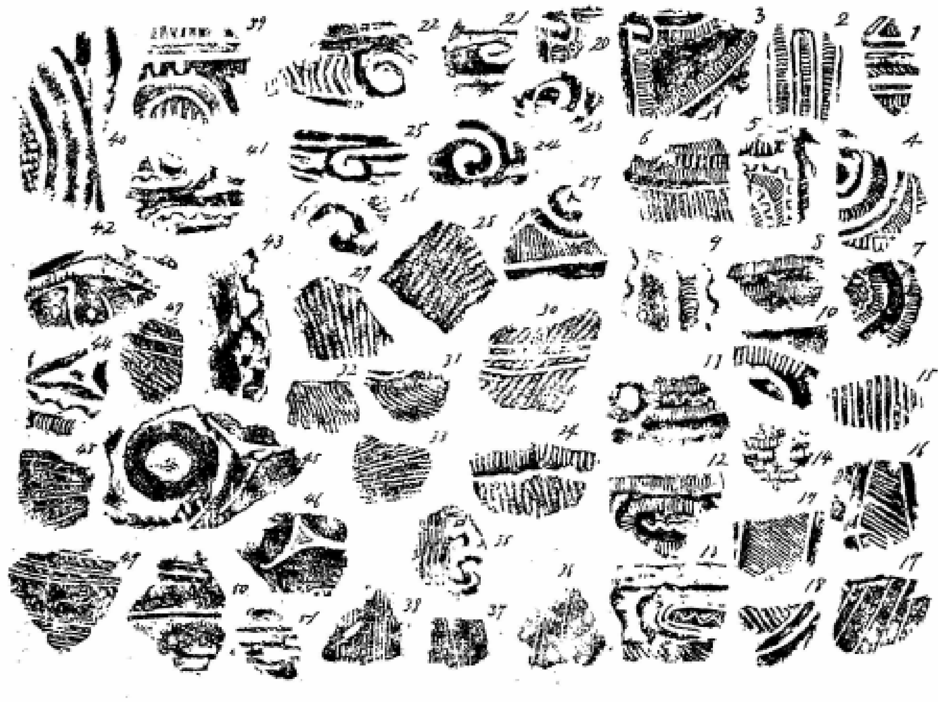


Fig. 4.

（第四圖１—９）であるがこの他凹三角形の沈紋（44—46）土器面に於けるＸ形の隆起及其の左右にある有圏じぐざぐ紋等が數へられる。この有圏じぐざぐ紋は（第四圖11 12 13）に示す如き變化をたどつて單純化して行く事が見られる。繩紋を有するものは本類を更に分割して一類を形式づけるものかと思はれるが資料が少ないから今は同一種に入れておく。本類土器の把手は特に變化の甚しいものはなく口緣部に於ける突起の變化して把手形となれるものと肩部から口緣部にかけて生じた所謂把手とある。前者は何れも小形にて瘤狀の突起の紋樣化したもの、後者は所謂把手として發達したもので稍大なる孔が左右に貫通してゐるが特別な變化は見られない。（第七圖）たゞ一例やゝ手の込んだ把手がありこれは前者に屬すると思はれるが上下左右に貫通した五箇の穴を有するが單に穴の周に一沈線を飾るのみである。器形については其の全形を見るべきものがないが口緣部及腹部等の斷片から推定して淺鉢形、深鉢形、

壺形等に分たれる。本類土器片中に一片內面に紋樣を有するものがある。これは其の形が極めて淺き鉢形であるため外面が全く上から見られぬため必然的に描かれたる內面紋樣であつて薄手式土器の一種に見る如き內面紋樣では決してない。やはり爪形紋である。他に所謂丹塗土器一片が見られる。

本類土器は普通に繩紋式厚手土器の代表とも見られる種類であつて其の分布の極めて廣いものであり恐らく所謂厚手式の最盛時をなすものと見られる。三浦郡浦賀町江戶坂貝塚の主土器たる貝層中のものは之と全く同じ（史前學雜誌第五卷第三號參照）ものであり、同三崎町諸磯なる白須遺跡（考古學雜誌第二十卷第十一號）に於ける主土器でもある。更に本遺跡附近にては鎌倉郡中川村（考古學雜誌第二十二卷第三號）諸遺跡に於けるものと同じものであつて所謂加曾利E式に屬するものと考へられる。されば本遺跡に於ける土器の形式は江戶坂遺跡に於けるもの（第五圖）等に依つてうかゞひ知る事を得る。

第三類土器は三片しかないが前者より薄く厚さ八粍程。土質はより細かい。其の二片は色は黃褐色を呈し沈線紋によりて區劃されたる中に細かき繩紋及網目類似紋を押し無紋の部は丹塗となつてゐる。壺形の腹部の斷片である。他の一は稍赤味を帶びた黃褐色で前と同質。首部の斷片で首に巻かれた紐狀粘土

A　B

10 cm　10 cm

江戶坂貝塚土器

Fig. 5.

の上を刻をつけた木片か何かで太く刻をつけたもの。これ等は普通彌生式土器と呼ばれるものに屬し特に本類の如きは石器を伴出する類である。三浦郡初聲村赤坂遺跡（考古學雜誌第廿一卷第二號及考古學第一卷彌生式號）に出るものと同じである。

第四類土器は前者と全く同じ色及質をなすもすべて無紋にして或は刷毛目を存し、又は全面丹塗となるものがある。器形は壺形、高坏形、深鉢形と思はれる斷片のみであるがこれ等は三浦郡初聲村和田遺跡に於けるものと全く同種類にして彌生式土器と稱せられるものである。前類を彌生式古式土器とすれば本類は彌生式新式土器と稱せらるべきものである。本類には普通

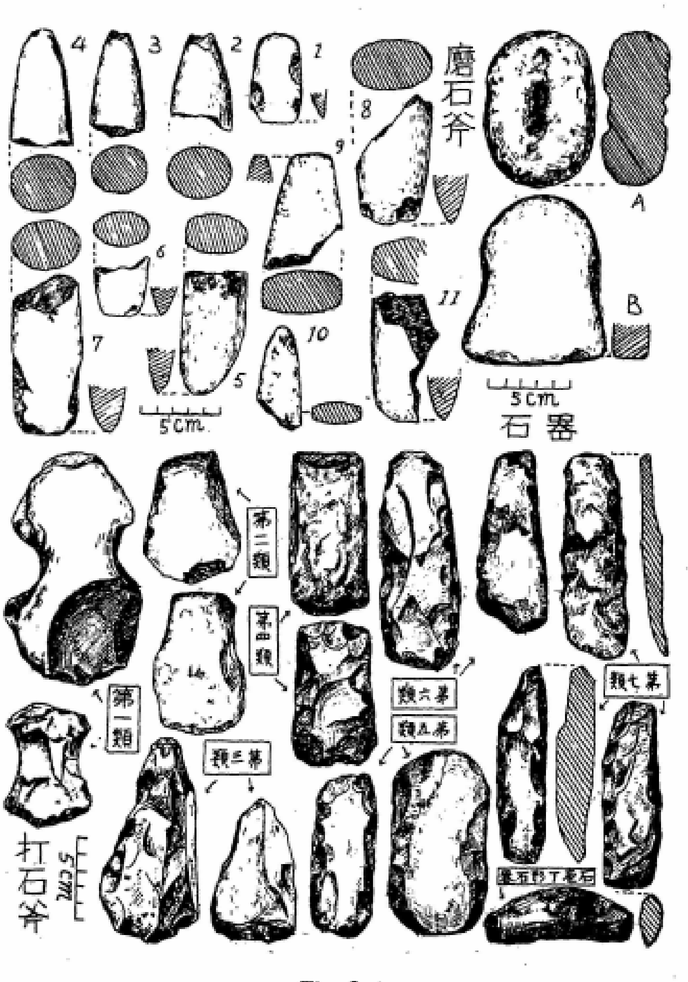


Fig. 6.

石器を伴はない。木の葉の押紋を有する底部が二片あるがこれも彌生式土器に通有のものである。

第五類土器は靑黑色頗る堅緻なるものであり表面に稍太く淺い平行押型を存する。裏面無紋。これ等は須惠器と稱せられるものに屬し、甕の破片と思はれるものである。彌生式土器（新式）に伴出し又古墳横穴等より埴器と伴出する。裏に靑海波紋を有するを普通とし年代下れば之を失ふを普通とするとされてゐるが本遺跡附近には古墳若くは其の頃のものがない樣であるからこれは前記彌生式土器に伴出のものと推定する方がよからう。

石　器

資料として手もとに存するもの磨石斧完形品一、斷片十。打石斧完形品四十四、斷片三十五。石錘完形品三十五、斷片二。凹石一。石皿片二。敲石片二。石輪形石一。總計百三十三箇の多きに達する。本資料は主として發見當日の表面採集なれば後に何人かの手に拾はれたる數を加へれば頗る多くならうと思ふ。土器片の出土數に比して石器特に石斧の數の頗る多い事は注意を要する。次に各石器について解說しておく。

磨石斧

石質についてはよくわからないが粘板岩、砂岩、閃緑岩であるらしい。何れも堅い石である。尖頭形のものと三味線胴形のものとの二種類に分たれる。完形品は長五、五糎巾三糎の小形のもので自然石の一端に加工したに過ぎない片刄のもの。他は何れも充分加工せられたもので、尖頭形のもの頭部三、刄部三。一は片刄に近い形をなすが他は蛤刄である。三味線胴形のものは頭部二、刄部二あるが何れも蛤刄である。前者と同形式のものは附近では中川村にあり縣下では津久井郡に多い樣である。後者は浦賀町江戸坂貝塚に其の例がある。（第六圖）

打石斧

頗る多い。分銅形、三角形、撥形、短册形等あり更に其中間形式もあるが大略七形式に分けられる。第六圖は

之を示したもので第一類は分銅形又は島田髷形と稱するもので六箇、中一個は其のくびれ部が磨製になつて居る。第二類は前者のくびれから一方だけの左右兩端を落した鑁形撥形とも言ふべきもの。五個ある。第三類は第二類の一端を更に細くして三角形としたものでやはり五個ある。第四類は矩形と言つてよさゝうな形。これが四個。

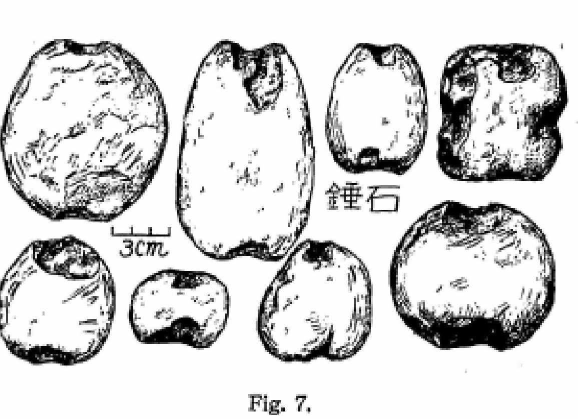


Fig. 7.

第五類は第四類の四隅を落した形でこれが五個。第六類は第五類を長くのばした形で頭より刄の部が幾分巾廣になつてゐる。この形式が十二個。更にこれを長くした所謂短册形を第七類とする。これが七個。更に破片で見ると(明瞭でないのもあるが)第二類が八個、第三類が一個、第五類が五個、第七類が十五個。不明が九個となる。卽各形式のものが存するが最も多いのは第七類と第五類であるといふ事が出來る。第七類中には勝坂遺跡(神奈川縣下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告　大山柏著)に於ける如く片方へ曲つたものが四例見られる。

石　錘

扁平な自然石の兩端を打ち缺いて作つた普通の形式である。丸い形を有するものと長いものとあり、長いものには打缺きを長徑の兩端に作つたものと短徑の兩端に作つたものとある。丸いものと長いものは用ひられた石によつて偶然生じた譯と思はれるが長い石の長徑の兩端を打缺いたものと短徑を打缺いたものとは其れを作るとき異つた意志が働いたものと考へる。他に石の四端に打缺のあるものが一例ある。石錘の數の多い事は何を物語るであ

らうか。（第七圖）

凹　石

子供の頭程の緻密な安山岩の上面に雞卵の恰度乘る程の凹みが作られたものだ。

石　皿

多孔質の安山岩の二片。別々な石皿であつた事は石質の相違が物語る。緣の方の破片に過ぎないが石皿があつた事を物語るものである。

敲　石

二つ共斷片、大型石斧の頭部とも見えれば石鹼形石器の斷片とも見える。敲いたり磨つたりした痕が殘る。

石鹼形石器

よくある形で必らず中央に凹石の樣な小穴がある。これも例外なしに兩面共二つづゝの小穴が接してあいてゐる。多孔質安山岩。（第六圖右上A）

其の他に石錘とも見える一個があるが一端が扁平になつてゐるので考へると柄をつけて打擊用にしたものと考へられる。（第六圖右上B）更に今一個棒狀の石塊があるが周に打痕が多いのでこれは敲石に用ひられたものと思ふ。

本遺跡からはまだ石鏃が發見されないが黑曜石片は發見されてゐるから他の同種遺跡同樣なものがいづれ發見されるであらう。

以上の他に土製錘と認められるものが一個ある。厚い土器片の口緣部を長方形に打缺いて作つたものであるが他の遺跡のもので見る樣な切込が其の端にないのは其の面に於ける二本の深い沈線紋が紐を固着する用をなした

が爲であると思はれる。（第八圖右下）

人工遺物ではないが自然遺物として貝殻の種類を擧げておく。充分な發掘でないから更に訂正を要するかも知れない。

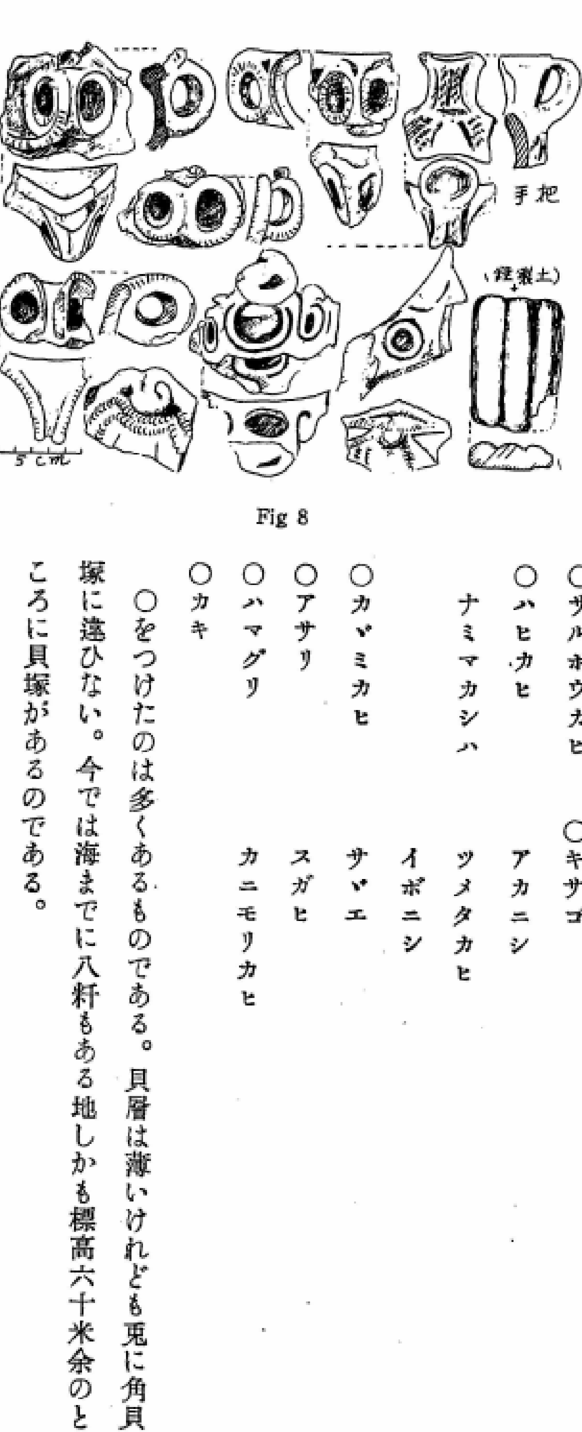


Fig 8

○サルボウカヒ　○キサゴ
○ハヒカヒ　アカニシ
ナミマカシハ　ツメタカヒ
イボニシ
○カヾミカヒ　サヾエ
○アサリ　スガヒ
○ハマグリ　カニモリカヒ
○カキ

○をつけたのは多くあるものである。貝層は薄いけれども兎に角貝塚に違ひない。今では海までに八粁もある地しかも標高六十米余のところに貝塚があるのである。

遺　跡

遺物を通して本遺跡が如何なるものであるかを考へて見ねばならない。卽稍古式と目されるところの諸磯式土器の出土は本遺跡が諸磯式土器使用者によつて先づ居住し始められたる事を物語るものであり、第二類土器（加曾

利E式）の多き事は本遺跡に於ける最盛時を物語るものである。彌生式土器の分布中心は幾分前記縄紋式土器の分布中心と異なるところのある事は縄紋式土器中、後期に屬する薄手式のものを全く出土しない事と考へ合せて本遺跡（平戸山）が時を異にして數度居住地として選ばれた事を物語るものである。卽第一類（諸磯式）土器使用者居住後第二類（加曾利E式）土器使用者が稍久しく居住し貝塚を殘し其の後久しく無人の山頂であつたが第三類（彌生式古式）土器使用者が移り住して後長く居住し第四類（彌生式新）及第五類（須惠器）土器を殘したものである。

より低地に更に適當と思はれる平地（東南方の長屋臺等）があるにもかゝわらず六十米余の高地を選定したについては何か理由がなくてはなるまいが本遺跡東北の山腹に飲料水の湧出する地（今農家の飲料水となる）がある事が一原因であらう。本遺跡に海產貝の貝塚のある事は石錘の多く殘された事と共に海に關係深い事を物語るものである、石錘は網に使用のもの（現漁業のものと比較して）と考へられるから附近に海のあつた事を思はせる。今でこそ本遺跡に最も近い海は片瀨（江ノ島附近）であつて八粁以上も距つてゐるが當時は其の汀線が本遺跡直下にまで延びてゐたと考へられるのである。陸地測量部二萬五千分一地圖戸塚號に依つて海拔十米以下を海として塗りつぶすとすれば本遺跡は完全に海に面する事となる。然らば深い入江が本遺跡直下に迄及んで海產貝を得る事も漁撈する事も可能である。海拔十米以下を塗りつぶした理由は仝郡腰越町津村の縄紋式一遺跡（考古學雜誌第十六卷）が海拔七米程のところにある事に依つて推定したものである（五米程で塗れるとよいが十米しかわからないからこれでやつてゐる。）入江に臨んで突出した山頂の一部を占める一小遺跡に石斧石錘の頗る多い事は如何に解釋さるべきであるか。自分は石塊の多くある事と思ひ比べて石器製作所であつたと考へたい。石斧中短冊形の物を耕作用（新磯遺跡調査による前出）とすれば本遺跡に於てもこの山頂の平地に於いて幾何かの耕作が行はれたもの

であらうか。

本遺跡は周圍の他跡遺と如何なる關係にあるかを見てみやう。大船町に於いては本遺跡は唯一の縄紋式遺跡である。周圍には北方に大正村小雀小字的場の御靈社遺跡が谷一つ距てゝ存するが之は縄紋式薄手に屬し、更に北方地續きには原宿小字中荒句遺跡があるが之亦同樣なる薄手式である。其の西方谷を距てゝ前澤町善行遺跡があるが之亦同樣薄手式である。本遺跡の北東方數粁を距てゝ中川村には岡津遺跡を始め二三の小遺跡があり此處には本遺跡と同じ土器を出土する。南方山を距てゝ鎌倉町師範學校内に薄手式土器の出土を見、西南方數粁の地に腰越町津村遺跡があるがこれはむしろ本遺跡出土のものより古いものが多く同樣のもの少量ある。三浦半島に至つては前記例出の江戸坂及白須の二遺跡を見るがあまりに距たり過ぎてゐる。されば本遺跡に居住者が存在した時の周圍の狀況は本遺跡に諸磯式土器使用者のゐた時には腰越に小遺跡を殘した一群の居住を見るのみであり、更に第二類（加曾利E式）土器使用者の居た時には腰越に一ヶ所、中川村に二三所の居住者群を見たのみである。更に下つて彌生式古式土器使用者が本遺跡に居住した時に於ける周圍は如何と見るに西南四粁程の地卽同郡深澤村の山頂（今鎌倉山住宅地）から腰越町猫池臺に渉つて大群落があつた。更に下つて彌生式新式土器使用者の居住頃には如何であつたか。大船町内に於てはすぐ東南下の長尾臺、其の南方の小丘陵（當時島かと見られる）上に點々と見られる他北鎌倉驛西方臺地、深澤村の前記山頂、腰越津村に上ノ山他數所、其の西の川口村馬立山頂、前記藤澤町善行の西方臺地、中川村に於ける所々山頂と言つた位に急に居住者がふえてゐるのである。恐らくこれは現在住民の祖をなすものと思はれ大體に於いて現在住居地はその山下にありと言ふ事が出來るのである。

之を要するに本遺跡は縄紋式土器遺跡として本町唯一のものであり、其の最盛時に於ては海が其の山下にまで

達して居り住民は漁撈をなしてゐたものであつた。更に石斧石錘の製作所であつたと思はれ附近の遺跡と物々交換によつて賣りさばかれたものであつたらしい。後には現在住民の祖先と目される住民が移り住んで附近住民の祖となり村の基をひらいたものと考へられる。言ひかへれば現在居住民の發生の地と考へられるのである。

栃の實の食料に就て

大山會長のお話にアメリカ、インデアンの一部で今でも栃の實を食料にして居ると珍らしがられて居る樣ですが山形縣最上郡地方では今日でも栃の實の灰汁（アク）をぬいて米の胚芽と共に蒸して搗いて餅として中に小豆の餡を入れて食用として居ります。原始時代米の無い時代には栃の實を盛んに食用としたことは想像されます、尙妻の話では遠州の山家でも栃餅をたべると云ひます、栃の實は山家では何處でも食べると見えます。（鴇田忠雄）

日本石器時代陸産動物質食料

――特に狩獵による食料――

大給 尹

I 序 言

日本石器時代に於ても動物質食料と同時に、植物質食料の存在した事は勿論である。けれども植物質食料は現在の發見に於ては遺物が極めて少いので、特別に研究しない限り明かではない。又農耕も原始的乍ら行はれたであらうと考へられるが、これについては他日に譲りたいと思ふ。この他、若干の鑛物質食料[一]も存在したであらうが、植物質食料と同様の理由によつて明かでない。動物質食料の中の魚類貝類等の海産食料については岸上博士の詳細なる論文[二]があるが、陸産の動物質食料については纏まつたものを聞知してゐないから、これについて聊か小見を開陳して諸賢の叱正を乞ふ次第である。單に陸産動物質食料と云へば、哺乳類から昆虫類等に至るまでの廣範圍のものとなるが、こゝでは主として狩獵によつて得る食料のみについて見て行きたいと思ふ。從つて通常狩獵の主要なる對象であつた陸棲哺乳類についての考察が主となる。

II 遺蹟よりの考察

元來日本は濕度が多い爲めに骨角歯牙その他の遺物の保存が悪く、貝塚又は洞窟等に包含さるゝ如き、特別の事情によつて保護[三]されない限りは殆んど朽廢して跡を止めない。それ故貝塚によつて漁撈生活を研究するのに對して狩獵生活者の生活趾から、狩獵動物の遺骨等を發見研究するのが理論上當然の事ではある

が、斯如き遺跡が殆んど無いので(四)、止むを得ず陸産食料遺骸を藏する貝塚に、この資料を求め、研究する次第である。

今『日本石器時代地名表』第五版及び追補1によつて、北海道・本州・四國・九州と琉球に於ける石器時代遺跡の中、獸骨角齒牙の出土を報告せられた箇所數を國別遺跡種類別によつて表示すれば次の如くである。

國別	獸骨を出せる遺跡				骨角器を出せる遺跡			石器時代遺跡總數		
	貝塚	洞窟	その他	合計	貝塚	洞窟	合計	貝塚	洞窟	合計
陸奥	二		一	三				一一		三六一
羽後								三		三六九
羽前										三三三
陸中	一一	一〇	四	二五	一二	三	一五	一五	一九	六二三
陸前	二五	三	一	二九	二五	二	二七	三五	七	一七七
岩代										一九九
磐城	六			六	一		一	三三		一八三
武藏	八		二	一〇	一〇		一〇	一三六		一三三三
相模	四			四	三	一	四	一三	一	一〇五
下總	一〇			一〇	一四		一四	一二六		三三三
上總	三			三	二	一	三	一四	一	一四六
安房	一			一				三		三三
上野			一	一				一		四三四
下野								二		三二四
常陸	八			八	八		八	九一		三七七
駿河										六六

遠江	二			二	三		三	一〇		七七
伊豆			一	一						一〇四
三河	三			三	八		八	一七		一三五
尾張								五		二四
美濃	一			一				二		五八〇
飛騨										一三五
甲斐										一九九
信濃			四	四						一四四五
越後			二	二				四		二六七
佐渡			一	一				三		一四五
越中	一	一		二	二	一	三	二	一	八五
加賀								一		五三
能登										五九
越前								一		二三
近江										四四
山城										三五
丹後										二四
丹波										六
大和			一	一						一四七
伊賀										一六
伊勢	一			一	一		一	一		五五

志摩								五		二四
紀伊								一		九
河内										一三
和泉										一四
攝津										四九
但馬	一			一				一		二
播磨										三九
淡路									一	八
美作										五
備前	一		一	二	一		一	二		六九
備中	一			一				三		九七
備後	一			一				四		六八
安藝								五		一五
周防								一		三四
長門										一〇
出雲								三		一五七
石見										一三
隱岐										六
因幡										一九
伯耆										七四
阿波										四四

讃岐										一五五
伊豫	一			一	一		一	二		四八
土佐								一		五
筑前	二			二				五		三四
筑後								四		六一
豐前										三五
豐後	一			一				一		三三
肥前					二		二	三		四五
肥後	二			二	三		三	一八		七二
日向	二			二				五		一四五
大隅								一		100
薩摩	三			三	二		二	四		三五
壹岐										三
對馬										五
琉球					二		二	五	二	三三
渡島								四		三九
後志					一		一	六		七四
石狩								一		七五
天鹽										一七
北見					一		一	二		二五
膽振	三		一	四	三		三	三		四八

日高										六
十勝										四
釧路	二			二	六		六	九		二四
根室					一		一	四		二四
千島										二三
合計	104	16	50	140	111	8	119	668	211	1049

卽ち北海道・本州・四國・九州及び琉球に於ける貝塚の總數は六六八ヶ處の多きにのぼるが、其の中骨角齒牙を加工した所謂骨角器の出土を報ぜられた貝塚は一一一ヶ處である。しかし骨角器は通常小さな骨や角等の破片を加工し、又は一本の齒牙を加工したものであるから動物の種類を識別する上から云へば、これをより確實に檢出する爲めには、極端に云へば完全乃至はこれに近い遺骸が發見せられる事が最も望ましいが、通常これを期待し得ないから普通加工されてゐない特徴あるより大なる骨角齒牙から識別する。これらの出土貝塚數は一〇四ヶ處を數へうるに過ぎない。

而も從來の報告中には鹿の角の如き一見しかと認められるもの以外は、單に人骨と區別して獸骨又は獸牙等と報告せられてゐるに過ぎないものも可成りあるから、單に文獻上のみからの研究は或る點までしか成しえない。貝塚以外では骨角齒牙を出土した洞窟が一六ヶ處、その他遺跡二〇ヶ處を數へるが、これらの報告も貝塚のそれと同樣である。

III　遺物よりの考察

1　檢出せられたる動物及び出土地

上記の如き次第であるから實際發見せられたる遺跡數及び動物の種類については、正確な事は云へないのであるが、さりとて各發見を確認する事は到底不可能に近いから止むを得ず從來報告せられてゐる動物の種類及びその發見地名のみを次ぎに列擧する。(五)

陸棲哺乳類(六)

1. **しか。** (Cervus sika)
　(發見地名を省く)(七)

2. **ゐのしゝ。** (Sus leucomystax)
　(發見地名を省く)

3. **うま。**(Equus caballus)[八]

（1）陸前國氣仙郡赤崎村舞良貝塚　史學八ノ三
（2）同國氣仙郡赤崎村大洞貝塚（？）　人雜四〇ノ一〇
（3）武藏國東京市芝公園內貝塚　石器時代に於ける日本の研究一ノ二
（4）同國荏原郡調布村下沼部宮ノ上貝塚（東京市大森區田園調布二丁目）　同右
（5）同國北豐島郡志村小豆澤貝塚（東京市板橋區志村小豆澤町）　史前雜三ノ五
（6）三河國渥美郡田原町吉胡矢崎貝塚　日本原人の研究
（7）越中國氷見郡宇波村大境洞窟　史學八ノ三
（8）肥後國宇土郡轟村宮庄貝塚　人雜四〇ノ四
（9）薩摩國出水郡出水町上知識貝塚　京大考報六
（10）河內國南河內郡道明寺村國府衣縫遺跡（繩紋及彌生式）　京大考報二
（11）尾張國名古屋市南區熱田高倉貝塚（彌生式系）　人雜三ノ二六

4. **うし。**(Bos taurus)

（1）越中國氷見郡宇波村大境洞窟[九]　人雜三四ノ一〇
(Bison sp.*)
（1）常陸國稲敷郡安井村馬掛陸平貝塚　陸平介墟篇

5. **かもしか。**(Nemorhaedus crispus)

（1）河內國南河內郡道明寺村國府衣縫遺蹟（繩紋及彌生式）　京大考報二
（2）越中國氷見郡宇波村大境洞窟（彌生式系）　人雜三四ノ一〇

6. **あなぐま。**(Meles anakuma Temminck)

（1）下總國東葛飾郡新川村上新宿貝塚　史前學研究所藏

7. **たぬき。**(Nyctereutes procyonoides)

（1）陸奧國三戶郡是川村一王寺遺蹟　史前雜二ノ六
（2）陸前國氣仙郡小友村獺澤貝塚　動雜二九ノ一八一
（3）同國氣仙郡赤崎村大洞貝塚　人雜四〇ノ一〇
（4）下總國東葛飾郡關宿町篠塚貝塚　史前學研究所藏
（5）同國東葛飾郡大柏村姥山貝塚　人數研報五
（6）同國東葛飾郡新川村上新宿貝塚　史前學研究所藏
（7）常陸國行方郡麻生町大宮臺貝塚　史前雜三ノ四
（8）薩摩國出水郡出水町尾崎貝塚　京大考報六
（9）安房國安房郡神戶村大神宮安房神社洞窟（彌生式系）　史前雜五ノ一
（10）越中國氷見郡宇波村大境洞窟（彌生式系）　人雜三四ノ一〇

8. **きつね。**(Canis vulpes*)

（1）陸前國氣仙郡小友村獺澤貝塚　動雜二九ノ一八一
（2）同國宮城郡七ケ濱村要害大木圍貝塚　考雜一八ノ一二

9. **いぬ。**(Canis familiaris japonicus Temminck)[十]

（1）陸前國氣仙郡小友村門前貝塚　先史學研究
（2）同國氣仙郡小友村獺澤貝塚　京大考報六
（3）同國氣仙郡廣田村中澤濱貝塚　先史學研究
（4）同國牡鹿郡稲井村南境貝塚　先史學研究
（5）同國宮城郡七ケ濱村要害大木圍貝塚　考雜一八ノ一二
（6）同國氣仙郡赤崎村大洞貝塚　人雜四〇ノ一〇
（7）武藏國荏原郡大森貝塚（東京市大森區大森町）　大森介墟篇
（8）同國南埼玉郡豐春村花積貝塚　史前學研究所藏
（9）同國橫濱市神奈川區菊名貝塚　同右
（10）相模國中郡旭村萬田貝殼坂　人雜四〇ノ五

(11) 下總國東葛飾郡國分村堀ノ内貝塚 人雜二二四
(12) 同國香取郡良文村貝塚 史前雜一ノ五
(13) 同國東葛飾郡大柏村姥山貝塚 人敎研報五
(14) 遠江國濱名郡入野村蜆塚貝塚 先史學研究
(15) 同國磐田郡西貝村貝塚 日本原人の研究
(16) 越中國氷見郡宇波村大境洞窟 人雜三四ノ一〇
(17) 同國同郡同村朝日貝塚 朝日貝塚保存會
(18) 備中國都窪郡帶江村羽島貝塚 先史學研究
(19) 同國淺口郡大島村西大島津雲貝塚 先史學研究
(20) 筑後國三池郡二川村貝塚 日本原人の研究
(21) 肥後國宇土郡轟村宮莊貝塚 先史學研究
(22) 薩摩國出水郡出水町上知識尾崎貝塚 京大考報六
(23) 琉球國中頭郡美里村伊波貝塚 伊波貝塚發掘報告
(24) 琉球國那覇市北郊崎樋川貝塚 人雜四七ノ一〇

10. おほかみ。(Canis lupus (?-)*)
やまいぬ。(Canis hodophylax (?-)*)
(1) 陸前國氣仙郡小友村獺澤貝塚 動雜二九ノ一八一
(2) 武藏國荏原郡大森貝塚 (東京市大森區大森町) 大森介墟篇
(3) 薩摩國出水郡出水町尾崎貝塚 京大考報六

11. のうさぎ。(Lupus brackyurus Temminck)
(1) 陸奥國三戸郡是川村一王寺遺蹟 史前雜二ノ六
(2) 陸前國氣仙郡赤崎村大洞貝塚 人雜四〇ノ一〇
(3) 下總國東葛飾郡國分村堀ノ内貝塚 人雜二二四
(4) 薩摩國出水郡出水町尾崎貝塚 京大考報六

12. さる。(Macaccus fuscatus)[十一]
(1) 陸中國下閉伊郡磯雞村蝦夷ケ森貝塚 人雜三九ノ四
(2) 武藏國荏原郡大森貝塚 (東京市大森區大森町) 大森介墟篇
(3) 下總國香取郡良文村貝塚 史前雜一ノ五
(4) 同國千葉郡千葉村犢橋貝塚 人雜四〇ノ一二
(5) 三河國渥美郡泉村伊川津貝塚 人雜三九ノ四
(6) 備中國淺口郡大島村西大島津雲貝塚 人雜三九ノ四
(7) 肥後國宇土郡轟村宮莊貝塚 人雜三九ノ四
(8) 薩摩國日置郡市來町市來川上貝塚 史前學研究所藏
(9) 越中國氷見郡宇波村大境洞窟 (彌生式系) 人雜三四ノ一〇

13. むさゝび。(Pteromys sp.*)
(1) 陸奥國三戸郡是川村一王寺遺蹟 史前雜二ノ六
(2) 陸前國宮城郡鹽釜町崎山囲洞窟 史前雜三ノ一

14. てん。(Mustela sp.*)
(1) 陸前國氣仙郡小友村獺澤貝塚 動雜二九ノ一八一
(2) 陸前國宮城郡鹽釜町崎山囲洞窟 史前雜三ノ一

15. りす。(Sciurus lis)
(1) 越中國氷見郡宇波村大境洞窟 (彌生式系) 人雜三四ノ一〇

16. くま。(Ursus sp.*)
(1) 膽振國幌別郡鷲別村幌別 人雜一一七

17. ねこ。(?)[十二]
(1) 肥前國北高來郡有喜村有喜貝塚 人雜四一ノ二

18. かわうそ。(Lutra lutra lutra)[十三]

19. もぐら。(Trlpa sp.*)[十四]

鳥類[十五]

1. こうづる。
2. とび。
3. からす。
4. きじ。（にはとり？）

以上の他、海棲哺乳類の遺骨があるが、試に、その種類のみを列擧すれば、次の如きものである。

海棲哺乳類(十六)

1. くぢら。
2. いるか。
3. じゆごん。
4. とど。
5. らつこ。
6. あしか。
7. おつとせい。

上記の如く、陸棲哺乳類は十九種類程檢出せられてゐるが、その中分布も廣く量に於ても壓倒的に多いのはしかとゐのしゝである。全獸骨の九〇%までが(十七)、しかとゐのしゝであると云はれてゐる。これは獨り我國のみに止まらず、デンマークの貝塚の如き森林系の時代に於ける貝塚にもこの現象が見られる。(十八)これらの獸骨の量の多い所では殆んど貝殼又は土壤を混ぜず、累々として、數十糎の厚さの層を成して發見せられる。(十九)これはしかやゐのしゝが當時非常に多く棲息してゐた事を語ると同時に、當時の狩獵の主要な對象であつた事を示すものである。今迄は單に、しか又はゐのしゝと稱して來たが、實は各々二種類程あるらしい。(二十)しかには今日日本に棲息してゐない北方系の大鹿が居たとも云はれてゐる。(二一)又、ゐのしゝに於ては同種であつても今日のそれよりは大型のものが棲息してゐた事は齒牙や其他から想像して牛程の大きさのものが居たと云はれるのを見ても知りうるのである。(二二)

2. 檢出せられたる動物と食料との關係

次に注意を要するのは、うま、うし、いぬ等の今日では普通直ちに家畜又は文化動物を思ひ起す動物の發見である。今日とは文化に大なる差のある當時の事であるから、これらの動物と人間との關係を、直ちに今日と同樣であつたと速斷する事は出來ない。

うまは、繩紋式系統のもの十ケ處、彌生式系統のもの一ケ處、都合十一ケ處から(二三)出土して居り、出土地域も陸前から薩摩に亘る廣汎なものである。動物學者の說によると、(二四)野馬が日本島に棲息してゐた事は可能であるとの事であるが、確證が有るわけでは無いらしいから普通一般の說の如く、大陸方面より輸入されたものと考へられる。けれども當時石器使用の住民が馬を飼ひ、これを使役した程の文化を所有してゐたとは考へられないから、他に高等文化民が居て、その所有の馬が、偶々の機會に繩紋式系文化民及び程度のひくい彌生式系文化民等の間に傳は

つたものと見られもしやう。斯如き場合、彼等はこれを如何に取り扱つたものか、其詳細は全く解らないけれども、或る一場合に於ては、或はこれを食用に供したこともあるのではあるまいか。

うしは、越中國大境洞窟と常陸國陸平貝塚の二例があるが、前者は Bos taurus で今日の家畜と同種である。陸平貝塚のそれは野牛 Bison であると云はれる。[二五]今日野牛は日本には棲息してゐないし、何しろ一例しか無いのでその棲息してゐた事も疑はれてゐる位であるが、若し居たとすれば家畜ではなく、從つて狩獵の對象となつた事と思はれる。

いぬは我が石器時代の第一の家畜であつたと云へる。陸前から琉球に亘る二十四ケ處から發見されてゐる。下總堀之內貝塚發見のものは身長が一尺五寸ばかりの小型のものであつたやうである。[二六]曾て薩摩國出水貝塚から犬の骨を打ち割つて骨髓を食べた形跡のあるものが出土したので、濱田博士は犬は主として肉を取る爲めに飼育したものであらうと論ぜられたが、[二七]武藏國花積貝塚以下三例程、[二八]完全な骨骼を備へたものが發見せられてゐる所を見ると、必ずしも食料を主とした家畜であつたとは云へないやうにも思はれる。飢饉等止むを得ない場合は兎に角として、其後に於ける發見事實に徴すれば、普段は番犬又は獵犬として飼育してゐたと考へた方が穩當ではあるまいか。

いぬの外におほかみ Canis lupus 又はやまいぬ Canis hodophylax と稱せられるものが出土して居るが、これについては古來議論があつて、家犬であるか否かは意見の一致を見てゐないやうであるが、こゝでは假に區別して置く。又これも類例が多くないから餘り深入りも出來ない。

以上列擧した種類を除いた他の狩獵動物を出土の多い方から見ると、

たぬき　一〇ケ處　　さる　九ケ處
うさぎ　四ケ處　　おほかみ（?）三ケ處
かもしか・きつね・むさゝび・てん　各二ケ處
あなぐま・りす・くま・ねこ（?）　各一ケ處

となる。以上の出土地數には遺漏もある事と思ふが、それにしてもしかとゐのしゝの出土地數とは桁はずれの差がある。これらの中ではたぬきが意外に多いが、これは食べたものと見えて燒けた骨が出土したこともある。[二九]たぬきは日本特產の動物であるが、出土量も相當有るやうであるから當時は可成り繁殖してゐたものと思はれる。さる、うさぎその他もいづれも食用に供した事と思はれる。

3. 狩獵方法

次にこれらの動物の狩獵方法について一應考察する必要があるが、現存遺物の上から僅かにその片鱗に觸れうるに過ぎず、

其多くは全く不明と考へられる。

常陸椎塚貝塚發見の骨器の突入せる鯛の顱頂骨の明確に漁撈方法を示す如き(三〇)直接適確な狩獵關係の遺物は、我國では未だ發見せられてゐないから、或る點までしか云へないが、(三一)遺物上に於て見らるゝ狩獵用具として先づ第一にあぐべきは、弓と矢である。弓の現品は先年陸奥國是川から五本許り出土したのみであるが、(三二)鏃は日本の殆ど全遺跡から出土し石器時代の遺物の中で分布に於ても量に於ても第一であると云へるから、弓矢が最も普及してゐたと考へられる。次ぎは槍・斧・棒等の類の使用であつたらうと思はれる。原始民族の例より見れば他に多くの狩獵方法が有つたらうと思はれるが、遺存性が少い爲めに明かではない。(三三)又森林系の時代には集團狩獵は森林草叢等に妨げられて困難なものであるから、當時も大規模の集團狩獵は行はれなかつたものと考へる。(三四)次に今日に比較して棲息動物の數量が想像以上に多かつた事を考へねばならない。そこで猪の如く單獨に行動するものでも、これの發見に特別の搜索方法を講ぜずにすんだものと思はれる。更に今日も極北地方或は南洋方面の人跡稀なる場所等に見る如く動物が人を恐れない爲めに、容易にこれに接近し得た事も有つたらうと思はれる。從つて狩獵用具も存外廣い範圍のものが使用されたと考へられる。故に當時の狩獵方法としては、今述べた以外に全く今日の頭では想像し得ない事も多くあつたらうと思はれる。

4. 料理方法

狩獲した動物の皮を剝ぎ肉を切り取るのには、通常皮剝と稱せられ、其内でも特徴明かなもので石匙と呼ばれる類の器具を使用したであらう。かうして切り取つた肉を如何して食べたかは詳かでないが、その一方法として燒いて食べた事は、燒けた獸骨を各地から發見する事によつて證しうる。恐らく煮る事も知つてゐたであらうが具體的の證據がない。(三五)又骨を打ち割つて骨髓を食べた形跡はある。調味料も存在したであらうが、今の所全く不明である。蛇足ではあるが、肉を食ひ盡した殘りの骨角齒牙その他も、決して只捨てたものとは思へない。毛皮その他腐朽して殘らないものは解らないが、骨角齒牙は加工して非常に廣範圍の用途に利用せられてゐる。

IV 生業樣式と食料との關係

既に記した如く、全獸骨の九〇％までが、しかとゐのしゝであるが、骨角器として利用されてゐる骨角齒牙も亦、この二種類のものが多い。即ち日本石器時代に於ける狩獵の主要なる對象は、この二種類であつて、換言すれば日本石器時代の陸產動物質食料の代表者と云へる。たぬき以下の諸獸類は、出土例から見て到底この比ではない。鳥類も、こうづる、とび、からす、きじ（?）等が僅かに數へられる程度に過ぎない。

然るに茲に注意を要するのは、これらの動物の骨角歯牙を保存する場所が殆んど大部分貝塚である爲めに、主として上記の資料は貝塚に依つたものである事である。元來貝塚は當時の海岸居住者の構成したもので、從つて貝塚の構成者は主として魚介を主要食料とした漁撈者であつた筈である。卽ち海岸居住者は現存の遺物上より見れば、當時既に可成り發達してゐた漁撈によつて魚類又は貝類等の海産動物質食料を比較的容易に得てゐたのであるから、陸棲動物の側から云へば彼等は大した敵ではなかつたと云へる。然るに貝塚から獸骨を出土し、或貝塚によつては、それが纍々として有ると云ふ事は彼等海岸居住者が漁撈のみを生業としてゐなかつた事もあつたらうし、又場所により漁撈には比較的不便な事もあつたらうし、又季節により或は海が荒れたり何かの原因で不漁である事もあつたらうからそれらの場合等乃至は嗜好上からも陸棲動物を捕へた爲めと思はれる。そして又その主要なる對象となつたしかとゐのしゝは、森林系動物の代表者であるから、海岸居住者の背後には鬱蒼たる森林が有つて、極く手近な所で可成り容易にこれらの動物を狩獲し得たものと思はれる。獸類にとつて狩獵者が大なる敵である事は勿論であるが、農耕者も亦動物の敵である。云ふ迄もなく農耕者は植物質食料を自ら作つてゐるが、彼等の動物質食料は狩獵に俟つたと云ふ事が寧ろ當然の事である。而も彼等は農作物を動物に荒される場合、食料の目的以外に、これを殺す事もある。骨角皮革の必要上からも捕殺は行はれる。獨り牧者のみが動物の味方と云へるのであるが、我國は地形上牧畜は不可能であるから、恐らく當時も、專業的な牧者は居なかつたと思はれる。

V　結　論

以上を要するに日本石器時代も生業樣式から、狩獵者、漁撈者、農耕者の三つに大別して見ると、漁撈者と雖も狩漁農の三者を並用し、農耕者は狩獵をも合せ行つたものが有つたと思はれる。然るに狩獵者と狩獵を並用した農耕者の生活趾からは、狩獵動物の遺骸を求める事が出來ない爲めに、止むを得ず狩漁農の三者を並用した漁撈者の生活趾たる貝塚によつて漁撈者の狩獵によつて得てゐた陸産動物質食料の資料のみを見て來た次第である。故に既に記した如く狩獵者、漁撈者、農耕者の中で、最も狩獵を行はない筈の漁撈者でさへ、その生活趾から十九種類程を含む極めて多量の陸棲哺乳類の骨角歯牙を出土する所を見ると、より以上に陸産動物質食料を必要とした農耕者及び狩獵者が、狩獵によつて得てゐた陸産食料、換言すれば陸棲哺乳類を捕食した量は遙かに多く、又種類も多かつたものと考へられる。卽ち日本石器時代人は全體から見て大なる狩獵者であつたと云へるのであるから、狩獵によつて得てゐた陸産動物質食

料は、我石器時代の食料の中では重要なるものゝ一つであつたらう。而して何遍も繰返して云ふ如くその中でも主要なるものは、しかとゐのしゝであつたと云へるのである。

以上でこの小篇を結びたいと思ふのであるが、今後狩獵者の生活跡より狩獵を研究し、又各動物の習性によつて狩獵方法の異同をも考究したいと考へてゐる。この小篇は統てこれらの研究の端緒を爲すに過ぎないものであつて、今後は今云つた樣に色々の方向に向つて考究したい考へであるが、大方諸賢の叱正鞭撻によつて一歩を進みうれば幸である。

〔註一〕 鑛物質食料の中には例へば水鹽等が含まれる。又柴田常惠先生の御話によればアイヌが山に入つて空腹になつた場合、一時凌ぎに凝灰岩を食する事もあるさうであるし、印度方面の土俗に、河川によつて出來た腐蝕土を燕焼にして食する風もあるさうであるから念の爲めに、將來この方面の事も一應は注意する必要もあらう。

〔註二〕 東京帝國大學農科大學紀要。第二卷第七號。一九一一年東京。中央史壇第六卷第一號原始時代號。原始民族の水產食料大正十二年。

〔註三〕 骨角齒牙を保護する一つの條件は石灰分の存在である。貝塚は貝殼の石灰分により、洞窟も石灰岩より成るものが多いので、その石灰分により骨角齒牙を保護する。又琉球伊波貝塚の如きは珊瑚礁の上に構成せられてゐて、珊瑚の有する多量の石灰分と貝殼のそれと相俟つて保存を助けてゐる例もある。（大山柏著琉球伊波貝塚發掘報告）他の條件としては、砂層中に包含せられる時、粘土質の有機層中に存在する時（史前學雜誌、五ノ五、四五頁、山口隆一氏「日本石器時代人に關する一疑問」參照）火山灰中にある場合等を數へうる。又越中氷見洞窟の如く洞窟内の貝塚と云ふ復合した條件を有する例もある。

〔註四〕 河内國府からは非常に澤山の骨角器を出土してゐる。斯如き類例は他に多く聞知してゐない。

〔註五〕 「日本石器時代地名表」第五版及び追補1に記されてゐる以外の文獻についても、出來るだけ漁るつもりでは居たが、不勉強の爲め見落しも多い事と思ふ。諸賢の御敎示を賜はらば幸である。

〔註六〕 動物の學名については中谷治宇二郎氏「日本石器時代提要」二五四―二五八頁に揭ぐるものを用ふる。猶同書に揭載せられてゐない動物の學名は、主として谷津直秀博士「動物分類表」（東京大正九年）によつて記す。後者によるものは、學名の後に※印を附す。

地名の番號は便宜上附けたもので、配列は「日本石器時代地名表」の國名の配列に從ふ。番號に（ ）を用ひたものは彌生式系のものである。これは上記の配列に從はず、最後に纒める。

引用圖書は次の如く略記する。

人　　雜――人類學雜誌
考　　雜――考古學雜誌
史　前　雜――史前學雜誌
京大考報――京都帝國大學文學部考古學報告
人敎研報――東京帝國大學人類學敎室研究報告
動　　雜――動物學雜誌

以上の他は原名通りである。

〔註七〕 しか、及びゐのしゝは發見地が非常に多く、その發見地數も確實な事は勿論不明であるから發見地名を記さない。前揭の骨角齒牙及び骨角器出土數の表によつて、その約九十%がしか及びゐのしゝであると想像せられたい。しかし「日本石器時代地名

表」に記されてゐる以外にも、相當出土例が有るから實際はより多い筈である。

〔註八〕 陸前大洞貝塚のものは、報告者たる長谷部博士が或は後世混入せるものかと云はれてゐるが便宜上(？)を附して掲げて置く。

〔註九〕 陸平介墟篇 (Memoir Vol. I. Part I. of the Science Department, Tôkyô. Daigaku. Tôkyô 1882 p. 6) に依り、野牛(Bison sp.) として置く。

〔註一〇〕 犬も一種ではないらしいが、これに就ては松本彦七郎博士「介塚に犬の二型あり」(動物學雜誌二九ノ一八一) 及び、長谷部言人博士「先史學研究」三九五頁以下參照。

〔註一一〕 武藏大森貝塚からは Cynopithecus が出土したと報ぜられてゐるが(E. S. Morse, Shell Mounds of Omori. p. 16)、これに就ては長谷部博士「先史學研究」三八七頁以下參照。

〔註一二〕 報告者濱田博士もれこ（●●）と確言せられて居るのではないから(？)を附して掲げて置く。

〔註一三〕 かわうそ（●●●●）の發見地は何處であるか見出し得なかつたが、中谷治宇二郎氏「日本石器時代提要」に従つて種名のみを掲げておく。

〔註一四〕 もぐら類は大山柏先生「日本新石文化存否研究」五〇頁(70)に従つて掲げる。

〔註一五〕 鳥類の遺骸も各地から相當發見せられてゐるが多くは種類を識別し得ないらしい。こうづる（●●●●）、とび（●●）、からす（●●●）は、中谷治宇二郎氏前掲書に従ふ。4.さぎ（●●）(？)は或は雞かと云はれる。伊豫國越智郡及萬村岡方貝塚（人類學雜誌四三卷四號一八六頁）の報告に従ふ。猶鳥類の學名は省く。

〔註一六〕 海棲哺乳類の種名は宮坂光次氏(史前學雜誌一ノ二、五八頁)に従ふ。これらは、此小論に直接關係ないから、出土地名、學名等は省く。

〔註一七〕 實際はこれ以上であるかも知れないが確かな所は解らない。

〔註一八〕 S. Müller, Nordische Altertumskunde. 參照。

〔註一九〕 出土量の多い貝塚例としては下總余山貝塚、陸摩市來貝塚、武藏慈恩寺貝塚等がある。

〔註二〇〕 松本彦七郎博士「貝塚の猪及鹿に二種あり」(動物學雜誌二九ノ一九)「瀨澤介塚の猪及鹿」(動物學雜誌二九－一四九)等參照。

〔註二一〕 松本博士前掲論文參照。

〔註二二〕 「常陸國椎塚介墟發掘報告」(人類學雜誌八七號) 參照。

〔註二三〕 前掲 (八) 參照。

〔註二四〕 學習院教授戸澤富壽氏より直接御教示いたゞいたもので、動物學の知識の全くない余に種々御注意下さつた事を感謝する。猶、大塚彌之助氏「第四紀」(岩波講座「地質・古生物」)、横山次郎氏「化石生物」(岩波講座 (古生物學))を拜見したが、馬については何らの記載がない。

〔註二五〕 前掲 (九) 參照。

〔註二六〕 田中茂穂氏「記念遠足會採集品中動物諸類について」人類學雜誌二二四號一一三頁參照。

〔註二七〕 薩摩國出水郡出水町尾崎貝塚調査報告 (京大考古學報告第六册) 參照。

〔註二八〕 完全骨骼を備へた例は、花積貝塚以外に、遠江國西貝村貝塚、筑後國二川村貝塚がある。清野謙次博士「日本原人の研究」二九四頁參照。

〔註二九〕 常陸國行方郡麻生町大宮藩貝塚 (史前學雜誌三ノ四)

〔註三〇〕 坪井正五郎博士「常陸國椎塚貝塚」(東洋學藝雜誌、一一ノ三三九) 參照。

〔註三一〕 歐洲に於ては、直接狩獵を物語る捕獲具の突入せるまゝ殘存せる動物遺骸が發見せられてゐる。大山柏先生「原始人の闘爭」(科學畫報、八ノ六、第五圖) 參照。

〔註三二〕 杉山壽榮男氏石器時代有機質遺物の研究概報（史前學雜誌二ノ四、是川研究號）參照。

〔註三三〕 例へば、網、罠、陷穴等の如きものを指す。

〔註三四〕 二三人で相助けて行ふ如き極めて小規模のものを指すのではなく、所謂富士の卷狩式のものを云ふ。

〔註三五〕 故岸上博士によれば小さい完全なキサゴの殼が貝塚から夥しく出土する事から、一旦煮た後に肉を取り出して食ふたものであらうと想像されてゐるが（中央史壇、六ノ一、二三頁）狩獵關係では斯如き例が無い。

發掘と自動車

昨秋の十一月末、發掘期節はとうに過ぎた寒い日でした。私共研究所員は植木市で有名な安行村方面に、小型自動車を利用して貝塚の測量に出かけたのでした。自動車利用の効果はあつて豫期以上の成績を修め、おまけに好い氣持になつて、植木までしこたま積込んで引き揚げた迄はよかつたが、歸途はからずも自動車の燈火（ライト）がつかない。日は暮れる。腹は空る。東京までは未だ余程ある。今更、リツクサツクの重さと横着した罰が恐ろしい。夜間に燈火のない自動車は、發掘歸途のシャベルや鍬の荷厄介の比でない。

泣き面の果が荒物屋で自轉車用のローソクを點ずるカンテラを二個求め、これを山と積んだ植木の間からニユツト差出して、お巡りさんをヲツカナ、ビツクリしながら安行村から赤羽それから都大路をノソリ、ノソリ。研究所に着いたのが晩の九時頃でした。（池　上）

打製石斧の新例

島本一

一

大和の石器伴出遺蹟は既に百數十ケ所の多きを加へ――純包含層遺蹟と散布地との明確なる調査を必要とするけれ共――且つ種類も增加しつゝある。石斧も又それ等の遺蹟中に介在し、多くのバラエテイーを持つものであるが、殆ど大部分は磨製であつて、打製は極めて類似に乏しい現象を示してゐる。

昭和八年春四月、竹之内遺蹟に於ける樋口淸之氏との第二次共同調査に於て、繩紋式土器の數個を初め、石棒、石劍等と共に此の打製石斧を一の收獲と爲し得たが、同年九月、森本六爾氏歸省の際、之等一切を整理の上、第一次調査の概要を樋口氏の發表となり、(一)是に次いで樋口氏以外の遺物を發表せらるゝに至つたが、(二)打製石斧を舉げられなかつたから今補遺し、樋口氏との調査の責を免がれることにした。

二

竹之内遺蹟の地理的景觀並に遺物の數量に就ては、既に前記の兩氏に據つて發表せられたから此處では一切述べない。

吾々が大和の遺蹟を山岳、傾斜、平地の三分類を爲す内の傾斜地遺蹟に屬し、(三)打製石器を以つて大きい特色とし、石鏃、石槍、石錐、石小刀、皮剝等がその代表とされてゐる。勿論、磨製石器に於ては優秀なる鐵劍型石劍の存在を知らなくてはならない。又一面、石器の豐富なるに反して土器の僅少なる事は、表面採集に起因し、完全なる層序的研究の乏しさをも認識する。土器は彌生式、繩紋式の兩者を檢出する復合遺蹟であることを證してゐる。

Fig. 1.

三

本文の主體と成るべき打製石器は、長十九糎あり、幅は中央の括部(クビレ)に於て三・二糎、刃部の廣い所の幅は五・二糎を有してゐる。厚さは最も厚い所で一、四糎ある。石質はサヌカイトであ

つて、周縁の剝脱法裂面は精巧である。此の打製石斧の特色は中央の括部を有する事であつて明白に手にて握る爲に狹められたと解すべきであり、利器としての活用を考へられる。從來、打製石斧を出した大和に於ける例證は新譯を充てることが出來るが、(四)本例の如き飛躍さは見得られない。

(大和新沢發見)

Fig. 2.

如何なる層位に存在したかは表面採集の結果、判定出來ないのが遺憾であるが、所藏者星川氏の言を信ずれば縄紋式土器との共存を肯定されるのであるが、かの皿形土器底一面の施紋は陸奥式との聯鎖を考へられ、綠泥片岩製類長方形石皿、砥石様石器の一類によつて、此の打製石斧もその列に加へ得られると思ふ。

四

現今、大和の諸遺蹟を一瞥するに、低地遺蹟は、純彌生式系であり、傾斜地を經て山岳に至るに從つて彌生系乏しくなり縄紋式系が加累する。然乍、純彌生式遺蹟はあり得ても、純縄紋式遺蹟はあり得ない。更に山岳地に至るに從つて共伴する石器は、その特色とする所打製多く、且つ精巧であり鋭利であり薄手であつて利器としての價値極めて高い。

兎角、吾々は大和平地の石器が彌生式土器に伴ひ、傾斜地は彌生式縄紋式の兩者に伴ひ、山岳地は殆ど縄紋式土器に伴ふ石器の示相を窺ふことが出來る。(五)此等は生業様式及び文化發展に起因するのであるが、是に就ては別の機會にゆづりたい。

然らば、竹之内遺蹟發見の打製石斧も、自らその地域性を主題とする域内に包含せられた所産であり、唯今の所、大和唯一の重要なる遺物として取扱つて置かう。

註一、大和考古學四號「大和竹之内遺蹟發見の石器に就て」　樋口清之氏

註二、考古學四ノ七「大和竹之内遺蹟(覺書)」　森本六爾氏

註三、五、大和石器時代研究單行本「大和の石器」舊稿

註四、奈良縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十冊　吉田宇太郎氏

戸山ヶ原上ノ臺の史前時代遺蹟及遺物

高　島　德　三　郎

一

昨年卽ち昭和七年九月二十日であつた。友人飛田潔氏が戸山ヶ原の一角を散策してゐる時偶然にも路傍の切り崩しより土器の把手を發見し、なほ附近で數個の土器破片を拾得した。私は同氏の提示する是等の破片を見て、初めて戸山ヶ原に遺物の發見されることを知つたのであるが、從來遺跡として戸山ヶ原が紹介されたことは聞いて居ないし、文獻も無いらしい。なほ東京帝國大學人類學敎室編纂の「日本石器時代住民遺物發見地名表」(第五版)にも記載が無いことからすれば本地點が遺跡として紹介されることは今回を以て嚆矢のやうに思はれる。

私は昨年九月以來、本遺跡の性質を知らんとして機會ある毎に踏査し、或は試掘などして極力遺物の蒐集に力めたのであつたが、今日迄蒐集したところのものは土器小破片及び石器など、遺物としては種類數量共に僅少なものではあるがまさに壞滅しつゝある本遺跡を一刻も早く廣く江湖に紹介して一新資料を提供することは徒爾ならずと信じ、本稿を物するわけである。

二

本遺跡の存在する戸ヶ原は大東京市の殆んど中央に位する新宿驛の西北々方約二粁の地點にあり、今回新築落成した淀橋區役所に隣接する東西約一粁半、南北約二百米の地積を占むる、標高約三十米の洪積平地であつて、現在陸軍練兵場になつてゐる。

遺跡は東京市淀橋區戸塚町四丁目六百十七番地附近、卽ち戸山ヶ原の西北隅俗稱上ノ臺と稱する處で、昨年九月迄は東京府豐多摩郡戸塚町に屬してゐたのであるが同年十月市域擴張のため東京市に編入されたのである。

今本遺跡附近に立つて眺むれば、西南より東北に向つて流れる神田川は本地點に迫るが如くにして約百米前方小瀧橋の下を過ぐるや蜿蜒北向し、約七百米の彼方で西方より東方に向つて流れる妙正寺川を合流してゐる。この川は所謂多摩川系の断層谷に當り、流域は幅約四五百米、標高約十七八米の低地があつて甚だしく蛇行してゐる。この低地を隔てゝ西南より東北に走る

標高約三十六米の中野住吉、上落合等の臺地があり、妙正寺川に切斷されてゐる。又妙正寺川の對岸には下落合及び目白の高臺がこれと同一程度の標高を示しつゝ東西に一線を描いてゐる。

戸山ケ原の高臺は西及び北に神田川を還らし、北緣卽ち戸塚町の北端は間々高さ十三四米位の斷崖を爲す處があつて神田川

Fig. 2. 遺　跡　位　置

流域の低地に望んでゐるが西緣は比較的緩かである。本遺跡は是等兩緣邊の中間突端にあつて標高二十三四米を示し、神田川に架せられた小瀧橋に對してゐる。本地點は西北方に向つて次第に傾斜してゐる地形より考へても、今日こそ道路發達し、自然の傾斜は中斷されてゐるが、往昔は緩かな丘陵で楢、櫟等の樹木生ひ茂り、川へ通ずるさゝやかな通路さへ作られて在つたかも知れない。尤も遂四五年以前まではこの附近の丘陵上には櫟林の下に乳牛を飼養し居り、神田川の低地には水田が見られ、いかにも原始の面影を殘してゐたのであるが、今や牛舍は取除かれて區役所が建ち、水田は影を沒して民家を以て蔽はれんとしてゐる。思ふに本遺跡は景勝の地を占め、且つ用水の便もよく、居を構ふるには好適の地であつたことは容易に想像されるのである。

（第一圖▲印附近參照）

三

土器片の出土する處は第二圖に示す如く、豐多摩病院の北端と道路を隔てゝ對する陸軍用地切り崩し附近のA點と、地續きの中村德太郎氏所有宅地（第二圖點線內）とである。A點附近に於ては表面に露出することが稀で所謂遺物包含地であるが中村宅地內は旣に大方攪亂されて表面に散布してゐる。中村氏の談によれば現在道路寄りの宅地B點附近と、物置の在るC點附近を掘る時多くの土器破片を出土したが一向に注意せず、現在散亂するものは大部分當時掘出したものであると云ふ。私は同氏の許可を得て宅地內を隈なく捜し、多くの土器破片を蒐集したのであるが同宅地は陸軍用地よりも一米許り低く削平したも

のであつて大部分赤土を露出し居り、今後發掘により何程の遺物を發見し得るとも思はれない。只散亂遺物の土中に混在するを蒐集し得る程度であらう。これに比して陸軍用地內卽ちA點附近は攪亂の痕跡甚だしくない。しかし試掘の結果よりすれば出土量少く、且つ範圍甚だ狹小なるを憾みとする。

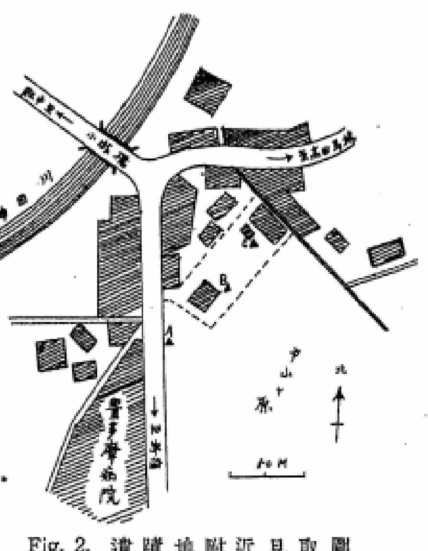


Fig. 2.　遺蹟地附近見取圖

試掘は初め切り崩しに平行して大體西北に掘進し、次にこの線を基準として直徑一米半の半圓を描く如くした。其の結果本地點に於ける遺物の出土量は北方に進むに漸つて比較的密度を增加し、殊に西方卽ち切り崩しに接近するに漸つて東方よりも著しく密度を增加することを知ることが出來た。更にこの地點より東南方五十米及び南方十五米の地點にピットを穿つて見たが東南方に於ては何等發見せず、南方のピット直下に於て第六圖十八に示す破片一個を得たのみであつた。なほ本地點の層位的測定を爲すに、南方に於ては厚さ七十糎の黑土層を有し、北方に於ては漸次薄くなつて十三糎となり、以下赤土に達する。かゝる層厚の變化は、この部分が雨水の流出口に當り、且つ自然の路となつて踏み固められたためであつて何等の意味もない。一般にこの附近の黑土層は平均七十糎の層厚を有する。

　土器破片は赤土と黑土との接觸面に最も多く出土し、第五圖二十三の土器底部はA點南端切り崩しに接近して底面を上方に向け赤土上に顚倒した形となつて出土した。なほ赤土上には折々徑二三糎の川石の如き滑かな礫の出土を見るほか特異なる點に着眼し得ない。斯くの如く陸軍用地內の遺物包含地は現在極めて小範圍にとゞまり、僅かに切り崩しに沿ひて數坪であるらしい。その理由は前述の如く、此の地點より西方に幅約十五米の道路があり、遺跡の中心點が掘取られ、其の上は他に運搬されたためで、私の報告する處は僅かに其の一小部分に過ぎないことが首肯出來る。要するに本遺跡は遺跡としての主要部分は既に湮滅に歸し、只その一部分に殘影をとゞむるのみであることが推知される。私はA點にては試掘により、中村氏宅地內にては表面採集によつて土器片總計二百九十六個、內、口緣部三十二個、底部三個、把手及び把手狀突起六個、注口一個、石斧

一個を得た。但し是等遺物中石斧を除いて、口縁部、底部、注口、把手及把手狀突起等は全部A點の試掘により、及びその附近より得たものである。元來A地點と中村氏宅地とは同一遺跡の一部であらうか、私はこの點を確むるため遺物について比較研究したが何等の特異點も發見し得なかつた。殊に兩地域は僅かに數米を出でずして接するのであつて、これを同一遺跡と見ることが妥當なりと信ずる。故に今出土遺物の各々に就いて記述するにあたりこれら兩地點の蒐集遺物は全部混合して觀察することとした。

四

土器片は概して薄手で、表面色は黄褐色、灰黑色、暗褐色等をなし、破面色も大體に於て一致してゐるが間々有機質を含むが如く黑色を呈するものもある。但し纖維等を含む形跡はない。土質は比較的緻密なものと粗大で小砂利を含むものもある。製作法は不明なるも轆轤等を使用した痕跡はない。たゞ表裏とも比較的光澤を有するは箆磨きを施したゝめであらう。燒成は相當によく、比較的堅硬なものが多い。

土器形態は完全形の出土なきため、口縁部、底部、其他より考察するに、鉢形最も多く、壺形、椀形等の存在も想像せられ殊に注口土器の存在したことは確實である。今口縁部、胴部、底部等の各々に就いて紋樣、形態、其他を記述することゝする。

口　縁　部

土器口縁部は主として反りを持たぬか僅かに内反するものが大部分を占め、口脣部に於て著しく内曲するもの三個及び僅かに外反するもの一個を數へ得る。口縁は平縁大部分で、明瞭に波狀縁と目すべきものを見ない。一般に口縁部及び口脣部に於ては平凡なる形態を爲すもののみである。

紋樣は無紋大半を占め、（第三圖、一二三、四）有紋に於ては沈線を主體としたものが大部分を占めて居り、就中口頸部外側に一條乃至二三條の沈線を繞らし、以下胴部に向つて斜線を並列した並行沈線を意匠したものが多い。（第三圖五、六、七、八）向口縁より一二糎下方に一條の隆起線を繞らし、これに連續的壓痕

Fig. 3. 土 器 破 片

を附與して、更に二三種下方に前記同樣沈線紋及び繩紋或は斜線を併用したものがある。(第三圖九、十、十三) 其他二三個ではあるが全部荒き繩紋のもの (第三圖十六、十九) 比較的深き沈線の或る區劃中に繩紋を充塡したもの (第三圖十八) 及び口緣に近く圓形刺突紋を一列に繞らし、器面は押捺紋の上に沈線を施したもの (第三圖十七) を得て居る。第三圖十一及び十二

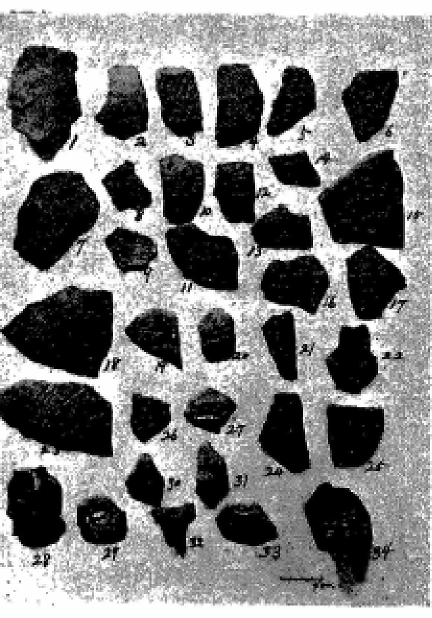


Fig. 4.

は口緣部に8字形の小隆起あるもの〻破片であつて同圖十もその例である。

胴　部

胴部破片は厚さ十粍以下薄きは三粍のものもあり、六七粍のものが最も多い。紋樣は無紋 (第四圖一、二) 及び沈線を以て平行線又は長楕圓形を描いたもの大部分を占め (第四圖七——十七)所謂帶狀繩紋これに次いで多い。(第四圖十八——二十三) この種の紋樣は繩紋擦り消しの手法を用ひ、繩紋は比較的纖細であつて、中には殆んど沈線と區別し難いものもある。この他極く少數乍ら刷毛目を有する土器片 (第四圖二十四、二十五) 繩紋押捺紋を有するもの (第四圖三——六) 或は僅かに立體化された浮線を有するものも二個を得た。(第四圖二十六、二十七) 又是等破片中一二のものに夥しい爪痕の印せられてあるのが見らる〻ことは興味あることである (第四圖十五)

底　部

底部は四個中三個は無紋で一個だけ底面に網代紋を有してゐた。すべて圓形底であつて第七圖一、二 (第三圖二十一、二十三) は底面二三粍上昇し、所謂上げ底をなし、直徑三糎及び六糎あり、第七圖四、(第三圖二十) の網代紋を有するものは直徑十糎半、平底であつて胴部と底面との接着部にクビレが無い。同圖三 (第三圖二十二) は矢張り圓形平底で直徑七糎、胴部と底面との接着部に少しくクビレを有する。

把手及び把手狀突起

主として土器口緣部に附着したるならんと思考せられる裝飾突起であつて、第八圖 (第四圖二十八) は飛田潔氏が本遺跡に於いて最初に發見したものであつて土質粗、小砂を混ずるも燒

成よく可成り堅硬である。極めて複雜したる形狀を有する。私の見聞を以てしてはこれと類似のもの「武藏野第十八卷第三號」に於て志村瀧蔵氏の「七里岩南部の先史遺跡及遺物に就て」中第二十圖に求めらるゝも或は實物を見ざる故案外相違するかも知れない。

この他扇狀をなすもの（第四圖三十、三十三）吊手狀をなすもの（第四圖二十九）三射狀をなすもの等あり、何れも土質粗で燒成不良である。これらに附隨する紋樣を見るに圓形刺突孔を太き溝或は沈線を以て連絡するの風あり、異なる形狀のうちにも意匠に於て一派相通ずるものがあるやうに思はれる。

注　口

注口孔徑二十三粍、基部五十粍、長さ五十五粍あり、燒成中位、黃褐色を呈する。基部には沈線を以てした隈取り紋樣を有する。因にこの種紋樣を有するものに口緣部一個を拾得した。

五

石器は表面採集によつて第三圖C點附近より、所謂分金形打製石斧一個を得たのみである。一端少しく缺損してはゐるがよく均整のとれたものである。長さ九糎、幅五糎、クビレ部分三糎、厚さ一・八糎で石質は砂岩である。

六

以上本遺蹟より蒐集した遺物はその種類數量共にまことに貧弱なものではあるが大體の性質を窺知し得ると信ずる。

これを要するに本遺蹟は遺物の全體的考察よりして繩紋式文化系列に入るべきものであつて、其の紋樣、形態、手法等より、關東に於ける繩紋式文化期の比較的後期に屬する所產なりと思考せらるゝも因より明確なる文化的位置の決定は後日に俟つよりほかはない。

（昭和八、九、五）

資　料

石器時代遺物と伴出せるガラス製曲玉

樋口清之

圖示の曲玉は、羽後國飽海郡吹浦村丸池より多數の石器、土器と共に伴出したものであつて、故高野榮明氏發掘され、現在、山形縣東田川郡東榮村添川、鈴木盾三氏の珍藏に歸してゐる。表面は風化のために白色粉狀となり、その元來の色を見ることが出來ない。全長一・四糎を算し、尾部が鋭く尖つてはね上つてゐる。孔は現今細くなつて居り、その孔周は壊れてゐる。

Fig. A.

右の如きガラス製曲玉は、岩手縣下出土の鐵鏃と共に、石器時代と云ふ從來の概念を破ること甚だしく强きものであるが、東北地方石器時代遺蹟よりガラス製曲玉の出土した例はなほ他に木村善吉氏の蒐集品中に秋田縣下の例が一箇存在してゐる。自分は此等を必ずしも例外視して排斥することを好まない。

圓筒土器伴出の土偶

武藤鐵城

本紙第五卷第五號に報告してあつた、秋田縣仙北郡神代村道心坊清水の、圓筒土器系遺跡から玆夏七月十一日の發掘に於て、一箇の土偶の出土を見た故、其の概略を左に述べてみたいと思ふ。

發掘地域は前回の琥珀玉の出た點から、更に東方を約三米半平方を選んだが、該地域は遺跡全體のうち最高部分である。そして恐らく當時完形の儘置かれてあつたと思はれる大型圓筒土器破片の無數包含し、然して小形品の完形を保ち得たものゝ、これまで五六箇發掘された線上に在る。

それは腐蝕土の堆積殆んどなく、薄い表土下直ちに黄褐色の乾いた土層となつてゐるので、背高い圓筒は破壊されたに不拘、

小形品がその土層に姿を隠して、壊滅からよく免れ得たものらしい。

琥珀玉の出土點から一米程進んだ頃、約三十糎の黑色表土下の褐色土層に淺く埋まつて、拓本及び寫眞Aの土偶腰脚部が出た。

Fig. 1. 本 拓 偶 土
中 央　前 面　右裏面
左　側 面　下底部

腹部の邊から折れ、上部を失つてゐるが殘存高さ五糎、腹幅四糎半、脚底現存六糎（對象してゐたものとしての想像、八糎）厚さ腹部二糎半、脚底三糎、平型で充塡式の土偶である。正面中央に、偉大なる疣狀突起部があり、その上に背に貫通した二孔があり、宛もその部分から折れてゐる。然して側部は縦に二筋縒縄紋を附し、下部で前面縁を構成してゐる一本の縒縄紋と共に組合つてゐる。

底部は平滑、そして燒成は全體へ相當利いてゐる。此の土偶の出た地點に接近して、東北の一線にB、Cの土器が殆んど抱き合つてゐた。

A　B　C　D
Fig. 2.

B土器は高さ七糎、口徑十糎の茶碗形で、口縁部を張り出し、それに波狀浮紋を施してある。その下縄蓆紋としてゐるが、頗る紋の粗らいものを使用してゐる。

C土器は高さ十一糎、小形圓筒とも稱す可きものであるが、頗る薄手である。口邊には龜ヶ岡式土器に見る炭手紋の飛び出

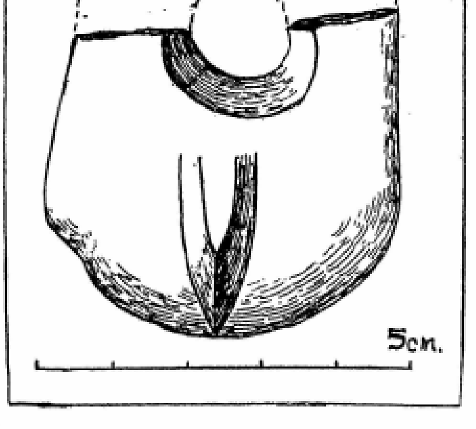
た様な突起があるが、他邊が脱落してゐる故、果してそれが他の多くの圓筒の如く對照的に四突起を有してゐたものであつたかは判からない。更にそれ等の土器より稍東に、D土器が同じ層位に正しく伏せられてあつた。但しその底部は、前記の様な表土の薄い理由でか、脱落してなかつた。此のD土器の器形は、從來此の遺跡から出土しなかつたもので、甚だ異色のあるものである。高さ口徑等しく廿五糎、底部は繩蓆の薄く終りかゝつてゐるところから判斷して、これより五糎は延びてゐなかつたらしい。一見鉛の胴の感じを受ける土器である。內面には黑色塗料の如きものが、薄く附着いてゐる。煮沸した黑色殘滓と相違して、炭化せぬもので、漆の樣にも見える。口脣部は綛繩で、連點刻目を施し其の下にアーチ型の連續帶を廻はし、四等分の點から一本宛綛繩懸垂紋を垂らしてある。そして胴部全面に施した繩蓆の粒は、B土器と等しく、右肩から左下へ斜行してゐる。猶ほ此の部分から、本遺跡として始めての錘石が二箇出たことは、それが若し菰槌風の錘でなく網に使川されたものであつたら、遺跡の東崖（赤ハブ）下を脊て洗つてゐた玉川と遺跡居住者との漁撈關係を考へ得るであらう。

　最後に、前回發掘の琥珀玉及び極小形の磨製石斧、それから今回發掘の土偶、異形のD土器が、相寄つた地域に埋藏してゐた事實は其等が脈絡ある目的で、其處へ寄せられたと考へ得ぬものでもない。

　以上本遺跡の土偶及び其の出土狀態が、前回の埋藏二例と共に、大方諸賢の御研究に、いさゝかなりとも參考たり得ば幸である。

有孔石斧の一例

樋口清之



圖示の有孔石斧は、羽後國飽海郡高瀨村當山字神矢田の發見にかゝり、山形縣東田川郡東榮村添川、鈴木盾三氏の所藏に歸してゐる。丁度半分に破損してゐるが、蛤双双

の精良な磨製であつて、中央に徑一・五糎の相當大きい圓錐孔を有し、灰綠色の風化せる。硬砂岩である。有孔石斧の聚成は數年年來自分が心掛けて來たところであるが、今又その一例を增した事を喜んでゐる。

東京地方發見の彌生式土器

堀野良之助

最近東京市内の遺跡から彌生派土器數個を入手したので、簡單に報告して置きたいと思ふ。去る五月下旬板橋區の小豆澤貝塚に土器破片採取に行つたが、既に業に荒し盡された本貝塚は僅に其殘骸を示すのみで何等得る所はなかつた、止むを得ず附近の畑中を捜し廻る內、貝塚の西方凹窪地に臨んだ斷崖に沿ふ道路右手の新しく切取つた崖の下に彌生派土器の首が轉がつて居た、仍て崖の上の畑地の斷面を注意して見て行くと挿圖Aの土器の首だけ出て居るのを見付けたので、苦心して掘出した、口邊部に聊かの欠損はあるが完形品と云つていゝ、內外共美しい朱を塗つてある、頸部に突帶を廻らし小く刻みを入れて居る、斯る偶然の採取は予も豫期しなかつた所で思はず快哉を叫んだ、此地點は貝塚を去る僅に七八十米突の所で、貝塚を殘した縄紋後期の人達と此彌生生系文化の人達との間には時間的にも大した距りはないのではあるまいか。

B、C、二個は同じく板橋區上赤塚諏訪神社裏の畑地から出土したもので、Bは掘出されてから數年若は十數年畑の畔にでも放置されて居たらしく、表面著しく風化して居る、Cも數年前掘出したものだらうであるが、形が變つて居るため農夫が自宅に持歸つて居たもので、Cを讓受けた際まだあつた筈だと云つて何所からか搜出して來てくれたのである。Bは赤褐色、Cは灰色、共に無紋である、Cは脚部に僅な欠損があるが脚付坩としては形の佳い方だと思ふ。農夫の朧げな記憶を訊ねて見ると表面耕土よりは遙に深い地點にあつたやうに云ふ、或は竪穴の底にあつたのではないかと思ふが確言は出來兼る、猶ほ此地點から出土した彌生式の大形甕一個を讓受けたが之は已に埼玉史談に報告されて居るとか聞いたので本報告には除外

した。

D、E、F、三個は矢張板橋區練馬春日町月白中學の東方、豐島園の西北方、石神井川左岸の傾斜地に、今春道路開設の際、竪穴の底から掘出したものである、土壙の斷面に數個の竪穴を露出して居るが、直徑約六七尺、深さ二尺位で、久ケ原などのものより概して直徑小く深さは深いやうである、Dは灰色の坩で僅に擦痕的な縄紋を認める、底部に木の葉の擦紋がある、Eはアムフオーラ形壜の口邊部で、矢張灰色で小い羽狀紋を見る、Fは高杯の脚部を欠損したものであるが、上部の直徑約一尺、厚さも厚く頑丈に出來て居る。口邊折返しの下部に小く刻みを付け上部に羽狀紋を施す、杯の表面に曲率なく殆ど一直線で、盤形にならず擂鉢形になつて居るのは、此地方としては稀な形式であらうと思ふ、猶ほ此地點の竪穴から石劍が出たと云ふことであるが、能く訊質して見ると矢張石斧か石槍のやうな物であつたやうである、然し、此地點の土器は既に土師器に屬するものゝやうであるから或は金屬期に入るものとも考へらるべく、石器の有無は實物を見ない限りいづれとも云へないやうである。（昭和八、八）

考古斷片

松下胤信

集錄した短編の二三、眞にとるに足らない屑片だが、斯うした形にして見ると、言ひしれぬ懐しさが湧いて來る。せめて私の小さな備忘の控錄として、過ぎ去つた日の良き思出の資としやう。

一、神戸市須磨海岸の彌生式土器

一二年前私は低地遺跡群の研究に興味を持つて、盛んに多摩鶴見川の沿岸を歩き廻り、更に横濱杉田東漸寺貝塚の刺戟に依つて、三浦半島の類似遺跡を求めたり、遠く相模川地帶の其を追求したりして居る。大阪へ移り住んでから、淀川沿岸に無數の、然かもすばらしい其等が存在するのを知つて、多少の驚きを感じた。以下紹介し様とする須磨海岸の彌生式土器は甚だ貧少な資料だが、尙低地遺跡に多分のチャアミングをもつて居る、私としては捨て難いので簡單に書き綴つて置きたい。採集した土器片は砂濱の爲、損滅を受くる部分が著しいが、赤褐色乃至褐色無紋、赤色塗料を口縁部上緣及び內部に施してある。此等は海濱に散布するのであるが、其狀態且つて私の報告した鎌倉

由比ケ濱の其と（考古學雜誌並びに武藏野誌上）近似して居るし、本彌生式土器が、該文化圏の後期的樣相、墳墓への接近は其の示す文化内包の檢出により强い興味あるトッピックを呈する。（前上二論文參考）扇港神戸の海波も此處に來ればいらぶつた感覺を靜めて、美しき波汀と綸の如き水面と眠るが如き淡路島と背後の紫の山色に、固やかな本性に立還つて、小波をひたひたと西方一ノ谷から、北東方妙法寺川邊り迄渡して居る。近邊亦豐かな考古學的證示に恵まれて居るので、本海濱上の其も其等を考へ樣とする場合、竝列的な價値を附與しなければならないのである。

二、岐阜縣不破郡合原村字栗原の祝部土器

同僚の西脇貞夫君の好意に依り、同君が歸省された際、採集された祝部の破片二個を寄贈されたので、簡單に記して其好意に報いたいと思ふ。此祝部は胴部の一片と蓋の一片とであるが、蓋には撮みが小突起を以つて作られ、全體灰白色の精巧な燒成をもつて居る。標題の如き岐阜縣不破郡合原村栗原の採出である。そして同君に依れば、出土地は鈴鹿山脈の一部に屬し、栗原山と稱する小山連で、其山裾に近い地點から見出したとの由である。

三、三笠山の埴輪と嫩草山の彌生式土器

三笠山山頂が一古墳で、其表示として埴輪を發見された事は、既に黒板博士に依つて提唱され、本年の新聞紙に傳へられる所があつた。私も幸ひにして本年に入つて晩春と初夏の二回奈良を訪れて、三笠山山頂の埴輪を採集したので、嫩草山の彌生式土器と共に、合せ述べる事にする。山頂の古墳は春日奥山ドライヴウェイの終點に當る一丘で、自然の起伏の配置を其儘墳丘に利用したのである。丘墳側に沿うて埴輪の斷片が分在して居る。私の採集したのは圓筒片であるが、丘頂に接して家形と覺しき砕片が、露呈して居るのを見出した。墳形は不整の前方後圓墳を思はすけれども、地形の關係からかなりの無理が含まれて居る。大和平野と聚落、生駒信貴金剛の諸山、夢の樣な木津の流れ、周圍の眺望は互ひにあらん限りの景裝の美を競ふて居る。山頂を少し下ると嫩草山である。秋には妻戀ふる雄鹿の群、春には萌える若草に點影する雌鹿の人懷しむ聲音に、旅人の哀愁を遠く萬葉古今の昔に還らしめる。

此山頂亦彌生式土器を分布して居る。斷片的な小片だが紋樣を伴ふものも混在して居る。此極めて貧しい資料が、三笠山古墳との間にどの樣な連脈を示し得るかは、單なる直感と感覺に依つて印象的に綜合されるのでなく、論理的な科學的綜合に依つて意義づけられなければならない。

四、大阪市住吉區北邊寺院趾

大阪市の南丘及び東丘は、先史原史兩代から有史期に亘つて、

恵まれた人文地理的機能を營爲しつゝあつた。試みに南郊の低平な丘陵を、更に南伸すれば密集古墳群の分布を指摘する事が出來得よう。仁德反正履仲三陵も亦此等の間に坐して、嚴然と鼎立して居る。そして燦爛たる此等古墳文化が終末を告ぐる頃、其等に代ふるに佛教寺院文化が燦爛たる光彩を蓄積しつゝあつた。北田邊寺院趾も數多い大阪市に於ける、飛鳥寧樂時代の佛教文化の一遺形であつて、大鐵沿線北田邊驛西方の人家に包まれた小畠地に存在する。私の採集したのは布目瓦であるが、類燒の證跡歷然として殘存し、猛烈な燃燒を濛むつて居る。北方には天王寺の伽藍を指呼の中に望むし、東方低平な耕農的吸引力をもつた大阪平野を介して生駒信貴と對坐し、其間に多くの集落と池溝を擁して居る。そればかりでない古風土記に見ゆる猪飼野、平安朝に於ける難波市、玉の生產と其氏族と關係深いと思はれる玉造も、總て圓周圏に收められる地理的位置にある。本寺院趾の優秀な瓦類は、市民博物館に陳列されて居る蓮花紋に指を屈するだらう。飛鳥寧樂期の芳香を多分にもつて居る遺品である。最後に附記したい事は、北西方に僅接して桑津町の彌生式遺跡のある事である。豐富な文化的素質に滿ち足りた、本趾の伸びやかな生長と發展を、私は羨望の眸を以つて想見せずには居られない。

（一九三三、八、二五）

文　獻

彌生式土器圖集（第一輯）序集　森本六爾氏編

近年彌生式土器及びそれによつて代表される文化の究明が熱心な篤學者によつて、次第に盛に行はれ、多くの業績が殘されて來たのは學界の爲慶賀すべき現象である。本圖集もこの趨勢の産物として編まれたものであつて、廣く各地方の彌生式土器全體を通觀して行はれた圖集としてはおそらく最初の物と稱して不可ないであらうと思はれる。勿論彌生式土器器型の聚成は古く京都帝國大學考古學教室の手によつて行はれたが、本圖集は、その撰擇配列の狀態を觀て、これとはその目的を異にし、從つて方法を全然別にしたものを意圖して編まれたものであることを察するに難くない。その内容は僅に二十枚の圖版であるが、武藏、相模、尾張、大和、攝津、播磨、備中、周防、長門、筑前、筑後、肥後に汎る各地方の代表的なる器型を擇んで配列してゐる。殊に彌生式土器の概念を學史的に決定する本郷彌生町の彌生式土器を最初に掲示し、又、彌生式土器に顯れたる農業資料としての稻籾及び動物畫や人物畫を挿入して、生業樣式、生活樣式の暗示及び、青銅器への連絡の暗示を試みてゐる點等編者の意圖の存するところを伺ふことが出來る。

本圖集に採られたところの土器をその發見地について見れば、本郷彌生町及びその一類の物は別とするも、大體に於て北九州、瀬戸内海沿岸、近畿、東海道に汎るものであつて、この地域は亦青銅器文化の流動の上に重要な幹線を成してゐるところである。從つて、この空間の撰擇は彌生式土器問題の上で青銅器文化問題が最も興味ある問題である理由を以て當を得た策として、迎へ得られる可能性を有することは否定すべくもないが、しかし、もし、彌生式土器問題の中に於て青銅器問題を單にその重要なる問題の一であると做し、青銅器問題を中心とするのみに於ては、彌生式土器問題は解決し得ずと觀る論者に在りては、必ずしもこの撰擇を以て、地的にも又、内容的にも完全なものとしてはおそらく迎へ得られないのではないかと考へられる。

自分等はより廣き視野の、正しき歸納にのみ學的信頼を有し得る。聊かしき問題の一つが往々にして自分等の認識を指導し、錯覺を誘導することの可能なのを想ひ、自己及びその周圍の反省批判を强く敎へられる。

（圖版二十、解說五頁、定價二圓、東京考古學會發行）

石器骨角器（日本考古圖錄大成第十五輯）八幡一郎氏編

本圖集は代表的なる型式の石器及び骨角器を網羅聚集することを目的として編まれたものと想はれ、その内容は各地發見の

石製骨角製の利器、器具、身體裝飾品の各型式が集められてゐる。たゞその集め方に一の方針として森本六爾氏が彌生式土器圖集に行はれたと見る可き意圖の如き特殊なものが無く、此點從來の多くの圖集とその軌を一にし、たゞそのヴアラエテイを漏さゞる樣よりよく努めたと言ふ點を特色としてゐる點或は一抹の寂しさを感じさせるが、しかし、又一方より見れば非常に忠實眞摯な編者の態度の現はれとして擧げることも出來る。本集は圖版四十八枚、解說十二頁の內容を有してゐるが、その最も特色とするところはその解說に存してゐる。その解說に當つては、概念、製作技術、類別、器物としての種類別、型式別、時代性、地方性及び特殊性に分けて之を汎說し、圖版個々の說明に於て各說的の解說を施こされてゐる。そして極く簡單ではあるが、此等の研究が考古學上有する意義を略說して、「今後の研究方法を示して解說的考古學を一步進めたい念願」に資せられてゐる。勿論本圖集の資料の採り方、配列等については區々の異議も考へられないことはないが、しかし、全體を通じて見て良く纂へられてゐるものであることは否定出來ないところである。

（非賣品、日東書院發行）（樋口清之）

PRAEHISTORICA ASIAE ORIENTALIS. I.
Premier Congrés des Préhistoriens d'Extrême-Orient Hanoi (1932)

本書は表題の如く、一昨一九三二年一月佛領印度支那ハノイに於て、極東史前學第一回大會を開催せられた時の記錄である。此大會に參加したものは、日本(?)シアム、香港、マレー、蘭領印度、フキリッピン並に司會地の佛領印度支那の七ヶ所である。この中で特筆すべきは日本である。本書第一項には日本と大きな見出しがあるが、參加者は日佛會館のアグノーエル氏である。即ち日本は參加はしたが出席者は、佛人のア氏で、如何にも人無き樣に見へる。これはア氏より直接聞知した所だが、最初この招待狀は、東京佛國大使館より、外務省を經て文部省に移牒せられたとかであるが、同省では如何樣に所理せられたかは不明で、恐らく官學たるの故を以て、帝大には移牒せられたらうが、私學には通知は無い樣に思はれる。從つて例の如く、旅費の予算がない、とで人が出ず、こんな變んな代表者(!)が出たのではあるまいか。兎に角、日本としては、御恥しいことである。

話は大變横道に入つたが、本書の形式は、從來に於ける國際史前學大會記錄と略同樣に編纂せられ、議事日程の外、發表せられた論文が十餘ある。中に J. L. Shellshear 氏其他の香港史前文化 M. Colani 孃の原新石器以下多くの印度支那史前文化に關する論文がある。日本からは鳥居博士と評者との二論文があるけれども、極東大會でありながら、支那からは何んの片

鱗をも見出さないことが、甚だ寂しい。全巻四六倍版百五四項價未詳。（大山）

會報

一、年報を御蠟中にお送りする筈でしたが、種々の事情で本誌と同封致しました。又豫め御斷り申さねばならない事は、第五卷第六號として「東京灣に注ぐ主要渓谷の貝塚に於ける編年學的研究豫報第二編」を年報では刊行した事になつて居りますが、之れは執筆者の御都合で今暫く待つて戴かなければならない事です。御了解を願つて置きます。

二、第一號には石野、赤堀、島本、大給及び其他の諸氏の玉稿で飾らせて戴いた事は感謝の他はありません會員諸氏に於かれても、年報でもお願ひしてある事ですが、本誌を發展せしめる意味で論説の長短に不拘奮つて御寄稿を願ひます。

三、會員諸氏に喜んで戴き度い事は本九年度から表紙裏に掲載致しました樣に會則並に役員を改めました。これは益々一つの學會として會員本位に發展せしめる意味で御座いまして多數の新幹事の御參加を得た事は誠に喜ばしい事で御座います。これからは、幹事の合議制で會務をとり諸氏の御期待に伴ふ可く努力致す考へで御座います。

四、今回、飯沼包次郎氏が栃木縣芳賀郡中村八木岡遺蹟の土器石器を多數寄贈せられました。此の紹介は次號に讓りますが同氏の御好意を深く感謝します。

五、

入會

東京市芝區白金臺町一ノ四八　神山能賓留
東京市大森區入新井四ノ七四四　相川廣秋
熊本縣下益城郡隈ノ庄町　小林久雄

退會

中井武一郎　丸山瓦全　外山哲二郎
原田廣作　矢崎源藏　金高勘次
高橋照之助　相川之賀

死亡

大地原寛龍　林田芳太郎

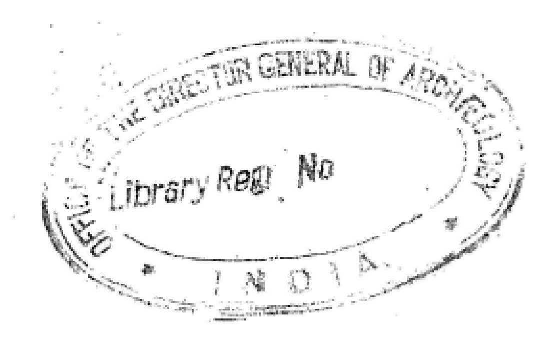
INHALT

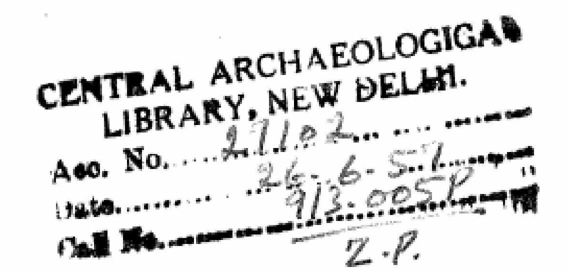
I. Abhandlungen (Japanisch)

II. Kleine Mitteilungen (Japanisch)

III. Bücher, Besprechungen

TAFEL





Satzungen der Gesellschft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durchjährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen.Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Rtech, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungau und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich :

9. Onden Shibuya-Ku Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeber — Prof. Yoshikiyo Koganei
Vorsitzender — Fürst Kashiwa Ohyama
für den Vorstand

Kiyoyuki Higuchi	Keisuke Ikegami
Isamu Kohno	Kei Kwanno
Sumio Nakazawa	Iwao Ooba
Jookei Shibata	Sueo Sugiyama
Kingo Tazawa	Ryuichi Yamaguchi

ZEITSCHRIFT
FÜR
PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

ORGAN DER JAPANISCHEN
PRAEHISTORISCHEN GESELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN
von
KASHIWA OHYAMA



6. BAND 1. HEFT

TOKIO

Januar 1934

Japanische praehistorische Gesellschaft
(SHIZENGAKU-KWAI)
9, Onden, Shibuya-Ku Tokio.

